THE CENTRAL REVIEW

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正六年七月廿九日印刷納本
大正六年八月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

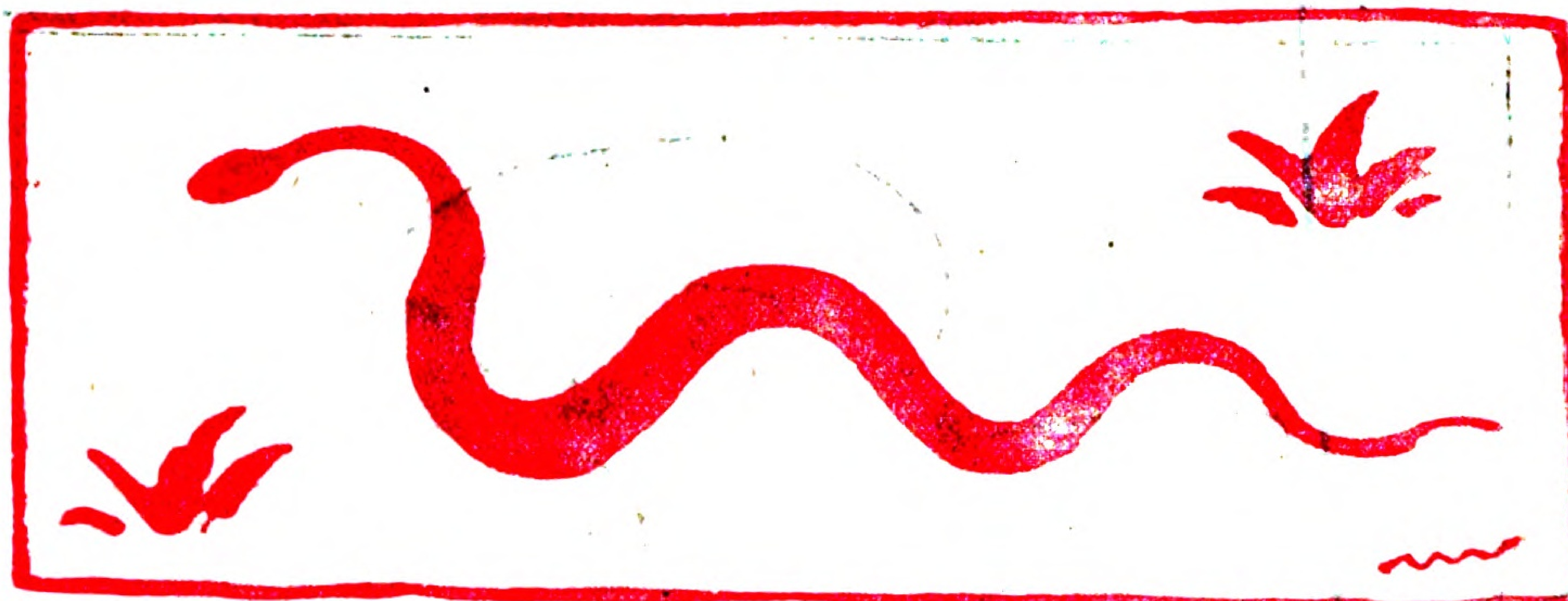
八月號

第三十二年第九號　第三百四十七號


理解力と記憶力
不幸なる腦神經病者は此二つを欠けり。
唯、「健腦丸」の常用者のみ理解力と記憶力を完全に増進せむ!!
島村醫學博士證明
島村博士證明
健腦丸
TRADE MARK
KENNOGWAN
腦神經病特効藥
特長
健腦丸を少量宛常に持藥とせば便通をよくし逆上を引下げ怖るべき中風卒中を豫防し記臆力を増進する効あり
主効
腦膜炎、搐搦、便秘
腦貧血、眩暈、頭痛
神經痛、卒中、健忘
腦充血、中風、耳鳴
藥價 四回分廿錢 ■ 半週四十錢 ■ 壹週七十錢 ■ 二週一圓卅錢 十週五圓
本舖 大阪 東京 丹平商會藥房



中央公論第卅二年八月號目次



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"KOPF"
HENRI MATISE

中央公論



八月號
第卅二年第九號
第三百四十七號

初めて議院内の人として觀たる我が議院政治の現狀

白河次郎

一

現在の日本に於て、議院政治が果して成立し居れりや否やが先づ第一に疑問である。併し、大ざつぱに政治を形式上より區別して、獨裁政治、官僚政治、及び議院政治の三種とすれば、日本は最早官僚政治國では無くして議院政治國であると謂はねばならぬ。且、憲政とは即ち法治で、立法權は即ち議院の

所有するものなる以上、既に議院あらば議院政治は既に成れりと言はれぬことも無い。但し日本の憲法に在りては、法律と全く其効力を同じくする命令なるものがあつて、命令は行政府が勝手に製造し得るものなるが故に、行政府が議院外に儼然たる一獨立國をなして、そして盛んに其立法權を振りまわし、到底完全なる議院政治は實現し能はぬ組織になつて居るのである。

制度上よりして日本に完全なる議院政治の實現は困難なりとするも、閣臣が多くは官僚出身たる今の如き慣習が打破されて、所謂政黨内閣となり、内閣は必ず議院に根柢するものならざるべからざることゝなり、議院は立法權を所有するものなると同時に閣臣選出機關たるの慣習が出來上るやうな時代が來たならば、行政府は必ず其命令權を自ら制抑すべく、然らずとも其發する所の命令は、議院又は議院の絕對多數の意志を尊重し若くは其是認を受くべきものとなるべく、こゝに於て始めて議院政治の完成を見ることゝなるのである。さりながら、此一日に到達することは前途まだ〳〵甚だ遠い。今の如き政黨の狀態、政黨の不發達、政黨の幼稚なる理想と下品なる行動、新知識や人物やが政黨に甚だ少ないこと及び政黨に對して國民が興味や價値感やを有するの頗る乏しきこと等は、いよ〳〵以て議院政治完成の甚だ遼遠なることを想はしめる。日本が議院政治を完成するには、前途尙ほ憲政の幾多の血戰を經た上で無ければなるまい。憲政の戰ひは日本に議會開けて以來屢次繰りかへされたが、自由黨と山縣との妥協、政友會の成立、政友會と桂の情意投合等によりて少しく緩和され、一轉して憲政擁護運動となつて俄然復び猛烈となり、直ちに轉回して山本と政友會との結緣、大隈と同志會との握手によりて、姑らく休戰狀態となり、寺内内閣成ると共に又々一たび憲政の戰ひが啓かれたが、此緩和時代休戰時代に在つ

ても常に孤軍を提げて憲政の戰ひを呼號し、愈よ戰場となれば、常に必ず先鋒となつた國民黨が、今度は今の時局の重大なるに鑑みて、國内的なる憲政の形式上の爭ひを姑らく中絶して、國際的なる世界的なる大經綸を重しとし、外交及び國防の上に國論統一を必要なりとし、黨爭の範圍を縮少するの先唱となり、議院の主力が之れと歩調を一にすることゝなつた爲に、憲政の戰ひは今や一旦休止されつゝある姿となつて居る。しかし此くの如くして議院の力は次第に伸暢されつゝあるが故に、時局が平靜に歸した他日に於て、官僚が猶ほ其態度を改めずに居る樣であるならば、猛然たる憲政の戰ひは又も國民黨の先鋒によりて開始されるであらう。而して始めて眞の議院政治は實現するであらう。

二

日本の議院政治の現狀は要するに以上の如く甚だ貧弱である。故に議院政治に對する觀察は、議院の内に在りてすると外にありてすると何等の變化は無い。從つて吾人が始めて議院内の人となりたりとて議院政治に對する從來の感想に何等か是正若くは新見を加へることは毫も無かつたと斷言する。議院政治なるものに對しては然りであるが、議院其ものに對しては、外より見たるものと、内に入つて見たるものとには多少の變化が無いでも無かつた。外に在りて議院を見たときには、議院を監督する、批判する、そして之を尊敬するよりも寧ろ罵倒して見たくなる樣な態度を以て之に對するのであつたが、既に議院の人となつて見れば、あきらめる、辯護する、從來知ることを得なかつた寧ろ知ることを欲しなかつた長處や美點やが先づ目につき、要するに自分も亦因襲に囚はれたる平凡なる一議員となつて了ふ樣な傾向がある。故に新代議士の議院觀は多くは二樣となる。其一は依然として議院外に在るが如き態度

を以て、院外の批評者と調子を合はせて、寧ろ議院外の評判を氣にして、議院の短處のみを擧げて自ら高うするが如き言說を弄し、以て世間の論調に迎合するものと、其二は議院氣質に呑まれて全然沒了し、何等の新見地をも立て得ぬものとである。吾人の議院政治觀は即ち換言すれば議院觀に外ならぬが、成るべく以上二者の何れにも偏せぬ公平の觀察を語つて見たい。公平に先づ議院を知ることは、議院政治の現狀及び其趨勢を知る所以であると思ふ。

先づ、議院の空氣、議場心理、各政派の懸引、此等は何うしても議院內の一人となつて見ねば到底理會することは出來ぬ。而して議院政治の實際の發動は多くは此等より生じて來る。吾人が始めて院內の人となりたる這次の三週間の議院生活は、未だ此等に對して多く語り得るほどの理會を有せぬものであり、又此等は心解すべくして說明すべからざる性質のものなるが故に、明瞭なる觀念を院外者に與えることは極めて困難である。假りに一二の例を擧げて見れば、不信任案議事に於ける議院の空氣は極めてダレて居つた。不信任案といふが如き重大なる案件を議するに當つては今少しく議院の空氣は緊張せねばならぬと思ふ。これは始めより成敗が分明なるが故であつたとはいへ、成敗の分明なりし從來の不信任案議事も、空氣は隨分緊張したものであつたさうで、今回の如くダレて居たのは始めてだといふ。憲政會に人なく、少しも戰略なく、第一の鬪士たる尾崎君の演說の如き、其內容は豫算委員會や其他の質問に於て屢々繰りかへされたるものと同じく何等の新內容もなく、貧弱なる材料を潤飾するに徒らに奇矯激越の形容的修辭を以てするのみ、單に政敵を漫罵するのみを以て快事とし、先づ期待の心理を利用する所以を誤まり、同時に今の如き實質的經綸の大仕事を擧國一致で行らねばならぬ時局に際して、尙

ほ斯かる形式的政爭に從はねばならぬといふ大切な點に於て論據を有せず、議員の一人々々に浸み込む樣な誠意と威嚴とが全然缺如した爲に、單に滑稽を以て遇され、少なくとも、あらずもがなの態度を以て迎えられ、遂に少しも議場の空氣を緊張せしめなかつたことは大失敗であつた。若し今少しく議場の空氣を緊張せしめたならば、たとひ議場に於ては敗れても、此空氣が院外に傳播されて、不信任案を提出したといふ目的は多少なりとも達せらるべかりしに、空氣を緊張せしめ得なかつた爲に、院外の輿論に對して少しの印象少しの反響をも與えることが出來なかつた。

議場心理の一適例としては齋藤隆夫君の失敗を擧げることが出來る。外交調査會無用の決議案提出を說明すべく齋藤君が呼び出されたとき、齋藤君は大臣の出席を要求した。齋藤君の此要求は必ずしも不可ではないが、其態度に對して議場心理は先づ齋藤君を生意氣だと感じた。且大臣出席を要求すると共に登壇して演說を始めれば可かつたが、手持不沙汰の少時間が出來た爲に、伊藤知也君の半疊を入れた動機が直ちに成立して、次の日程に移つた。斯くて議場心理は愈よ齋藤君を輕蔑して了つた。既に氣勢を殺がれた齋藤君が一小失言の爲に遂に懲罰までに行き着いたのも、議場心理の當然の進み方であつた。

政派の懸引が議院政治の發動に重要なる要素たることは多く說明するまでもなく明白に知られて居ると思ふ。たゞ憲政會が此懸引について非常に拙劣であつた一例として、余が國民黨の院內幹事たりしによりて明かに知つて居るものを擧げて見たい。後藤內相の失言取消問題の如き、あの傲岸な內相が彼れが如く柔順に服從したのは、憲政會の提案に國民黨が贊成を表したからであつた。國民黨の此態度を德とすべき筈の憲政會は、極めて小さい問題ではあつたが、政友會の高見之通君を懲罰に附するの動議・

出すに當りて、先づ國民黨に交渉して來ねばならなかつた。單獨に突發した爲に、國民黨は友黨たる政友會の懇請に應じて、此度だけは高見君を不問に附することにしたが、維新會中ですらも高見君懲罰に賛成したものがあつたのであるから、若し憲政會が事前に國民黨に交渉して來たならば、國民黨代議士會は必ず之に賛成して、此動議は成立するものであつたらうと思はれる。

三

吾人の議院政治觀、寧ろ簡單に議院觀は、之を統制的に論述する程のものではない。次第もなく、秩序もなく、今回の議院生活中の事實を回顧して、思ひ出すに從つて之を叙述して見やうと思ふのである。何よりも先づ指を屈したいのは議院の建築である。これは目下餘りに輕視された餘りに重要な問題である。

憲法布かれて既に二十七年、議會は回を重ねること三十九、決して短かしとせぬ。而も今に至つて尚ほ議院の建物はバラック同樣の粗末極まるものである。凡そ議會を有する國に於て日本の議院ほど憐れむべき建築はあるまい。先進憲政國にありては、其國の第一等の壯麗雄大なる建物は必ず議院であると言はれて居るのに、日本は未だ此點に何等の考慮を費やして居らぬ。時として豫算案に議院建築費が計上されるが、之を通過させるべく熱心でなかつた。議員等も、他の國費多端を名として、自分個人のことの如くに馬鹿遠慮をして之を成立せしめなかつた。今は議院建築調査會の名に於て當分葬むられて居るのである。思ふに議院の建築は議員の私事ではない。憲法を大切にする國民は議院の建築物に於て其感情を具體化せねばならぬ。別に之れよりも必要なる國費があるからといふならば、恰も國民の生活の

直接なる必要よりして、憲法よりも民法商法の方が大切であると言ふと同じき誤謬である。議院の建築は國民の精神氣魂の宿る處であらねばならぬ。それを仰ぎ見るによりて、それが自分のものであるとの感じを起さねばならぬ。親しみがあり、而も威嚴があり、雄渾壯大なる議院の建築に接することにより
て、憲法政治の親しみ、威嚴、及び雄渾壯大なるを感得せしめねばならぬ。而して議員も亦斯かる建築の中に入りて國事に參與するの痛切なる責任を感ぜしめねばならぬ。若し今の議員に眞摯の心がなく責任の觀念が乏しいと言ふならば、不眞面目なるらしき、假小屋なるらしき、重厚の表現なき、議院の現在の建物が、其由緣の一部をなして居ることを否定することは出來ぬ。日本の議院政治の向上は、先づ議院の建築より始めねばならぬことを絶叫する。議院は議員の住宅ではない。憲法の殿堂である。憲法を尊重し、憲政の完備を念とするならば、他の國費を割いてなりとも、議員は先づ議院の壯麗雄大なる建築を完成することに焦心せねばならぬ。而して國民は更に最も之を切望せねばならぬ。陛下の宮城と議院の建築との唯此二つは、國民の忠君愛國の性情を實物化したものでなければならぬ。

議院の建築と同時に議院の制度も之を改善すべく研究の餘地があると思ふ。吾人は未だ多く此點に考察を加へたことがないけれども、心づいた一二を擧げて見れば、議場内に於ける議長の職權は、大臣や政府委員に對しても之を支配し節制し得るものたらしめねばならぬ。例へば大臣の失言の如きは、議長が之に取消を命じ得るものたらしめる必要がある。議場の神聖を保ち之を代表するものは議長であるとすれば、場内に在る何人も之が節度に服せしむることは、議院の權能を向上せしむべき所以に外ならぬ。

部屬制度の如きも告朔の餼羊である。政黨政派の發達しなかつた當年に於ては、部屬制度は必要であ

つたが、今では殆んど何の用をも爲さない。寧ろ斯かる不必要なる制度の爲に議會成立の一要件として之に一日を費やすに至りては寧ろ有害無益であると言つて可い。一の典禮としてならば、古き歴史を尊重する爲に不必要な制度を殘存することも不可はないが、部屬制度の如きは典禮と見るべきものではない。無意味な不必要な制度が殘存して、尙之に拘へられて居ることは、煩はしいのみではない。議院が其明かに改善すべきものを改善しないことを表明する所以となるが爲に、議院自ら小にし、自ら卑うする所以となり、從つて議院政治の向上改善を阻碍する所以となるのである。一時的の若しくは僅小なる必要不必要により制度を改めることは輕卒なるものとして愼しんで避けねばならぬが、斯かる極めて明白な何人にも異論なき既死の制度に拘泥して其愚を守ることは、議院の向上的精神と矛盾するものである。此向上的精神は議院政治を完成する上に決して閑却し得べからざるものと思ふ。斷じて一小事では無いのである。

委員會の制度及び慣習も改善すべきものに屬する。我が議院法に於ては委員會を公開せぬことを以て原則としてある。吾人は之れが勵行を望みたい。然るに新聞記者に迫られて新聞に媚びるの風あるより遂に公開することを以て原則とするの慣習を造るに至つた。之が爲に議員は多く委員會に於て發言し、之を以て賣名の場となすに至つた。豫算委員會の如きは其弊最も甚だしきもので、豫算と關係なき質問を連發するを以て得意とするやうになつた。而して此等質問應答の多くは之を本議場に於てなすべき當然の性質を失つて了つた。委員會は圓卓的相談を以て錬り上げる場所である。而して質問應答は之を本議場に於てなすべきである。議會は言論の府たる以上、本議場は飽くまでも言論を盛んならしめねばな

らぬ。今の如き本議場に於ける言論の寂寥は、委員會の制度が之を然らしめたものたることは爭ひなき事實である。議場が委員會の決定に盲從し、而して議場に於て言論の花々しからざることは、決して議院政治を向上せしむる所以でなく、又國民を議院政治的に訓練せしむる所以でも無い。

四

議長は第一黨より選出されるものなるが故に、其院の議長たると共に、其黨を代表して友黨に臨み敵黨を壓する所以のものとなることは已むを得ぬ。議院政治の發達は要するに政黨政治の發達なるが故に此風は永遠に排することは出來まい。議長は公平なるべきものなるが故に、政黨以外に立つべきものなりと望むものもあるが、これはたゞ觀念に於てのみ望み得べきも事實に於ては到底望み得べきものでは無い。議長も亦人たり黨人たるが故に、人たるの感情と黨人たるの私心より超脫せんことを望むは望むものゝ愚である。たゞ餘りに甚だしき偏頗は議場道德の制裁を以て之を戒愼せしむべき一途の存するのみである。然るに吾人の聞見する所を以てすれば、議事に慣れざる日本國民は未だ議事に訓練さるゝこと少なく、議院に於ける議場道德なるものは未だ成立して居ない。大政黨は必ず橫暴の廻り持をやり、宿昔の仇討ちにのみ熱中して居る。大岡議長の行り方は隨分不公平であつた。反對黨の言論に少しでも不穩なるものがあれば直に取消を命じ、味方のものに對しては聞かざるまねをするのが常であつた。一寸した用語でも、反對黨の發言に對しては『登壇を命じます』といひ、味方に對しては『登壇を希望します』といふ。萬事が此調子である。反對黨に在りても、議長なるものは不公平のものであると始めより頭から定めてかゝつて居るのであるから、議長と反對黨とは愈よ反目するのみである。反對黨は必ず

議長苛めをやるものなりと定められてあるが故に、議長には溫厚の人物よりも寧ろ横着な人を以て選擇の標準とすることになり、從つて益々不公平が行はれることになる。これは何とか改めねばならぬ。議場道徳の成立を待つのは遠しと雖も確かな方法であるが、反對黨も亦議長苛めに浮身を窶すやうな下劣なことは廢めて、議場を成るべく上品にするといふことに心掛けたならば、餘り偏頗な處置も行はれぬことになるであらうと思はれる。同時に第一黨よりする議長選出の標準も、溫厚方正といふことに重きを置かねばならぬ。第一黨が絶對過半數でなくして、他の友黨の援助を借らねばならぬ這次の場合の如きは、友黨も之れが選擇に容喙すべき權能を發揮して、大岡君よりも寧ろ床次君の如き人を出さしめたならば可かつたと思はれる。議長の椅子は黨爭の戰勝の表章物であり、黨爭は常に黨爭の爲めに行はれて、其の勝敗及既に勝敗の定まつた後に於ける反目が、恰も源氏平家又は山名細川の爭ひの如き有樣なる黨界の現狀に在りては、議長不公平の如きは寧ろ一の枝葉の問題たるに過ぎぬ。此惡弊を匡正すべき根本の問題がある。根本の問題とは即ち黨爭の範圍を縮少することである。

議員には有爲の人材も決して少なしとはせぬが、同時にくだらない人物の多いことも否認されぬ。これは議院政治の完成の上に看過し難き一障碍であるが、現在に於ては如何ともし難きものである。甚だ月並の言草ではあるが、國民の覺醒と選擧法の改正とに待たねばならぬことは言ふまでもない。しかし吾人の見る所を以てすれば、平議員に大した人物を望む必要は無いと思ふ。現在くらゐの發達の程度に於ても政黨は其領袖さへ大人物であるならば、普通の議員は只其指揮に從つて若しくは其帷幕に參劃して行動するのみで足りると思ふ。所謂一人一黨主義とかの連中は一々人材であることを要求さるべき義務

があるが、政黨員に在りては個々の材器に就いては餘り嚴密に問ふことを要しないと思ふ。吾人の宿論に依れば、政治は如何なる場所如何なる時代に於ても偉人政治である。一鄕の政治、一國の支配、必ず其鄕其國の偉人によりて行はれる。國家も亦然りである。たゞ獨裁の名によりて行はるゝ偉人政治は、偉人と其治められるものとが別々に離れて居るが、自治又は憲政の名によりて行はるゝ偉人政治は、他の總てが偉人に共鳴し、其偉人の方寸が、他の總ての人の共有的施設となつて現はれるのである。政黨の首領なるものと他の黨員との關係も亦此れに外ならない。故に議員選擧に當りても、候補者が政黨員であるならば、其候補者に投票するといふよりも、其候補者の屬して居る政黨の領袖に投票するといふ意味に於て選擧を行ることにすれば、議院政治政黨政治は發達するものである。若し其個人の材器を問ふならば、其候補者が其領袖と如何なる關係に於て立つかを吟味するのみを以て足れりとすべきである。

此故に議院政治を背負つて立つものは所謂領袖なるものでなければならぬ。此意味に於て吾人は今の第一黨及第二黨の領袖に對して不滿を感ぜずには居られなかつた。國策といふことには趣味も知識も抱懷も乏しく、單に政權を獲んことにのみ焦慮しつゝあることが歴然として瞭解し得られる。普通の代議士が代議士たらんが爲に代議士となり、國策の實行といふことに對して風馬牛相及ばざるが如く、領袖等も亦政權を獲んが爲めのみに政權を獲ることを望むもので、國策の研究、國策の樹立、國策の實現に於て何等の熱誠もなく、此くの如き思想を以て其黨員を指導するのみなるが故に、黨爭も必ず黨爭の爲のみの黨爭となり、黨爭は常に必ず險惡の氣象を帶び、悲觀的識者をして或は議會の墮落を叫ばしめ、議院政治の前途を憂慮せしめるのである。大臣病が膏肓に入つて居る今の第一黨第二黨の領袖連は、議會

裡に於ける總ての弊資の根基をなすものたることは斷言し得る。

五

彌次といふものがある。今度の議會の如きは隨分猛烈であつた。これが爲めに議場は幾たびも紛擾を來した。議會の品位を言ふものは、何人も彌次に論及せぬものは無い。彌次には二種類ある。其人の存在を示すべく、若しくは新聞紙に其名の現はれんことを望む所の微少なる下劣なる賣名者は其一で、感情の激する所、思はず口を突いて發するものは其二である。共に卑しむべきものではあるが、第二に屬するものは已むを得ない。且つ此第二者は在りては、威投的に出るのであるから、不斷常習的に騒ぎ出すのではなく、此種に屬するものは不問に附して可なりである。第一に屬するものに在りては、新聞紙も其名を書かぬことにして、(此等の賣名者は筆誅されても其名の新聞に出ることを喜ぶもので、最も苦痛とすることは默殺されることである) 各政黨も亦互に節制することによりて幾分か廓清することが出來やう。

しかし一面から考へれば、時々警拔なる痛快なる評言を放つて敵黨及敵黨を代表する登壇者を威嚇し又は評殺することは、黨爭の一餘戯として必ずしも排斥すべきものではないが、常習的な、永續的な、好んで議場を紛擾せしめるやうな、而白半分の下品な彌次に至つては、微塵も許容すべき所以を見ぬのである。たゞ、議會は左樣然らばの切口上を以てのみ議論を上下すべき處ではなく、野人を代表し、野人の風格を其まゝに備へて國事を論爭するの點に下院の趣味も價値もあるのであるから、天眞爛熳の威投的なる、若くば機に應じて突發する片言隻語の警句の如きは寧ろ歡迎しても不可はないと思ふ。議會

は總ての點に於て國民を代表せねばならぬ。國民の理性を代表すると共に、國民の感情を代表すべきではある。或種の彌次は國民の感情を代表すべき聲として存在の價値と理由とがある。之を外にしては皆擯斥すべきものである。

議員の方面に彌次の愼しむべきと共に、政府の方面に對して其驕慢と鬪志とを警しめねばならぬ必要がある。今の內閣の如きは、維新會と稱する御用黨四十餘名の代議士を有する外、其他は總べて其手足ではない。政友會も國民黨も與黨ではない。憲政會に對する黨略と、重大なる時局に對する自覺と自制とにより、姑らく政爭を中絕して、現內閣の存在を承認し、十分の留保を以て、國策の實行を監視督勵しつゝあるのみに過ぎぬ。此時に際し現內閣の諸臣は、極めて小心翼々であらねばならぬ。極めて恪勤であらねばならぬ。誠意誠心といふことを口にせんより其擧動容姿の上にあり／＼と誠意誠心が溢れて見ゆる樣な態度でなければならぬ。然るに吾人の見る所では、現內閣の基礎既に固しとなし、次第に驕慢の風が現はれて來た。そして憲政會に對して頻りに鬪心爭氣を投げて居つた。斯くの如き其志も其器も極めて小なるを見るべく、必ずや識者をして此重大なる時局の處理を現內閣諸人に托するに足りないと感ぜしめるに至るであらう。憲政會に對しても之を包容すべく大でありたい。既に試みて失敗したとはいへ、更に機會があるならば、憲政會の首領をも擧國一致の大經綸に伴はしむべく二たび三たび懇請するほどの雅量と誠意とがあつて欲しい。

大臣驕慢の態度の責むべきと共に、反對黨が徒らに大臣の鬪心爭氣を激發するのみに努力するのも亦極めて見惡かつた。質問の如きも、首相に法制上の知識が無いのを奇貨として、憲法上の質問を發して

首相をして答へしめんとするが如きは其一例である。最高政策の質問に對しては首相をして答へしむべきであるが、法制上に關しては法制局長官をして答へしめても可いではないか。法制局長官のお答へは聽きませぬなど、すねるに至りては所謂第一流政治家も餘りに幼稚である。之れと同時に、各大臣は聯帶責任を以て政策上の質問には何人も應答の任に當ることにせねばならぬ。我國の諸大臣は多くは僚屬の出身なるが故に、其所管事務といふことのみに拘泥するの嫌ひがある。現内閣の政策には、現内閣諸大臣が聯帶を以て其責に任じ、之れが說明應答に當るを以て立憲的とすべきである。

吾人の議會觀は、瑣末の點に至れば尙ほ多くを擧げ得る。併し凡そ重要なりと信じたる以上の敍說を以て一旦筆を擱きたい。最後に是非とも一事の擧げざるべからざるものがある。幵は新聞記者の議會に關する記事で、或は甚だしき偏頗を以て、或は問題の要點をつかみ得る頭腦の不足によりて、議院内に在るものより見れば殆んど總ての新聞の議會記事は、或は誤謬甚だしく、或は甚だしく中心を失し、若くは故意の曲筆も多く、或は重要なる記事を逸する等、今の調子では新聞の記事によりて正確なる議會觀を得ることは到底出來ない相談である。議院政治を向上せしめんには、各新聞社は議會に派出する所の其記者を精選すべき義務があることを知らねばならぬ。

獨墺同盟の將來と世界に於ける五大勢力圏の出現

尾原亮太郎

一

大戰亂は勃發以來既に殆んど三年に近しと雖もその終結は今以て豫測することが出來ぬ。然れども何れにしても獨墺同盟の全然叩き潰されざることは今は豫想に難からざることとなつた。露國は戰爭の央に於て革命を起し、その結果東部の戰線は休戰同然の姿となり、獨逸は露境に守兵を留めてその全力を西方に集中するに至りたれば、英國徴兵令の實施の効果も今日の所では餘り現はれないのである。北米の出兵もこれ亦實戰の上に於ては、多大の影響を起すべしとも思はれぬ。要するに戰爭は曾ても述べたるが如く、今や速戰を利とする第一期を通り越し、更に兵員の多數を利とする第二期を通り越して、愈長圖持久の策を廻らすべき第三期に入つて來た。經濟戰に於ける勝利は、結局聯合側に歸着すべきことと之を大觀するに難からざれども、左りとて獨墺があれ丈の面積を以て居て、それに墺匈及土勃が同盟して尚其上に侵略地も其儘である以上は、そう容易く降服もすまい。財政も紙幣が循環して居て、正金の餘り輸出されざる現狀にては、國債が如何に嵩張りたればとて、急に迫究すべく見へぬ。兎も角も獨墺同盟はその儘存續するものと認めて、その將來を研究することは益必要と認むるのである。

土勃二國は暫く別として、獨墺は所謂大獨逸の聯合として一國たるべき行懸を以て居る。近世史の初かのカール五世帝の獨逸帝國なるものは、その西班牙と濠

外領地を外にしては、卽ち今日の獨墺兩國を包括するものであつた。三十年戰爭以來獨逸は殆んど支離滅裂の有様であつたが、獨逸帝國の觀念丈は一貫して最近世迄傳はり來つたのである。然るに那破翁戰爭後に於ける維納會議に於て、獨逸帝國は復興されなかつた。これが獨逸人民を刺激して、かの千八百四十八年に於けるフランクフルトの國民議會となつた。此議會に於て墺國を包括する大獨逸黨と墺國を除外せる小獨逸黨との爭論となり、小獨逸黨勝を制して國民議會は結局墺國を聯邦外に除外して普國王に帝冠を上つたのである。若し普國王にして此際此帝冠を受けたらんには、大統領同然の皇帝を戴く所の民主的獨逸帝國が現出したであらう。これが今日迄無事に續いたかどうかは疑問である。否疾うに瓦解に歸したであらうが、これと形を同くして全然性質を異にする獨逸帝國がビスマークに依りて建設された。ビスマークの建設せる獨逸帝國は、卽ち普國を本位として他の聯邦を附屬とするもので、卽ち今日の軍國的獨逸帝國がそれである。

然るに墺國を除外せる此小獨逸的獨逸帝國は、今回の戰亂に於て墺匈國との同盟を極度に固め、フランクフルトの議會の論議となりたる大獨逸的獨逸帝國、卽ち墺國を包括せる大獨逸帝國を居ながら現出せる觀がある。今や土耳古も勃牙利も包括されて、四國同盟を作つて居るが、之が愈一國となりて北海より小亞細亞に迄延長する大獨逸を形成したらんには、實に世界に於ける一大事變と云はなければならぬ。併かし事實はこの形勢に向つて刻々進みつゝある有様である。

二

戰亂久しきに亘りて決せざる間に、世界の形勢は早くも一大變を遂げつゝあることは、識者の看取することを忘らざる所である。かのニーチェは世界を擧て一大合衆國の組織さるべき時期を豫想して、人間活動の論理的歸結と說きたるが、固より急に其實現を見ることは六つかしかるべきも、大小幾十の春秋的分裂は最早過去の事實となりて、小弱者は次第に幷呑されて、今や戰國七雄の割據時代に推移しつゝある有様を見認

むるのである。而かも現代の戰國に於ては七雄の代りに五六雄の現出に歸着しさうである。今之を列擧すれば、第一は前章に述べたる獨墺土勃の一群である。第二は指を英佛の一群に屆すべく、第三は露國であらうか、これは最近の大革命に依りて如何に成行くべきか、未だその豫測が付かぬ。第四は無論米國にして、かのモンロー主義に依りて或は南米を包括するに至るやも計られぬ。而して第五は必ず日本を中心とする東洋の一群ならざるべからずと考ふるのである。英國はその阿弗利加亞細亞濠州及北米加那太に至る所の領土千二百萬方哩の大さと、四億二千五百萬の人口を以て、恐らくは最大のものであらう。現下の大戰亂に於てその五大洲に散布する各植民地は、何れも母國を仰で中心とする一大聯邦に變化しつゝあることは誰人も看過することの出來ざる有樣である。佛國は獨逸に征服せられざる限り、今日の形勢を以てしては到底英國の附庸國たることを免れぬと云ふのは、戰亂の中頃より歐米學者間に起りし說である。彼等の說に依れば葡萄牙伊太利瀕海の國も亦佛國と同運命を免れ得まい。而して西班牙も亦孤立たることの出來ざるは明かであると云ふのである。併かし我々はかく迄佛國を見縊つて居ない。何と云ふても陸上に於ける獨逸の最大强敵は、矢張佛國である。我々は佛國に牛耳を執らせて、伊西葡白の拉甸人種國の組織を希望して已まないのである。佛國の植民地も今日に於て尙英國に次ぐ廣大のものであり、且つ葡國白國にも相當の植民地があるから、一切を併合したらば隨分大きいものとなるべく、優に獨立の一大雄國となり得る資格がある。總面積は七百萬方哩で人口は一億四千萬である。併しこれは今の處ではまだ出來て居ない。出來るにしても其成立が中々に困難であらう。それでこれは暫く未製品として置く。露西亞は八百七十萬方哩の大さと、一億七千萬の人口を以て、而かも其領土は密實なる陸土にして、既に鐵道の大幹線を貫通する上より見るも、その人種の兎も角大體に於て統一する上より云ふも、支離滅裂獨逸の餌食となる樣な氣遣ひはあるまい。早晩之を收拾

すべき大豪傑現はれ出でゝ、民族的大抱負を實行するに相違ないから、これ亦從來の如く將來に於ても一大勢力となるべく思ふのである。只獨逸は之を懷柔してその鋒を東方に向けしめたがる風があるから、日本は常に注意して現在の通り之を反對に向けることに努力せねばならぬ。幸に露國には無限の富源と無限の勢力があるから、今回の革命には何處迄も同情して、その獨逸の幹部獨逸の技師を驅逐せしめ、その代りに日本人を入り込ましめて、その無限の勢力を用ゐて無限の富力を開拓せしめ、露國は勿論聯合國の資料に供せねばならぬ。

　米國は前三者に比較すれば稍小にして、三百五十萬方哩の大さで、一億餘の人口を有して居る。然れども其領土は露國のそれよりは一層密實にして且つ整頓し、その氣候は全部溫帶の好位地を占め、その地味は全體を通じて極めて豐沃、人民は殆んど九分通りは白晳人種にして、建國以來百五十年に滿たざるも、能く調和融合し、清新活動の意氣充滿するものがある。その無限の富源も着々開拓されて、漸次農工兩本位に移り、隆々天に冲する盛況を呈出して居る。近頃大に感ずる所あり、盛に陸海軍を擴張しつゝあるが、此點は彼の本來の國是に鑑みて聊か不穩當と認むれども、兎も角前途希望に滿ちたる國勢である。而かも近來大に南米に手をつけ出した。これで以て愈モンロー主義を具體的に實現するに於ては、事態容易ならざるものがある。

　最後に日本がある。極東の局面は何と云ふても日本の勢力の下にある。此一群も未だ一團をなしては居らぬが、是非とも物にしなければならぬ。而かも焦眉の急を要する。日本は現在二十六萬方哩の面積と七千萬の人口を有て居る。支那は四百萬方哩の面積と三億二千萬の人口を有て居る。日支兩國の合計四百二十六萬方哩人口四億に達せんとするのである。これを統一するのは何も日本の野心と云ふ譯ではない。自から天の配采となつて居つて、東南洋人民は日本に賴つて救はるべき運命を有つて居る。天の命たる所從はざれば

相當の制裁を受けなければならぬ。現代の邦人たるもの、東洋人たるもの眞に自覺しなければならぬ。

三

獨墺の二國は曾ては反目したことがあつた。十九世紀の前半は殆んどその暗闘史である。而して千八百六十六年には遂に一大決戰に及んだが、墺國は全敗して獨逸聯邦より手を引て墺匈國を組織した。然るに伯林會議の直後千八百七十九年を以てビスマークは墺匈國と二國同盟を結び、四年の後伊太利を加へて有名の三國同盟を形成した。此同盟は今回の戰亂の始迄繼續したが、戰亂開始の後利害關係上、伊太利は聯合側に背き去り、入り代りて土耳古が加はり、又勃牙利が加はつた。土勃二國は獨墺の東南發展上重要の位地を占めて居れども、國狀も違ふし國力も殆んど比較にならない。それから未だ十分纏りもついて居ないから、暫く之を措きて獨墺のみにつきて述べんに、獨は二十萬方哩の大さで、人口が七千萬、墺は二十三萬方哩の大さで、人口が五千萬であるから、合計四十三萬方哩の大さで、人口一億二千萬である。(土耳古は七十萬方哩で、人口は二千萬、勃牙利は四萬方哩で人口四百七十萬である。總計しても百二十萬方哩人口一億五千萬に足らぬ。)勿論他の三團に比しては非常に小さいが、これ丈でも愈纏つて一國同然の姿となるとそれは中々に强勢のものとなるに相違ない。それでその組織につきては、既に兩國內の政論家により〳〵種々の計畫を立てゝ居るものがあるが、先づ經濟的見地より觀る論が一番實際的と認められる。回顧すれば往年リストの首唱に本づける關稅同盟が根底となりて、北獨逸聯邦が組織されて、之に依りて墺國を除外せる獨逸帝國の前身が出來上り、更らに此關稅同盟が南獨逸をも包括するに至りて、遂に之に依りて南北獨逸の聯合が遂げられて、かの普佛戰爭の結果獨逸帝國が建設された。左れば聯合國側より包圍攻擊を受けて事實上一種の關稅同盟をなせる獨墺兩國は、聯合國側の對敵取引禁止の經濟同盟と相俟ちて、現に旁ら激烈なる經濟戰を演じつゝある次第で、縱令他日兩國の戰爭は講和に依りて

一段落を告ぐるとも、それに拘らず目下の戰國狀態は永遠に繼續すべきものであらうと思ふのである。

獨墺二國は産業上より見ると云ふと、丁度相互補足の狀態となつて居る。獨逸は其東部に於ては尙農業本位の狀態を存するも、全體としては全く工業國に移つて居る。而してその農産物は到底其住民を養い切れないから、已むを得ず食料輸入の狀態となつて居る。墺匈國は未だ全く農業本位を脫せざるの國で、特に匈牙利に於て然りである。戰前の狀況では先づ所謂自給自足の有樣で、以前の如く食料輸出の餘裕はなくなつて居つた。然れども國內を通して一般に豐饒で、而かも農業が十分行屆いて居なかつたから、此戰爭中非常の努力の結果、今日では余程餘裕が生ずる樣になつて居ると云ふ說もある。巴里大學のリクタンベルジー教授（卽ち「最近獨逸の發展」の著者）の調査に依ると、千九百十二年に於ける小麥の收穫が一ヘクトル（我一町二段）につきて墺國は十五キログラム（我三十九貫目）匈牙利は十三キログラム（我三十四貫目）なるに對し、獨逸は二十二キログララム半（我五十八貫五百目）にも及んで居る。卽ち若し墺匈國の農作に改良を加ふるに於ては、少くとも獨逸のそれに近き收穫を得るに至るべく、さすれば現在一ヶ年の收穫千八百噸なるに對し、二千七百噸迄增收することが出來るであらうと云ふのである（巴里發行ロビニオン）。若し此調査にして大なる誤なしとすれば、墺匈國は其餘裕を割いて獨逸に輸出し、而してその不足の殆んど全部を補充することが出來るであらう。獨墺國內の狀況は開戰後その詳細を知ることが出來ぬ。然れども當初より食料に大々的不足を告ぐべき獨逸が案外にもどうかかうか遣つて居る所を見ると何か裏面に多少相當の補足の事情が出來て居るに相違ない。而して墺匈國の農作改良に關する大努力の如きは、確かに試みられて居るであらうと思ふのである。故に工業品に剩多なる獨逸は之を墺匈國に輸出し、農作物に剩多なる墺匈國は之を獨逸に輸出し、不充分ながら彼此相融通して先づ兎も角も自給自足の實を擧げつゝあるものと考ふる外ない。況んや食

料品の剩多なる土物の二國あるをや。此點より考ふると云ふと、聯合國の封鎖政略は十分効を奏して居ないと云はざるを得ぬ。

四

然れども獨逸と墺匈國とはその經濟事情を異にして居る。戰前に於ける獨逸の輸出入合計は百五億圓に達して居る。然るに墺匈國のそれは漸く二十六七億圓に過ぎぬ。墺匈國の輸入總額の三割九分は獨逸よりし、その輸出總額の四割は獨逸に行く。然るに獨逸側に於ては輸入總額の僅かに七分半が墺匈國よりするものにして、輸出總額の一割一分しか墺匈國に入らぬ。かくの如く戰前に於ける兩國の貿易關係は、墺匈の側では相當と云つてよいが、獨逸側より云へば案外に薄いものであつた。獨逸の狀勢は商工業に於ては殆んど英國の壘を摩する迄進んで居たが、墺匈國は餘程後れて未だ農業本位の境遇を脱しないのである。工業に於ても獨逸はカーテルやシンジケートの最近式組織が發達して、企業家相互間の競爭も、傭主と職工との利害も凡てが圓滿に調和されて有機的關係を現出して居るに比し、墺匈國は未だ個人主義の組織を脱して居ない。かくの如く、事情に於て相異るものを一社會に能く融一混和することは、至大の困難たらざるを得ぬ。兩國經濟上の融化は如何にして遂げらるべきか。

之に對して獨墺兩國內には現に種々の論者が現はれ出でゝ、盛に其研究を鬪はして居る。

その一は丁度その昔關稅同盟が初め北獨逸に起り、それが進んで南獨逸を包括するに至つた樣に、現在獨逸聯邦間の關稅同盟を墺匈國に延長すると云ふ說である。これは行懸上當然の說で、所謂今日の小獨逸が大獨逸とならんとするには是非ともその實行が必要であるが、如何にせん前述の樣に獨逸と墺匈國とは經濟上の事情を異にして居るので俄かなるこの實行は墺匈國に取りて容易ならざる損害であらうと言ふので、殊に匈牙利と墺國とは今日に於ても既に內實は別國として、通商條約の關係を以て居る樣の次第で、一層この融合が六つかしくなるべき事情がある。つまりはよく

此方法に依るとするも、二十年位を期して關稅の遞減を計りて、終には全く獨墺間の障壁を撤してはどうであらうかと云ふ位の議論が成立つて居る。

その二は先づ獨墺二國は關稅同盟を作りて一國として外に對し、その上必要に應じて二國間に相當の關稅を設けようと言ふのである。これは一見便法で、兩國殊に墺匈國の產業を保護しながら、二國の共同利益を進むることになるが、實行上必ず困難を來すべく、その結果折角の關稅同盟が同盟にならぬ樣のことになるかも知れぬと云ふのである。

その三は兩國の關係は單に特惠關稅條約に止めて、別に共同一致の團體を作らざることである。此方法は兩國の關係を經濟上殆んど獨立の位地に置くと同樣なれば、聯合上利益たる所少かるべく、而して一面に於ては他列國の感情を害することは、前者と同樣なれば利弊相償はざるものと云ふのである。

三者各長短あつて未だ何れがよいとも決定がつかぬらしいけれども、兩國の調和融合の着手は兎に角此邊よりすべきは勿論である。

關稅同盟又は之に類する方法に依りて兩國の聯合合同を計るのも一方法なれども、尙こゝに今一つの方法がある。それは產業上の合同である。兩國の資本家が合同してカーテル又はシンジケートを組織することは、これ迄も行はれて居ることであるけれども、今後一層大規模に實行することにして、之に對する政府の監督も亦二國共同に定めて行くと云ふこと、これは二國を合同せしせる上に於て有力の方法であるが、尙一步を進めて現に戰時中實行されつゝある國家組織の軍需品の產業を、更に其範圍を廣めて一般產業に及ぼし、兩國共同的に永續經營することの意見である。これ等の意見にして實行され、經濟上より融合合體するに至らば事實上二國は全く合同するに至るべく、而かして優勢なる實力の獨逸にあらん限りは、政治上形式上墺匈國が將來バヾリア、ウルテンブルグと似寄りたる大なる聯邦となるべきは最早疑を容れぬ。

五

戰亂の結果世界の形勢は如何なる趨勢に向ふであらうか。近世に於ける思想の潮流は平和を目標とし理想として進みつゝあつた。政治家も事業家も思想家も尙更以て宗教家も、凡て此論點より意見を立て、此目標に向て努力しつゝあつた。然れとも平和は勝者の主張に過ぎぬ。敗者の位地に立てるものは不平欝勃として已むに已まれず、機會を見て此狀態を顚覆して勝者をして虛榮に誇れる太平樂を、邯鄲一場の夢と悔恨煩悶せしめて遣りたくて堪まらない。これは人情である。中世に於ける獨逸帝國の勢力は如何なるものなりしぞ。シヤーレマン、オツトー、フレテリツク、バロバロツサを中心とするチユートンの勢威は、實にその當時の世界を統一する槪があつた。然るに近世に於ては此優勢なる獨逸人種も閑却されて、殆んどあれどもなきが如き有樣となり、跼天蹐地殆んど手も足も出ない姿となり、而して三大洋五大洲徒らにアングルサクソンの跳梁跋扈を見るのみとなつた。敗者の位地に立てる獨逸人が、勝者の位地に立てる英米の平和論に共鳴せざるは、尙一片男子の意氣銷沈せざるものがあるからである。果して然り、百年來彼等の間に中世に憧憬する浪漫的思想欝勃として起り、その結果遂に此般驚天動地の活劇を演ずるに至つたのである。昨秋西に於てはソンムの大戰に新銳の英軍豫期の功を收めず、而してヴオーとヅオーモンの二砲臺陷りてヴエルダンの佛軍危しと傳へられ、東に在りては露軍甚しく振はず、新參加のルーマニア軍一敗地に塗るゝに當りて、獨逸の宰相ベートマンホルウエヒ聯邦議會に於て揚言して曰く、「若し人力を以て此恐るべき禍害の再演を防止し得べくんば、獨逸は人道の叫びに從て喜んで平和の介議ト會意に聽取すべく、而して忠實にその解決法の講求に努力し其實現に助力すべし」と。次で講話の議を提出した。彼が今日の苦境に在りても少しにても形勢の自己に利あるものあるに當りては、此媾話を敢てし直ちに平和の風を吹かすを以て見るべしである。誠に平和は勝者の主張に外ならぬ、云はゞ勝手の議論に過ぎぬことが明かである。

翻て思ふに、東洋人種の從來の境遇は果して如何なるものなりしぞ。白人種橫行の世界にありて、黃色人種の狀態は恰も餘喘を一隅に保ちつゝある有樣ではなかりしや。不思議にもこゝに白人種間に大戰勃發して、豫想以外の戰亂となり、現に殆んど三年を經過して、而かも今後の推移も豫測すべからず。その終結につきても一向見當もつかざる有樣である。最近獨逸國內の政變の報が傳つたが、その詳細は固より知るを得ざれども、大體より見るに矢張墺匈國との折合上其間に一致を保つ事に重きを置いて居るに起つたことが分る。墺匈國は近來露國に對する迎合上、非併合無賠償主義に傾て居るが、獨逸皇帝は當初通り併合も賠償も主張さるゝので、それが墺匈國の利害に反し內治上に於ても戰亂に倦みたる人心に影響し始めた。中央黨社會黨進步黨の三黨がその決議案を發表し、一、獨逸は獨立擁護及領土保全の爲に戰ふものにして、侵略戰爭を爲すものにあらず。二、帝國議會は暴力に依る一切の領土併合を排斥し、各國民間に妥協的平和及永續的和協を冀ふ。三、若しも敵國政府が前記の平和を拒絕し、獨逸及その同盟國を侵略せんと脅すに於ては、獨逸國民は飽迄防戰するの決心を有す云々。その他數條を發表せるは、此消息を洩らすもので、此主義の中心かバヽリアにあるは想像し得べく、それが亦墺匈國の利害に一致すること勿論なれば、皇帝の意を承けて從來賠償主義併合主義を執り居れる宰相ベートマン、ホルウエヒも、その主張を一貫することを得ざるに至り、こゝにその更迭を促がして皇帝をしてその辭職を聽許するの已むを得ざるに至らしめしものと思はるゝのである。最近の歐洲電報に依れば皇帝皇太子及軍閥派保守派は、飽迄も賠償主義併合主義を執り、新宰相ミハエリスは其意を受けて從來の方針を持續する樣に傳へられて居るが、かくては國內の民黨側の意見と背くのみならず、墺匈國及バヽリア國とも利害相衝突すをことになる。個樣な無理なことは迚も出來ないと思ふ。これは想像ではあるが、結局皇帝も此點に於て讓步せられ、新宰相の意見は恐くは非賠償無併合主義を

執り、內、國內の民黨を取り纏め、外、墺匈國及バヾリアと一致の方針を取るに至るであらう。新宰相の演說が多大の注目を以て期待せられつゝあるは、それが爲であらう。墺國に多くの知已を有するフロックドル、フランツァルが外務大臣となりしも、此邊の消息を洩らすものであらうと思はるゝのである。それにしても聯合國が非賠償無併合の樣な條件、所謂五分五分の交綏には迚も同意すべくもあるまいから戰爭は尚此儘に繼續すべく、從て獨逸に於ける軍國主義と主戰主義は當然持續されねばならぬ。又その强硬の意志に於ては少しも異るべくもないから、新宰相が官僚派の人なることも、其保守黨側より堅忍不拔にして勇猛活潑なる人なりとの賛辭を浴せかけられて、軍國主義の勝利と傳らるゝことも、これが爲であらう。講和の方向に向つて一歩を進めたとは云へるかも知れぬが、其の平和は未だ曙光をも認むる場合に至らぬ。只此際に於ける吾人の態度は、內には擧國一致の實を擧げ、外には東洋諸國就中支那との提携聯絡を遂げて、世界列國の形勢の推移に順應し、小者常危大者安の理を知り、如何にして變レ小爲レ大危爲レ安の實を擧ぐべきやを心懸けなければならぬ。而して獨逸の主義精神の飽迄も彼等の民族本位にして、他人種に對する非人道、他國に對する侵略主義の辛辣なることは意料の外にある有樣なれば、困究の餘假令非併合無賠償などゝ云ふた所で、決して心を許すべきものでなきのみならず、非併合の相互主義より膠州灣や南洋回復を主張する樣になりては、それこそ由々敷大事であるから我國民たるものは正義に仗り交誼を重んじて、益々聯合列國と結束を固くして、永久に彼を包圍の內に置き、斷じて彼をして世界の平和を攪亂せざらしむる樣努めなければならぬ。世界永遠の平和を策すべき方略は、之を外にして他にあるまいと思ふ。

何故に人工的なる米價暴騰を抑制せざる

法學博士　堀江歸一

米價の暴騰放任す可からず

米は我國民の生活上、至重の食料品たり、又地方農民の生計を繋ぐ主要の產物たるに拘はらず、其代價は常に騰落し、然も騰落の區域甚だ大にして、其暴騰するや、消費者に苦痛を與へ、其暴落するや、生產者に損失を及ぼさゞれば已まず、之を適度に維持して、生產者並に消費者双方の利害を調和するの必要は從來爲政者に依て承認せられ、之に應ずるの目的を以て、一二施政の行はれたるものなきに非ずと雖も、其効果は容易に實現せらるゝに至らず、現に最近の事實に就て見るも、本年一月より四月に至る間十五圓乃至十七圓を往來したる定期米の價格は五月に入りて最高價格二十一圓六十五錢と爲り、六月には二十三圓七十九錢に上り、更に七月には二十四圓八十錢と云ふが如き、價格を生ずることゝ爲り、定期米市場に於ける空前の騰貴と共に、深川市場の白米標準相場も亦之に伴うて至れり。今や戰爭景氣は社會の或る方面に大なる利益を與へ、大小の成金は世間到る所に簇生しつゝあるの趣なるを以て、米價の暴騰斯の如き程度に至れりとするも、必ずしも平生に於けるが如く、細民の生活に甚だしき壓迫を加へざるの觀あり。古來米價の高き時には必ず盜賊、放火、賣淫其他の犯罪を增加し、米價の低き時には是等の犯罪を抑制するの事實ありと稱せらる。爲政者が米價をして其平準を保たしむるの方策に重きを置けるもの亦偶然に非ずとす可し。然も今日の如く社會一般に商工業殷賑の爲めに繁昌しつゝあるときは、米價騰貴するも職工勞働者は容易に職業を求め、之に就きて騰貴したる米價と調節を保つ程度まで

增加したる所得を收むるを得るを以て、米價の騰貴必ずしも彼等に取つて大なる苦痛たらざる可し。大正元年米價が略ぼ今日の程度に騰貴するや、社會諸方面に之を愁訴するの聲を生じたるに對し、頃者米價の騰貴に對して人心の平穩なるは、畢竟如上の事情に基くものにして、此一事は今回の米價騰貴に就て一の異色を以て、目す可き所なり。

然れども吾人は斯る特殊の事情あるの故を以て、今日の米價をして其暴騰するに任せよと云ふものに非ず。戰爭景氣に依て利益を收めたる者は其絶對數に就て云ふときは必ずしも少なりとする可からざるも、國民全體より見るときは、其小部分のみ。戰爭の經濟上に與ふる利益如何に大なりとするも、全然之に與らざる、又は與ることの少なき階級あり、官吏を始め定額の俸給、利子等に依て衣食する者の如き、即ち之に相當し、何れも米價騰貴の爲めに、生計上に大なる壓迫を蒙りつゝあることを看過す可からず。又職工勞働者の輩が米價騰貴に伴つて、生計上に壓迫を蒙らざるは、畢竟戰爭の爲めに偶然の利益を獲得しつゝあるが故のみ。此利益にして偶然のものたる以上は、戰爭終熄し、又は其終熄する時期の近づきたる際を以て、消滅す可きことを免かれず。現に近來露國軍需品註文の杜絶したる結果、關西の某兵器製造會社に於て一擧に數千名の職工を解傭して會社と職工との間に紛議を釀したるが如き、東京の某毛織物會社に於て同樣の事件を生じたるが如き、何れも戰爭繼續中の今日に於て、早く經濟社會の一局面に從來の好景氣に對する反動時代の到來したることを語るものと認む可く、講和の成立若しくは其成立の確定したる時に於て、斯る反動時代に接す可きは今日より之を想像するに難からず。斯る場合に臨んで、米價の暴騰今日の如く爲らんか、職工勞働者の輩は失業又は賃銀減損に加ふるに、生活費の膨脹を以てし、日常の生計に非常の困難を蒙らざるを得ず。反動時代に於ける彼等の苦痛を減却するの點より考ふるも、米價の暴騰を抑制し、今日に於て早く其平準に就かしむるの必要あるや、論を俟たざるな

り。

戰爭の我國經濟社會に及ぼせる影響の一端として、商工業の殷賑今日の如く、職工勞働者の階級に撒布せらるゝ資金の頗る大なる場合には、彼等をして其一部を貯蓄せしめ、以て、戰後に來る可き經濟社會の反動に當らしむると共に、資力を國內に充實して、外に我國經濟上の權勢を伸張せしむるの急務なるは、何人も承認する所なる可し。曩に內務、大藏、遞信、農商務諸大臣が勤儉貯蓄獎勵に關する訓示を部下の吏僚に與へ、次いで地方長官會議の席上に於ても、總理、大藏兩大臣が勤儉貯蓄の必要を力說し、地方長官の管轄下の人民に其意を致すことを望みたるが如き、何れも以上の趣意に出づるものにして、政府は此一事を以て、戰後經濟政策の一要項に充てんとするの觀あり。假令ひ此目的を達する爲めに、政府が過般の特別議會に提出したる貯金券法案は何故か衆議院に於て握り潰しの運命に遭ひて、成立の機會に達せざりしが、貯蓄を獎勵するの方法必ずしも一の貯金券發行に止まるものに非ず、政府にして其獎勵を必要とする以上は、他の方法に依て其目的を果すに勉む可しと雖も、勞働者社會の所得の大部分の消費せらるゝ米の代價の騰貴せることと今日の如き場合に於て、彼等に向つて貯蓄を勸奬するが如き、矛盾を極むるの甚だしきものとす可く、貯蓄を獎勵して、戰後に於ける資金の供給を豐富ならしむる爲めにも、米價の暴騰を抑制するの必要ありとす可きなり。

米價騰貴の諸原因――自然的と人工的

米價をして其暴騰するに任さしむるも、他日の反動的暴落を招く可きことあるは、自然の勢なりと雖も、其暴騰しつゝあるの間、消費者殊に定額の所得を收むる中流階級の人民並に戰爭景氣に關係なき下級人民の生活を壓迫し、勤儉貯蓄を妨げて、資金の增殖を困難ならしむるの弊害あり。一方に地方農民は米價騰貴に依て多少の利益を收むるが如しと雖も、其利益たる多く農民と消費者との中間に居る投機業者に依て壟斷せらるゝ以上は、消費者の損失するだけ、農民は利益す

るものと見る可からず、一小部分の投機業者の私腹を肥す爲めに、全國多數の消費者は米價騰貴の形態に於て負擔を蒙り社會亦米價騰貴に伴ふ損失を荷ひつゝあるものにして、斯る狀勢に對して、或る緩和策の主張せらる可きは、自然の命ずる所とす可きなり。

若しも今日の米價騰貴にして例へば米穀不作の後を承け、其の供給不足し、我國以外の方面に求むるも、之を補充するの餘地なく、眞實需要供給の調節を缺きたる結果として起れるものならんか、其徑路頗る自然に出で、之に對抗して代價の調節を謀らんとするが如き、至難の業たらざるを得ず。往年彼の大隈內閣が當時米價下落の連年繼續する豐作の結果供給の過剩と爲れる爲めに起り、人力を以て之を如何ともす可からざる關係の存したるに拘はらず、地方農民の歡心を結んで、政治上に之を利用するの必要に促され、米價調節の方策を立案し、國庫の資金を投じて、一部の過剩米を買上げたりと雖も、毫も其効果を實際に示すに至らず、米價引上の目的を有する調節策の一として農業倉庫法なるものが米價の騰貴甚だしく、其引下の目的を以て調節策を講ぜざる可からざるの今日、議會の協贊を經て、世上に公布せられたるが如き、人工的調節策の如何に愚なるかの事實に就て、恰好の例證を呈したるものと云ふ可きなり。

故に米價にして調節策を施すに値するは、其騰貴の原因の人工的事情に存する時に限られ、自然的事情の下に騰貴したる場合には調節策を講ずるも、實効を擧ぐるに困難なりと云はざるを得ず。然らば今日の米價騰貴たる、果して之を人工的原因に基くものとす可きか。此點に就ては論者の意見に異なるものある可しと雖も、吾輩は近時に於ける米價騰貴の原因を數へて、第一通貨の膨脹、第二消費量の增加、第三外國米補充の困難、第四輸出の增加、第五內地輸送の遲滯、第六投機取引の旺盛の諸點とし、是等諸原因中第二項消費量の增加は近年に於ける國民生活程度の上進に基き、人工的勢力を以て之を如何ともする能はず、隨て自然的原因の已を得ざるものと認むれども、其他の五原因

は盡く人工的事情に屬し、人工的勢力を以て、之に對抗するときは、或る程度まで米價の暴騰を抑制し、消費者と生産者との利害を調和せしむるに難からず、政府が漫然手を拱して、大勢を傍觀し、米價をして其奔騰する所に任さしめ、殆ど近年の記錄を打破するの狀態を現出するに至れることを以て、經濟政策上に於ける失政の一とするに躊躇せざるものなり。

米價騰貴の諸原因中、消費量の增加は國民生活程度の上進せる結果として、寧ろ喜ぶ可きの事相とせざる可からず。唯消費量の增加と云ふも、明治四十年より同四十四年に至る五箇年間に於ては、多く五千萬石内外に上り、五千萬石の上に出づるも、五千三百八十九萬六千石に至れる明治四十二年を最高とし、五千萬石の下に降るも、四千八百八十八萬二千石に至れる明治四十四年を最低とするが如く、增減の區域極めて小なりしが、其以後消費量は著しく增加し、大正四年五千九百六十四萬四千石に上りて、在來の記錄を破り、大正元年より同五年に至る五箇年間の平均亦五千六百九萬五千石を數へたり。思ふに本年の消費量の如き、昨年來の商工業の殷賑に加ふるに、生絲輸出の盛況を以てし、工業地に於ても、農業地に於ても共に需要の增加して、再び既往の記錄を打破するに至れるやも知る可からず。近來我國に於ては玄米を以て、或は半搗米を以て、人の食用に適するものとし、米と糠とを混合して、得々たる輩ありと雖も、精白米を以て、最も美味なりとするは、古來の習慣として、動かす可からず。而して人の生活程度進み、生活上に餘裕を生ずると共に、雜穀を排して、精白米を主食物とするとも亦爭ふ可からざるの數にして、米の消費量の增加以上の如く爲るは、敢て異とするに足らず。然も最近十年間に於ける消費量の增加率は僅に一割内外に過ぎず。固より供給の局限せられたる貨物に對しては、少許の需要增加率を以てして、代價に大なる騰貴を來すことなきに非ずと雖も、一割内外の需要增加率を以て、今日の米價騰貴を說明するは、事實に於て甚だ困難なり。需要增加は其原因たりと雖も、他に有力なる原因の存

することを知らざる可からず、而して需要の增加は米價の騰貴を惹起すの原因と爲れりと雖も、其作用たる國民生活程度の向上に基き、到底人工的手段を以て、左右する能はざる事實に屬することを知らざる可からず。

米價騰貴の人工的原因

通貨の膨脹は啻に米價のみならず、今日の一般物價騰貴を惹起するに與つて力あるものなり。通貨の膨脹を以て、直に物價騰貴の原因に充つるが如き貨幣數量説は實際に適せざるの嫌ありとして、之を排斥するの意見あるが如しと雖も、吾輩は難者の説に同意する能はず。今日の通貨制度の下に於て、一國に於ける正貨の供給増加せんか、必ず中央銀行の正貨準備を増加し正貨を基礎とする兌換券の增發を見る可く、斯く增發せられたる兌換券の一部分は市場に流通し、他の一部分は市中銀行の支拂準備金と爲り、一は直接に通貨を過剩にし、他は間接に信用を膨脹し、二者相俟つて、物價騰貴を惹起するに至る可し。即ち歐洲開戰以來我國の輸出貿易が著しく順潮に向ひ、輸出超過の金額甚だ大なるに加ふるに、軍器の賣却、船舶運賃傭船料の受入高の著しき增加を以てし、之に對する正貨の流入盛なる場合に、物價の騰貴するは、當然の理にして、試に大正三年七月以來各月末に於ける正貨現在高、兌換券發行高、物價指數を對照すれば、左表の如し。（正貨現在高併に兌換券發行高の單位は百萬圓にして物價指數は日本銀行の調査に據る）

	正貨現在高	兌換券發行高	物價指數
大正三年七月	三五五	三三一	一三五、七五
同　十二月	三四一	三八五	一二九、八一
大正四年七月	四二五	三二五	一三五、六五
同　十二月	五一六	四三〇	一四二、一一
大正五年七月	五九八	四〇〇	一四七、九六
同　十二月	七一四	六〇一	一七六、一一
大正六年六月	八九五	六〇六	一九三、三〇

故に政府にして正貨流入に伴ふ經濟上の變動を緩和する財政方針を持し、正貨流入の勢ひ起ると同時に、一方に正貨を利用し、處分するの計畫を講ずるに就て方策の確乎たるものあらんか、一方に正貨を吸收しな

から、他の一方に之を處分し、今日の如く物價に大なる影響を及ぼすの患なきを得たる筈なり。然るに大隈內閣も、寺內內閣も正貨處分の問題に就ては共に見る可きの施設を爲さず、今日に至るまで其施設の一端として行はれたるものは、減債基金に依る年額三千萬圓の外債償還、內外國債の借換、露國大藏省證劵、英國國庫債劵、佛國國庫債劵並に大藏省劵等の引受を始めとして民間に行はれたる對外債務の支拂並に對外債權の取得を擧ぐるを得べく、是等の金額は合せて六億圓の上に出でざる一方に、大正四年には一億七千萬圓、同五年には三億七千萬圓の輸出超過を生じ、本年上半季の輸出超過亦二億五千九百萬圓に上り、外に貿易表に示されざる軍器軍需品の賣却、傭船料、運賃、移住民送金等あるを以て、如上の正貨處分策の行はれたるのみを以てしては、到底正貨國內に橫溢して、物價の暴騰を惹起せざるを得ず。政府は何が故に正貨の處分に躊躇し、物價を今日の狀態に至らしめたるや、吾輩の了解に苦む所なり。

我國の米は孤立的商品にして、國際的商品に非ず。歐洲又は南北亞米利加の間に於て、小麥が自由に流動し、各國を通じて價格の最も高き所に最も多く輸送せられて、代價の平均を保つが如き作用は我國の米に對して之を望む能はず。是れ吾輩が我國の米を以て、孤立的商品なりと云ふ所以なれども、尙ほ內國に於て米價の高きときには外國に對する米の輸出は或る程度まで防遏せられて、却て外國米の輸入を促し、依て米價の昂騰を制するを常としたり。然らば今回の米價騰貴に際して如何と云ふに、斯る作用は毫も其力を致さず却て米價騰貴時代に輸出の增加、輸入の減退を來して已まず。卽ち輸出の數量に就て云はんか、大正元年並に同二年に於ては何れも十九萬石臺を、大正三年に於ては二十四萬八千石を輸出するに過ぎざりしが、大正四年に至るや、輸出は俄然六十三萬一千石に增加し、大正五年に於ては六十五萬三千石と爲り、更に本年に於ては一月より五月に至る五箇月間に四十萬六千石の輸出を告げたり。而して我國米の輸出せらるゝ市場を見

るに、大正三年以前に於ては布哇に輸出せらるゝ數量最も多きを占め、殆ど總輸出の半額に居り、之に次ぐものは對米輸出額なりしが、開戰以後に於ては、却て英國に對する輸出額最も多きに至れり。斯の如きは卽ち我國の米が從來外國に居留する日本國民の需要に應ずる爲めに輸出せらるゝに止まれるに反し、今や外國に於ける食料品供給の不足を補ふの目的を以て輸出せられ、隨て內地に於て米價の騰貴せるに拘はらず、相當の需要を存することを語るものとす可し。米以外の穀物、穀粉、澱粉等の輸出も亦增加し、大麥、蕎麥の如きものすら輸出せらるゝの盛況に居るものとすれば、直接間接兩方面の原因に依て、米價の騰貴しつゝあることは之を知るに難からず。而して外國米は船舶不足の爲めに、外國より自由に之を輸入する能はざるに於ては、益々米價騰貴の勢を助長するを免かれず。蓋し外國米は內國米に對して純然たる代用品を以て、之を目する能はず。上下階級の別を問はず、國民は多年の習慣上、日本米を愛用するのみならず、勞働者の如き力役に從事する者亦日本米を食用とせざれば、長時間の力役に堪へ難しとするの狀なるを以て、日本米に比較して外國米の價格が如何に低廉なるも、日本人多數の需要を一方より他方に移すに難きものあり。然も內地に於ける米價の騰貴甚だしきに至るや、外國米の輸入高は自ら增加し、或る程度まで其騰貴を抑制するを以て、舊來の慣例としたるに、今や內地に於ける船腹の不足甚だしく、到底外國米の輸送を自由ならしむる能はず。而して船腹の不足は啻に外國米の輸送に困難を加ふるに止まらず、內國諸地方に於ける米の輸送をも困難ならしむる以上は、二者相重なりて、米價騰貴を甚だしからしむるや、論を俟たず。況や船腹の不足を補充す可き鐵道輸送力の增進意の如く爲らざるに於てをや。

最後に金融の繁閑が米の投機取引に消長を及ぼすの故を以て、其價格の高低に大なる勢力を及ぼすに至ること疑を容れず。卽ち一兩年來の如く、金融の緩漫殆ど其極點に達するときは、地方の農民は金融の便を求

ひることの容易なるに乘じて、米を賣惜み、投機業者亦資金を調達して、買占、買煽を企て、或る程度まで人工的に米價を釣上げ、之を意外の高きに上らしむるを難しとせざるなり。

米價昂騰抑制策

吾輩は上述したる所に據て、近時に於ける米價騰貴の諸原因を明にしたり。諸原因中一般消費量の增加に基くものに就ては、之を如何ともする能はず、寧ろ米の消費量の增加し、多數國民の生活狀態の改良するを以て、文明の恩澤の國民に洽きに至ることを認めて、之に滿足を表するの外に他あるを知らずと雖も、此以外の原因に對しては、政府に於て之に對抗する處置を施すもの決して困難なりとせず。正貨流入して、通貨膨脹し、一般物價は勿論米價を騰貴せしむること今日の如き場合に、何故に政府は自ら外國に資金を放下し流入す可き正貨を對外債權に振替へて、通貨を收縮するの擧に出でざりしか、對外放資に就て、政府の爲す所に限りありとすれば、何故に民間當業者の資金を外國に放下することを誘導せざりしか、前者に就ては、政府の爲す所甚だ乏しく、後者に就ては、政府の爲す所、絕無にして、今日の通貨膨脹を致したりとすれば人工的米價騰貴を招きたるの責任は一に、政府に於て之を負はざる可からず。我國民は今や輸出超過の盛況に對して、非常の滿足を表し、其增加の無限大に至らんことを希望して、已まざるもの如しと雖も、輸出超過の反面に於て、內國に於ける物資の供給を缺乏せしむるの弊を免かれず。而して其缺乏の程度異常にして、一方に物資の國民消費に於ける關係の重要なる場合に於ては、單に物資の輸出增進し、貿易上輸出の超過を生ずるの故を以て、其輸出を是認する能はず、時に輸出に制限を加へて、內國に於ける供給を豐富ならしむるの必要ある可し。現に我國の米其他の食料品が外國に輸出せらるゝは、歐洲戰爭と云ふが如き大事件突發し、諸國は軍國經濟の急に應ずる爲め、多數貨物殊に食料品の輸出を禁止すると共に、多數貨物の輸入を禁止する間に於て、獨り食料品の輸入は之を自由にする

が故に、我國食料品も亦外國に需要せられ、國内に於ける供給をして不足の狀態に至らしむるものなる以上は、輸出の制限は卽ち需要供給の關係を調節する一の方法たるを得べし。

吾輩は平生國際間の通商關係を自由の地步に置くことを必要とし、貿易政策に於ても亦自由貿易の可なるを信ずるものにして、或る貨物の輸出を禁止するが如き、政治上警察上又は經濟上確乎たる理由あるに非ざれば之を是認するを欲せずと雖も、歐洲諸國が我國の米を需要する事實が既に異常の事變に屬する以上は、之に對抗して、米價を適當の程度に維持せんとするに當つても、亦異常の處置を必要とせざる可からず。而して昨今の如く、米價暴騰して、生産者仲介業者並に消費者間の利害の明に反撥しつゝあるときの如き、輸出の制限を厲行し、現實に國内の供給に於ける減損を防ぎ、又投機業者の跋扈を制するに最も適したりとす可きなり。或は我國が歐洲交戰國に軍需品を供給するは、我國の交戰諸國に對する經濟的援助の一方法にして斯る援助を與へてこそ、我國の歐洲戰爭に參加したる意義を明にするを得べく、隨て軍需品の供給、食料品の輸出の如き、濫に之を制限す可からず、勉めて其自由を期せざる可からざるの說あらんか、然も吾輩は我國が交戰國に對して與ふる援助を以て、嚴に我國民の利益に適合する範圍に限定し、之を超越することなからしめんと欲するものなり。米價の暴騰今日の如き場合に、尙ほ聯合諸國を援助する爲めに、米の輸出を自由にし、之を制限することに依て、米價を調節する手段に出でざるが如き、我國經濟上の利害をして聯合諸國に從屬せしめ、我國民をして宋襄の仁、尾生の信を學ばしめんとするの嫌なきを得るか、吾輩の疑を挾く所なり。

若しも政府にして其屢々聲明したるが如く、或は金融を調節し、或は通貨を收縮するの目的を以て、財政上の政策を確立せんか、金融は今日の如く永く緩漫の狀態を持續せざる可きが故に、自ら米の投機取引を抑制し、米價の人工的騰貴を或る程度に沮止するを得べ

るの道理なれども、此點に於ても政府は無爲無策なりしが故に、米價騰貴の勢を助長したるの嫌なきを得ざるなり。故に今日米價を調節せんとする以上は、正貨の處分を目的とする對外放資も、通貨の收縮も、輸出の制限も、船腹の補充も、内地運輸機關の整頓も、投機取引の抑制を共に必要にして、是等諸策の併せ行はるゝことに依て、始めて米價の人工的騰貴を緩和するを得べきなり。

　固より米價の根本的調節策としては、米其ものゝ孤立的商品たる今日の狀態を改めて、之を一箇の國際的商品たらしむるを以て、其急務とし、要點とす可し。即ち米の産出せらるゝ區域は獨り日本國内に止まらず、東洋諸國に散在し、米を消費する者も亦日本内地に棲息する日本國民に止まらず、東洋諸國に住居する諸國民に及ぶに至らんか、日本國内に於て産出せられたる米の過剰なるときには、其一部は他國に輸出する一方に、産出の不足したるときには、他國より輸入し來りて、價格の高低宜しきを制するに至る可し。此狀態を現出するには、日本國民の盛に海外に移住し、生業を求めて、海外に於ける米の需要區域を擴張すると共に、日本も亦米の輸入を自由にするの方針を確立し海外到る所に米の産出せらるゝに至ることを期し、以て米の國際的商品たるの事實を發揮するに勉めざる可からず。米價騰貴の如き、外國米の輸入に依て、之に對抗するに困難なる今日の事實を根據として、米の國産奬勵を期するが如きことあらんか、米價を調節せんとして、却て其價格の動搖を大ならしむるものとす可し。此事たる、米價に關する目前の問題と直接の關係を有せざるを以て、詳細の議論は姑く之を他日に讓る可し。

支那政局の大勢を論じて所謂帝政論を排す

法學博士　吉野作造

(一)　復辟の失敗

七月一日早朝、突如として發表せられたる清朝の復辟は、十二日張勳の敗亡と共に、再び永遠の闇に葬り去られた。素より大勢に逆行する計畫なりしとはいへ、斯くまで脆き運命に陷るべしとは、多くの人の豫想せざるところであつたらう。而して斯くの如き見苦しき失敗に終らしめた原因が、張勳其人の無策短見に在ることは固より言ふを俟たない。

張勳をして復辟の實行を決心せしめた直接の動機は、五月末より六月にかけての各省督軍連の大總統反抗、國會壓迫の聯合運動である。而して又斯くの如き聯合運動を表面に導き出したものは、實に五月廿三日黎大總統が官僚軍閥に對して斷行せるクーデターにある。大總統が國會內部に大多數を擁する民黨と結托して、段祺瑞を代表者とする官僚軍閥の勢力と拮抗して來た事は今茲に贅するを須ゐない。而して兩者の反目は、參戰問題によつて殊に一層激烈を極め、五月に入つては兩者の關係殆んど險惡の極點に達し、到底尋常一樣の手段を以ては解決せらるべくもなかつた。此時に方り民黨の策士は、先んずれば人を制するの筆法で、一擧して敵の本營を覆すの目論見を立て、遂に五月二十三日大總統を促して段總理の罷免を決行せしめたのである。是れ實に一種のクーデターに外ならずして、官僚軍閥に取つては恰かも匕首を以て頭に擬せられたやうなものである。法律上正當なる權限の何れに在りやといふが如き閑問題は、最早斯うなつては之を爭ふも詮がない。官僚軍閥の連中に取つては正當防衛の手段としても最早默つては居られない。況んや北方に於て何等の實力的根據なき民黨が斯くの如き所爲に出づるのは實に生意氣千萬の妄擧と映ぜざるを得ざるに於てをや。果せる哉官僚軍閥の重立つた連中は、忽ち所

謂「獨立の宣言」によつて中央政府との關係を絶ち、中にも奉天、山東、安徽、河南の如きは、各々兵を進めて北京を討伐せんと宣言した。遂にお膝元の直隷までが大總統に反噬するに至つて民黨の一派は手も足も出なくなつた。獨り此間に在つて、國會議員連は尚口に强硬論を唱へては居つたけれども、實は一身の安危を慮つて南方に奔るもの踵を接した。若し夫れ黎大總統に至つては、殆んど爲す所を知らずして、遂に調停を張勳に乞ふに至つた。玆から張勳の復辟運動の端緒が發生するのである。

一體後から考へて見ると、對北京反對同盟には二つの中心があつた。一つは天津に於て一切の計畫の策源地を爲す所の段祺瑞・徐世昌の一派であり。一つは各省督軍の訪問によつて自ら武斷的解決論の中心となつた徐州の張勳である。而していよ〳〵此等の連中が起つて北京政府に反抗するに際しては、之等の間にどれ丈け綿密なる打合せがあつたかは、今日未だ明白に知れてない。殊に此連中の重立つた者が悉く獨立を宣せるに際して、張勳獨り自重して動かず、遂に自ら調停者たるの地位を取る樣になつたのは、當初からの豫定の行動であつたか否かも、今日よく分らない。只、今日に於て略ぼ我々の斷定して謬り無かるべしと思はるる點は、五月末督軍連の徐州に集つた際、張勳の首唱の下に復辟實行の案が協定された事、並びに此協定が更に其時に參會しなかつた他の有力者にも移牒されてそれ〳〵同意を求め得た事である。是れ今日時々新聞などに、復辟の實行にはもと〳〵徐世昌・段祺瑞や馮國璋・陸榮廷まで贊成であつたとか、更に一歩を進めて、此等の有力者は凡て近き將來を期して淸朝の復辟を斷行すべきの堅き約束をなして居つたとか謂はれて居る所以である。尤も此等の連中は、今度の政變に先ち、早く已に民黨に對抗するといふ共同の目的を以て大同團結を形造つて居つたのであるから、斯く今度の問題でも意外に早く纏まりのついたのは、モト怪むを須ゐない。故に今度の新らしい運動には、天津と徐州と二つの中心點が出來たやうには見えるけれども、實

の所初めは暗默の裡に共間の折合がついて居り、少くとも兩者の間には、初めさしたる反感もなかつたらうと思ふ。寧ろ張勳は段祺瑞一派の智謀に賴り、段一派は亦强大なる張勳の武力を恃み、相依り相援けて最後の成功を見ようとして居つたに相違ない。然るに之れが六月の央ば頃から漸く融和を缺き、遂に彼此反目せねばならぬことになつたのは、支那其物の爲めには左まで憂ふべき事どゝ思はぬけれども、復辟運動の爲めに實に惜むべき出來事であつた。

段祺瑞の一派も張勳の一派も、民黨の勢力に對抗する目的を以て起つた當座は、大體に於て共に、近き將來に適當の時期を見はからひ、復辟を實行すべしといふ事に一致して居つたやうだ。故に若し清朝の復辟といふ事が、此種の計畫に基き、此等の人々の一致の後援の下に出來上つたものであつたならば、假令大勢に逆行する計畫であるとはいへ、尙ほも少し永い壽命を保ち得たかも知れない。然るに世事意の如くならず段の一派は中途説を變じて共和擁護を主張せざるべからざる境遇に陷り、張勳獨り復辟實行の任に當つたが爲めに、遂に復辟は芽を出すか出さぬ間に、忽ち暴風の吹き去るところとなつて了つた。斯くして所謂復辟問題は單に張勳の事業として蹉跌を見たばかりでなく、此頓挫の爲めに復辟といふ事それ自身までが、再び支那に於て容易に問題となり得ざる破目に陷つて了つた。

然らば初め復辟に同意して居つた官僚軍閥が、何故に中途贊否兩論に分裂したか。此原因を知るに、第一見遁してならぬ事は、當初の復辟贊成論者は、凡て皆必ずしも主義として心から復辟を主張するものばかりではなかつたといふ事である。張勳の如きは、自ら清朝に孤忠を盡すと稱して居る丈け、正眞正銘の復辟論者であらう。けれども他の大多數は清朝の復辟其物が目的でなくして、民黨の勢力の壓迫が其目的である。民黨の勢力を抑へて自分達の階級の擁護が出來さへすれば、復辟であらうが無からうが彼等の深く問ふところではない。只這の目的は、君主制の樹立によつて最も

容易く遂せらるゝは言ふを俟たない。故に袁世凱を擔ぐ事が君主制の樹立の捷徑でありし時には、彼等は擧つて袁を戴く帝政論者であつた。袁が死んで了へば、清朝復辟を論ずるのが帝政實現の最捷徑となる。即ち今日彼等が一轉して復辟を唱ふる所以である。若し眞に清朝に忠誠を寄するものであるならば、彼等が嘗つて袁世凱奉戴の帝政論を唱へた意味が判らない。彼等が、昨は袁の下に帝政論者たり、今は熱心なる復辟論者を裝ふのを以て觀ても、全然主義としての復辟論者でない事は明白である。故に此等の連中は、畢竟清朝に忠なるものではなくして、或る他の目的の爲めに復辟を利用せんとする連中である。故に形勢の變が若し復辟論の主張を不利とするが如き事情に立ち到るならば、彼等が弊履の如く復辟論を棄つべきは亦怪むを須ゐない。張勳の復辟失敗は畢竟段祺瑞一派の復辟利用の心理を適當に解せなかつた事に原因する。

然らば先に熱心なる復辟論者を裝ふて居つた段の一派が、何故に中途復辟論を離るゝに至つたか。此事も今日尚明白なる斷定をなす丈けの材料を缺くが、予輩の想像するところによれば、一には段祺瑞等が時勢を見るに極めて明敏なるの致す所であらうかと思ふ。彼等は素より天下の大勢が帝政に在らず、殊に清朝の復辟に在らざる事を知つて居る。斯くても一時の便に迷うて復辟の實行を敢てし、以て反對黨を壓して自家階級の維持擁護を圖らんとし、之が爲めに大に劃策するところがあつたのである。而して彼等は事を成すに最も愼重を要すと信じて居つたから、志こゝに在りて而かも當初容易に復辟を口にしなかつた。以て愼重の用意を見るべきである。然るに此點に於て張勳は餘りに愚直であつた。彼が居常自ら清朝の官服を着け、自分は素より部下の軍隊をして亦殊更らに辮髮を蓄へしめなどする態度は、其心情に掬すべき一片の誠意を窺ふべしとはいへ、決して大事を爲すの智謀ある人の爲す所とは思へない。そこでいよ／＼國會を壓倒し、黎元洪を窮追し、天下は正に自家の掌裡に歸したといふ場合に至つて、段・張の執らんとする方策は、自ら漸く一

致を缺くやうになつて來ざるを得ない。詳しく云へば段は愼量に事を運ばんと欲する方であり、張勳は之に反して急に事を決行せんとする方であつた。之れ丈けでも張と段とは結局事を共にする事が出來ない間柄であるのに、玆にもう一つ此乖離の關係を更に一層進ましめた出來事は、黎大總統が張の窮迫の結果遂に其任を辭して其の地位を馮國璋に讓らんと決心した事である。蓋し此事が實現すれば、復辟の計畫は恐らく全然挫折するに至るであらう。なぜなれば、馮國璋は今幸に我黨の士であるけれども、若し偶々民國元首の榮位が彼の頭上に落ち來らんとすとなれば、彼の野心は直ちに彼を動かし、歎を南方に通じて共和擁護を叫ばしむるに極まつて居る。故に此際愼重に彼等の目的を達せんとすれば、黎をして輕々しく大總統の職を去らしめざるに限る。此見地から判ずるに、張の態度は決して段の意に副ふものではなかつた。彼は兵力を擁して北京を横行濶歩し、自分の主張を赤裸々に掲げて、之に反對するものをば頗る迫害した。斯かる行動を以て段は啻に自分の事業の妨げと認めたのみならず、又國情の上で其暴慢なる態度を苦々しく思つたに相違ない。斯くして此兩派は、益々遠ざからねばならなかつた。

其外に、張勳が北京に在つて政治上にも敢擅の振舞が多かつた事、殊に張勳が今や北京に於ける唯一の勢力者として全然自家の勢力を以て中央政府を組織せんとした事などは、最も著しく先きの味方の反感を挑發したに相違ない。彼が調停者として提出せる條件に對し黎大總統の同意を得たのは六月九日であり、十三日徐州を發して天津に入り、玆に徐・段と會見を遂げて十四日北京に入つた。因に云ふ、之より先き六月三日、段祺瑞派は天津に獨立政府を作り、徐世昌を大元帥に戴いて黎元洪に對抗して居たのである。而して張勳は此獨立政府とも打合せを遂げて北京に乘り込んだのである。然るに彼の北京に入るや、彼は忽ち元の清朝の遺臣と通じ、多くの復辟論者を其左右に集め、李經羲を內閣總理に推薦して、純然たる復辟主義の政府を造らん

とした。是れ恐らくは天津政府の意外とせるところであらう。元來天津の側では、明らさまには言はなかつたけれども、恐らく內閣の組織に就ては段祺瑞の一派に相談して來るか、少くとも王士珍などに交渉して主として段の一派を以て組織するであらうと豫期して居つたに相違ない。然るに、張勳のなすところは全然この豫期に反した。之れが實に彼が正面から多くの人々に反對された所以である。其うちに張勳が獨斷を以て復辟を實行すべきの色も現はれた。中には張勳獨りに功を收めらるゝとなして之を嫉視するものもあつたらう。斯くて直情徑行ではあるが深慮遠謀を缺く張勳の一擧一動は、悉く先きの同志の反感を買ひ、六月の後半は李經羲內閣反對といふ名目の下に、官僚軍閥の重立つた者は、擧つて彼の時局收拾策に反對の聲を放つたのである。故に此等の反對に激して決行したる彼の復辟實行が、直ちに四面楚歌の聲に葬られ、彼並びに其卷添を喰つた哀れむべき清朝が、僅か十日餘りで包圍攻擊の中に滅亡し去つたのは、亦怪むに足らないのである。

斯く論ずれば、復辟失敗の主因は、一に張勳の淺慮短見にあるが如くであるけれども、然し、是れ未だ事の眞相に透徹したる解釋ではない。張勳の淺慮短見はもう少し永かるべき清朝の運命を、不當に縮めたとは言へるけれども、どの道復辟の永く續くべからざるは大勢の上に初めから明白なるところである。故に復辟失敗の根本原因は、矢張り大勢が之を許さなかつた事に在ると言はなければならぬ。從つて又段祺瑞が斯くも容易く張勳を壓倒し得たのも、是れ段祺瑞の傑物たる所以を語るものには相違ないけれども、彼が知らずして大勢の後援を得たといふ事をも決して打算の外に置く事を許さない。若し復辟が大勢に逆行するものでなかつたならば、各省の督軍連が決してあれ程早くあれ程多く、段祺瑞に附いて來なかつたらう。若し復辟の實行が大勢に背くものでなかつたならば、親分子分の關係で最も密接に繋がれてあつたと稱せらるゝ張勳の部下が、あゝまで脆く降を段の軍門に乞はなかつ

たであらう。畢竟するに目に見えぬ大勢が實に張勳を孤立せしめたのが事變の主因である。我々は此の見えざる勢力を誤算して徒らに段の手腕を過大視してはいけない。少くとも官僚政治家としての段の缺點を、之が爲めに辯護するの態度を取つてはいけない。張勳に代つて北京政界の主人公となれる段たるものも亦、須らく自家の成功の大半が大勢の後援に基くものなる事を省み、其時局收拾の功を收むるに當りて、再び張勳の轍を踏まざらん事に注意しなければならない。

（二） 支那に於て帝政は不可能なり

國家統治の便不便の論として、君主制の遙かに共和制に優ることは言ふを俟たない。殊に東洋諸國の如く一般民智の程度低き處に於ては、君主制を外にして國民精神を統一するの良道は殆んど見出し難いと言つてよい。然しながら、之には一つの根本的な且つ極めて重大な條件がある。何かといふに、夫自身に備はる自然の權威に基いて立派に君臨し得る皇室が上に存在するといふ事である。此皇室の前には天下の萬民は無條件に、理屈無しに全然頭を下げる、否、誠心誠意を捧げて之に奉仕するといふさういふ皇室が存在して居るといふ事である。更に具體的に之を言ふならば、我國の如き萬世一系の、而かも歷代明君に富み、國民の道德的尊崇の中心となつて居るやうな皇室が上に在ますでなければ、君主制といふものは立派に立つて行けるものではない。斯ういふ立派な皇室を戴くことは實に日本國民の他國に例なき幸であつて、而して我々日本國民に取つては君主制を可とするや否やは、最早や問題ではない。我が日本國は嫌が應でも君主制たらざるを得ないのである。之に反して如斯皇室の存在せざる國に在つては、其反對に君主制を可とするや否やは、決して實際の問題たることが出來ぬ。君主制は初めから不可能であるのである。故に君主制並びに共和制の比較は、利害得失の問題ではなくして、寧ろ可能不可能の問題であるといふべきである。君主になるべきものが

なければ、初めから問題にならない。強いて時の勢力者を拉し來つて之を君主の位に卽ければ、如何に其人の手腕德望に優秀なるものあり、從つて其人一代は無難であるとしても、偉人に對する國民的崇敬は、必ずしも之を子々孫々に傳へ難きが故に、やがては之に取つて代らんとするもの丶生ずるは亦之を避け難い。子々孫々相繼いで君臨して治まつて行くには、千年二千年の長きに亙つて萬民を育んだといふ歷史的の箔がついた皇室がなければならぬ。此箔は俄かに之をつくる事が出來ない。此箔を缺きしが故に、那翁の天才を以てして尙ほ帝業を二世に亙らしむる事が出來なかつたではないか。民衆の暗愚に乘じて當初姑く世襲して君臨するに成功したとしても、數代にして易を代へざるを得ないといふが普通である。支那の歷史は正に之を證明して居るではないか。且つ夫れ支那では過去に於てこそ或は二百年或は三百年と續いた事もあつたが、近代思想に觸れた今日の支那に於ては、到底さう長くは續くことはあるまいと思ふ。一代の英傑袁世凱の帝制失敗は正に之を證明して居るではないか。故に曰く支那では日本のやうな意味の帝政は斷じて不可能である。支那流の帝制と雖も、强て之を布かうとすれば、そは過去に於て二百年三百年每に起るを常とした革命をば、五年か十年每に起らしむるに止まるものであると。

帝制が不可能であれば、共和制でやつて行くの外はない。然しながら共和制とは必ずしも一知半解の青年政治家が、國會に於てワイ〱と騷ぎ、徒らに政府當局者の施政を制肘するといふだけの事ではない。今日の支那の如き事情の下に於ては、强大なる手腕家の下に一切の勢力を集め、縱横に其手腕を振はしむることが必要である。而して最近六年間の民國共和の成績は實に此點に於て全然失敗であつた。茲に於て、世上或は共和制の支那に不適當なるを說いて、輕忽に帝政の回復を辯護せんとするものがあるが、然しながら支那に於ける過去六年間の施設は、實は支那の採用せる共和制の特殊の一形式の失敗であつて、總ての共和制の

失敗ではない。又支那の共和政の失敗を説く者、動もすればストロング・ハンドの掌裡に權力を集中して縱橫の手腕を振はしむるの必要を以て其根據とするも、斯れ必ずしも帝政でなければ出來ぬ事柄ではない。現に亞米利加の共和制は立派に此要求に應じて居るではないか。且つ又更に一歩を進めて考ふれば、ストロングハンドをして恒に必ず其局に當らしむるといふ事は、能く考へて見ると君主制に於てよりも寧ろ共和制に於てより多く可能なる事柄である。何故なれば、所謂ストロング・ハンドなるものは必ずしも君位と共に其才能をも世襲せしむることの出來るものでは無いからである。されば恒久的にストロング・ハンドをして其局に當らしむる樣にするには、元首の地位に一定の任期を附し、一國の有能を擇んで時々相交替せしむるの制を取らなければならない。之れ實に亞米利加合衆國の共和制が大統領に關して現に定めて居るところである。故に支那の現在の共和制は、尚幾多の改革を其組織の上に加ふるの必要ありといふならば分つて居るが、其共和制を變じて帝政を復活すべしといふ論には全然何等の據り所がない。

且つ夫れ支那人自身は今日、全然帝政の回復に些の執着を有つて居ない。況んや清朝の復辟に對しておや。尤も嘗て清朝の祿を食んだ高年の舊官吏の間には、誠心誠意清朝の爲めを念ふて居る者はあらう。張勳と復辟運動を共にしたる梁鼎芬、陳寶琛の如き、又上海に高踏勇退して居る瞿鴻機の如きは、此部類に屬する人である。けれども此等の人の思想は今日どれ丈け青年の間に共鳴を得て居るだらうか。我々の交際する範圍について觀ても、漢人の青年は固より、滿人ですら殆んど何等の執着を元の清朝に有つて居ない。近時滿人青年にして其姓を漢人風に改むるもの非常に多いのを觀ても、彼等は着々漢人に同化せられつゝあり、又同化せらるゝを厭はざる風が見へる。故に支那の今日の青年は、我日本に帝政恢復論の盛に主張せらるゝを見て却つて意外の感を抱いて居るのである。勿論支那でも、過去六年間に於ける共和制失敗の反動として、共

和制其物に多少の疑を挾む者がないではない。殊に共和主義を代表して起つた民黨の勢力の膨脹を不利益とする所の官僚軍閥の一派は、此勢に乘じて近時頻りに帝政思想を鼓吹して居るといふ事實はある。併しながら、之は民黨の勢力に對抗する爲めの武器として利用するに過ぎざるもので、心から帝政の復興を希望するものではない。現に今度の政變でも、大勢我に不可なりと見るや、先に復辟を唱へし徒輩は忽ち前說を捨てゝ共和擁護の傘下に馳せ集つたではないか。支那に若し輿論といふものがありとすれば、其が大勢は今日斷じて帝政の復興にはない。

（三）日本に於ける支那帝政論の盛行

帝政復興が支那に於て斷じて不可能であり、且つ支那人自らの輿論も全然之に向つて居ないのに、獨りわが日本に於て帝政論の盛に唱へらるゝのは、頗る奇怪なる現象と言はなければならない。尤も帝政論は我國に於て色々な形に唱へられて居る。或者は言ふ、支那は到底帝政にあらずんば收まりがつかないと。或者は言ふ、支那に於て帝政復興の機運は今や有力者の間に頗る熟して居ると。又或者は言ふ、一度起つて强大なる手腕家が先の淸國皇帝を擁立するならば、天下は瞬く間に之が制令を奉ずるに至るであらうと。要するに支那に帝政の可能なるを信じ、又帝政の實現が支那民族に幸福を來すべきを信じ、而して我國民一般をして帝政運動に同情を傾けしめんとするが、此等帝政論の眼目のやうである。併しながら、之等の帝政論は果して精密なる硏究と純潔なる考察とに基きたる公平なる意見であらうかは、大に疑はざるを得ない。

我國に於て支那に關する多くの議論は、言ふまでもなく所謂支那通と人も許し自らも任ずる者の間から起る。然るに此等の所謂支那通なるものゝ間には、我々の眼から見るに、精密純白なる硏鑽に基かず、識つて或は識らずして、偏狹の議論を唱へて居る者が少からずあるやうである。此等不純なる偏僻分子を除けば、

跡に果してどれ丈けの公平なる支那論が殘るであらうか。眞に隣邦の近事を憂ひ、兼て東洋の問題に志を注がるゝ讀者は深く此等の點に注意して、今日不幸にして多くの所謂支那通なるものゝ間より來るところの俗論に惑はされない樣にしなければならない。

試みに此等偏僻なる支那論をなす者の種類を列擧せんか、第一に來る者は、最も淺薄なる近眼者流にして、即ち過去數年間の共和制の失敗の跡に失望し、直ちに帝政論に走らんとする輩である。我日本でさへ、正に三十年に垂んとする永き經驗を重ねたるに拘らず、現今憲政の運用上の不シダラは言語に絶する有樣ではないか。僅々六年の成績の上に共和制の完全なる運用を期待するは、獨り難きを他人に責むるものである。尤も進歩したる英國の自由民の、何等反動的勢力の存在せざる自由の天地に建設せんとしたる合衆國の共和制ですら、七年を本國との戰爭に費やし、八年を紛々たる議論の交換に費し、前後十五年を經て辛く目鼻がついたではないか。支那が今後更に二十年三十年の永きに亘つて、今日の如き紛亂を重ねても、我々史家の眼より見れば、敢て怪むべき事ではない。

第二には、特に清朝の某親王とか或は宗社黨の某名士とかに親交を有するといふ友誼の點から、不知不識帝政論を唱ふるやうになつたものもある。本人は何んと說明するか知らぬが、川島浪速氏の如きは、想ふに此種類の帝政論者であらう。予輩は密かに同氏の誠實なる人格を傳聞して其誠意に多大の尊敬を捧ぐるものである。けれども、氏が私交に發足して天下の公問題を論結するの態度に對しては、遺憾ながら斷然之を非認せざるを得ない。此種類の帝政論者は、川島氏の外にも、先には袁世凱と接近せる多くの人々の間に、又今でも官僚軍閥の系統に屬する諸名士に接近したる人々の間に少からずあるやうだ。同じやうな種類の人が孫逸仙と親しいとか黄興と親しいとかいふやうな關係から、革命黨の方面にもあることは言ふを俟たない。

第三には、自家の經濟的利害關係に動かされて、不知不識、帝政派の辯護をなすやうな人も少くない。支

那に多大の資本を投下して居る實業家の間には、此種の人は相當に多い樣だ。蓋し彼等は其經濟的利益の點よりして、支那に於ける現狀の紛更を非常に不便とする。殊に支那では、外國と大取引をする實業家と云へば、大體半ば官僚であるか、又は少くとも背後に官僚の後楯を有する官商である。例へば、日本の銀行團が交通銀行に借欵を提供したと云へば、其交通銀行の首腦は梁士詒乃至陸宗輿、曹汝霖等にして、卽ち立派な官僚系の帝政論者ではないか。斯ういふところから日本の大實業家の間には、案外に帝政讃美論者が多い。少くとも南方の民黨よりは北方の官僚軍閥に志を得しめたいと希望する者が多い。此等は皆經濟的利己心よりして、支那の政體の上に或種の希望を繋ぐものにして、固より公平に大勢の歸趨を判斷する者ではない。

第四には、日本の國體に何等かの影響あるべきを恐れて、隣邦に革命運動の成功するを忌むといふ點から自ら帝政運動に同情を表せんとするものがある。之は元老並びに先輩政治家の間に少からずある。日本の國體の由來を考へ、又支那には本來帝政の行はるべき實質的基礎を缺く所以を考へたならば、斯くの如き杞憂を抱く道理はないと思ふけれども、彼等は只革命とか共和とかいふ聲に恐れ、只譯もなく南方共和主義者の成功を喜ばない。斯くして大勢に逆行するを知つてるや又は知らずしてにや、彼等は從來屢々帝政贊助の態度を取つた事がある。斯くの如きは、所謂大勢を無視し、只一片の希望の上に外交政策の根據を据ゑるものにして、危險之より甚しきはない。今日でも此種の考が先輩政治家の間に非常に强い。その結果として今日に至るもなほ屢々政府自ら誤り、又同時に國論の指導を誤りつゝある事は吾々の慨嘆に堪へざるところである。

第五に、所謂支那浪人の變說政論も亦最も主要なる原因として之を數ふる必要がある。今日世人は、支那浪人などゝ一概に罵倒して深く其言說を珍重せざるが如きも、併し支那に關して最も深き智識を有して居る人々である丈けに、事實上此等の人の意見は、案外に重

きをなすのであるが、從來此種の浪人は、多く共和的革命主義者の同情者であつた。然るに之等の人達は昨今は殆んど總て變說改論して帝政論者となつて了つた。之を先輩の間に尋ぬれば、犬養毅氏然り、內田良平氏然り、其他末輩に至つては數ふるに遑がない。而して此等の人々が何故其所說を變じたかについては、素より本人に於て夫々辯明の理窟はあらう。殊に前記の諸氏の如きは、根柢ある深き所信から其說を變へたものには相違あるまい。けれども、此等諸氏の下に附和雷同して昨今頻りに帝政論の主張に浮身を窶して居る多數の連中に至つては、予輩は其變說改論の動機について多少の疑を有して居るものである。

予輩の觀るところによれば、所謂支那浪人の中には其性格上秩序の旣に定まつた日本の社會には適合せざるところよりして、支那へでも行つて何か一仕事しようといふやうな連中が頗る多いと思ふ。而して此種の連中は、元來平地に波瀾を起して自ら其渦中に投ずる事によつて、初めて其活動慾を滿足するものであるから、支那へ往つても政府筋には斯ういふ人の働くべき餘地はない。此種の人物を需用するものは何時でも政治的秘密結社の類である。斯くして彼等は支那革命黨の需用に應じて續々之に身を投ずるといふ事になつたのである。中には頗る危險を冒して支那の革命的青年と死生を共にした者もある。而して彼等が斯く革命黨の同情者を以て任じて居つた間は、彼等は心から革命の爲めに働いた僞りなき一個の志士であつたに相違ない。けれども元來彼等に果して本當に徹底したる主義ありや否やは、多少疑はしいので、我々局外から見れば、畢竟彼等は其本來有する好事的性癖に驅られて革命黨に身を投じたものに外ならぬと思ふのである。故に一朝周圍の境遇が變化して、彼國の共和主義者が最早や自分達を需用せず、自分達を需用するものは寧ろ帝政復辟主義の方であるといふ樣な事になれば、彼等は忽ち此方へ身を轉ずる事なしと限らない。蓋し共和主義と帝政主義とは、彼等の去就を決せしむる根本の動機ではないからである。彼等は不知不識其居るとこ

ろの境遇に相應はしき理屈を立てゝ自家の態度を辯明して居るけれども、而して其辯明たるや、或點までは彼等の誠意を以てなすところであると思ふけれども、然しながら彼等の變說改論の動機は、多く決して爾く公明正大なるものではないやうに思ふ。殊に彼等の多くが、何故に革命黨を離れ、何故に帝政回復論者となつたかの實際的經過を見る時には、我々は實に彼等の賴み甲斐なきを慨かざるを得ない。

先づ彼等が革命黨と段々疎遠になつた事情を見るに、其基くところ多くは彼等の放縱暴慢なる行動にある。元來革命黨員は其の未だ日蔭者として隱密の行動をして居つた際は、成程一も二もなくそれ〴〵の日本人に便つて居る。けれども、一朝成功して彼等がそれ〴〵責任の衝に立つや、彼等は何時までも浪人肌の日本人につき纏はれては仕事の邪魔になる。若し此等の所謂日本志士が、眞に其隣邦の友人をして結局の成功を收めしめんとならば、いゝ加減の時に、少くとも表向き其身を退かなければならない。然るに、彼等は其友人の成功を以て恰かも自分の成功なるが如くに吹聽し、全然其左右に侍し、甚しきは其公けの仕事にまで干涉し、一方には支那の事情に適合せざる滅茶苦茶な獻策をして對手を苦むるのみならず、他方には徒らに其人の門戶を狹隘にして他を孤立せしむるの結果を來す。其外或は日本の實業家と結托していろ〳〵の利權問題を提供し、先に賣つたる私恩を笠に着て其承諾を迫るが如き、一個の公人としては固より、私人としても忍ぶべからざる壓迫を平氣で加へたものもある。更に甚しきに至つては、其成功せる友人の名を濫用して諸所方々に酒食の借財を重ね、其責任を擧げて其支那人に歸せしめたる如き不埒千萬な醜態もあつた。斯くては如何に忍耐强き支那人でも、遂に彼等を敬遠せざるを得なくなるのは當然である。我國人の間には、動もすれば此等支那人の忘恩を罵る。忘恩といふ非難も實は全然當らないではない。併しながら、彼等が一個の憂國的政治家として已に責任の衝に立つに至つた以上は、我々は彼等の公人としての立場を大に尊敬して掛

らねばなるまい。日本に亡命して居つた間彼等を引張り廻した調子で、何々大臣、何々局長となつた彼等を支那まで行つて其のやうに引つ張り廻さうといふのは土臺間違つて居る。況んや金錢上其他に於て多大な迷惑をかけた事もあるに於てをや。更に況んや彼等浪人同志の愚にも付ぬ感情の衝突が、亦著しく支那政治家相互の關係を紛更せしめた事實もあるに於てをや。斯くして先には生命懸けで彼等を助けた恩人であるに拘らず、遂に支那人の方から段々に疎外せらるゝやうになつた。少くとも敬して遠けらるゝやうになつた。斯うなれば浪人連も亦支那人に對して惡感を抱かざるを得ない。而して淺慮なる彼等日本浪人は、斯くの如き結果に到達せるを以て自己の不明に歸するを知らず、漫然として支那人の忘恩を罵りつゝ、彼等自身も亦漸く支那人を疎外するやうになつた。斯くの如き現象は第一革命後間もなくから初まつて、最近益々甚しくなつて居つたのである

右の如き關係を更に甚しからしめたものは、此兩三年來の帝政回復運動である。中華民國成立以來清朝に心を寄する者は、總括して宗社黨と呼ばれて居つた。が、元より纏つた勢力ではない。其後帝政論者といへば多くは袁世凱を推戴せんとする連中であつたが、袁世凱の沒落後反動思想の更に一層盛んになると共に、帝政回復論は宗社黨と一緒になつて俄かに其の勢を高めた。而してこれが去年の春頃から起つた滿蒙地方の宗社黨の運動と連繫して、昨今從々火の手を高めたのである。而して此種の運動は、中華民國となつた今日に於ては、卽ち秘密の隱謀團にして、清朝時代に革命黨が秘密結社たりしに對して正に主客顚倒するものである。而して今や日本の所謂支那浪人の助力を需用するものは、卽ち一轉して秘密隱謀團たる帝政回復黨である。是に於て革命黨から振られて悶々の情に堪へざりし支那浪人の好事的本能は、直ちに之に誘はれ、遂に踵を接して其門に奔るといふ現象を呈したのである。加ふるに昨今此派の財政は頗る饒かにして、物質的利益も亦之に伴ふものあるのみならず、内外の有り

なる勢力の之を後援するものもある等の理由よりして、昨今帝政回復運動の傘下に所謂日本志士の集るもの、恰かも蟻の甘きにつくの概があつた。今日我々の知る範圍に於ては、依然として當年の節を枉げず、十年一日の如く支那の革命的青年の同情者として殘つて居る者は、殆ど五指を屈するにも足らない。

以上の如き理由よりして、近來我國の支那論策は、著しく一方に偏して居る。決して之を恒常公平の論議と見る事は出來ない。蓋し對支論策を建つる者の多くは前述の如く實に幾多不純の動機によつて去就を動かされて居るからである。國民は決して此等偏僻なる議論に動かされてはならない。對支問題が我々にとつて重大なる丈けそれ丈け、我々は此點に關する警告を國民に向て大聲絶叫するの必要を認むるものである。

臨時特別議會の批判

松井柏軒

（一）

去る六月下旬より七月中旬に掛け、約三週餘日間に開かれし臨時議會を回顧するに、興趣殊に饒かなるを覺ゆ、世多くは豫算追加金額と、政府提出案との多きに過ぐるをいひ、延きて其の成績の小ならざるを擧ぐるも、吾人は其れ以外、政治的に國民の心裏に多大なる印象ありしことを思はずんばあらず。

歐洲の大戰殆んど滿二年に及びて未だ終局の形勢なく、強勁なりし獨逸流石に勢ひ振はざるに至れりと評せらるゝも、ヒンデンブルグ元帥は、尚ほ鋭意年少の新兵を訓育し、其の成るを俟ちて聯合軍を掩撃し、最後の留めを刺さんとし、爲めに大宰相ベートマン・ホ

ルウエッをすら驅逐し、露國はまた革命の餘波未だ全く收まらざるに、早くも攻勢に轉じ、墺匈軍を撃破して陣地を進むること五十哩に及べるも、レンブルグ進攻に一頓挫を來せしのみならず、南方のウクライナ獨立せんとし、爲めに内閣に動搖を來す等、情勢輙もすれば思はしからざるものあり、剰つさへ其の社會黨は密かに丁抹、瑞典等の社會主義者と通謀し、獨逸社會黨と相呼應して無償無併合主義の媾和を成立せしめんとす、伊太利の墺軍攻撃は恰かも行詰れるが如く、英佛の攻撃準備は、大規模を以て進捗し、軍隊の士氣また振ひて、着々敵を壓すと雖も、國内の疲困と、民心の戰ひに倦めるとは、蓋　獨逸に比して伯仲の間に在らんか、唯だ幸ひに聯合側に新たに米國の加はるありて、意氣天を凌ぐの概あるに反し、敵側には墺太利先づ困乏して和　欲し、獨逸政黨の一部と相應じて軟風を煽するも、鐵の如きヒンデンブルグ果して屈するや否や、否、彼れは英佛軍の攻勢準備を挫くがため、陣地を更に縮小したる後、尺蠖の大に伸ぶる前、先づ屈する筆法に倣ひ、新兵を提げて一大決戰を行ふとも係ふ、和戰の機、茫として捉へがたく、和議の來る或は意料外に迅速なる又また測る可らずして、世界を擧げて多く混迷する時、我が臨時議會は開かれて、而して其の結果する所、總選擧のためといふよりも、寧ろ主として彼の臨時外交調査會の創立より來るに於て、殊に觀察し評論すべきもの多し。

（二）

臨時外交調査會が宮中の側近に設けられて、然かも天皇のため應機啓沃の重責あるに於て、憲法の明定せる國務大臣、樞密顧問以外、何の責任あるかは、少くも一の疑問たるべし、但し之を追究して憲法上の判斷を下すことは兎に角、其の目的の擧國一致に在りといふは信ず可らず、若し果して擧國一致を目的とせば、何故に寺内内閣成立の當初に之を實現せんとせざりし乎、當時ならば、内閣と憲政會との爭議未だ啓かれずして、感情また太だ惡からざりしが故に、其の黨首を迎へ來るの望みは十二分なりしに非ずや、或は俗諺の

如く、下素の智恵は跡から出でしとする乎、然らば則ち原、犬養、伊東の諸氏に計りしが如く、夙くより加藤子とも相議せざりしは何ぞ、有らゆる元老と豫め打合せ置ながら、大隈侯が旅行中なりといふの故を以て之のみを除外し、且つ六月二日正式の會見までは、加藤子に一切を打明けずして、突如として會の創立を申出で、且つ委員の一人たらんと求めしは何ぞ、其の第一回會議を六月十八日までに開く程の餘裕ありしものならば、何故に其の月五日大隈侯の歸京するを俟つて侯の賛成を求め、侯を透して加藤子を迎ふるの手段に出でざりしぞ。

且つ外交調査會にして、果して眞に國論統一のため各方面に渉りて、練達堪能の士を網羅するを目的とせば、何故に薩派の山本權兵衛伯を迎へざりしぞ、伯の氣力剛勁なる、元老を視ると腐れたる草鞋の啻だならず、理に長じて苟も曖昧なるを許さゞると、頗ぶる加藤子に似たるあり、否、或は加藤子以上の强味あり、然るに伯と子とを迎へず、子を迎へんとせしも型式一片にして却つて初めより之を除外する形迹すら之なきに非ず、外交調査といへば、何者よりも先づ斯の伯と子とを迎へてこそ、眞に練達堪能の士を網羅したりといはるべきに、之を爲さゞりしは、蓋し他に別異の目的ありし一證ならざらんや。

然らば則ち他の別異の目的とは何ぞ、曰く二重の目的也、其の一は政黨との妥協にして、一は擧國一致の美名を取らんとする是れ也、抑も外交調査會は、如何なる機能を有するぞ、單に外交上の大目的を調査するに止むる乎、將た對支外交を始め、外交上の有らゆる重要問題より、延きて之に關聯すべき財政國防にも及ぼすや、其の範疇すら今尙ほ分明ならずして、此の會に如何の權威あるか、會の創立の意義すら未だに徹底する所あらず、唯だ單に擧國一致といふが如き漠然たる美名を掲げて、然かも加藤子を逸せるがため、完全に擧國一致の名實をも擧げ得ざるに拘らず、初めより加藤子の不參加を豫期し、又山本伯の如き最適任者を迎へざりしは、畢竟擧國一致の美名を籍りしのみ、其

の主たる目的は寧ろ政黨との妥協に在るや疑ふ可からず。

山縣公の内閣が自由黨と肝膽相照を唱へし以來、情意投合といひ、妥協提携といひ、歴代の官僚内閣皆政黨と妥協して以て辛ふじて衆議院を無難に政局を進め得たりしに、寺内内閣は成立の當初、秉公持平と稱して何等政黨に關與せず、純超然の態度を執れるは、假令政友會等と一種のアンダアスタンヂありしにせよ、實に奇異なる事象なりしといはざる可らず、蓋し官僚の眞目的は、政黨の横暴を抑ゆるがため、小黨分立を必要とし、若し一黨多數を制すれば必らず之を打破せすんば止まず、曩には剛岸にして其の實お人好なる大隈老を指嗾して政友會を征伐せしめ、亞で大隈老の骨折に由て出來上りたる憲政會の第二の大多數黨となるや、乃ち寺内伯を擁立して憲政會を征伐し、竟に其の目的の如く、今や一政黨を以てして議會に絶對多數を有するものなきに至て、官僚本尊の目的は達せりと謂べし、然れども小黨を分立せしむるも、其の二三と妥協するに非ずんば、衆議院を奈何ともする能はず、乃ち何等かの方法を以て政黨を利用せざる可らずと雖も、大正の今日、再び肝膽相照、情意投合、妥協提携といふも陳套なるが故に、世に擧國一致の説あるを幸ひ、玆に臨時外交調査會を設置し、原、犬養の兩黨首を羅致して、政友、國民の兩黨妥協したるのみ、此の妥協に加ふるに、内閣直屬の御用派たる維新會及び無所屬派を以てせば、政府與黨は二百五十餘の多數を超ゆるや明か也、臨時外交調査會を設けて政黨妥協し、更に官僚派の智嚢及び策士をも率き來りし手法の新たにして而して奇なる、實に賛嘆に餘あり、木强なる寺内伯にして此の手腕あるは、天下何人も恐らくば意外とする所なるべし。

（三）

此の臨時外交調査會なる妥協策の行はれし結果、寺内内閣は臨時議會に於て泰山の如き基礎に立てり、憲政會の微力之を奈何せんや、唯だ憲政會が必敗を期して而して政府不信任案を提出せるは、思ふに諸葛亮の

所謂漢賊兩立せざるの主旨に由て、成敗利鈍を度外に措き、斃れて後已むの精神なりしならん、其の心事頗ぶる憫れむべし、然れども其の主張の不徹底なるは、反對議員の一人たる林毅陸氏の演說したる如く、憲政會自から多くの弱點を有するがために、凡ての方面に理義精透せず、我が海軍の地中海出動を難ぜんとすれば、前內閣對獨宣戰當時の不用意を奈何せん、對支外交の失敗を痛擊せんとすれば、前內閣の支那に對する失敗を掩ふ能はず、後藤男の秘密出版を訐かんとするも、其の記載の多く事實にして、而して外交と軍事との不統一を暴露する危險あり、選擧干涉を辯難せんと欲するも、歷代の內閣皆然らざるなく、大隈內閣の政友會征伐と、寺內內閣の憲政會征伐とは、本來同巧異曲のみ、五十步を以て百步を嗤ふに異ならず、本來憲政會にこれ等弱點あるに止まらず、尙ほ對支外交には西原某の問題に主力を注ぐが如き、寧ろ枝葉にのみ亘りて根本に觸れざるの缺點あり、內務大臣不信任案の如き、臨時外交調査會廢止案の如き、更に好個の利器を有しながら、河野、箕浦の如き重厚なる君子をして陣頭に立たしめず、第二流以下の戰士を出して、故らに問題を輕視せしめしが如き、策戰上にも幾多の缺點あり、加ふるに其の演說者たる尾崎、齋藤、橫山の諸雄辯家は、反對黨の巧みなる術策に陷ゐりて激烈なる言語を用ゐしため、却つて前言取消の如き、懲罰事犯の如き失態をすら生じて、竟に十二分に其の理由を國民に徹底せしめ得ざりしは、最も嘆惜すべしとす。

（四）

寺內內閣の對支外交を目して早く既に失敗なりと斷定するは、吾人の未だ俄かに與みせざる所とす、素より何等成功なしと雖も、未だ著るしき失策もなしとすると、却つて公論には非ざるべき乎、唯だ大隈內閣の後を承けて、段祺瑞の內閣一び失脚したりしと雖も、米國公使ラインシユの忠告失敗し、張勳の復辟運動また失敗に終り、而して南方派の實力乏しくして內却つて統一せず、今や段祺瑞再び起つて參戰問題を決定せんとするが如きは、寧ろ寺內內閣の幸運と看ざる可ら

ず、唯だ歐洲の大戰今日の如き秋、米國がルート氏を特使として露都に派し、大に新政府援助の協議を爲したる結果、今や露國は靡然として米國の經濟的援助に縋らんとし、爲めに歐露及び西伯利亞方面の諸鑛山を擧げて米國人の採掘に一任し、樺太北半部の石油坑をも米人の一手に歸せしめて、日本人の志望者を排斥するに至れる時（日石、寶田其の他は今夏技師を北樺太に派すべく準備せるも在東京露國大使館の注意に由て一切之を中止したり）我が滿州鐵道を小松花江岸頭まで伸張するの議さへも、曩に一び內定して而して今に實行されざるが如きは、國民の寺內內閣の外交を視るに於て如何の情ありとするや。

此の時に於て臨時外交調査會を設けしがため、衆議院の基礎磐石なるに安心して、議會より外交上の質問出づるも懇切に說明せずして多く秘密を守れるは、假令必らずしも大に咎むるに足らずとするも、輙もすれば詭辯を弄して問者を瞞し去らんとする形迹ありしは何ぞ、質問者が未だ質問の趣意をも述べざるに方りて早く已に答辯書を提出すが如き、假令多くの先例ありといふと雖も、寧ろ不親切の非難を免かれ得ざるに非ずや、議員の質問や素より非難し攻擊する目的に出で其の惡意的なるや言を俟たずと雖も、政府が目を以て目に酬ひ、指を以て指に酬ゆるは、果して何と評すべきぞ。

內閣不信任案に當るに、大權論を以てせしの妥當を缺くや少しく心ある者の始めより稱へし所とす、曲學阿官の徒は如何に解するにせよ、世界の大勢に鑑みるも、將た我が國民心理の推移に照すも、政黨內閣制は抑ゆ可らざる形勢也、現に超然を標榜せる寺內內閣と雖も、既に臨時外交調査會を設けて自から政黨と妥協したるに非ずや、彼の貴族院に於ける江木千之氏の皮肉なる質問に對して、寺內伯が嘲咤して多く言ふを得ざりし所以のものは、必らずしも憲法を解せざるがために非ずして、全く理勢の奈何ともす可らざる故のみ、然かも伯の人格を以てして、此の場合寸分でも詭辯を弄せざりしは、所謂過を見て仁を知るもの也、吾人は

寧ろ伯の叱咤したるを貴ばんと欲す。

唯だ最も惜むべきは後藤内相・岡田文相也、内相の所謂秘密出版は、假令事實といふと雖も、世界の前に國家の非を訐きし也、所謂國惡を諱むの箴言に叛せし也、殊に之を以て政爭上の尋常手段と做すに至ては最も忠亮なる士人の嘆惜する所とす、文相が總選擧の際、松浦某を援助したるをば、吾人絕對に之を非とせず、彼れ既に法律上復活して公人となり、現に被選擧權をも有する以上、之を援助したる必らずしも非ならずと雖も、援助したる事實なしといへるは、是れ明白なる虛言也、吾人は乃ち此の虛言を非とす、文相は後に至つて其の打消しの誤解に出でしが如く言做せるも、實は一種の曲辯のみ。

寺内内閣は其の成立當初の宣言に於て、政黨に對して乘公持平をいひ、誠心事に當り、紀綱官紀を振肅すべしと稱せしに非ずや、思ふに寺内伯の政敵と雖も、伯の人格の正しくして、至誠を推すの人たることゝ、嚴正自から持して綱紀を振刷するの適當者たることゝを認めざるは莫かるべし、乃ち識慮ある國民は、今更超然内閣を欲せずと雖も、唯だ近時弛廢し解怠せる紀綱を振肅し、民心を緊張せしむるがために、伯の人格に信賴して、其の内閣組織を妨げざりしのみ、隨つて伯の内閣の政綱たる至誠事に當ると、綱紀振肅とは、最も重きを置かるゝ所とす、彼の政黨に對する乘公持平說の如きは、謂はゞポリシイのみ、プリンシプルと做すべきものに非ず、即ち乘公持平のポリシイを放棄するも、何等怪むを要せずと雖も、至誠當事と綱紀振肅とのプリンシプルを破棄するに至ては、是れ幾んど寺内内閣存在の意義を疑はるべき重要問題とす、敢て問ふ、内相と文相との事は、此のプリンシプルに照して如何、吾人は何よりも先づ寺内伯其の人の心事を聽かんと欲す。

（五）

短期なる臨時議會に於て、失敗せる憲政會は却つて頗ぶる國民間の同情を得たるが如し、蓋し彼等が總選擧に當りて撲たれ踢られて、十二分の虐待を受けして

とは、先づ弱者を憫れむ我が國民の俠情を刺激したるに止まらず、更に臨時外交調査會の創立に當りて、其の黨首が獨り擧國一致破壞者らしく言做されんとせしをも、亦大に國民の同情を惹けるが如く、殊に國民黨の狡策に構陷せられて今日に至りし一事最も然りとす、故に其の必敗を豫期して議會に惡戰苦鬪せしことも、其の欠點に乘ぜられて、散々の虐待を受けしことも、却つて國民同情の一因たるが如し、乃ち彼れや議會に失敗して、而して必らずしも國民に失敗せざるものと稱するを得。

內閣が二百五十餘の大多數を衆議院に占めしことは殆んど前例なき勝利の如きも、議會解散當時より憲政會を攻擊せしと辛辣に過ぎしが如き、將た臨時外交調査會の設立に巧を極めしが如き、議會に於ける答辯の懇切を盡さゞりしが如き、殊に內相問題文相問題の如き、痛く國民の心證を損せしや爭ふ可らず、是れ如何に內閣に忠實なる者と雖も、否定する能はざる事實として、私かに嘆惜を禁せざる所ならずや。

此の間に於て獨り無事なるが如きは政友會也、彼れが內閣の政綱とも目すべき興業銀行法改正案と、國民貯金法案とを握り潰せしは、思ふに內閣に示すに一種の權威を以てせし方略ならん、殊に反對黨の內閣攻擊に對し、正面より堂々として之を爭はず、却つて區々の失言激語を捉へ來りて、或は之を取消さしめ（同時に國務大臣にも失言を正さしむ）、或は懲罰事犯を起して、小題を大題と做し、以て彼の眦を裂き髮を亂して大童となれる憲政會を弄殺したる手法の如き、其の巧妙なる、殆んど言語に絕するものあり、彼れや恐らくは之を以て區々の憲政會、力を用ゐずして之を斃したりと做し、他の愚直を冷笑して獨り自から巧智に誇るなるべし。

然れども政友會の過去十幾年に涉る歷史は、未だ全く國民の惡感情を拂拭するに至らず、殊に自黨本位のため、如何なる政府とも妥協するが如き、一部國民の未だ必らずしも好まざる所にして、政友會の巧智は、寧ろ原田甲斐、大槻傳藏式の狡慧と視做すものの少から

ずとす、斯の黨にして今や何等勢するなくして、反對黨を巧みに飜弄し弄殺して、殆んど完膚なからしめ、獨り自から莞爾たるは、是れ寧ろ原田式大槻式として國民の感情却つて彼の飜弄され弄殺されし失敗者に飯せしには非ざる乎、果して然らば過ぎたるは猶ほ及ばざるが如き也、獨り何等手疵を負はざりしと自負せる政友會は、却つて大なる瘡痍を受けたりと斷せざる可らず。

國民黨の態度は、寺内内閣の對支外交と齊しく、吾人は尙ほ暫らく評論の自由を留保すべし、維新會に至ては、素より其の本色通りに發揮したるのみ、全く可否の問題外に屬す。

（六）

世間或は民主々義の世界に淘湧するを視て、我が國體に影響するなきやを危惧する者なきに非ず、憂心忡々として國を思ふの至情や貴ふべしと雖も、世の危惧や畢竟杞人の天を墜つると做すと齊しきのみ。

露國の大革命に由て帝政の僵れしと朽木も啻ならざりしは、畢竟ロマノフ王家の其の始め莫斯科貴族に選擧されしと、官僚政府と一致して恰かも賣國の危險ありし結果のみ、獨逸に於ても、其の議會が責任内閣制（政府をして議會に責任を負はしむる）と普通選擧法とを主張して、益々民主的傾向を長ぜんとするは、殊に注目すべき事象にして、戰後歐米の民主主義、彌よ勃興するや疑ひなし、蓋し大戰に當りて其の掛替なき生命を擧げて犧牲としたる大多數は、總て下級の國民にして、彼等は其の權利義務上の觀念よりして、戰後多く政治上の發言權を増大すべく、隨つて政治上に民主的革新を看るべきや必也、何ぞ況んや其の王家君家なるもの大抵選擧されしものに非ずんば、則ち他より來れる征服者なるをや。

然れども我が皇祖は、我が民族の祖先にして、我が民族の祖は、始めより皇祖の臣從たりしのみならず、民族中には源平其の他の姓名者の如く、皇室より出でたるもの甚だ多くして、事實皇室はまた民族の首長たり、而して其の三千年來一系不變の皇統は、萬國に類

なき所にして、殊に列聖の仁愛なると、臣民の忠良なる感情とは、綿々として國民の血液中に傳へ流れて長へに斷絕することなきを以て、世界を擧げて悉く共和國となるも、我が國體には素より微動だも及ぼすことあらず。

然れども國民の意思を疏通して、之を政治上に於て十分に伸べしめんことは、是れ先帝の萬機公論に決すと宣し玉へる大詔の精神にして、又實に憲法の大主旨たり、政局の衝に當るもの乃ち一切私心を去り、横合より君民間を阻隔するが如きなきを要す、殊に政治は常に改良すべし、絕えず改良を怠らんずんば、革命の如き變に生ずるの虞なきのみ。

唯だ國民の意思の大に政治上に伸ぶる時、必然來るべきは政黨の革新ならん、臨時議會に於て、政黨が依然として政爭にのみ囚はれて、憂國の至誠に乏しく、且つ反對黨を打つに有らゆる卑語妄言を逞くして、以て其の品性の低劣なるを示して悔ゆる色なかりしは、益々國民の信用を墜せるのみならず、政爭に熱して全力を盡す。似ず、國民の生活問題には一顧だも與へずして、竟に國民の生活が政治の最大要義たるを悟らず、依然として舊思想に拘泥せるは、是れ新たなる智慮ある國民の既成政黨に失望する所以にして、其の結果の將來必らず、政界革新に至るや數に於て爭ふ可らず、乃ち臨時議會短期といふと雖も、此の點に於て多くの原因を作爲せることは、是れ政治的に頗ぶる大なる意義あるものとせざる可らず、然り、總ての事は國民の覺醒に在り、而して臨時議會は頗ぶる多く覺醒を國民に與へたるもの也。

史劇の本領を論ず

島村民藏

史劇の「史」の意味

史劇の本領乃至使命を論ずる場合には、當然の出發點として、史劇の「史」は果して如何樣の意味を持つてゐるか、まづそれから詮義してかからねばなるまいと思ふ。假に史劇を過去の世界を描いた劇と解釋し、「史」はすなはち「過去の世界」の同義語だと思つて見る。そこで逍遙博士の「役の行者」、鷗外博士の「生田川」、ヘッベルの「ユウヂット」、ワイルドの「サロメ」などに描かれた過去の世界と、シルレルの「ヰルヘルム・テル」、ハウプトマンの「哀れなるハインリヒ」、近松の「傾城酒呑童子」などに描かれた過去の世界と、榎本破笠の「葵の上」に描かれた過去の世界と、シェークスピヤの「リチャード二世」、シルレルの「ワルレンスタイン」、イプセンの「皇帝とガリレヤ人」、キルデンブルフの「クイッコフ家」逍遙博士の「牧の方」、鷗外博士の「日蓮上人辻説法」、默阿彌の「桃山譚」、櫻痴居士の「春日局」などに描かれた過去の世界と、この四通りの過去の世界を比較して見ると、意義内容の上に各格段の相違があることがわかる。

「役の行者」「サロメ」などに於ける過去の世界は古代傳說（Mythos）の世界である。「傾城酒呑童子」「ヰルヘルム・テル」などに於ける過去の世界は口碑（Tradition）の世界である。それから「葵の上」に於ける過去の世界は「源氏物語」すなはち古代叙事詩（Epos）の世界である。また「リチャード二世」「牧の方」などに於ける過去の世界は正史（Historie）の世界である。すなはち史劇の「史」は從來、古代傳說、口碑、古代叙事詩、正史といふ、四通りの意味に用ゐられてゐたのである。この裡で口碑と古代叙事詩の場合は比較的少いと思ふから、玆所では史劇の「史」は、古代傳說または正史の意であるとして置く。史劇は古代傳說もしくは正史の裡の事蹟人物を描いた劇であるといふことになる。

獨逸の劇詩人フリードリヒ・ヘッベルは、悲劇「ギゲスの指環」の冒頭に、「行爲は歷史以前的、古代傳說的である」（Die Handlung ist vorgeschichtlich und mythisch.）といふ斷りを書いて居る。これによると古代

傳說は正史以前の歷史であつて、神話や古英雄譚や人文未開時代の事蹟の記錄といふ意味も含まれてゐる。至純な普遍的なそして極めて種族的の產物である。民族的精神の結晶である。人文發展のおの〳〵の時代の空想によつて樣式化された口碑である、古代傳說は「歷史以前の歷史」であると一口に云ふもの丶、實際は左樣簡單には正史と區別され得ないのである。少くとも時間の上からはほとんど的確な區別はつけ難い。シェークスピヤ研究家の說によると、シェークスピヤの時代では、二代以前、すなはち曾祖父の時代はもはや古代傳說の時代と見做されてゐた傾きがあつたさうであるが、歷史に關する精神科學の發達進化した今日の時代では、三十代も四十代も先きの時代でなければ古代傳說の時代とは思はれない。正史の時代が延びると同時に、古代傳說の時代は縮まる。史學の發達は從來の藝術的題材の多くから、古代傳說的な性と力と能を奪つて、詩人に對して科學的な暗示を要求すると共に、不羈奔放な空想をいろ〳〵な方法で束縛するものといつてよい。兎に角、藝術的題材としては古代傳說と正史の區別は大した問題ではない。たゞ正史は正史として古代傳說は古代傳說として取扱へばよいのである。我が國の所謂時代物、乃至は泰西のロマンチック劇のやうに、正史を古代傳說扱ひしたりさへしなければよいのである。わたしは茲所で、古代傳說と正史と、この二つを合せて、假りに歷史と呼んで見る。この「歷史」の世界を取扱ふ劇が史劇なのである。

純正史劇と象徵史劇と活歷劇

史劇の「史」が古代傳說と正史を合せた意味の「歷史」であることは前に述べたが、これから史劇作家のこの歷史に對する態度が大凡三通りあることを說明しよう。逍遙博士はこれに就いて、嘗て次のやうな說を吐かれた。

予が平生考ふる所によれば、史を題としたる詩におのづから三種の別あり。

（第一）全く空想より成りたるものに過去の時、處、人名等を被らせたるもの、例へば、巢林子の夢幻史劇、若しくはスペンサアの「

女王」の如きもの、若しくは抒情詩人の手に成れる史的叙事詩又は史劇。
(第二)野史、正史の事實に多少の潤色を加へて殆ど其の儘に劇となしたるもの、又は俗に小説と呼び做したるもの、例へば、我が活歷劇、又は『平家物語』の如きもの。
(第三)史を讀みて其の中に見えたる人物及び事件の詩人の想像にも優りて詩的なるに詩興を發し、其の興を本として案を構へ、詩としての適否に因りて材を陶汰し、且つ自在に想像を加へ、取捨伸縮して一篇の詩と成せるもの。
是れなり。第一を名づけて史の衣を被りたる空想又は史の衣を被せたる空想と呼ぶべくば、第二を史に空想を附加したるもの、即ち空想の衣を被りたる野史と呼ぶべく、第三を史より生れたる空想と呼ぶべし。【「史劇に就きての疑ひを再び太陽記者に質す」(文藝と教育)】

逍遙博士の所謂「史の衣を被せたる空想」は、言葉を換へて言へば、史的象徴、史的寓話の藝術である。ロマンチック劇や我が國の夢幻史劇が過去の事相や人物を方便とし象徴として、醇化した性情、能力を具象化したのや、最近に武者小路實篤氏が「日本武尊」の裡で武力と自信の化身として日本武尊を描いたのは、この第一の場合の好例である。この場合に史劇作家は歴史を象徴(又は擬人)として取扱つて居る。表現上の一方便として見て居るのである。

次に第三の「史より生れたる空想」は、もつとも純粋な意味でいふ過去の事蹟人物を描く文學であつて、史劇作家はこの場合に歴史を題材として取扱つて居る。表現されべき對境として見て居るのである。この場合史劇の「史」は、社會劇に於ける社會、戀愛劇に於ける戀愛、家庭劇に於ける家庭、問題劇に於ける問題と同樣に、藝術が表現する對境の種類を示す言葉となつて居る。

それから第二の「史に空想を附加したるもの」は、人間の平等旨を活現することよりも、まづ歴史そのものを活かすことを主眼とした藝術、史主詩從の藝術、藝術の目的から外れた作用效用を狙つた文學である。彼の依田學海、福地櫻痴、及び晩年の默阿彌などの作した所謂活歷劇は、この種の史劇である。

余は新劇につきて別に明瞭の案もなけれど要するに成るべく實際

に近くせよといふにあり、其の次第順序はいくらもあるべきが、第一根本の事實は飽くまでも眞正の歷史によりその間に歷史以外の許多の脚色を點綴するにあり……余が不服なるはひとり切腹戰爭のやりかたのみならず、道具立をはじめ舞臺の組織からが氣に入らぬなり、又チョボ、らしろ、相方の如き悉く不服なり。〔「演劇改革談」（早稻田文學第六十二號）〕

右の學海の意見に徴しても明かなやうに、彼等は史劇を對話體の歷史、歷史敎育の補助機關として作り上げようとして、極端なる藝術上の功利主義を實行しようとした譯である。要するにこの場合には史劇作家は歷史を藝術の支配者として見て居るのである。

以上、史劇作家の歷史に對する三種の態度を擧げたが、その裡て、歷史を象徵として見る態度から生れた史劇を象徵史劇（又は擬人史劇）と呼び歷史を題材として見る態度から生れた史劇を純正史劇と稱し、歷史を藝術の支配者として見る態度から生れた史劇を、從前通り活歷劇と名付けるとすると、象徵史劇と純正史劇は自由藝術であるが、活歷劇は羈絆藝術乃至は準羈絆藝術である。わたしがこれから研究しようと思ふ史劇は、象徵史劇でもなければ活歷劇でもない。前者はむしろ象徵劇の一種として論ずべきものであり、後者は純正史劇の變種劣種、もしくは純正史劇として描いて及ばなかつたもの、虎を描いて猫に類するのたぐひと解するが至當であらう。わたしの所謂史劇は純正史劇に外ならぬ。そこで、純正史劇は古代傳說もしくは正史に表れた事蹟人物を題材とした戯曲である。といふ斷案が下される。この純正史劇の本領乃至使命の特質を研究するのがこの論の目的なのである。

アリストテレスとレッシングの史劇論

史劇は歷史を題材とした戯曲である、といふ斷案から、戯曲と歷史といふ二つの題目が得られる。從來の史劇の本領論はいつもこの二つの題目の相互關係に就いての論議に落ちて行つた。そこに落ちて行くのが當然の順序である。これを逆に云ふと、戯曲と歷史の相互關係を闡明にすることによつて、史劇の本領乃至使命を推斷するのが、もつとも適切な着實な論法であるといふことになる。しかしこの戯曲對歷史の關係は、

西洋でも昔から今に至るまでいつも美學上藝術上に重大な論爭問題となつてゐて、いまだに最後の解決方法は發見されずにある次第である。けれども大體に於いて、希臘の哲人アリストテレスと獨逸文學の創建者レッシングの史劇論が、この紛糾した問題に對してもつとも根柢ある解決を與へたものである、といふことに近代の演劇美學者の説は一致して居る。であるからまづこの二者の史劇論を掲げて、それからこれに對する反對論に及ばふと思ふ。

　アリストテレスの史劇論は、『詩論』第九章に極めて簡潔であるが含蓄に富んだ文章で述べてある。その一節に、

　詩人の務は實在の事件を敍述するところになく、起り得べきこと、すなはち眞實性もしくは必然性の法則に從つて、有り得べきことを敍述するところにある。歴史家と詩人の相違は、前者が散文を書き後者が韻文を綴る點になく、むしろ一が實在の事件を敍述するに反して、他が起り得べきことを敍述する點にある。故に詩は歴史よりも更に哲學的であり更に高尚（理想的）である。詩が平等相を對境とするに、歴史は差別相を敍述するからである。

と云つて居る。アリストテレスのこの主張を分解すると、左の四つの條項が得られる。

（一）詩人は歴史家ではないこと。
（二）詩人の職分と歴史家のそれとは全然異なること。
（三）詩人は起り得べきこと、有り得べきことを敍し、歴史家は實在の事件を述べること。
（四）詩人は起り得べきこと有り得べきことを述べる際に、必ず、眞實性（Wahrscheinlichkeit）もしくは必然性（Notwendigkeit）を保持すべきこと。

　この四つの條項は、史劇の根本的性質と、史劇作家の天分と目標をもつとも純な言葉で云ひ表はしてある。アリストテレスにとつては、藝術と歴史、すなはち戯曲と歴史は、これを同一視し、もしくは主從主賓の別を立てる餘地のない程、おの〳〵全く獨立した精神生活の一分科なのである。

　アリストテレスの學説を敷衍して、更に獨自の見解を補綴して、晦澁を明快に、簡疎を委曲に替へた觀があるのは、レッシングの史劇論である。レッシングは特に史劇に關する纏まつた議論を書いた譯ではない

が、「ハムブルク演劇評論」の裡に隨處に散見する意見を綜合すると、四つの段階から成り立つ史劇論になる。その第一段の要素は、戯曲家は歴史家ではない、といふのである。アリストテレエスの説を踏襲したのであるのは云ふまでもない。

戯曲家は歴史家ではない。戯曲家は實際の出來事と信ぜられてゐることを物語りはしない。反つて我々の眼前にそれを再現する。單なる史的眞相のためにではなく、全く別なそれより更に高尚な企圖のためにそれを再現する。史的眞相は戯曲家の目的ではない。目的を貫徹するための手段に過ぎぬ。戯曲家は我々を欺瞞しようとする。欺瞞して感動させようとする。(Hamburgische Dramaturgie, XI)

此裡には既に第二段の要點をも云ひ表してある。史的眞相(Historische Wahrheit)を描破することは、史劇作家の目的ではなく手段である、といふのがそれである。なほ第三段は第二段の説明に近いものであるが、戯曲家が歴史を資料とするのは眞實性と必然性を生み出すためである、史劇にあつては人物の性格が主で、史的眞相は從であらねばならぬ、史的事相は偶發的であるが、人物の性格は本來的である、劇のもつとも主要な要素たる悲劇的行爲(Tragische Handlung)は人物の性格から生れる、故に史劇は過去の時代に於ける人物の性格の發展を描くもので、歴史そのものゝ展開變化を寫すを主眼とするものではない、といふのが大體の論旨である。

アリストテレエスは悲劇作家が史的眞相に介意すべき程度をさだめて、悲劇作家の意思に適合するやうに仕組まれた筋に、史的眞相を近接する範圍にとどめよといつた。悲劇作家が歴史を資料とするのは、それが起つたことであるからではなく、當面の目的に對してこれ以上の構案が不可能であるやうな風に起つたからである。彼が偶然一つの事實の裡にこの種の適合を見出した時には、その事實はよろこばれる。けれどもそれを追求するために史書を漁るのは徒事である。起り得るといふ可能性を、たゞそれが甞て起つたことがあるといふ事實から歸納するならば、全然作つた筋を、我々が之まで耳にしなかつた實際の歴史と見做すも敢へて差支ないではないか。歴史を信ずるに足ると思惟させるものは果して何か。それは内面的の「眞實性」ではないか。それならばこの「眞實性」が全く何等の證據もしくは傳説によつて確實にされずとも、はたまた我々の知識の未だ到達し得ないほどのあらゆるものによつて立證されたとするも、結局同じことではないか。演劇の職能が偉人の面影を留めるに

あるといふのは根抵のない說である。それは歷史の務であつて演劇の與り知るところではない。我々舞臺上に學ぶべきは、この人もしくは彼の人が何をしたかといふことではなく、一定の性格を有するおのおのの人間が、ある特殊の境遇の下に置かれて何をするであらうかといふことである。(ditto, XIX)

この第三段は、アリストテレスの學說の第三、第四の條項を敷衍したものといつてよい。しかし戲曲家が歷史を資料とするのは眞實性と必然性を生み出すため、といつたのは彼の創見といつてよい。それから第四段には、前段の論旨を受けた當然の歸結として、戲曲家は性格描寫の都合によつて自由に歷史から離反して差支ない、題材に取つた歷史を思ふままに扱つてよい、潤色取捨に一切戲曲家の任意である。といふのがその要旨である。

詩人は史的眞相からどの位ゐの程度まで離れて差支ないかといふ問題は、性格を中心にして考へれば直ちに解決される。性格に關係のない範圍では、詩人の思ひの儘である。性格ばかりが詩人にとつて神聖なのである。(ditto, XXI)

以上、レッシングの史劇論の要旨を再び繰り返すと、

（一）戲曲家は歷史家ではない。（二）史的眞相を描破することは、眞實性と必然性を保つための手段である。（三）史劇は人物の性格の發展を主眼とする。（四）性格描寫の都合上自由に歷史を取捨潤色して差支ない。といふことになる。すなはち史劇作家は科學的法則の下に立たないで、藝術的法則の下に立つ。史劇でもつとも重要なものは、「人間」であつて「歷史」ではない。「歷史」は只この「人間」を眞らしく必然らしく見せるために使はれる方便手段に過ぎない、といふのである。これはたしかに何人も否定しがたい眞理を道破したものといつてよいであらう。

しかるに、レッシングの「史的眞相の描破は手段であつて目的でない」といふ斷案に對して異議を挿んだ人がある。それがすなはち、近代劇の先驅者と云はれる獨逸のフリードリヒ・ヘッベルである。

ヘッベルの史劇論

ヘッベルはまづレッシングの言葉を引いて、

「簡單に云へば、悲劇は對話體の歷史ではない。歷史は悲劇に對して、

ある性格を結び合せる人名錄に外ならぬ。詩人は歴史の裡から、境遇事情を潤色して個性化するのが便宜であると思つたならば、彼はその歴史を資料とするがよい。たゞこのことによつて、詩人は功勞を立てもしなければ、罪惡を犯しもしないのである。」レッシング。わたしには歴史と悲劇の關係には、もつと內面的なところがある筈だと思ふ。(Tagebücher)

といつて、歴史は戯曲にとつて單に眞實性必然性を保つ上の手段にすぎないのであらうか。この兩者の關係にはもつと內面的な複雜さがあるのではあるまいか。と疑つて次のやうな意見を洩らして居る。

戯曲と歴史の關係は何うであらうか、戯曲はどの位ゐの程度まで歴史的でなければならないか、といふことは問題である。わたしは斯様考へる。戯曲はその本質の求める程度に、また藝術が最高の歴史と見做され得る程度に、歴史的でなければならぬ。藝術は史的危機なしには、壯大深劇の生活過程は表現し得ない。現世の宗教的もしくは政治的の形式を、社會文化の指道者保持者として、一言にして云へば時代の雰圍氣として、徐々に壓搾する場合に、史的危機は藝術にとつて必要缺くべからざるものである。(Tagebücher)

ヘッベルの主張は要する處、藝術は史的事件に對する歴史よりも更に本質的な表白として、更に高尚な不易な「所謂」の形式を表現せねばならぬ、「最高の歴史と見做され得る程度に歴史的」であらねばならぬといふのである。レッシングの方便論から轉じて目的論にうつらうとした傾きが見える。この思想はたま〳〵ヘッベルがヘーゲリアンなることを正しく證明するものであつて、彼と同時代のヘーゲル派の哲學者ヘルマン・ウルリチの史劇論の要旨と暗合一致した點がある。ウルリチのそれはシェークスピヤの歴代史劇に對する評論として書かれたもので、往年坪內逍遙博士が史劇論を草された折に、その大意を抄錄されたから、左にその一部を拜借して掲げる。單に沙翁に對する辯證(ジャスティヒケーション)とのみ見るべきものではない。

史劇の目的は史的事件の隱微なる眞意を描破するにあり、所謂史の眞意は啻り倫理的のみならず、其倫理的なるところ、やがて其の詩的なるところ也。されば史の眞意を描くは、詩の本領に外づれたる事をなすにあらずと。又曰ふ、史劇の劇詩たることは他の劇詩に異なることなし。されども史的といふ約束ある限りは、それを作するの法則は悉く他の劇と同一なるを得じ。他の空想より生みいだす作は、事件も、人物も、一編の主意も、すべて作者の作意なれば、人

物を先きにして事件を後にし、個人の性行を以て事の發展の主因となすも自在なれど、史劇に至りては然らず。史には自然の大法に從へる一道の發展あり。此の發展は個々人の一生を貫き、延いては其の死後にまで及ぶものなり。偉なる個々人の力は、往々にして大發展を左右し、幾分か是を進退することありといへども、要するにそは一時の作用たるのみ。史を通じて觀れば、個々人は末にして大勢は本なりと。[「史劇に就きての疑ひ」(文藝と教育)]

このウルリチとヘッベルの議論の要點、すなはち、最高の歴史と見做され得る程度に歴史的であること、および、史的事件の隱微なる眞意を描破することが、史劇の史劇たる所以であるといふのを云ひ換へると、史劇の本領は、人間の生活過程の表現としての歴史の眞相を描破するにある、といふことになる。從つて史劇の行爲はいつも境遇悲劇であつて性格悲劇でなく、單に「史劇」と呼ぶよりも、「文化史劇」とか「文明史劇」とかいふ方が妥當であるといふことになる。ヘッベルはこれでレッシングの史劇論の足らざる處を補つた氣で居るが、實はレッシングの提言を少許違つた言葉で云ひ改めたにすぎないのである。何となれば、ヘッベルの所謂「史的危機」乃至「時代の雰圍氣」も、ウルリチの所謂「自然の大法に從へる一道の發展」も、詰るところ、人間生存の過程の一ポイント又は全豹の謂に外ならない。從つて「人間」の表現を史劇の主眼とし根幹とする點では、ヘッベルもレッシングも決して變りはないからである。たゞ兩者の意見の分れる所は、戲曲と歴史の關係を、一方は文化哲學的に見ようとし、一方は美學的に根本的に觀察しようとする點丈けであつて、要するに枝葉は異るも根幹はいづれも同じなのである。ヘッベルの左の文はよくこれを證據立てて居る。

歴史家は個々の人物を榴霰彈の如く見做して、その飛散や効果を數へるをこれこととして、その發生に就いては些の注意を拂へばよいとして居る。しかるに詩人は、もし彼が自分の高尚な使命を辨へてゐるならば、歴史を補綴して、主題人物の性格の發生は如何樣であるか、如何であるか、を示さうと努力する。個々の人物の發生に關することは詩人の仕事である。例へば、劇界の聖書といはれるシェークスピヤ劇には、あらゆる情熱が根幹同時に描出されてあるのを見る。(Theodor Körner und Heinrich von Kleist)

歴史に反した史劇は、歴史に對する一の罪惡であるとするものにとつては、机もまた樹木に對して一の罪惡であらねばならぬ。(Hugo Bocher)

ヘッベルの本意は決して史先詩後でもなければ史主詩從でもない。歴史を「世界精神がその内容を實現しようとして、種々の國民精神の形を採りながら順次に開展して行く行程」と見たヘーゲルの思想に感化されて文化史、人類進化の行程といふ風に歴史を解したにすぎない。であるからレッシングもヘッベルも、史劇の本領は、史的眞相を描破するところになく、歴史的事件の間に、個々の人物の性格を活現して、人間生活の本然の姿を窺はせるところにある、といふに何れも一致して居ると見て差支ない譯である。

演劇としての史劇

以上泰西の劇作家美學者哲學者の史劇論の主なるものを擧げたが、これらは何れも「戯曲としての史劇」の論である。これから、なほ念のために、舞臺美術家の史劇論、すなはち「演劇としての史劇」の論を調べて見る必要がある。史劇の舞臺面は他の社會劇や戀愛劇の舞臺面とは全くちがつた特徴があるのではないか、それともまるでないか、といふ疑問を解くには、獨逸の舞臺監督兼演劇美學者たるカルル・ハーゲマンが「舞臺監督術」の裡で述べてゐることが大に參考になると思ふ。これからその大意を述べることにする。

戯曲によつては是れが人間の平等相を著しく描出して居るにも係らず、一定の時代の空氣の裡にひたして見なければ、充分了解の出來ないものがある。であるからフライタハの「新聞記者」や、ヘッベルの「マリア・マグダレーナ」を現代の衣裳を着けて演ずるのは正しくない。オットオ・ブラアムが獨逸座を管理してゐた頃に、シルレルの「巧と戀」をフロックコオトや近代の婦人服を着て演じたことがあつたが、隨分馬鹿らしく感じた。これらの劇の根本の事情をなるべく速に觀衆に理解させるために、舞臺監督は作者が豫定した舞臺と同じ文化の時代に、劇的行爲を移植する必要がある。換言すれば舞臺監督は、劇的行爲を詩人の生存してゐた時代より、更に進化した後の時代に置き換へてはならないのである。

演劇としての史劇の困難な點は、過去の史的關係を寫眞のやうに正確に復寫することではなく、史的の眞實と眞正を目標として、その時代精神の部屋、服裝、場景などの幻影を觀衆に起させることである。史的行

爲が我々現代人の眼前に演ぜられる場合には、幾分か現代の好尙も參酌されねばならぬ。史的眞相は我々の普遍的な美學的根本觀念と抵觸しないかぎり、許されるべきである。しかしその史的眞相が近代人の審美感や適合感を傷けたり、またはいかに科學的に確實であつても、今日では全く了解の出來ない、從つて無意味に思はれる、典例故實などを忠實に舞臺の上で摸倣したりすれば、觀衆の幻影はたちまち破られる。藝術に於いては、すでにアリストテレスもいつたやうに、有り得べき實らしからざることよりも、實らしき有り得べからざることの方を採るべきである。純人間的要素が絶えずもつとも重要である、純歷史的要素よりも更に重要である。

であるから、背景や小道具や衣裳は忠實に歷史的である必要もなければ、必ず眞正でなければならぬといふこともない。この點に於いてマイニンゲル公爵の主宰した劇團はいろ／＼の效績をのこした。けれど今、なほ一派の舞臺監督があつて、史劇を上場するに當つていつも型の如く服裝學上の詮議に浮身をやつし、衣裳家具裝飾品武器其他の撰擇を、全然歷史に忠實な方法ですることを光榮として居るが、彼等の努力は多くは徒勞となる。

舞臺は決して副業としても人類學や考古學の陳列館の職分を果たすべきものではない。重ねていふが、舞臺美術が歷史に忠實ならんことを努めるのは決して最後の目的ではない。最後の目的に到達するための手段に過ぎないのである。我々は劇場に於いて、文明史の特殊研究や、または單なる眼の法樂を欲しない。終始一貫した純一に働く綜合藝術を欲するのである。

以上ハーゲマンの謂ふところは、アリストテレス、レッシング、ヘッベル等の根本思想と吻合して居る。これを要するに、史劇の本領は——これを劇として見るも戯曲として見るも——歷史的事件の間に、個々の人物の性格を活現して、人間生活の本然の姿を示すところにあるのである。

逍遙博士の史劇論

泰西諸家の史劇論の主なるものは以上で大體明かになつたと思ふから、これから我が國の史劇論を研究しよう。それにはまづ坪内逍遙博士の史劇に關する意見からはじめなければならない。博士の意見は『梨園の落葉』の裡に收められた「我が國の史劇」が最初であると思ふが、これは當時の好尙界を毒しつゝあつた、學海櫻痴一派の活歷主義の史劇が、純正史劇の常道を逸したものであることと、近松巢林子の史劇が何れも夢幻的史劇であることを喝破して、純正史劇の本質を

委曲をつくして説明したものである。その一節に、

> 私に案ずるに、凡そ脚本の精髄は、個々人物の性格を根本因として其の周圍の事情、境遇等を縁とし、此の複雜隠微なる因緣の間に成る強大著明なる業果を寫破して、以て鑒戒として人間事相の眞實平等體を見えしむる所にあるべし。而して謂ふ所の史劇とは、件の個々の人物をば專ら過去の世間に取り、且之れを過去の特殊なる事情境遇のうちに立たしめて、件の千古唯一體なる自然、人間の平等旨を殊なる過去相のうちに現示せんと力むるもののみ。時代物も、世話物も、其の骨髓の旨は一なり。或は此の平等旨を過去の差別相によりて寫破し、或はその現世の相によりて寫す。さるは作家の方面よりいはば、最も實現し易き材を取るに外ならざるべし。かるが故に、模糊縹渺の間に、因緣果報の旨を現ずることは主にして、過去相を實寫することは賓なり。換言すれば、個性と外界との複雜霊妙なる關係を描破するは第一、根幹にして、史的事件と史的人物とを實寫するは第二、枝葉なり。更に具に之れをいへば、史劇の最も重ずる所は、第一に個々の性情と其の殊なる周圍、事情、境遇、即ち最も廣き義に謂ふ時勢との關係にして、俗に所謂正史の其の實頗る信憑すべからざる記事に拘泥し、概して黨派又は國教の往々偏狹なる批判より成れる想像臆測の史論若しくは人物論に執着し、以て無味乾燥なる史物事件を聯絡無く再現し、且平淡非詩歌的人物の外相のみを殆んど叙事的に其の間に點綴するが如きはそもそも末なり。

【「我が國の史劇」(桐園の落葉)】

と云ふことがいつてある。「千古唯一體なる自然、人間の平等旨を殊なる過去相のうちに現示せんと努むる」のが史劇の本領であり、「史的事件と史的人物とを實寫するは第二、枝葉」であるといふところは、アリストテレエス、レッシング兩家の純美學說と吻合して居ると同時にまた、史劇の最も重ずる所は、「個々の性情と其の殊なる周圍、事情、境遇、即ち廣き義に謂ふ時勢との關係」であるといふところは、ヘッベル、ウルリチ等の文化哲學說と脈々相通ずる氣味がある。少くとも坪内博士の史劇に關する最初の意見は、純美學說と文化哲學的の長所を綜合したと見られるほどの立派なものであつた。

しかるにその後、博士は親しく「桐一葉」「牧の方」等の史劇に筆を染められるやうになつて、史劇の本領乃至本質に對して幾多の疑問が生じ、「史劇と特稱する一種の劇には何等か特別の本領あるか」と問はれて、「史劇に就きての疑ひ」を發表されるに至つた。この

論文の裡で、シェークスピヤの國史劇には一種の特殊な本領があるのを感じたと、既記のウルリチの史劇論を引用して、シェークスピヤがその國史劇を前後連絡したものとして作つたのは豫め用意があつてしたことゝ推斷されさうではないか、と云つて次のやうに述べて居られた。

只々此の主意に成れる悲喜劇は、尋常の悲喜劇と異なるが故に、多少敍事詩的性質を具へざるを得ざるべく、また特に悲喜兩劇の性質を兼具して幾分か劇の正則に背く所なきを得ざるべけれど、一面に於ては敍事詩よりも深く、一面に於ては家庭劇よりも廣く、其の人間事相の尤も遠大深刻なる隱微を傳ふるの點に於て他の作の能くし得ざる所を能くし、併の缺陷を補うて餘りあるにあらずや。シェークスピヤの歷代史劇は、種々の點に於て瑕瑾ありと雖も、この點に其の功を成したるに似たり。[「史劇に就きての疑ひ」(文藝と教育)]

この論の要點は左の二項目である。

(一)史劇の目的は史的發展の隱微なる眞意を摘破して之を詩化するにある。

(二)史的發展の眞意は歷代史劇の形式によつて、はじめて成就することが出來る。であるから史劇は僅々五七幕を限りとする他の劇詩の常型に背かざるを得ないのである。

以前「我が國の史劇」に表はれたアリストテレス、レッシング等との共通點は玆所に至つて裏面にかくれて、ヘッベル、ウルリチ等との共通點ばかりが眞中に押し出された觀がある。是れと同時に、史劇はその本領を發揮するためには、戲曲の法則を破つても差支ない、いな、破るのが當然だといふ議論に到達した。これはウルリチを通じて、シェークスピヤの歷代史劇の樣式に共鳴するところの多かつた、當時の博士としては無理もないことである。

博士の此の第二の史劇論、ことに前掲の二項の要點は、高山樗牛博士から激烈な異議を受けた。これが有名な兩博士の史劇及び歷史畫に關する論爭のはじまりである。演劇に關する專門的知識及び經驗に就いては到底逍遙博士の敵でなかつた樗牛博士は、もつぱら美學上の學說を楯として論じた。その要點は、

吾人の見る所を以てすれば、史劇と稱する劇詩の一種が、物類萬種の中、特に史的事實を材料とするは、他の故あるに非ず、主として劇中の事件の『實らしさ』を維持せむが爲のみ。

夫れ人情は虛僞に動かず、一切の文學が人心を動かし得べき第一の制約は、實に其の『實らしさ』にあり。其外面の形式のみより之を見れば、自然世界に有り得べからざる幾多の瑰奇夸大を包有するにも係らず、巧妙なる詩歌がしかく人心を感動し得るは其內面的精神の逼眞自然、卽ち玆に所謂『實らしき』ものありて、知らず識らず吾人の肺肝を把摑するに依る。今夫れ劇詩は縱に抒情詩の出情微細を捉へ、橫に敍事詩の宏壯偉大を攝り、以て過去に於ける人生の活動を現在の舞臺に演出せむと擬す。其感興の大いなるを得むが爲めには、自ら事局の大いならむを必とす。是際劇的動作の『實らしさ』は如何にして支撐せらるゝを得べきか。其內面的精神の自然發展は、其動作の『實らしさ』に缺くべからざるは勿論なり。然れども是れのみにては足らざらむ。そは家庭的劇詩の、事一私人に係るものならざるは、其歲時方處は之に關する固有名辭と共に、全く空想の所生たるを妨げじ。而かも事例令へば邦家の興亡にあづかり、英雄の運命にかかはるが如きものあらむには、正史の保障を待つに非ざれば吾人の伎信をつなぐに賴りあしからむ。何となれば吾人が有せる過去世の知識にして、苟も邦家の大事に關するものは正史之を塡充して、又尺寸の遺漏を貽さざればなり。是を以て劇詩にして壯大なる事局を描破せむと欲するものは、勢ひ史劇の形式を取らざるを得ず。故に吾人は信ず、史劇は一派の學者等が思惟するが如く、史的發展の縱徵を傳ふるを旨とするものに非ず、隨ふて當代の人情風俗等を體現するを尙ぶべきものにも非ず、其名稱（及或場合には事實）を史上に借るは、只劇的動作の『實らしさ』を支撐する所以の方便のみ。【『坪內逍遙が『史劇に就きての疑ひ』を讀む（全集第二卷）】

といふ一節に竭きてゐるが、これを更に摘要すると、

（一）史劇が史的事實を資料とするは、劇的動作の『實らしさ』（卽ち眞實性）を支撐するための方便に過ぎない。

（二）戯曲によつて壯大なる事局を描破しようとするものは、史劇の形式を採る他はない。

となる。第一項は明かに「史劇は史的事件を資料とする目的ではなく、眞實性と必然を支撐するための手段にすぎない」といふレッシング說の踏襲と見られるが、第二項は純然たる理想主義乃至浪漫主義の上に立つ偏狹な議論である。悲劇の主人公は英雄でなければならぬといふ、近代劇勃興以前の美學說の片鱗を示したものである。云ふ迄もなく現代に於いては何等の價値もない意見である。外面的に壯大なる事局は或は過去の時代に多く發見されるかもしれないが、しかしそれと同時に、內面的に壯大なる事局は現代に於いても容易に見出されるではないか。オセローの煩悶よりも、洋

燈を前にさびしく坐してゐる無名翁の情感の方が余程悲的であると云つた、メエテルリンクの言葉を樗牛博士は何う解釋するのであらう。樗牛博士の論據の第二項は今日に於いては殆ど意味をなさないし、逍遙博士の論據の第二項は萬人の踏むべき正法ではなく、大天才の靈腕を俟つてはじめて成就し得る底の逆法（この逆法の實行の如何に困難であるかは近代に於ける沙翁崇拜家の一人なるアウダスト・ストリンドベルクが、沙翁の歷代史劇を意識して倣つた史劇の出來榮えを見てもわかる）を說いたのであるから、假りにこの兩項を刪除すると、逍遙博士の「史劇の目的は史的發展の隱微なる眞意を描破して之を詩化するにある」の項と、樗牛博士の「史劇が史的事實を資料とするは、劇的動作の眞實性を支撐するための方便にすぎない」の項と丈けになる。この兩項は一見矛盾してゐるやうに思はれるが、實は左樣ではない。

一は「史的發展の隱微なる眞意」といふ言葉で、「過去時代の人間生活の隱微なる過程」の意を表はし、これを描破する、すなはち過去時代に於ける人間を描破するのが史劇の本領であるとし、他は史劇がその本領を發揮する場合に、史的事實は劇的行爲の眞實性必然性を支撐するための手段にすぎないとするのである。すなはち一は三段論法の前提を示し、他はその斷案を示したに外ならぬ。その上逍遙博士はウルリチ、ヘッベルと相照らし、樗牛博士はアリストテエレス、レッシングを承けて居るのであるから、從つて以前說明した通り、レッシングとヘッベルの學說の間には些の矛盾を見ないばかりか、むしろ同一の趣意をちがつた二つの言葉で云ひ表はしたにすぎないのであるから、兩博士の史劇に關する見解に對しても矢張同樣の見方がゆるされる譯である。たゞ逍遙博士の文明史論的寫實主義とも稱すべき傾向が、たまたま法則無視論をかもしたのが、美學硏究者の立場からは看過し難いことであつたとともに、樗牛博士の理想的寫實主義ともいふべき想念が、兎角純正史劇と象徵史劇乃至夢幻史劇の差別を顧みない嫌ひがあつたので、あれほどの論爭を起し

たのであらうと思はれる。

純正史劇の本領

純正史劇の作家としては、泰西には遠くはシェークスピヤがあり、ゲーテがあり、シルレルがあり、クライストがあり、ヘッベルがある。近くはヰルデンブルフがあり、ストリンドベルクがあり、メエテルリンクがあり、ダンヌンチオがある。また我が國には坪内逍遙博士があり、森鷗外博士がある。その風格傾向は十人十色であるが、純正史劇の作家としてその作者の何れもに、純正史劇の本領を發揮しないものは一人もない。少くとも必ずどの點かに純正劇の模範とすべきものを示して居るのである。

要するにこれらの大家の手になつた史劇は、何れも期せずしてアリストテレエス、レッシングの學說を明白に裏書して居るのである。であるから、戯曲としても演劇としても——また理論の上からも實際の上からも——史劇の本領は、

歷史的事件の間に、個々の人物の性格を活現して、人間生活の本然の姿を示すところにある。

とするのが、もつとも妥當な見解であらうと思ふ。

九月一日發行の

秋期大附錄號

の創作の豫告は本欄の終り(八八頁)に在り

高等學校入學試驗不合格者問題

▽高等學校選抜試驗不合格者の處置

前文部次官　福原鐐二郎

□今日高等學校を志望する者が八千人から、一萬人近くもあらうかと思ふ。而して之を收容する數は僅か二千人足らずであるから、志願者が澤山餘るといふことは當然である。年々中學校を卒業して各種の專門學校を志望する者も、高等學校を志望する者も、今日の樣子で見れば、何時までたつても減る事はなく從々增加する一方であらう。學生が高等學校の選抜試驗に洩れた場合を考へて見ると、一回位の落第は更に勉强して競爭するといふのは當り前の事である。然し二回或は三回も不幸にして不合格の場合には、特別の事情があれば格別であるが、何時までも執着して高等學校の門前で老人となつて了ふといふのは考へ物である。二回續けて落ちた場合或は三回にも及へば何んとか相當に其方向を變へるのが、まア原則として當然な事である。今日までの事實によつても、二回まではまだよいが、三回も落ちた者が更に入學する事が少ない。四回以上は更に少ない、といふ有樣である。さればと言つて、めい〳〵志望もある事であるから、さう大いに違つた方面へ行くといふ事は本意ではあるまい。然し今の帝國大學の法、醫、工、文、理、農等の諸學科も他に求めれば、程度の差こそあれ、各種の專門學校が官公私立夫々あるのであるから、徒らに競爭試驗の爲めに一つ處にまごつかずに、其方へ行くの決心をするのがよからうと思ふ。無論各人の所信、各人の家庭の事情等によつて一概には言へないけれど、普通一般に言つてさうである。

□帝國大學と言へば、一番高い學校であり、專門學校等にやゝ下つた程度であるから、向上心の强い青年達の見て最高とする所に志望するのは尤もな事であるが、實際今日の社會へ出て見ると、全く實力の競爭であつて、昔は或は出來たかも知れぬが「帝國大學出身何々學士」といふ看板一枚で通つて行くことは今日は到底出來ない。學校出身の如何に拘らず、實力の强き者が勝つのである。其證據には、今日工場や會社などで高等工業の出身者が帝大出身の工學士を下に使ひ、高等商業の出身者が帝大出身の法學士を引廻して居るといふやうな例が澤山ある。濟生學會や醫學專門出身にして知名の醫學者になつて居る者も隨分多數である。

實際帝大を出た者が必ず出世し、專門學校其他私立學校を出た者が出世しないと定つては居らぬ。要するに、一概に「帝大にあらずんば學問の道なし」とか「出世の途なし」とかいふ考は大なる間違ひであるから、一度乃至二度以上も蹉跌すれば、徒らに帝大の金看板にのみ執着せずに早速熟考して一年でも早く活社會へ出るやうな道を選ぶのがよろしい。

□然しながら一方から考へると、專門學校や私立大學を志望する者も非常に多いのであるから、之に入ることとも高等學校同樣なか〳〵困難である。學校によつては其困難の程度も夫々異つて居るが、總て收容數より志願者の多いのが今日の常態である。特に商工醫科等の學校に於て多い。官立の工業學校の如きは非常なものである。民間の專門學校程度以上で九州の明治專門學校と早稻田大學の理工科は最も著しいものである。之等は其成績に於て官立の高等工業に毫も讓らざるのみならず、或は優つて居るかも知れない。從つて之等は收容數に數倍する志願者を有つて居る。以上の現象は、商業に關する學校に於ても矢張り同樣である。私立大學にても割合に入り易いのは、政治科、文科、法科であるが、其他の科目は官公私を通じて六ケしい。それ故に、高等學校で不合格になつた者に對して、專門學校其他私立大學等へ行けと言ふても、玆も競爭を免れぬのであるから、必ず這入れると受合ふ事は出來ぬ。但だ一概に帝國大學の看板ばかりに執着せず相當の年に於て成業する見込を立てることが肝要であるといふだけである。どの場合に於ても學生は最善の努力をせねばならぬ。

□次いで教育制度について言へば、何の道、中學校の卒業生が斯くの如く溢れて居るのであるから、之を收容する爲にそれぞれ高等の學校を增加せねばならぬのである。恐らく高等學校も、今日の設備を以て決して滿足しては居れまい。更により以上の擴張を必要とする。尤も高等學校に關しては數年來所謂學制改革なる懸案がある。現狀の教育制度を或は修正するか、或は全然廢止して別のものを作るか、或は現狀維持で滿足するか、其議論が區々で未だに歸着を見ないのである。自分は今學制論をする積ではない。高等學校が今後如何に改正せられるにしても、兎に角今日の志望者の狀況より考へると、如何なる形にしても高等學校の擴張を計らねばならぬ。然し高等學校の擴張のみが總ての困難を解決する事は出來ない。學生の溢れて居るのは高等學校の門前のみではなく、至る處に溢れて居るのであるから、夫々適當な所置を取らねばならぬ。溢れて居る者に向つて、何處其處へ這入れと言つたところで、本人の志望に近いものでない以上は駄目である。多數青年の志望をして甚だしく變更せしめない範圍に於て、夫々適當に收容するといふ設備を作らねばならぬのである。

□今日の狀態では、官公私立に通じて法、文、政の學科は相當な設備があると言ひ得るかも知れぬけれども、工、商、農等の實業課目に對しては、志望者が非常に激增して居つて而かも其設備が伴つて居らぬのである。然し農、工、商を志望する者に向つて法、文、政などを這入れと言ふが如き大々的方向變更を強ふるは無理である。そこで先づ專門學校でも

最も必要ものを選んで其設備を擴張せねばならぬ。今日最も急を要するものは、工業、農林、商工、水產といふやうな方面である。其他のもの例へば商科醫とか、藥學とかの學校も尚今後多少の擴張を要するであらう。其他にも擴張の必要あるものがあると思ふが、先づ今日特に其必要を痛切に感ずるものは實業方面の諸學科に若くものは無からうと思はれる。專門學校を擴張しろと云つても、決して帝國大學を縮少しろといふのではない。之れも矢張り何時までたつても其志望者が増加する事はあつても、決して減少するやうな事はない。詰り、一方には專門學校、他の一方には高等學校、及び之に引續いて大學と次ぎ〳〵に擴張せねばならぬのである。之等の問題は行政當局者に於て深く考慮を加へて多數青年者を救濟するの途を一日も早く立てんことを切望する次第である。

□今日世間で單科大學の議論が喧しい。此議論について、自分在職の時敎育調査會に諮問せられた所謂一木案なるもの又高田案なるものも孰れも單科大學を認めるといふ點に於ては同一であつた。併し此等の案は調査會に於て單科大學制度其物を否認するといふのではなかつたが、他の色々な議論の爲めに甚だ遺憾ながら事實潰れて了つた。學制論は別の話になるから見合せるが、單科大學を認めることは今日殆ど爭のないことと思ふ。是れが即ち大學敎育擴張の一の方法ともなる譯である。此事も當局に於て近く相當の案を立てゝ之が實行を見るに至らんことを希望する。

□然し以上の如き設備の完成は今日急に出來るものではないから、現在の多くの志望者に對してそれまで待つて居れと言ふ譯には行かない。何うしても勉强して競爭するより外に其道はない。只要は、「帝大にあらざれば學問の道なし」といふ誤つた考へに陷らず、二回以上も遣つて駄目な時は他の方面に考へ直さねばならぬと思ふ。最後に試驗を受ける準備の事であるが、獨學は非常に困難な場合が多い。準備中都會に居るがよいか田舍がよいかといへば、田舍の方が總ての點に於て弊害が少いには相違ないが、善き先生、善き學校がなくては仕樣があるまい。結局相當信用のある學校へ入つて勉强するの外はあるまい。其の爲め都會に出ることを必要とするならばどうも已むを得ぬことかと思ふ。それにつけても入學試驗に何度も何度も失敗してぶらついて居る間は、學生の身がきまらぬのであるのから最も危險の多い時期である。學生自身に努力し又熟慮して早く確實なる成業の途に上ることを心掛くべきである。

▽高等學校入學試驗に合格し得ざりし者及其父兄に告ぐ

法學博士 吉野作造

（一）

高等學校の入學試驗に合格し得ずして、其針路に迷つて居る青年は毎

年幾千を以て數へ、而かも年と共に其數を增し、結局其總計に於て幾萬の靑年が修學上肝要な時機に停滯して居るといふ事は、國家問題としても由々しき大事である。此等の點に關しては敎育行政上の方面からも大いに硏究さるべき事柄であるが、今は暫く之を述べない。玆には主として其不合格者本人並びに其父兄に對して一應の忠告を呈して置きたいと思ふ。

(二)

入學試驗の不合格は普通の學校の試驗の落第とは違ふ。採用する人數に限りがあるのだから、普通の試驗ならば合格すべき好成績を得て尙且つ其選に洩れる事もある。從て不合格は必ずしも無能力を意味しない。此點に於て合格の好運に浴せざりしものも亦幾分慰むる所あり、更に捲土重來の勇を鼓すべきである。唯此際彼等に望む所は受驗に際して最善の力を盡したりや否やを反省する事である。最善の力を盡くして而かも其選に洩れたりとせば、更に大に勇を鼓して翌年の準備をするか、又は敎を先輩に乞ひ我能力の判斷を求めて、更に適當の所置を講ずべきである。すべて人は自己の能力を相當以上に評價するものである。自己の能力の初めから及ばざるに徒らに望を高きに繫くるは又取るべきでない。此等の點については早く先輩の敎を求めて諦めをつくるが肝要である。

最善の力を盡しても、又幾度も奮勵努力を繰返しても、不幸にして遂に合格し得ざりしものに向つては、予輩はかゝる學業上の失敗は決して人格其物の失敗でないことを覺悟せられん事を望むものである。靑年學生に取つて學業の失敗は最も重き傷手たるに相違ない。殊に入學試驗の不合格は前途の進路を閉塞せらるゝに等しく、學生々活に於ては殆んど致命傷である。然しながら之は其人の知識上の能力の問題であつて、之れあるが爲めに其人の本來の人格其物は殆んど何等增減する所はない。若し玆に信念を置く事を得ば、彼等は此重き傷手に失望する事なく、更に悠然として其進むべき路を他に見出す事も出來る。然るに多くの靑年は覺悟を玆に極めずして、學業上の失敗は即ち靑年學生としての全體の失敗なるかの如くに感じ、自ら蔑しんで自暴自棄に陷り、或は意氣銷沈し、或は憂を酒食に遣り、以て人格其物の頽廢するを省みない。本人の爲めには言ふを俟たず、社會國家の爲めにも痛歎の至りに堪へない。

(三)

前述の如く試驗の失敗者は動もすれば自暴自棄の極、人格其物を崩壞するの傾向を有するものなるが故に、父兄其他保護の任にあるものは、細心の注意を以て之を監督指導する事を怠つてはならない。第一には之に對して最も親切なる助言を與ふるに止むべきである。更に同情のある慰安を與ふることを得ば、どれ丈け彼の奮勵心を鼓舞するか分らない。第二に最も肝要なるは、其子弟の失敗を以て人格の失敗を見るべからざる事である。所が此點に於て世間普通の父兄の心掛けが甚だ間違つて居

る。

予輩の知人の一人にさる學校の入學試驗に數回續いて合格しなかつたものがある。一度目には兄貴から馬鹿野郎と罵られた。二度目には姉からお前のやうな意氣地なしは汽車にでも轢れて死んで了へと云はれた。三度目の失敗には父兄から學費の供給を絶たれ、勘當同様の待遇を受けた。斯くの如きは子弟を鞭撻するの方法としても極めて拙劣であるのみならず、試驗の不合格を見るに、恰かも嚴重なる制裁若くは刑罰に價すべき不德行爲なるかの如く見て居るものである。其結果此靑年は父兄親族に申譯がないと言つて、其世間を狹くし益々意氣消沈し、遂に過度の神經衰弱に罹つて今は殆んど廢人同様になつて了つた。斯くの如きは、最も極端なる例に屬するけれども、之と同じ心理狀態にある父兄は世間に決して乏しくないと信ずる。なぜなれば、多くの父兄は斯くまで其子を虐めないまでも、子供の不合格を以て如何にも耻づべき出來事なるが如くに見做し、斯くて自ら子弟の意氣を消磨せしむることを憂とせざる者が多いからである。能力の足らざるは、恰かも怯弱な生れつきと同じことである。子供が弱くて困つた、子弟が出來なくて困つたと嘆息するのは差支ないが、弱い出來ないを子供の責任問題としてのみ取扱ふのは甚だ當を得ない。

（四）

尤も之は只父兄のみを責むべき事柄ではない。世間一般も亦責任がある。なぜなれば、今日我國の社會では總て人物を計るに專ら其智能を以てし、從つて學生生活に於ては學業の成功が即ち學生としての成功の全體であるかの如くに見られて居るからである。現に諸所方々の學校でも重んずるところは、專ら智育にして德育體育は案外粗略にされて居るではないか。學校の教課目などを見ると、倫理修身の如きは眞先に掲げて最も之を重んずるの形式は取つて居る。けれども、中學や高等學校で一番輕蔑されて居る課目は修身と體操である。父兄も亦英語や數學が出來れば滿足し、體操や修身は少し位惡い點數を取つても一向之を意にかけない。又學校自身も、例へば特待生を選拔するといふ際に殆ど唯一の標準となるものは、其學業の成績である。身體の健康、品行の方正は只規則の上にあらはされて居る殆ど無用の形式的標準に過ぎない。餘りに智育尊重に偏して居るから、學生自身も亦學業さへよく出來ればよろしい。又之が出來なければ、何もかも駄目だといふ考になるのは當然である。

今日諸官省銀行會社等に於て、高等諸學校の卒業生を採用するやうな場合にも、殆んど唯一の標準となるのは學業の成績である。彼等はよく人物といふ事を云ふ。けれども、彼等の所謂人物の內容の中には、道德的品性は極めて輕視せられて居る事を我々は常に經驗して居る。先年九重宮深き邊りに奉使して謹直の聞え高かつた某華族が、人才に學費の支給をなすとて其人選をなすに、學業・健康・德性の三條件を掲げたが、而かも人才を逸するの恐あるが故に、第三の條件は深く之を問はざるも可

なりといふ一條を入選者に内示したといふ事である。總で斯ういふ考が行はれて居るから、學生としての本分は專ら學業の成功にある。學業の成功は卽ち青年としての成功の總てゞある。其半面に於て失敗は又彼の人格の全失敗と感ずる事になる。我國の青年學生は斯くの如く社會に置かれてある丈け、之を指導する父兄の用意は一層叮嚀親切を極むる必要がある。

（五）

予輩は青年學生に向つても、父兄に向つても更に亦社會に向つても、學業上の蹉跌は決して人間としての本分を增減するものではない。幾度學業に失敗しても、他に彼は人間として立派に立ち得る地盤があるといふ事を覺悟して、其上に泰然として奮勵努力最善の力を盡し、又盡さしめるやうにありたいと希望する。

▽罪は今日の教育制度に在り

慶大塾長　鎌田榮吉

今のやうな制度では、何時まで經つても不合格者の續出するのを防ぐことは出來ない。のみならず年と共にます〳〵其數を增して行く許りである。されぱと云つて、悉ての入學希望者を滿足せしめる丈けの澤山な學校を設けると云ふ事は、政府としても出來ないであらう。其上所定の收容人員を、六倍も七倍も超過すると云ふのは東京だけの話で、地方になるとさまで甚だしい人員超過を見ないで濟む學校もある。學生は皆東京へ出て來たがるのである、中央集權の國柄であれば、之れも亦已むを得ない現象かも知れないが、も少し地方にも有力な、優れた教授を選んで、今日のやうな不都合な現象を防遏するやうにしたら可いと思ふ。獨逸邊りでは、首府伯林の外、ストラスブルヒとかボンとか云ふ都會に大學があつて、皆それ〴〵の特色を有つてゐる。で其の向き向きの學生が、自分の好む講義を聽く爲めに、それぞれの大學に集まつて來る。今日の日本の青年には、其人の學徳を慕つて講義を聽くと云ふやうな、眞摯な態度を有つものが少い。唯徒らにノートの製作に齷齪して、定まつた年限を卒へ學校を出る事を能事としてゐる。眞に學問を研究しようと云ふ者が少いのである。維新以前には、地方に有名な學者があつて、學生は其薫陶を受ける爲めに、千里を遠しとせずして山間僻地にも赴いたものであつた。兎に角地方にもつと良い教授を置いて、學生の中央に許り集まるのを防ぐのも一つの方法と思ふ。

次ぎには大學と云ふものに、特權を與へてあるのが不可ない。卽ち大學を出れば學士や博士の稱號を容易く與へると云ふ特權があるのが宜しくない。實際に能力の充分でない者でも、先生の講義をノートに寫して、所定の年限を經れば學校を卒業する事が出來る。卒業すれば、社會では之れを用ひる。他の私立學校を出た者などよりは、優待する。大學

は云はゞ登龍門になつてゐる。だから爭つて大學に入らうとする。其爲めに今日のやうな結果が生じて來るのである。一體大學を出なければ社會に活動が出來ないやうに思ふのが、甚だ間違つた考で、之れは世間に未だ未だ官尊民卑の弊風が脫け切らないからである。今日の弊害を除くには、一方には此の官尊民卑の惡い思想を打破すると同時に、一方には何處の學校を出たものでも、それ丈けの學問識見がある人ならば、誰れにでも學士や博士の學士稱號を與へるやうにすれば可いのである。大學は國民の租稅で維持されてゐるのだから、門戶を開放して、進んで高等の敎育を受けたい志望があつて、且つそれ丈けの能力あるものには、試驗などと云ふ關門を設けずに、自由に聽講させて、各其研究の結果によつて卒業させ、學士にも博士にもしてやるのが宜しい。而してそれだけの能力の無い者は何年經つても卒業の出來ないやうに仕て置けば可い。さうすれば自分に充分の能力の無い者は、何時まで勉强しても駄目であると自覺して、他の適當な方面に働くやうになるであらう。

今日の中學校の制度も惡い。皆高等の學校へ入る豫備のやうな姿で、中學校を卒業した丈けでは、充分に社會に出て働く事が出來ないやうな有樣である。從て中等敎育を受けた者は、是非共高等敎育を受けずには居られなくなる。之れは甚だ面白く無い傾向である。中學校を出た丈けでも、立派にやつて行けるやうにしなければならない。勿論進んで高等敎育を受ける者にも、其の準備になるやうな敎育を施さなくてはならないが、一方には中學を出た丈けでも、充分世に立つて行けるやうな獨立の敎育を施す必要がある。何時までも中學校を今日の位に豫備的な地位に立たせて置く事は、種々の點から甚だ面白くない事であると思ふ。

▽廣く高等敎育を授くるが私立學校の趣旨

早大學長　法學博士　天野爲之

私元來の考へでは、官立學校には官立學校の特徵があり、民設の學校には民設學校の特徵がある。今日のやうに官立學校に行くべき過程である高等學校・收容力の薄弱である場合には、世の中の青年が私立學校に入つて、そして自己の目的とする學問を修め、品性を陶冶すると云ふ事が甚だ必要であらうと思ふ。どうしても政府の學校に入らうとして、何時までも何時までも收容力の少ない處へ爭つて入らうとする事は頗る危險である。年々多數の人が入學を希望しながら、其目的を達せられないと、永く同一の希望を持續して行く事が六ずかしくなる。

私の關係してゐる早稻田大學は、少數の人を選拔して入學せしめ、見本的に之れを養成する方針では無く、寧ろ衆生濟度で、草木までも成佛させる目的で、高等敎育の利益を多數の青年に與へたいと云ふのを趣旨としてゐる。出來る限り盛んに學生を收容する方針を取つてゐる。尤も入つた後に成績が惡るければ、已むを得ず漸次排除して行く。中學を出て

から進んで高等の教育を享けやうとする者の爲めに、門戸を設けずにやる。學校の當局者としては生徒の多數なる爲め、設備を整頓する事も困難だし、教授其人を得る事も困難だが高等教育を受けたいと云ふ青年には其目的を頒つ。多分他の私立學校も早稻田大學と同じ目的を以つてゐると思はれる。成るべく制度を改良し、教授に良き人を選ぶやうになれば、高等教育を受けたい人は、私立學校に入つて其目的を容易く達し得るやうになる。外國では亞米利加でも、英國でも何れかと云へば私立の方が官公立よりも多數で、制度も教授も優れてゐる。生徒も多數集まつて來る。

政府の力には限りがある。政府の學校だけでは多數の青年の學問に對する渇仰を滿足させる事は困難である。であるから私立學校は其間に處して、世の高等教育を修めんとする青年に、其目的を遂げさせるやうに奮勵すべきである。この爲めには學生をして官立學校に餘り重きを置きすぎぬやうにし、一方では私立大學は從來の制度を改良して天下の青年の希望に背かぬやうにしたい。年々多數の不合格者を出し、甚だしきは爲めに不良の徒となつて多望な前途を誤まらしめる事は、國の人物經濟の上から云つても、甚だ不都合な結果を來たしはしないかと思ふ。

▽高等學校萬歲！

向　軍　治

（一）

猫も杓子も高等學校を志願するといふ事が根本的に間違つて居る。然しそれは其原因を除かぬ限り、此馬鹿げた現象はやまない。其原因は（第一）今猶官尊民卑の陋習のある事。（第二）社會の各方面で官立學校出身者を私立學校出身者より高い月給で雇ふ事。（第三）學生が官立學校出といふ虛名を欲しがる事。（第四）官立學校出の方が私立出より就職し易い事。（第五）中學校長が虛榮の爲め卒業生の高等學校入學を勸める事。以上孰れも馬鹿げきつた話であるが、第一、政府が官立學校卒業生に官吏登用上特典を與へて居る事を止めることから初めなければ、此原因を除く事が出來ない。從つて、其結果である高等學校志願者が多いといふ弊害が除かれない。

（二）

今日の狀況では、猫も杓子も高等學校を志望するのが、學生の側から考へると利益なのである。優等生は私立學校出身たるよりも官立學校出身でないと、出世がうまく出來ない。劣等生も私立學校出身たるよりも官立學校出身としての方が職にありつき易い。實力を本位として人を採用するといふ世の中では、斯ういふ馬鹿げた事がない譯であるが、現在の間違つた社會では高等學校志望者の多いのも無理でない。故に人物登用といふ方面から觀ても、今の社會は根本的に改革する必要がある。

（三）

私立學校をやる程馬鹿げた事はない。私立學校にはロクな學校がな

い。早稻田大學の如きは、漸然改良しようと努めて居るから、未來にはよくなるかも知れない。慶應義塾は學校當局者が惡いから益々腐敗する。

(四)

高等商業、高等工業等の諸種の專門學校は、教育といふものを知らない。只事務を取り仕事をする道具を作り上げるものと心得て居る。從つて、此種の專門學校出身者は人物が卑劣である。仕事も徹底的には出來ない。ちよつと間に合ふといふ事が彼等の長所であるが、戰後に於ける大日本の大經營には、彼等では用をなさない。

(五)

結局今日の教育は、普通教育も專門教育も根本的に間違つて居る。大改革をする必要がある。然らざれば教育の爲めに國は亡びる。我輩が此頃小學教員に敎へる事を初めたのは、せめて現在に於て出來る丈けの救濟方法を講ずる目的を以てゞある。時勢遅れの文部大臣や、時勢遅れの人間の團隊である教育調査會などが教育を左右する世の中では、亡國的教育の外何事も出來ないのは當然の事である。實際我國は、政治界と言はず、實業界と言はず、教育界と云はず、陸海軍と言はず、總て大手術を要する。到底も姑息の療治では追ッ付く話ではない。

(六)

今の高等學校の試驗は、智識の働きの試驗ではなくして記憶力の試驗である。故に白痴に近い人間でも記憶力さへあれば及第する。中學の卒業生で生れ付のまゝに發達して居るものは一人も居らない。教育の爲めに生れもつかない愚物にされて居る人間が澤山居る。高等學校入學試驗に及第したと言へば、世間では立派な事のやうに思つてをるが、我輩の眼から見れば、只紛れ當りに試驗が出來たといふに過ぎないのである。其證據には大學卒業の學士に平凡な男が澤山居て、高等學校へ入學に落第した學生の中に優等生が澤山居る事を、我輩は實驗によつて知つて居る。現在のやうな間違つた試驗制度の下には、一生懸命で暗記さへすれば何んな白痴でも及第が出來る。昨年の第一高等學校の入學試驗には、外國語の書取の時間に教師がボンヤリして一行ぬかして讀んで書き取らした。一行ぬかすと意味はまるで分らなくなつて了ふ。それを書かせる教師も教師、之を書き取る生徒も生徒、此一事が如何に我國の教育が無意味であるといふ事を明かに證明して居る。斯ういふ間違つた世の中では、金があつて身體の丈夫な人なら、二年かゝらうが三年かゝらうが構ふ事はない。クソ勉強をやつて高等學校へ入學するに限る。今日事實之が行はれて居るのである。其結果は無論國の滅亡!

▽高等學校を增設する迄は私立學校へ

文學博士　澤柳政太郎

此問題に對する一番良い救濟策は、容れ物をもつと多くする事である。容れ物が少ない爲めに、折角の希望も遂げられなかつたり、或は志を枉げて、已むを得ず他に向ふと云ふ事は、當人に取つて甚だ不幸である。若し高等學校を希望する事が、自分の目的に正當な撰擇であるなら、それを遂げる事の出來ないのには甚だ不幸である。どうしても容れ物を多くするより外に、救濟の策は無い。元來現在の容れ物が甚だ無理である。現在では高等學校は八つある。此の八つは殆んど十數年來一向數を增さない。然るに之れに入らうとするものは、年々增加して來た。之れは不自然な增加かと云ふに、決してさうではなく、極めて自然である。下から云へば、小學校に入るものが非常に殖へた。從て卒業して中學に入るものも增加する。だから高等學校に行かうと云ふものの增加するのは當然の話である。然るに高等學校の數は、依然として十數年前の通りである。第八が日露戰爭後に一つ丈け殖へたが、山口の高等學校が山口高等商業學校と變形したから同じである。こんな認容すべからざる不自然な狀態にあるから、不幸な事や悲慘な結果が起つて來るのである。本年の如きは一萬以上の希望者があつて、而かも收容するのは二千三百人であるから七千幾百人の不合格者が出る譯である。若し今年入學し得なくても、來年になれば入學が出來るかと云ふに、七千幾百人の中の三百人か四百人位は這入れるものもあらうが、其大多數は同じ事を繰り返すに過ぎない。其上來年は來年で、新たに中學を卒業したものが來る。這入れないものは依然として數を增してゆく。個人から見れば別々でも大體からは同じである。だから容れ物を多くするか、本人の志望を枉げて他の方面に向けるか、進んで高等の教育を受けやうと云ふ志望を止めさせるか、三者の中一つを選ばなければならない。所が日本の政府が今日教育に投ずる金は眞に僅かで、其額を二倍三倍にした所で、志望者を際限なく收容して、彼等に滿足を與へてやる事は迚も望まれない。と云つて志望を放擲せしめやうと云つても、それに從ふ青年はゐない。恐らく高等學校入學希望者の一割に足らないであらう。之れは當然の話である。茲に於て如何に成り行くかと云ふに、大多數は心ならずも當初の目的と定めた以外の處に不滿ながら落着かうとする。今日では此の經路を取る外は無い。

然らば其落着く先は、如何いふ方面かと云ふに、他の官立學校へ入らうとしても、其試驗は高等學校の試驗に先立つて行はれるから、大體に於て多くの私立學校が之れの落着く場所になる。私立學校と云ふものは、今日何が一番效能かと云ふに、獨特な教育を講ずるとか、自由な教育を施すとか云ふ點には、私は餘り望を置かない、又實際にさう云ふ目的を達しては居ない。唯、高等學校に入學し得なかつた者をして、幾分其志を枉げると言ひ條、就いて學ぶ處を得せしむる處に存立の理由があり、社會に對して效能がある。若し私立學校が無ければ、不合格者は進まんとして、如何なる處にも進路を見出し得ず、多數の有望な青年が、前途を誤つて自暴自棄に陷るを免かれない。幸に私立學校が存在する爲め之れを防ぐ事が出來るのである。然しもと／＼此處へ、最初から入學せんとしたものでないから、本人の志望目的から云へば、滿足の出來る筈はない。但、無いには勝つて居る。容れ物を多くする事の望まれない今日の場合では、やはり之れより外に仕方はあるまいと思ふ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

家庭醫學叢書

定價各一冊十五錢郵稅各一冊二錢

- 吾妻醫學博士述●お產の話
- 唐澤醫學博士述●小兒病の話
- 千葉醫學博士述●耳鼻咽喉病の話
- 山田醫學博士述●神經衰弱の話
- 額田醫學博士述●肺結核の話
- 岡村醫學博士述●皮膚病の話
- 佐藤醫學博士述●婦人病の話
- 廣川醫學博士述●淋病の話
- 佐藤病院長述●黴毒の話
- 高肛門病院長述●肛門病の話
- 杉江醫學博士述●ヒステリーの話
- 南醫學博士述●胃腸病の話
- 中原醫學博士述●外科療法の話
- 森醫學士述●呼吸器病の話
- 竹中ドクトル述●性慾敎育の話
- 森醫學士述●病人看護の話
- 中村醫學士述●精神病の話
- 菊地醫學士述●脚氣とリウマチスの話
- 齋藤ドクトル述●寄生蟲の話
- 豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 下卷
- 豐福醫學博士述●小兒傳染病の話 上卷
- 竹中ドクトル述●感冒と肋膜炎の話
- 岡崎醫院長述●有益危險食物の話
- 阿久津醫學士述●男子生殖器病の話
- 森醫學士述●良藥と毒藥の話
- 高橋醫學士述●姙娠と避妊の話
- 杉本醫學博士述●便泌と下痢の話
- 森醫學士述●注射の話
- 井上醫學士述●眼病の話
- 落合ドクトル述●科學的美容法の話
- 額田醫學博士述●糖尿病と腎臟病の話
- 土田醫學博士述●腦病の話(上卷)
- 同●同(中卷)●同(下卷)
- 岡崎醫院長述●有効漢藥療法の話
- 竹中ドクトル述●肺病有効療法の話
- 衞生新報社編纂●物理的健康增進法話
- 同●化學的健康增進法話
- 同●精神的健康增進法話
- 同●滋養食物と滋養劑話
- 同●兒童健康增進法の話
- 同●婦人健康增進法の話
- 同●黴菌と消毒の話
- 同●生殖衞生の話
- 同●營養療法の話
- 印刷中●理想的飲食物の話
- 印刷中●心臟病の話
- 印刷中●癌の話
- 印刷中●理學的療法の話
- 印刷中●九種傳染病の話

●體力養成叢書

- 大澤博士述 冷水浴と冷水摩擦 定價廿錢 郵稅四錢
- 二木博士述 腹式呼吸 價廿五錢 郵稅四錢
- 栗本博士述 海水浴 價廿五錢 郵稅四錢
- 櫻田博士述 滋養物の攝取 價五十錢 郵稅六錢
- 遠山博士述 深呼吸 價廿五錢 郵稅四錢
- 伊藤先生述 呼吸靜座法 價廿五錢 郵稅四錢

內外文豪 美辭名句集

定價各一冊金十八錢 郵稅各一冊二錢

- 夏目漱石 美辭名句集
- 尾崎紅葉 美辭名句集
- 高山樗牛 美辭名句集
- 三宅雪嶺 美辭名句集
- 德富蘇峰 美辭名句集
- 森鷗外 美辭名句集
- 德富蘆花 美辭名句集
- 樋口一葉 美辭名句集
- 幸田露伴 美辭名句集
- トルストイ 美辭名句集
- ニイチエ 美辭名句集
- ゲエテ 美辭名句集
- イブセン 美辭名句集
- ツルゲネエフ 美辭名句集
- ダスタエウスキー 美辭名句集
- 近松巢林子 美辭名句集
- 曲亭馬琴 美辭名句集
- 國木田獨歩 美辭名句集

旅行案內叢書

神社佛閣名勝古蹟案內

定價七十五錢 郵稅八錢

世界の大公園とも稱すべき日本國土の美は、實に其の秀拔なる山川と、佳麗なる花木と、淸澄なる空氣とに在り。而して其の秀拔と佳麗と淸澄とに包まれたる、幾多の建築、幾多の堂塔、幾多の歷史、幾多の傳說、徐ろに之を歷訪し、徐さに之を巡遊する人生の愉快は、乃ち我が六千萬國民の獨具り享樂感受すべき特權たり。本書が全國の神社佛閣と名勝古蹟とを網羅して、玆に之を讀者に提供するの微意亦以て知るべきなり。

衞生健康地案內

定價七十五錢 郵稅八錢

不幸なる諸種の病客、固より轉地療養の必要あり。而も單に疲勞を感じ或は多少の衰弱を來せる人、時に地方に轉じて靜に其身心を養ふ、亦頗る其要あり。閑散の人は勉めて其閑散の善用を期し、忙劇の人も亦其忙中に小閑を求め、病氣と體質と季節と時間とに應じ、或は溫泉に、或は山間に、或は海濱に、豐富なる日光と淸新なる和氣とに接するは、洵に人生の重大要件たり。而して本書は實に之が最好伴侶にして亦好顧問たり。

南洋印度濠洲渡航案內

定價七十五錢 郵稅八錢

日本の海上勢力が今後に大發展を逐ぐべき方面は、問はずして印度、南洋、濠洲に存するを知る。所謂帝國南進策なるもの此に於てか絕大の意義あり。而も邦人の此方面に關する智識が猶未だ幼稚を極むるは、識者の深く憾みとする所。本書は乃ち此の緊急なる國家的要求に應じ、苟くも南方に志ある者をして、一見の下、忽ちにして渡航自在往來隨意、眞に內國近海に於ると全く同一の智識と便宜と感興とを俱有せしめんことを期す。

●發賣元 東京市銀座通新橋際 振替東京二〇〇番 電話新橋一九九一 新橋堂

(中付一の一)

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

人さし指と中指で頭を押して御覽なさい

「諸君此繪の樣に前頭部の眞中を避へて、二本の指で頭の左右を押して御覽なさい…若し押した感じが右と左別々ならば諸君の腦神經は健全であるが、萬一、二本で押しても感じが一つで左右の區別が附かなければ如何…是明白に恐るべき腦神經衰弱の御見舞を受けてる證據である。此簡單明瞭なる自己診斷の外、更に次の如き自覺あらば如何?…簡易の執務、勉學、仕事に勞れ易く而も其疲勞が容易に回復しない—物事に倦易く、些々たる事が氣に懸り焦心煩悶して心に落付きが無い—思想は散漫に流れ、文章字句を綴れば盛んに誤字を連發する—記憶力、決斷力、判斷力は衰へ—頭重く、痛み又抑るい事ありて、全く明晰を欠く—眩暈、耳鳴りを覺え、視力充分ならず。晝はウトウトと居眠りをするも、夜は反つて眠られず、不愉快にトロトロとすれば忽ち惡夢に襲はれる…胃腸の神經衰弱して食慾減退し爲めに身體は次第にヤセ細る。喜怒哀樂の情定まり無く、忽ち惡感熱發する(田中醫博著、最新治療法の腦神經衰弱ヒステリー病狀自覺法の一節)



上述の症候は純然たる腦神經衰弱(男)ヒステリー(女)の病狀である。此樣な病魔の手に捉へられて果して諸君の目的に伴う愉快な生が送れやうか。意義ある生存が續けられ樣か。否!否!!否!!!是では生きて居る意義は〇である。マダマダ是よりも不自然—不愉快なのは…**男女生殖器の障害です**、曰、早漏、夢精—遺精—陰萎。不能不感。…吁、斯の如くにして果して人生の和樂、夫婦間の愛、家庭の溫味、文學、藝術の意義—それを何所に求められやう?然るに人は自己を欺く者である、就中有識階級の人々は自己の知識に訴へて專門家の領野迄も專斷しやうと仕度がるが爲め、斯る疾患に侵され乍らも尚且つ自己の體質に歸し又は自己判斷の定義を下して顧慮しやうと仕ない。危險此上もない…諸君は速かに偏見を捨て腦神經の衰弱、ヒステリー、生殖器障害を自覺仕たならば、直ちに**ハガキ一本**を投して目下有名な**前東京帝大教授醫學博士田中先生の最新治療法を讀給へ**。本書は博士獨特の見地から、本病の豫覺、豫防、自宅安全治療法を簡易詳細に記述したものである。私は博士の指定に依り**四六版八十余頁**の本書をドナタでも御申込みの方へは**即刻無料で**進呈致します。速かに本書を得て常識の一端とし、治療の導きとなし給はん事を祈る。

論東錠本舗 (電話京橋一〇二十番)

東京京橋區築地橋際、新築營業所

橋本德次郎

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

▽早稲田大學教授 安部磯雄先生新著

子供本位の家庭

最新刊

本書は是れ徹底的にして根本的なる安部教授の家庭改良意見也。家庭は國家社會の中心にして政治經濟宗教道徳教育の一大搖籃也。家庭をして立憲的たらしめよ須らく子供本位たらしめよ。

▽内容

▽定價壹圓中判 ▽總布送料八錢

東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社發行 振替口座東京三二六番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

縮刷獨歩叢書

第三編出づ――初版忽ち賣切となり再版出來

獨歩書簡

國木田獨歩が明治二十三年より同四十一年の病院に於ける絶筆まで、數百通の書簡を收め、以て彼が人生、藝術、戀愛等に對する感想を端的に語らしむ。中に佐々木某女に寄せて、熱烈火の如き戀を語れる數十通の如きは、眞に稀覯の戀愛文學と云ふ可く、此書夙に「戀愛書簡集」と稱せられつゝある所以也。今「縮刷獨歩叢書」の刊行に際し、新たに某々氏等の秘藏にかゝるもの數十通を加へて修訂刊行せり。就いて熱情の人獨歩が赤裸の面容を看よ。

第一編 ■武藏野及渚 再版賣切(三版)

第二編 ■獨歩集 初版賣切(再版)

定價各五十五錢 ■送料各六錢■

最　刊・の四名著

高濱虚子著 **道** ■價八十錢 送料八錢 最新刊

作者が靭へ動き要求によりて書けるものゝみ。眞に渾然玉の如き藝術品也。

近松秋江著 **青葉若葉** ■價五十五錢 送料六錢 最新刊

自然を讃し女を品し旅の思ひ出を描き狭斜の情を寫せる小品及び小說の集也

谷崎精二著 **生と死の愛** ■定價四十錢 送料四錢 最新刊

新進作家叢書の第五篇にして、谷崎氏の第一小說集也。

吉井勇著 **祇園双紙** ■價六十五錢 送料六錢 三新刊

祇園情緒の漲れる艶美華麗の名作歌集
[illegible]

東京牛込矢來町中の丸 振替東京一七四二番

新潮社

電話番町八〇九番 電話番町八九九番

（中付一の四）

…及び卑猥なる賣品の…は謝絶す



舊幕異聞

琴姫物語

村松梢風

（一）

次ぎの話は、文化二丑年の秋から同三寅年の春に亘つた事件である。

武州秩父郡小鹿野村といふ處に、荒松玄怡と呼ふ醫者があつた。玄怡は年も已に五十の坂を越え、界隈切つての名醫といふ評判で、其の玄關には常に患者の絕える間もないほどであつた。

稲の穗が波のやうに風に靡いて、秩父連山は日增しに秋の色に變つて行つた。或る日の暮れ方、男女二人連れの旅人が此の村へ入つて來た。女は途中で病氣でも起きたらしく、歩くのも苦しさうに見えた。男はそれを勞はりながらやつて來たが、漸う〳〵のことで玄怡の家の門前まで辿り着くと、女を路傍に待たせて置いて、一人で門內へ入つて行つた。四十恰好の侍風の男であつた。

もう其の時は、玄關には患者の影は一人も無かつた。「お賴み申す〳〵」と旅の男は案内を乞うたが、聽て奥から執次の書生が出て來ると「自分は旅の者だが、同行の者が俄に腹痛を催して難澁してゐる。就いては當家を醫者と見受けて來たのだが、どうか治療を

して貰ひ度い」といふことを極めて懇懃に頼むのであつた。書生は一寸顔を顰めて奥へ入つて行つたが、間もなく引返して來て

「先生が御診察なさるさうですから、病人をこちらへお連れなさい」と突つ立つたまゝぶつきら棒な調子で言つた。旅の男は喜んで、門の外へ走つて行き、それ迄路端にしやがんで待つて居た女の手を曳いて連れて來た。そして女の冠つてゐる菅笠の紐を解いてやつたり、足に結へつけた草履を脱がせてやつたり、着物の裾の埃を拂つてやつたり、實々しく世話をしながら女を玄關へ上らせた。女の年比は二十二三であつた。細面の勝れて美しい容貌と、見るから花車な姿態を備へてゐた。白羽二重の着物を着て黒天鵞絨の細帯をぐるぐると巻きつけ、漆のやうな髪を束ねて脊中に垂れ、紫縮緬の布で鉢巻をしてゐた。餘程苦しいと見えて、蒼ざめた額のあたりに脂汗がにじみ出て、きつと齒を喰ひしばつてゐた。

玄怡は丁度晩酌を傾け始めたところであつたが、書生に執次がれて見ると、まさか追ひ返せとも言はれず、酒臭い息を吐きながら肥つた軀を診察間へ現はしたのであつたが、意外な患者の姿を一と目見るより、彼れは尠なからず吃驚した。

「病人はそなたで御座るかな」。と玄怡は努めて平氣を裝ひ乍ら言つて、書生から一と通り容體を聽くと直ぐに女の軀を診察した。病氣は食傷か水中りといふやうなものであつた。

「大したことは御坐らぬ。只今藥を進ぜるから、一服召されて暫時休息なされたがよい。程なく痛みも去るで御坐らう」

さう言つて玄怡は書生に藥を調合させた。女は衣紋を直して座つてゐたが、藥を飲むと覿面に苦痛が和いだ容子であつた。

「お蔭で餘程快くなりました」と女は嬉しげな顔をして言つた。男も其所へ來て共々に玄怡に禮を述べた。

玄怡は不審に堪えぬ面持で二人の様子を見比べてゐ

た。二人が主從であるらしいことは一と目で分つたが、主人らしい女の何者であるかは到底判斷が下せなかつた。然し、見るほど美しいそして氣品の高い容貌と、異つた身なりから推して見ても、女が常人でないことだけは疑ひもなかつた。彼れは到頭我慢し切れなくなつて

「時にお身方は、お見受け申す處、たゞの旅人とも思はれぬが、如何なる御身分の方で御坐るか、差支えなくばお話し下さらぬか?」と訊いた。

二人は一寸困つたやうな顔をしたが、强て隱す場合でもないと思つたらしい様子で、軈て男は膝を進めて話し出した。その言葉に依ると、此の女性は、京都の日野大納言の息女でその名を琴姫と呼ばれるのである。琴姫は今年の春まで大内に仕へてゐたが、今度御暇を賜はつて自由な身となつたのを幸に、父大納言の許しを得て、豫々望んでゐた歌修業のため、態と忍びで諸國遊歴の途にのぼつたのである。秩父へ出たのは甲州路から來たのであるが、今日しも當所を通行の折柄、慮らずも病を得て玄怡の世話を受けたといふ次第である。「また某事は大納言様より、姫君の御供に附けられましたる安藤若狹と申す者で御坐る」と男は附け加へて言つた。

玄怡は、思はず持つてゐた煙管を取り落さんばかりに駭いた。安藤若狹の言葉が終るか終らぬうちに、彼は末座へ飛び退いて、坊主頭を疊に擦りつけて恐入つてしまつた。

「先生、それでは手前反つて迷惑致す」と若狹が當惑顔をするにも構はず、玄怡は益々恐縮しながら先刻からの不禮を詫びた。そして「最早日も暮れかゝり、殊に次の宿までは餘程道程もありまするとなれば、今宵はむさ苦しくとも手前方へ御一泊下し置かれまするよう」と嘆願するやうに云ふのであつた。主從の者は、親切は忝けないが旅籠屋の方が反つて勝手だからと云つて辭退したが、餘りに切なる玄怡の勸めに、到頭若狹が我を折つて

「是れ程迄に申さるゝを斷つて辭退致すも何うやら

失禮、今宵は當家へ御一泊遊されたが宜敷やうに存じまする」と主人に向つて云つた。琴姬は慇懃に頷いて見せた。

玄怡は鬼の首でも捕つたやうに勢づいて、先刻からの様子をぼんやり眺めてゐた書生や、まだ譯も知らずにまご〳〵してゐる家内の者などを叱りつけて、すゝぎの水を取らせたり、荷物を運ばせたり、大騷ぎをしながら主從を奥へ案内した。

其の夜、玄怡の家では家内總掛りで此の稀有の賓客を接待した。大抵の場合琴姬は氣高い顏に笑を浮べ乍ら人々の話を聽いてゐるばかりであつたが、思ひ付いたやうに若狹に命じて短册を取出させ、それに和歌を認めて今宵の禮として玄怡に與へた。短册には左衞門式部といふ名が署(しる)された。若狹は、自分の主人が大内に仕へて左衞門式部または內侍の局と呼ばれ、三位の位を持つて居ることや、學問でも歌道でも、當時姬の右に出る婦人は廣い日本國中〻探してもあるまいといふやうなことを話して聞かせた。

玄怡は自身の居間へ退つてからも、何遍も短册を取り出しては押し頂くのであつた。

（二）

日野大納言の姬君が荒松玄怡の處に泊つてゐるといふ噂は、稻妻のやうに村中に擴まつた。翌朝、琴姬主從がまだ出發の仕度にさへ掛らぬうちに、名主を始め村役人達は裃などを着てお目通りを願ひにやつて來た。玄怡は主從に向つて、せめてもう一日でも滯在して頂き度いと云つて引留めた。主從の者も、格別急ぐ旅といふ譯でもないので其の日も逗留することになつた。

すると玆に同村の小鹿神社の神官で齋木帶刀(たてわき)といふ者があつた。其の家は昔から界隈切つての門閥家であつたが、加ふるに帶刀は、可成り國學に造詣が深かつたので、此邊唯一の學者として常に一鄕の尊敬を聚めてゐた。帶刀も、此の話を聞くと直ぐ玄怡の門を訪れたのであつたが、彼は最初日野大納言の姬君といふことに就いて稍々疑念を抱いてゐた。で、琴姬の前へ出

てからも、歌道の話が出ると、それとなく、古歌に關して自分が豫々解釋に苦しんでゐることなどを一つ二つ提して試して見るのであつたが、さういふ問題に關する琴姫の造詣は何れ位まで深いのか、彼の力では量り知れないのに駭かされるばかりであつた。琴姫は帶刀に所望されると、即興の歌を作つて短冊に認めて與へた。一と間へ退つてから帶刀は玄怡に向つて、殆んど何う云つて自分の感動を表はしてよいか分らないやうな顔をした。

「實に恐るべき御方で御坐る。世にも不思議な女性があつたものぢやて」

かう云つて彼れは、白髮頭を振り乍ら幾度も幾度も讃嘆して止まないのであつた。

此の話は忽ち誇張されて村人の間に傳つた。今迄日本一の學者のやうに云はれてゐた帶刀が、琴姫と學問の議論をして、さながら小兒のやうに遣り込められたなどと噂するのであつた。こんなことが村人の脳裏に、何れ程深く琴姫の尊嚴を刻りつけたことか知れなかつた。

琴姫主従は、次ぎの日も其の次ぎの日も發つことが出來なくなつた。諸方からの需めに應じて短冊や色紙を書くだけでも、琴姫は毎日可成りの仕事があつた。其の間には、帶刀を初め近在の豪家などから、招待されて、乗物に乗つて行くことなどもあつた。斯うなると玄怡は呑氣らしく病家などを廻つて居るところではなかつた。彼れは此の絶大なる名譽を一人で擔つてゐるやうな顔をして、來客の執次をしたり、若狭と一緒に駕籠の脇に附いてお供をして歩いたりした。村人は路で琴姫の乗物に會うと、土下座をして其の神々しい姿を拜んだ。

秋は目立つて深くなつた。早稲の刈り取られた跡だけ、田圃にはところ〴〵黒い土が露はれた。どの家の柿の木も、黄色に熟した果をつけて、紅く染つた葉が次第〴〵に散つて行つた。其の頃になると、突然此の近邊に疱瘡が流行つて來て、忽ちの間に村々に蔓延して行つた。忙しくなつたのは玄怡であつた。彼れは毎

日朝から晩まで疱瘡患者の家を廻つて歩いたが、如何な玄怡でも此病氣ばかりは手のつけようがなかつた。彼れはほと〳〵困惑して或る日琴姫に其の事を話すと、琴姫は暫く考へてゐたが「藥石の及ばぬ病は神佛の加護を願ふほかは無いが、就いては自分は曾て厄病除けの秘法を修めたことがあるから、疱瘡除けの守り札を作つて人々に頒けてやり度いと思ふが如何なものであらう!?」と玄怡に相談した。

「それこそ何より有難い事に御座ります。どれ程人助けになりますか知れませぬ」と玄怡は手を打つて贊成した。琴姫は直ぐに若狹や玄怡に差圖して祈禱の仕度に掛つた。水垢離を取つて新しい白衣に着替へ、祭段の前に端座して聲高らかに神を祈つてゐる琴姫の姿は、美しいといふよりも寧ろ物凄いばかりであつた。

疱瘡除けの守り札は羽が生へて飛んだ。何しろ眞先に醫者が匙を投げて信仰したのであるから、諸人がどんなにその守り札を有難がつたかは云ふまでもないことであらう。

（三）

丁度其の頃、八州の役人柳原小兵衛といふ者が、關東の在々取締りとして廻村してゐた。琴姫の一條が小兵衛の耳に入ると、そこは職掌柄、早くも不審を打つた。事に依ると、大納言家の名を騙る曲者かも知れないと考へた。其所で内密に村役人を呼んで問ひ糺してみたが、誰一人として琴姫の身に疑ひを懸けてゐる者は無かつた。

「旦那樣も一度お姫樣を拜んで御覽なされませ、左樣なお疑ひは直ぐに晴れますから」と村役人は口を揃へて云つたが、まだ腑に落ちぬらしい小兵衛の顔を見て、あとで一同は其の捕方根性を卑しみ嘲笑ふのであつた。

或る日小兵衛は二三の手下を隨へて巡廻の途中、偶然に琴姫の乘物に出遇つた。琴姫は態と駕籠の垂れをかゝげて、艶麗な顔を村人に觀せて行くのであつた。小兵衛は一と目琴姫の顔を見たばかりで、全く自分の想像が誤つてゐた事を感じた。そして恍惚乘物のあと

を見送つてゐた。

「旦那、御安心なせえまし、悉皆あいつの化けの皮が剝げやした」と、そつと小兵衛の袖を引つ張つて云つた者があつた。それは穴熊傳次といふ手先であつた。

「何化けの皮だ？傳次、てめへ好い加減なことを吐すと承知しねえぞ」

「へいへい。百姓共や旦那の眼は瞞すか知れねえが、此の傳次に會つちやあ百年目だ。へツ、畜生うまく化けやがつた」

かう云つて傳次はセヽラ笑つた。傳次の言葉に依ると、今行つた琴姫と名乗る女こそ、以前品川の越前屋で飯盛をしてゐたお琴といふ女に違ひはない。其の女は傳次も二三度買つたことがあつたが、容貌と云ひ品と云ひ、到底宿場女郎などに成り下る身柄の者とは思はれなかつたといふのであつた。

「傳次、大丈夫間違えはあるめえなあ」と小兵衛は呻くやうに云つた。

「もし旦那へ、うぬが散々抱いて寢た女の面あ見忘れる程、まだ傳次あ耄碌は致しやせん」

小兵衛は再び五里霧中にさ迷ふ心地がした。現在今見た琴姫の神々しい面影を思ひ浮べると、到底そんな忌はしい嫌疑を掛けるとは出來なかつたが、さりとて己が股肱の傳次の言葉も信用しない譯にはいかなかつた。そこで小兵衛は、兎に角、配下の者を一名品川へ遣つて、お琴といふ女の成行を取調べることにした。

品川へ赴いた者は中一日隔いて歸つて來た。其の調べに依ると、今年の春まで同所の越前屋安左衛門抱への飯盛に、お琴といふ絶世の美人があつたことは事實であつた。而も其の女は今年の三月の初旬、御殿山の櫻か眞盛りの頃、或る夜何處へか逐電して終ひ今以て行衛が知れないといふのであつた。小兵衛は、配下の者が書き上げて來たお琴といふ女の人相書を見ると、全く傳次の言葉に違はず、寸分紛れず琴姫と符合するのであつた。

小兵衛が多數の配下を隨へて荒松玄怡の家へ乘り込

んだ時、琴姫は若狹や玄怡を相手に酒宴を催してゐる最中であつた。不意に闖入して來た上役人に對つて琴姫は少しも動じた色もなく

「妾は汝等如き不淨役人の調べを受くる者でない、不禮致すと許さぬぞや」と屹となつて云つた。其の威光に打たれて捕方の面々は思はず後に逡いだ。すると何と思つたか小兵衞は其の場に手をついて

「お上より其所許樣に對し、聊か御訊ねの仔細これあり、某御迎ひに參つて御座ります」と慇懃に述べた。かうなつては縱へ大納言の息女と雖も、役人の言葉には背くことは出來なかつた。其の日のうちに琴姫と若狹は、嚴重に役人に護られて江戸表へ向けて差し立てられた。

（四）

文化三年正月廿日辰の刻、勘定奉行公事方石川左近將監役宅へ、琴姫若狹を初めとして、荒松玄怡、齋木帶刀、小鹿野村名主源左衞門、其他總代組頭に至るまで、關係人一同呼び出された。一同は白洲の砂利の上に座つてゐたが、琴姫だけはお椽側に控えてゐた。琴姫はいつものやうに下げ髮にして紫縮緬の鉢卷をなし、お納戸茶繻子に木爪の紋所の褂を着て、白羽二重の小袖に緋の下着を重ね、黑天鵞絨の細帶といふいでたちで、紫絹の小蒲團の上に悠然として座つてゐた。調中小蒲團を與へるといふことは滅多に無いことであつたが、是れは萬一眞に大納言の息女であつた場合を慮り、萬事に行屆く老中松平伊豆守の差圖に出たことであつた。

型の如く下役が一同の姓名を讀みあげると奉行は琴姫から訊問を始めた。其の訊問に對して琴姫は、歌修業の目的で諸國遊歷の途に上つたといふことから、秩父を通行の際計らずも玄怡の處に足を停めるに至つた顚末を陳べ、尙守り札を頒ち與へたことは、只管諸人の難義を救ひ度いと思つたのみで、決して金品の謝禮を受けようなどゝいふ卑しい目的でしたことではないと云つた。尙此の上にも忌はしい嫌疑が身に降り掛つてゐようとは夢にも思つて居ないらしく、琴姫は飽く

迄も冷靜な態度で構へてゐた。

「然らば尋ねるが、其方は去年三月迄、品川宿安左衞門方にて、飯盛を致して居つたことがあるか、どうおや？」と奉行は態と穩やかな調子で云つた。

「是れは思ひも寄らぬ御訊ね、妾には一向合點が參りませぬ」

「覺えはないと申すか？」

「仰せまでもないこと。假そめにも三位左衞門式部と呼ばるゝ妾をば、かゝる穢はしき所へ呼び出すさへあるに、飯盛を致せしやなどゝ怪しからぬ御訊ね、役目とは云へ不禮でありませう」と琴姫は顏に紅を散らし、威猛高になつて云つたが、何故か其の聲は怪しく顫へてゐた。奉行はにつこり笑つた。

「安左衞門を呼び入れよ」

品川宿の旅籠渡世越前屋安左衞門は家主五兵衞が付添ひ、腰掛からおづおづ白洲へ入つて來た。

「安左衞門、其方は是れなる女を存じて居るか？」と奉行は扇で琴姫の方を指して云つた。

安左衞門は恐る〳〵頭を擡げて凝と琴姫の顏を見上げたが、忽ち後へ倒れんばかりに駭いた。

「お奉行樣へ申上げまする。姿は變つて居りまするが、あれは私方の抱えで御座りましたお琴と申す者に相違御座りませぬ」

「しかと夫れに相違ないか」

「一年餘りも抱え置きました女、何で見忘れ申しませう」

「此の者は亂心者に違ひない。假令何人が如何樣に申さうとて、身に覺えのない濡衣、もはやよしなき詮議にお答へは致しませぬ」と琴姫は眞蒼な顏をして云ひ放つた。

然し琴姫の椎幕も直きに破れる時が來た。それは安左衞門が、同じく白洲に控えてゐた安藤若狹を見出すと、再び吃驚して「あの男は以前お琴の許へ繁々通つて來た善兵衞といふ男である」と云ひ出したのであつた。

若狹は忽ちブル〳〵顫へ出した。そして奉行の峻烈

な糺問に遇うと、一溜りもなく恐れ入つて白狀して終つた。

彼れは本名を善兵衛と云ひ、淺草源空寺門前に店借りをして、甲州絹の行商を渡世にしてゐた。家には妻子も母もあつたが、それまで彼れは町内でも評判の律義者でまた稼ぎ人と云はれてゐた。或る時彼れは町内の交際(つきあひ)で川崎の大師へ參詣に行つた歸り途、無理矢理連れに誘はれて品川の越前屋へあがつて遊んだが其の時善兵衛の相かたに出たのは、其の頃品川で噂の高いお琴といふ女であつた。善兵衛は深くもお琴の美貌に迷つて終ひ、それから足繁く越前屋へ通つて行つた。

其の頃品川遊びをするほどのものならば、八ッ山のありかは知らずとも、越前屋のお琴の噂を口にせぬものはないと云はれた程その評判は高かつた。まつたく、芋のやうな宿場女郎と、一緒に置くさへ勿體ないほど、お琴は美しくて其の上品格の好い女であつた。されば本場の廓遊びに飽いた江戸の通客が氣まぐれの品川遊びも、お琴を見ては驚異の眼を瞬り、心底魂を打ち込んで終ふのが常であつた。

善兵衛は打つて變つた身持になり、母や妻の異見も耳に入れず品川通ひにのみ現をぬかしてゐたが、もと〱小商人のかなしさ、忽ち八方に不義理の借金が嵩んで頸が廻らなくなつて終つた。彼れは到頭江戸にも居られなくなり、妻子を捨てゝ田舍へ身を隱すことに覺悟を決めたが、これが最後のつもりでお琴に逢ひに行き、涙を流して其の話をすると、意外にもお琴は「わたしも連れて逃げて下さい」と云つて頼むのであつた。善兵衛は夢かとばかり喜んだ。そして二人は、その夜の闇に紛れて、手に手を取つて品川を逐電した。二人は最初下總邊へ落ちのびて、路用のある間は何處を目當ともなく流浪して歩いてゐた。お琴は何の苦勞もない遊覽の旅人のやうに名所や古跡を見物しては、歌など詠んで手帖に書き留めてゐるのであつた。

それまで善兵衛はお琴の素性についての事は少しも知らなかつたが、或る時ふとしたことから、お琴が日野大納言といふ公卿の女(むすめ)の成れの果といふことを知つ

た。彼女は最初歌修業の目的で京都を出たのであつたが、世間不案内の爲めに惡漢の餌になり、最後に旅女街吉五郎といふ者の手に渡つて、到頭飯盛にまで成り果てた——といふのであつた。善兵衛の駭きは一方でなかつた。彼れは京都まで送り届けるから家に歸るようにと勸めたがお琴は聞かなかつた。

「かうなるも皆前世からの約束、それに一旦自墮落な味を覺えたわたしには、結句今の身が面白くて、京都へ歸る氣はありませんのさ」とお琴は捨鉢のやうに云ふのであつた。

さう云はれると善兵衛も其の上勸める氣にはなれなかつた。女の心持は解せなかつたが、彼れは世にも稀な自身の幸運を喜ばずには居られなかつた。

二人が相談の上、主從と名乘つて諸國を徘徊し、短冊や守り札を賣つて歩き始めたのは、此の事があつてから間もないことである——と善兵衛は申立てた。

琴姫は、羞恥と恐怖に打ち顫へながら、襠の袖に顏を埋めて泣き伏して終つた。

（五）

幕府では此の事件の扱ひ方に就て種々評議をした。其の結果一と先日野大納言家へ問合せをなした上、其の回答の次第に依つて事を裁くことになつた。直ぐ樣所司代太田備中守の許へ早飛脚が立てられた。

所司代からの返書が到着したのは二月に入つてからであつた。

「…御糺之件に就、日野大納言家に對し、琴女と申息女有之候哉否哉、人相書相添問合候處、於當家琴女と申息女無之趣、御返答有之候間、右及御返事候」

此のほかに一通、備中守から石川左近將監に宛てた私信が添へてあつた。それには、

「尚大納言家仰には、右は此方息女にては無之も、其女の儀不便にも被存候間、宜敷取計はれ度しと被申越候。依而此段爲念申入候、云々」といふやうなことが書かれてあつた。

玆に於て再び白洲が立てられた。此の度は琴姫も砂

利の上に座らせられた。そして一同は奉行から次のやうな云ひ渡しを受けた。

無宿　こと

其方儀、日野大納言息女と偽りて諸人を欺き、猥りに守り札など頒ちて金品を受け候始末重々不埒に付、重追放被仰付。

浅草源空寺門前久蔵店　善兵衛

其方儀、他人抱えの女を誘ひて共々逐電なし、剰へ琴と共謀して悪事を働き諸々押歩き候始末重々不埒に付、手錠の上家主へ御預被仰付。

武州品川宿　安左衛門

其方儀、不法の人買ひを行ひ身元も相知れざる女を召抱え、假親を作りて官の帳簿を偽り届け候始末、重々不埒に付、手錠被仰付。

武州小鹿野村　玄怡

其方儀、無宿琴を日野大納言息女と心得なば速に官へ可訴出を、左る心付ヵ無之、善兵衛共々數月逗留致させ候始末不屆に付、過料三貫文被仰付。

（以下略）

江戸の市中は到る處此の噂で持ち切られた。琴姫は正しく日野大納言の息女であるといふことが、誰云うともなく傳へられたのである。そして大納言の女ともあらう身が、飯盛風情にまで淪落するに至つた動機については様々の風説が立てられた。或る者は、白洲の申立のやうに、歌行脚に出たといふのが眞であらうと云つた。又或る者は、邸に召抱えられてゐた卑賤しい奴僕の者と人知れず不義をしたあげく、男に唆かされて駆落したのが始まりであるとも云つた。中には、大納言家では昔からの家例として、代々子女のうちの一人を出家にすることになつてゐたが、それが琴姫の身に廻つて來たゝめに、佛門に入ることを嫌つて家出をしたものであると、尤もらしい話なども傳へられた。

頃は文化三年二月の末、はや桃の盛りも過ぎて、氣早な櫻の蕾がちらほら綻び初めてゐた。ある朝まだき、街々の大戸がまだ堅く鎖されてゐる刻限に、大手前の勘定奉行役宅の通用門から一挺の女乗物が舁ぎ出された。其の中には凄艶な琴姫の姿が駕籠の簾で隠されてゐた。斯くして此の乗物は、數名の役人に護衛られつゝ、江戸をあとに上方さして送られて行くのであつた。

瀧めぐり

遲塚麗水

一

日本海を瀧壺にして落つる瀧が二つある、私はこれを但馬津居山の小車の瀧に看、又た越後浦濱の白瀧に看めた、しのぶ歯朶のしげる谷の峽、やまめ岩魚の棲む淵を瀧壺とした瀧は、天下到るところの溪山にはあるが、廣いわだつみを瀧壺として落つる瀧は珍らしい、名にし負ふ魚龍常に驕る日本海、荒ぶる潮の寄せて碎けて裂けて飛ぶその波がしらを推しふせて、鞺鞳として落つる瀧の姿は、決して尋常一様の觀めではない。

私は小車の瀧を春淺い雪の日に看めた、湯の町の城崎、そこには遠い〳〵昔の朝鮮から海を渡つた出雲美人系が殘つてゐて、今でも天の日槍の末孫らしい眉目よい女が少くなかつた、その湯島女の化粧の水の末を集めてさゝ濁る本谷川は、低い欄干のついた短かい板橋をいくつも潜つて、圓山の江に注いでゐる、私は三人の詩友と、旅館の主人と、湯島女の仲居とで船に乘つて、曾て柴栗山が宿つたといふ半夜水明樓の趾の河岸から圓山の江に浮んだ、私の乘つた船は淺い蓆の屋根を葺いて、四方に棧の細かい障子がたてゝある、その屋根にも、船端にも、きのふの雪が殘つてゐる、低い卓袱臺を眞中に圍んで、私達は梅鉢なりに胡坐の膝を搖り合せて坐つた、艫に近い障子際に、仲居は火鉢に

炭を熾して小酒盛の用意をしてゐる、障子を明けて眺めると、東山、大師山、愛宕、甘露峯の雪の山は、折からの淡い日影をうけてうす紫に冴えて見えた、船の舳はさら〳〵と岸邊の枯蘆を推し分けてやがて江の中流へ出た、一と筋黒い川の水は悠々として流れてゐる、誠に大江の氣象がある。

『蟹があるかやい――』

艫を押してゐた船頭が大きな聲で喚ぶかと思ふと、やがて船は徐かに停まつた、そこに腰簑をつけた漁師の翁が、小舟を漕ぎながら淺瀬に沈めた柴の束を引き上げて、蟹を漁つてゐるのである、仲居は障子を明けて漁翁の手から栗の毬のやうな毛の生へた甲らの丸い杢藏蟹のいくつかを笊に受けて錢をやつた、船を江の心に縱つて其の之くところに任せながら、燒いた杢藏蟹を擘いて小酒盛が始まつた、絹絲を束ねたやうな蟹の肉、殊に琥珀の色をした解黃のうまさに舌を鼓して玫瑰の花咲く陸奥の海岸の夏の旅路で善く食はされる炙いた生海膽の味を憶ひ出した、旅館から持つて來た行厨の重い内には、城の崎名物の蟹はんぺんもあつた。

やがて船は津居山の港に入つた、金字塔形の日和山は低い石橋で陸地につゞいてゐる、船を捨て、陸に上ると寒い霙が降り出して來た、貝殼光る、蜑漁の村をかけぬけて、唯ある茶店で傘を借り、石の多い山路を頂福寺にたどりつき、更に西刀神社に參詣した、太古大巳貴尊が劒を拔いて島と陸とを截ち切つたと傳へられ、社はこの神を祀つてある、山の絕頂へ登り詰すと晴れた日には瑠璃を展べたと看らられる日本海、けふは潮の色も眞黑に變つて物悽く、颶氣は荒ぶる海を掩ふて、亂礁と相擊つて頽れる巨濤はさながら大雷のやうに吼えてゐる、唯見ると島陰から、腰簑をつけた舟人が小舟を漕いで現はれた、豫て雇つて置いた瀧見の舟である、仲居一人を跡に殘して、私達は岩を傳ふて其の舟へ飛び乘つた、舟は左右の舷端に横木を架して舳から艫へと舟の長さだけの板が取りつけてある、大波に擊たれても、舟の覆らぬ用意である、苫を殘らず

撒ねさせて、寒い霙と痛い波の飛沫とを浴びながら舟の中に蹲まつた、舟はやがて大巳貴が巨劒をもつて山を斫り開いたといふ瀬戸の海門を出た、山の裾にむら立つ亂礁を萬斛の雪に埋めて、さつと頽れて引いて行く波の間に、屈強の船頭二人は打ては鐃の音がする櫓い腕を押し並べて艫を操つた、揺り上げらるゝ時は、岩角に舟を微塵に打ち砕かれるかと掌に汗を握り、揺り下げらるゝ時は、大浪の底に沈むかと戰いた、舟はやがて但馬赤壁の名に呼ばれた絶壁の下に來た、その絶壁の中ほどに、根を露らして岩を攫んだ赤松が横生し、懸生し、斜生し、倒生してゐる間から、素絲を懸けたやうな小車の瀑布が見えた、私共は船頭を勵ましてその瀑布の前まで來た、但し波が荒いので、瀑布を距ること一町ばかしの沖に舟を停めて看めあかした。

瀑布は都べて四段となつて、高い岩角を傍ふて落ちてゐる、上の二段は絶へて又たつゞき、三段目のところは岩の陰にかくれて見えない、四段目になつてから宛から寒劒の石を劉る勢ひで直下してゐる、高さは百七八十尺もあらう、幅も四間に餘るであらうと見られた、寄せて群ら立つ紺色の大波小波の頭を薙ぎ伏せ押し伏せて萬斛の霧を吐く瀧の姿は、誠に壯觀といふべきである。

二

同じ日本海に落つる白瀧を、越後浦の濱に看めたのは、嫩い夏の小雨ふる朝であつた、寺泊といへば古い歴史の蹟を留めた昔の越路の要津である、菊屋長者と歌はれた亭長五十嵐氏の莊の趾は、當時の庭の泉石竹樹をそのまゝに聚感園の名に呼ばれて、義經の浴室の跡や辨慶が掘つたと傳はる井戸も殘つてゐる、承久の帝の佐渡遷幸の途すがら、秋より翌る年の春にかけて鑾輿を駐めさせられた行宮も、亦たこの菊屋長者の莊であつた、雁音砧聲、秋の夕べの淋しさは幾夜か袞衣の袖に月を宿し、簷一丈の雪に埋もれては、氷封ずる御硯を溫めて、幽懐を兎毫に寄せたまふたのであらう、北海の寒驛、冬は永うして春の來ること遲く、やがて行宮の梅櫻一時に咲き、海には蜃樓を絹がいて御舟の

路を開く頃となり、佐渡が島にと幸したまふたのである、行宮の跡にはさゝやかなる祠堂がある、苔に爛れた祠前の石は、古來幾多の遊子の墮涙の痕を留めてゐる。

日蓮上人が、熾烈の大思想を旅の硯に寄せたところも、この地の石川左衛門吉廣の莊であつた、莊の趾は今の法福寺である、風流なる冷泉爲兼卿と遊女初君との綺話も、亦た永く情史に傳はるべきものである、永仁年中、爲兼は北條氏の嫌疑を受けて佐渡へ流さるゝ途中、菊屋長者の莊へ宿つた、初君といふ遊女があつた、その枕席に侍つてゐたが、いよ〳〵明日は艤舟に上るといふ其の前夜、初君は別離の情に禁へずして、『物思ひ越路の浦の白波も立ちかへるならひありとこそ聞け』といふ歌を詠んだ、この歌讖をなして、爲兼卿やがて赦されて歸路の喜びに遭ひ、その後勅を受けて玉葉集を撰んだ時、初君の歌を其の集中に收め載せたといふことである、盟を寄せた去來の波は、今も尙ほ磯の砂と夜每に戀をさゝめいてゐる。

私は或る年の媛い夏、新潟から海を傳へて彌彥神社に參詣し、一夜を寺泊の元の菊屋の莊に近い海邊の旅館に過ごし、明る朝そぼふる雨に傘をかざして、聚感園を訪ひ、法福寺に詣し、又た遊女初君の墳に詣うでゝ一瓣香を炷いた後、新知の友に誘はれて舟を浦濱に浮べた、三人の若い船頭の外に、眉の白い老船頭がゐた、この老船頭は追分節の名人で、景色の好いところに舟を寄せ、追分節を聽かせてくれる趣構である。

漁莊蠶舍、斷へては又たつゞく野積の濱、磯邊に鰯網を晒らしたのが、まるで霞のように見える、日蓮上人が波の上に題目を書き現はして、驕れる魚龍を鎭めたといふ波題目はこの邊だといふところを過ぎて、やがて三個の大巖が鼎足の勢ひを作して波を抽いて欹つその陰を掠めて舟は行く、浦濱の勝に入る第一の關門である、ふと遙か彼方から三四人の客を載せた一艘の小舟が來た、彼の舟この舟やうやくに近づくと、一人の客は帽子を揮つて私を喚んでゐる、善く見ると、其の人は昨日逢つた彌彥宮祠の高松君で、本多博士も傍

にゐられた、博士の外に墨染の法衣をきた僧が一人と羽織袴の人もゐた、舟を寄せてこの海上の邂逅を語り合ふうち、僧と羽織袴の人とは私の舟に乗り移つて來た、僧は西蓮寺の風氣至和尚、羽織袴の人は浦濱小學校の校長であつた、詩僧と郷學先生とを私の舟に載せ得たのは、時にとつての風流であつた。

浦濱は、彌彥の山の海に枕んでそゝり立つ其の斷崖一帶の總稱で、峭壁と奇岩とは三里の濱につゞいてゐる、赭い色に黒い條を交えた大巖の面に、自然と帆掛船が現はれてゐる帆の浦の白帆岩といふのがある、駒が石といつて、岩の面に白馬の姿が見える奇石もある、二個の竄を其の鼻の孔にし、耳も眼も備はつて、流雲のごとき髯を振つて空に向つて咆吼する偉大なる獅子の首そのまゝの巖もある、小磯の白濱といつて、あたり一帶赭黒い岩ばかりのうちに、この濱の岩ばかりは眞白で、殊に磯の小石の白さは、さながら鵠の卵を敷いたかと怪しまるゝ美しい濱もあつた、女濱男濱の大岩の陰の二つの岩屋は、彌彥の神が鹽を煮たまひし異境なりと言ひ傳へられてある、繪に描いた蓬萊山そのまゝの蓬萊の崖、老松、老椿、老楓の、これも繪の心に繋つてゐるその岩間に點破した猩紅の岩躑躅、鶺鴒、人を怖れず、私の寄せた舟と岩との間を飛んでは止り、止つては飛ぶ浦濱の勝はこゝに十々目を刺すと思はれた。

音に聞く白瀧は、女濱男濱の絶壁に懸つてゐる、一綫白く岩の面を滑べり落ち、打ち寄する波群立ちてこれを呑む、高さは百尺もあるべく、幅は二間ばかりと思はれる、これを彼の但馬の小車の瀧に較べると、雄偉の觀めには乏しいが、幽婉の趣がある、瀧の傍の岩の上に蓑笠の一漁翁が、寂寞として綸を垂れてゐるのを見た、誠に仙の人かと疑はれた、風氣至和尚いふ、この邊一帶、雨の後には多くの瀧を見る、愚衲は曾つて驟雨の後にこの濱に舟を浮べて、常には見ない瀧を數へて二十五六もあつたいふ。

私は舟を瀧に近き岩の陰に維いで、携へて來た酒肴を開いた、老船頭に酒を與へて、さて約束の追分を聽い

た、酒の下物は寺泊名物の孕鮨、尾頭つきの鮮魚の腹へ石花菜を詰めて鮓としたものである、眉雪の船頭、舵柄に臂を載せて頬杖ついて、歌ひ出す追分節は

「朝咲いて、四つに萎るゝ朝顔さへも、思ひ〳〵の花が咲く」

「鳥ならば、近き森にて巣をかけ置いて、焦れ啼く聲聞かせたい」

「新潟戀しや白山さまの、松が見えますほの〳〵と」

海の背景あり波の伴奏ありて、追分節は始めて其の妙趣を發するものであると覺つた、眼を閉ぢて靜かに當時の事を憶ふと、霜柱のやうな白い短かい髭の生へた赭ッ面の漁翁の厚い唇から、瓢揺として出る人籟の極致の妙音が、私の耳の底にこびりついてゐて、何時までも聞えるやうな心地がしてならない。

三

赤城の山に行き暮れて、物凄い一夜を瀧澤不動の瀧の傍の茅葺の樓門に過ごした事は、永く忘るゝ能はざる旅の思出である、今から丁度二た昔前の夏の眞中、私は鹽原から山越しをして日光に出で、中禪寺湖畔から足尾を歴て渡良瀨川に沿ひ、澤入の里から赤城の山に分け入つたのであつた、鹽原では古町の旅館にとまつて、箒川の川べりの福渡戸や門前や鹽釜やの温泉に浸つてあるいた、鎌を腰に挿した旅館の主人の案内で溪を渉り岩に攀ぢ、山菅や荊棘を刈り拂つて、一番瀧、二番瀧、三番瀧、雄飛の瀧などを看めあるいた、源頼政の孫伊豆冠者有綱の隱れてゐたといふ窟にも入り、平重盛の妹妙雲尼の開基と傳ふる妙雲寺にも詣り、櫻と桂の木とを栽えた高尾の墳や、高尾の弟で繪を善くする僧普門の捨身のところといふ神祕な藍を湛へた深い〳〵普門の淵といふのも見た、浴客に一皿の團子をふるまつてくれる須巻の湯瀧にもかゝつてみた、團子を三皿までお代りして主人に笑はれたことを覺えてゐる、今の鹽原は散々に都の風に吹き荒らされたやうだが、その頃の鹽原は、野趣が横溢してゐた、二晩と一日、足かけ三日の宿賃が九十五錢で、膳の上にはいつも尺に餘る岩魚の鹽燒や山芋汁や香ばしい山獨活

の甘煮などの山菜溪魚が載せられた、誠に隔世の感がある。

朝、鹽原の宿を立つて、高原山を蹈へた時、すさまじい雷雨に遭つて、藤原の里へ出て鬼怒川の渡しをわたつた、舟からドりて中島を行くと、眼の前に雪を噴く早瀬が横はつてゐる、私は裾を掲げて徒渉りした、脛から膝、膝から股、水嵩は次第に増して、終に腰から腹に及んだ、河底の丸い石は幾たびか私の腫を滑べらせた、あなやといふ間もなく、私は急流に押流された、しばらくして私は海豚の背のやうな赭黑い大きな石の上に這ひ上つてゐた、私は聲を揚げて人を喚んだ、菅笠をかぶつた村の草刈女が、馬に騎つて向ふ岸を通つた、私の聲を聞きつけて、直ぐさま馬を河へ乘り入れて、さか卷く流れを亂しながら近寄つた、私は馬の鬣を攫んだ、草刈女は私を扶けて馬の脊に載せて彼岸に上つた、日頃は徒渉の出來る河であるが、この朝の雷雨で水嵩が急に增して來たのである、月の初めの雷雨の後で、今市の按摩さんが、徒渉りして到頭流されてしまつたと彼の女は語つた、私は危い生命を助かつた、濡れた紙幣を一枚無理に彼の女の懷に推し入れて立ち別れた、色の白い地藏眉の、左の頰に片笑渦の淺く浮く十七八の處女であつた、爾來二十年、彼の女は旣に六七人の兒女を擧げて平和の家庭の主婦として働いてゐるであらう、當時旅の鞄のうちに收めた陶靖節詩集は、しとゞと濡れた水の痕の影を留めて、今も尙ほ書架の上にある。

日光の霧降、裏見、華嚴を看て、中禪寺湖畔の旅館に一夜を過ごし、足尾から澤入、さて赤城の山に分け入つてやがて赤城の原に出た、たそがれの雲は路を偸却して寂しさはひし／＼と身に迫まつた、偶、瀧澤不動道と彫られた小さな石標があるのをたどつて行くと、日はとつぷりと暮れた頃、漆を盛つたやうな眞黑な谷の中へ路は次第に下りて行く、吾が現し身は蛾となつて、蠑螺の殼の中へでも入つて行くやうな心地がする、雷のやうな谷の水音、路窮まると冥にもしるき一溪の雪なす急湍、深樹の陰に孤燈の光を認めた時の

その嬉しさ、其處に一軒の茅店があつて、老爺と老媼とが不動へ參籠する人に日用品を賣つてゐる、飯があるかといへばないといふ、蚯蚓のやうな饂飩を食べて饑を凌いで、さて不動堂へ參詣した。

苔の磴を上ると低い茅葺の樓門がある、門を潜るとそゝり立つ當面の絶壁の下に、大きな岩窟がある、不動堂は鬼一口に啖はれたやうに、窟一杯に頬張られて建てられてある、佛燈香の烟を罩めて幽かに照らすそのあたりに、鶴のやうに痩せた一人の若い僧が、寂寞として趺坐してゐる、私は先づ佛に拜して、さて其の僧に挨拶し、行き暮れた旅の書生、御堂の縁に一夜の露を凌ぐことを許させたまへといつた、僧は趺坐の膝をも頽さず、唯だ私の顔を見つめてゐる、二たび三たび言ひ入れても、啞のやうに默つてゐる、無言の行でも修してゐるのかと思つて、私は御堂の階に腰を卸した。

「愚衲は是れぢや」

僧は忽ち口を听いて、青い爪のはへた指で自分の耳を指さした、僧は聾者であつた。

「愚衲に何か用があるなら、其處に筆と紙とがある。」

藥研のやうに凹んだ硯、禿びた筆、私は紙に書いて僧に示した、讀み終つて僧はうなづいて。

「嘸ぞお困りであつたらうの、しかし御堂には客は入れぬ、向ふに見える樓門の上に寢なさるが好い。」

樓門には梯子が架つてゐた、覺束なくもそれを攀ぢて低い簷の下を潜ると、燐寸の火がぱちりと漆の冥に光つた、喫驚して瞬して視ると、六十ばかりの白髮の老女が、裸蠟燭に火を點したのである、其の傍に、黒髮を振り亂した眞青な顔の二十二三の婦人が座つてゐた、その女の瞳を据へて私を見た其の眼の凄さ、私はそこに竦んでしまつた。

「お前さんも、お籠りにおいでなされたのかい。」

老女は恁ういつて私の顔を見た、私は參籠の人だなと覺つて安心した、路に迷つて今宵一夜を此處に過ごすのだと語ると、

「爾うでやすかい、私は又たおつむりでも惡くつてお

籠りに來なされた方だと思ふたわい、こゝにゐるのは私の娘でやすが、連合に別れてからつむりが惡くなつて、今日で七日私が附添ふてお籠りをしてゐますぞい。』

亂髮藍面の若い女は、正しく狂女であつたのである、私はしみ〴〵とこの靈に病む人の爲に悲しんで涙を呑んだ、老女は娘をいたはつて枕に就かせて、

『夜が更けますに、お前さまもお休みなされ、其處に蒲團も枕もありますぞい。』

裸蠟燭は涙を垂れて嗞々と燃え細つた、荒壁の樂書、千社札、蜘蛛の圍には枯葉や胡蝶の骸が懸つてゐるのがおぼろに見えた、山氣に潤つて冷めたい煎餅蒲團は奉納幟の古いのを綴り合せたものであつた、瀧澤だの不動尊だのと書いた文字が、横になり縱になつて蒲團の模樣を作してゐる、木を四角に削つた枕、私は疊んだ手拭を上に載せて横になつた、そして物凄い短夜を此の樓門の上で過ごした。

明る朝は早く起きて、谷川で顏を洗つた、和尚はと尋ねると、不動の瀧へ水垢離に行つたといふ、苔むす逕を辿つて行くと、甕を割つたやうな絕壁の上から、百六十尺と註せらるゝ瀧が眞直に落ちてゐる、大霧を吐く瀧壺の中に、腹に荒繩を八重に卷き、白衣を着けた聾僧が額のあたりに合掌して瀧に背を打たせてゐた、私は那智荒行の文覺を今ま眼のあたりに見る心地がした、やがて行を終つて僧は瀧壺から出て來た、頭や肩や頸や背に、刀瘢のやうな疵が縱横に光つてゐる、冬の水垢離の時、水と一緒に落ちてくる氷片で斫られた疵の痕だといふ、僧は品川の人だと語つた、齡は三十左右と見られた、二十年後の今、何處の寺の佛に事へて遊迦三昧を修してゐるであらう。

四

富士川の上流、甲斐の國釜無川の水源は、魔の山の名に負ふ駒が岳の懷ろから湧くのである、その雲白く嵐青い深山の奥に、まだ世の人に多く知られない瀑布がある、私は一と年、富士見の小川射山の歸去來山莊に夏を銷した時、菲圭及び四五の詩友と共にこの山の

秘奥を探つた。

岩魚を漁つて露宿の夕餉を賑はさうといふので、數人の漁夫を伴ふて釜無川の石磧を登つた、石はやうやく肥え、水はやうやく痩せて來た、石の雄なるに逢へば水の淺きを亂し、水の深きに遭へば石の峭れるを度つた、或時は苔むす大岩の腹を蝸牛のやうに這つて行き、或時は崖からさし出た樹の木に身を掛けて眞靑な深潭を岩から岩へと猿のやうに跳り移つた、こうして其の夜は五里の山奥、鷹見の山、釜無山、鋸山に圍まれた中川の深碉、海拔正に六千尺と註せらるゝ谷底の崖の陰に、楓、白樺、石楠の枝を切つて片廂の屋根を葺き、そこを露宿のところと定めた、石を構へて竈を作り、谷の水で米を研ぎ、平たい石を俎に魚菜を宰し、流れ木を拾ひ集めて丘と積んで夜を照らす篝火とした、やがて石の筵、岩の卓、山菅の莖を剪つて箸として酒飯のまとゐは催うされた、手に〱持つた一箇の椀は、酒を盛る盃ともなり、飯を盛り汁を盛る椀ともなつた、山風寒く篝火に吹き入つては火華は雨と降りそゝいで夜の雲を紅く爛らした、酒に醉つた漁夫どもは環になつて、

『娘可哀也十五でみもち、聞けば情夫は旅の人。』

などゝ、樽を大鼓に代へて敲いて盆踊が始つた。

翌る朝は又たこの谷を遡つた、十丈ばかりの大岩の面に、靈芝の模樣が現はれてゐるのがあつた、私はこれに靈芝岩と命名した、靈芝岩の上は、すなはち釜無川の第一湫潭である、谷底は、猪の脂のやうに白い膚に、翡翠のやうな碧い絛紋のある一枚石で、左右から蹙り欹つ崖は鋼鐵のつやのある玄武岩である、靈芝岩の下に立つて上流を仰ぎ見ると、谷底に敷かれた縹白い一枚石は一段又た一段と斷層を作してゐて、さながら繪にある紫微廣寒の玉の御階のやうである、水は其の斷層に逢ふ毎に、瀧となつて落下さる、水の落つるところはすなはち秋潭、所謂『釜』といふのである、劫初から晝夜を舍かず注ぎ流れる水の力は、この金剛の岩を穿つて、深さ幾丈まわりは百歩にも餘る圓い湫潭を作り成したのである、流れては釜に落ち、溢れては

又た瀧となる、十一の釜、十一の瀧、縹い水に白い石、水光石釆相映發してこの溪山の幽光を吐いてゐる、私は多くの瀧を看たが、いまだ曾つてこんな美しい瀧を看たことがない。

更に最も奇なる瀧は、こゝから一里の山を踰へた深壑にある大瀧小瀧である、岩を抱き樹に縋つて絶壁を下りて行くと、白樺、楓、石楠の繁る奇峯の絶頂から寒光一碧、大きな瀧が懸つてゐる、高さは二十五六丈もあると思はれる、幅は正しく五間に餘る、上恰度銚子の口から水が出るやうに、空に向つて跳ること一丈ばかり、誠に奇絶の觀めである、小瀧とは是れである、更に瀧壺の平ひな岩を傳ふて行くと、深壑復も脚下に開けて身は大瀧の落口に立つてゐるのである、岩角に取りつき葛羅を摑んで、こは〳〵ながら奈落の底を覗いて見ると、雲を穿ち嵐を貫いてたぎり落つる瀧の姿のすさまじさ、眼は眩めき肌は栗し、萬髪倒しまに竪つの概がある、若し谷底からこの大瀧小瀧を併せて仰ぎ看ることができたなら、彼の日光の華嚴の瀧にも優つた雄大瑰奇の觀であらう、彼は車輿往來の路に當つて其の名を天下に擅まゝにし、これは幽壑の奥にあつて、罕れに好奇の私たちに識られるのみである。

岩の上には青い毛氈を敷いたやうな萬年杉が生へてゐる、憐らしい紅い花をつけた信濃撫子、白い蕭疏な花のやなぎ蘭、清麗な岩桔梗、濃艶な車百合、花筵を展べたやうな岩鏡の花、碧い莖に白い花が咲き連なつて、なよ〳〵と瀧しぶきに吹かれてゐるかごめ蘭も多くあつた、正しく此處は斯の山姫の庭である、この記を讀んでこの瀧を看に行かんと思はるゝ方々は、富士見の驛で、この魔の山路に詳はしい人を雇ひたまへ。

五

瀧は上から落つるものと極つてゐるが、こゝに下から上へと吹き上げる瀧がある、瀧の中の拗者である、私はこの旋毛曲りの瀧を上州沼田から七里の山奥、追貝村の立科川の溪で看めた。

澁川から玩具のやうな鐵道馬車で、七里の路を沼田

へ來た、此處はもと眞田氏の支城、武田勝頼を迎へとつて織田德川の兵を引き受け籠城しやうとした城である、翌る朝、立科川の溪谷に傍ふて赤城の山の後を踰えて、上久屋の村、薗原の村、この邊に桑の大木が多い、幹の太さは一と抱へに餘り、梢は二三丈に及ぶのもある、蠶を飼ふ村の女達は梯子を架けてその葉を摘んでゐた、折から麥の秋であつた、農夫は刈つた麥の束を焚火に翳して、その穗を燒き落してゐた、常磐橋から大原村、山を下りると千歳橋、茅葺の家の軒に鹿の生皮を晒らしてあるのを見た、追貝の村であつた、沼田から正に六里。

酒を賣る店に入つて午餉をたべた、大きな鮎の鹽燒に、麥酒があつたのは思ひ設けぬ御馳走であつた、低い二階の欄干に靠れて見渡すと、雲氣の蒼莽なる當面の大雄峯は白根の山である、右には庚申山、左には座禪山、燧が嶽、北は立科、武尊、迦葉、白沼、鶴が岳が、晴れみ陰りみ白い雲碧い嵐の中に肩を並べて頂を露はしてゐる、路は沼田から西に走ると、上杉謙信が疾風のやうに兵を關東に出した三國越となり、北に走ると清水越、その中途から岐れては會津の間道となる、立科川は亂山のうちから出でて南、利根川に入り、北に流れる水は魚沼川となつて信濃川に合し、東北に流れる水は會津の只見川となつて阿賀川に注ぎ、南東に下るものは鬼怒川となる、凡てこの山の懷に湧く川で、關東の巨流でないものはない。

私はしばらく涼しい風に吹かれながら午睡をした、山の井の端で顔を洗つて、茶屋の少女に案內させて吹割の瀧を觀に行つた、林の陰の細逕を辿つて行くと、やがて立科川の大溪は眼の前に橫つてゐる、兩岸はそゝり立つ岩壁で、上は斧斤の曾つて入らない黑沈々の處女林である、溪は全く靑い一枚岩で成り立つてゐる、その溪底の一枚岩を橫斷して、深さも知れぬ大きな坑がある、縱に流れる谷の底に、橫に斷つ深い谷があるのである、渦まきたぎる滿溪の水は、碧りを積み靑きを重ねて流れて來て、その深い橫坑に吸ひ込まれ、やがて又た勢ひ猛に吹き上げて、雪の山の頽れたやうに

二三丈の高さに盛りあがり、雲を吐き霧を噴き、蜒の草木を薙ぎ伏せつゝ揉みにもんで流れるのである。

吹割の瀧の末は、沈碧が藍を湛へた獅子が淵の深潭となり、水は再び怒つて飛鯨の大瀧となる、谷一杯に盤踞した大岩の肩を踰へて雷のやうに轟きつゝ流れ下る、私は瀬を看てから溪を遡つて浮島の觀音堂に參詣した、浮島は溪の上に立つた小さな峯である、赤松の林の中に茅葺の觀音堂がある、十八番の觀音である、この御堂と御堂のうちの觀音の木像とは左甚五郎一夜の作と言ひ傳へらる、山を繞つて皆な水、水を繞つて皆な山、私は寂莫として石の上に腰を卸した、暮雲は山の懐から湧いて、眼のあるやうに樹に縈り石を抱いて靜かに流れた。

六

伊豆の修善寺の菖蒲の湯に浴みした時、宿の主人に誘はれて一里の山の奥に旭瀧といふのを觀に行つた、瀧の高さは三十丈、岩樹の趣きには乏しいが、瀧の前に小さな亭があつて、浦若い比丘尼さんが茶を煮て客に侑めてゐたが面白かつた、昨年の夏、友達と修善寺に遊んだ時は、馬車を僦ふて天城山の淨蓮の瀧といふのを觀に行つた、瀧の高さは六七丈、大瓶を割つたやうな懸崖から落ちてゐる、岩燕が白い腹を見せながら瀧の前に翔つてゐた、比丘尼で、憶ひ出したのは美濃養老の瀧である、一と年の秋であつた、黄昏のころ掬水樓といふに着いて、夕餉の後に折からの小雨の中を瀧へと往つて見た、蓑笠の宿の男は、長い竿の兩端に松薪を盛んに燃した鐵籠をかけて擔つて行く、篝火を焚いて夜の瀧を看せやうといふのである、私は友達と相合傘で後から跟いた、山風が吹き入るたびに松の火は横に靡いて黄金の砂子を撒くやうな火華を冥の山路に飛ばした、私はその火が宿の男の着てゐる蓑に燃えつきはしまいかと危ぶんだ、路窮まつて溪となり、見上ぐる峯の絶壁から滿山の雲をどよませて養老の瀧は落ちてゐた、ここにも早く私達と同じやうに、夜の瀧を看めに來た人がゐて、溪のほとり、岩の陰に篝火は焚かれてあつた、宿の男は瀧壺に近い岩の上に擔いで

來た松の火の鐵籠を置いた。

眞黒な峯の端、をぼろに白く仰がるゝ水の姿は、急に箕のやうに裾を張つてたぎり落ちる、松の火の屆かないところは、夜の色が水を紺に染め、やがて次第に淺葱に褪せて來るかと思ふと、燎火に照らし出された瀧の水は、遽かに桃色にさへ渡つて、濺いで滿溪五色の霧となるのである、高さは百五尺と註せられ、幅は二間に餘ると見られた、優しくも亦た綺麗な瀧である。

瀧を看ての歸るさに素心庵の扃を敲いた、庵主の老比丘尼、齡は六十を越したと思はれる、元は名古屋の致坊で全盛をうたはれた歌妓であつたが、粉華漸く零落してから、丈の黑髮と一緒に浮世をふつと思ひ斷つて、養老神社の片邊に消洒な草の庵を結び、手づくねの陶器を賣り、茶を賣つて餘世を松風蘿月に寄せゝゐる、私は老尼に薄茶を所望して夜更まで語つて宿へ歸つた、孝子源丞内が汲んで老親にすゝめたといふ醴泉の趾は、二階の私の部屋のすぐ傍の庭から濺いでゐる水ださうな、枕に通ふ水の音、ふと眼さめると何處とも知らず木犀の花がかすかに匂つて來る、心を細めた籠ランプ、その籠の端に蟋蟀が這ひ上つて、靜かに〱啼いてゐた。

最上川の四十八瀧、私は一と年雄鹿、象潟の旅の歸りに、酒田からこの川の左岸に傍ひ、余目、狩川、淸川を歷て、其の夕べは古口の川に枕んだ旅館に宿つた、瀧はこの七里の間の川添ひの縦崖から落ちてゐる、左岸よりも右岸の方が殊に多い、伊呂波四十八瀧といふのは、唯のその瀧の數の多いことを示した言葉で、大雨の後には殊に瀧の數が殖える、私はこの日、大小七十餘條の瀧を算へた、中には五丈十丈といふのもあつて、青葉がくれにその姿を見せるのもあれば、岩壁の上に平布し瀧全體を現はしてゐるものもある、、瀧の姿もいろ〱で、新柳の雪を帶びて舞ふやうな優しいのもあれば、水精の簾を懸けたやうな美しいのもあつた。

數ある瀧の中で、白絲といふのが最も優れてゐたと

思ふ、私は彼岸遙かにこの瀧を看めながら、川の許に佇んでゐた、偶、見ると、岸の苔磯に魚を釣つてゐる人があつた、鍔の廣い麥稈帽子を阿彌陀にかぶつて、紺飛色の筒袖をき、四斗樽のやうな太い腹をつき出して、無造作に纐纈の兵兒帶を箍と卷いて其の端を挙結びにし、毛臑あらはに胡坐をかいて、悠々然として鏡なす青い淵にうく浮標をながめてゐた、年の頃は四十五六、黒い髯が胸を掩ふて垂れてゐた、その傍に一人の少年がゐて、釣つた魚を容れた魚筌を護りながら、手に持つ本を讀み耽つてゐるのであつた、私は近づいて帽子を脱いて瀧の名を訊いた、美髯の人は豊かな頬に微笑を綻んで、

『あなたも豫て聞いてをらう、ここは最上の四十八瀧ぢや。』

『あすこに見えますあの瀧は。』

『あの瀧か、あれは白絲瀧ぢや。』

『向ふに見えますあの瀧は。』

『爾うなァあの瀧は。』

美髯の人は徐かに少年を振り向いた。

『姥が瀧でございます。』

『うむ、爾うぢや、この外の瀧の名は、振分、女夫、不動の瀧、たばれ瀧、姥が瀧、瀧くらべ、清水瀧、宇野瀧、まだあるがわしは忘れた。』

『三段瀧に乳房瀧、大瀧、七つ瀧、馬蹄瀧、虹の瀧、欅瀧に萬能瀧』と、少年は主翁に代つて瀧の名を答へながら指を折つた。

美髯の人の風貌は、私の瞳に刻まれたやうにはつきり見える、尋常の人ではあるまい、功名富貴を塵の世に思ひ絶つて、儼骨を草澤に寄せてゐる無名の豪傑ではなからうかと、今に私は爾う想つてゐる。

七

神通川の上流、飛騨の西茂住、諏訪谷の瀧は、まことに幽邃な瀧である、越中滑川驛から立山輕便鐵道の終點、上市町の南二里にある大岩山日石寺の呵咜の瀧は、不動明王と夾侍の兩童子が彫られてある岩壁から二百八十尺の瀧を並べ懸けたるは壯觀である、木曾御

嶽の王瀧、清瀧、陸中一の關在の五串瀧、私はこの外に名ある瀧、名のない瀧の多くを觀たが、獨り紀州熊野の那智の瀧をこの記のうちに書き入れることの出來ないことを憾みとする、那智の記をここに缺くのは、瀧を繪いて晴を點ぜず、花を描いて蝶を添へないものである、橘南溪の東西遊記に、この瀧の事を記して曰ふ。

『瀧全體の趣きをたとへていはゞ、美人の羅衣をきて立ちたるがごときものなり、瀧の落つるところは一枚の岩にて壁をつくりたるがごときところなり、その石壁の横の廣さ五町も十町もあり、但し遠方よりはこの石壁樹木の梢に出で全く見えざれども、近よりて瀧みるあたりにては、兩方に程よく大木の杉多くありて、石壁の横廣くは見えず、水はまことに天より落つる心地すれど、幅は殊の外に狹く、大抵幅一間ばかりにみゆれど、廣く高きところなれば、實は二三間もあるべし、高さは直下五六十間と見ゆ、上の方暫らくは水筋通りて見ゆれども、それより下にては石面に水碎け色白く霧のごとく散りて、其の見事いひつくすべからず、下には大石多くありて、瀧壺といふべき淵はなし、その音も格別甚しからねば、瀧に近よるも神氣の遠々しくなるやうにはあらず、文覺上人の荒行も虚言にはあらじと見ゆ、皆人の高さは二百間、幅は三十間などいふに、仰山に實を失ふていへるなるべし、この瀧のみには限らず、すべてのもの賞美に過ぎて、實を失つると多しとぞ覺ゆ、されど余ゝ京の大佛を大なりと聞きをり、越中の立山を高しと聞きゐたりしが、初めて大佛を拜し、立山を望みたりし時は、左のみ大なりとも高きとも思はざりしに、日を歷て見るたびに、大になり高くなりしがごとく、此の瀧もいく度も見ば、高くも廣くもなるべきにや、大隅の國の瀧などは、是れよりも廣けれど、那智は全體に奇にして美なること言語に絶せり。』

とある、私は紀州では唯だ高野山と和歌の浦とを知つてゐるのみである、那智と瀞八町へと志ざして、三度まで志摩の鳥羽へ往つたが、いつも日和が惡くて船

が出なかつた、私は茲に南溪の記を錄して、いつかはこの未了線を了せやうと思ふのである。

私は前に瀧の中の旋毛曲りの吹割瀧の事を書いた、茲に又た流れざる瀧を記さうと思ふ、流れざる瀧とは氷の瀧である、私は氷の瀧を支那山東省の泰山で看めた、時は大正三年の冬十二月、私は青島の新戰場を觀て濟南府に行き、更に津浦鐵道で曲阜に孔子の廟に參詣し、還つて泰安府へ泊つて鷄なく曉に旅館を出で、支那五岳の宗といふ泰山へ登つたのであつた、五岳の宗といふと大きな山のやうに聞えるが、高さは僅かに五千五百尺、(これは私がマウンテン、バロメートルを持つて行つて頂上で實測した高さである)、我が國の岩手山後羊蹄山級の山である、但し支那歷朝の帝王がこの山に封禪したといふ神聖な山だけあつて、山の麓から絕頂まで、峻嶮なところに靑石の廣石階を築き上げてある、紅門宮の傍にある光緒八年に建てた碑文を讀むと、『麓より頂上に至る四十里、石磴六千七百餘級』と刻してある、獨りその石磴の雄大なるのみでない、その石磴の登り口には必ず石の穹窿門や牌門がある、王者の力でなければ出來ない業である。

私は苦力の擔ぐ竹兜子に乘つてこの山に登つた、極寒の十二月二十二日の事である、風はないが寒さはひし〳〵と骨を刺すやうである、山は麓に柏樹の並木があるばかりで全體が巖山である、一天門、天階門、紅門宮、萬仙樓、斗母宮、壺天閣を過ぎるとやがて回馬嶺、有名な歇馬の摩崖碑がある、字の大さ一尺ばかりその一千何百字が高い岩壁に彫られてある、こゝから眺めると蒼茫たる大地の一角に、遙かに黃河の横さまに天際から流れ來るのが見える、提封百萬、一矚に盡たずと支那人の言ふのは、あながち誇張の言ではない、中天門から雲步橋、朱塗りの欄干のある石橋が幽硐の上に架つてゐる、橋の欄干から向ふを見ると、紺碧の色の大巖が削り立つ、この頂から太い眞白な瀧が懸つてゐる、瀧とは見えるが不思議にも水音が聞えない、近寄つて善く見ると正しく瀧が凍つてゐるのであつた、高さは八九丈幅さは二間ばかり、それが大理石の

太い柱を立てたやうになつてゐる、小龍口の瀧といふ、橋を渡ると、白い自然石が床のやうに敷かれてある、石の處々に少し凹んだところがある、宋の眞宗が仗衞を停めたところで、石の凹處は御帳の柱を立てた跡だといふ、その傍に石の亭があり、中に自然石の卓子と同じ石の椅子が置かれてある、私は少時らくこの石の椅子に靠れて無聲の瀑布に對した、磵畔の石には歷代踏名士の題字が多い、中に袁世凱の子の克文の『寒雲』と書いた二大文字も見えた。

御帳岩から黃峴、それから五太夫松門となる、珍らしくもここに三株の老松がある、秦の始皇帝雨宿りをした松だといふ、そんなに古い松ぢやない、やうやく二三百年ぐらゐのものだ、五太夫松から登ると、向ふの岩壁に又も無聲の瀧が懸つてゐた、小龍口の瀧の倍もあらう、折からの日を受けて、宛がら七寶の太柱を建てたやう、光彩陸離まことに綺麗なものであつた、大龍口泉とは是れである。

竹仙坊の石門から十八盤の危磴を攀ぢて、泰山の絕頂南天門に達したのが午前十一時半であつた、曉の五時に宿を出で、登り盡すに六時間と半を費したのである、絕頂の碧霞宮、玉皇廟は壯麗なる宮である、廟の後に富士の山にある石室のやうな石屋がある、寒さが激しいので私は石屋の中へ入つた、一人の老翁が筒形の爐の中へ、鼠いろの隋圓な盆のやうなものをへし折つては燻べてゐた、重り合つた其の缺片の間から、火がちよろ〳〵と紅い舌を出してゐる、やがて盛んに燃えて、緋菊の花瓣のやうに四方へ噴き出した、鼠いろの隋圓の盆のやうなものは、牛の糞をかためたものである、薪材の不足の地方では牛糞を乾し固めて燃料とする、所謂糞火はこれであると私は思つた、老翁はその糞火の上へ土瓶を戴せて、私に熱い茶を飲ませてくれた、更にその糞火の中から一塊の薯を取り出して、手渧をかんだ手で灰を拂い落して、私に食へと侑めた。（終）

三日轉地

巖谷小波

場所

東京から二時間斗りの、ある避暑地の旅館の一室。

人物

一 紳士　　一 其妻

一 其娘（十五六）　　一 其息（十三四）

一 旅館の女中　　一 同番頭

時間

午後三時頃

紳士は縁近くの所に横になつて、今午睡から起きたと云ふ體。その妻はチャブ臺にだらしなく凭れて、鉢に盛つた桃を食べて居る。

（妻）ねえ貴君！　何うしませうねえ。

ト、少しおれた様に云ふ。

（紳士）何を何うしやうッて云ふんだ？

（妻）ですからさア、今ならまだ汽車があるでせう？

（紳士）汽車は晩の九時まであるよ。

（妻）そりや解つてますけども、夕方までに歸れるのかさア。

（紳士）馬鹿にまた急になつたもんだな。

ト、漸く太儀さうに起き上つて、肩をゆすつて顏を皺めながら、

（紳士）アヽ熱い〱。なまじつか寢たらすつかり汗になつちやつた。何でも可い、一杯くれ！

（妻）桃がありますよ。

（紳士）桃ア眞平だ。此處でうつかりそんな物やると、赤痢が恐いからなア。

（妻）アラさう。ぢやア廢さう！

ト、食べかけたのを下に置いて、

(妻) お茶にしませうか。

(紳士) 不景氣だなア。サイダアでも取つてくれ！冷えた奴をグウッとやり度い。

(妻) また、サイダアですか。

(紳士) 水の代りだ。一本取つてくれ！

(妻) 高い水ですからねえ。

ト、澁々立つて、柱に仕かけた呼鈴をならすと、直ぐ返事の鈴が鳴る。妻は元の座に返つて、

(妻) ねえ貴君。さうしませうよ。

(紳士) さうたア、何うだイ？

(妻) 今日中に歸りませうよ。

(紳士) 馬鹿に歸り風が吹き出したんだなア。まだ三日にしきや成らないぜ。十日のつもりで來たんだぜ。

(妻) こんな所に十日も居た日にやア、後の二十日は食べずに居なけりやなりませんよ。

(紳士) そりやア初めから解つた話ぢやないか。

(妻) そりやア然うですけども……それならそれで、それ丈の甲斐がありやア可いんですけども……第一この熱いこと！……自家に居る方がどんなに涼しいか知れませんよ。

(紳士) 全くだ。何しろから狹い所へ、大勢押込められた日にやアたまらんよ。それも自家なら裸でも居られるが……

(妻) まだしもお隣室の空いてた時分はようござんしたが、昨日からふさがつちまつて、襖は終始締切でせう、風の拔け所が無いんですもの。

(紳士) 此方はまだしも風上だから可いが、隣室の連中はたまるまい。

(妻) だから御覽なさい。まるで室にやア居やしません。

(紳士) 居ないと云やア、子供達アまた海水か。

(妻) エヽ……親の心子知らずですよ。

(紳士) 尤も親知らずつて所ア、此所よりもずつと浪が荒いが……。

(妻) そんか酒落どころぢやありませんよ。……ほんとに貴君まで吞氣だから仕方がない。

(紳士) 何がさ。

(妻) 何がつて貴君! かうしてこんな所に暮してると、お茶一杯だつて只ぢや濟まないんですからネ。

(紳士) イヤお茶代は可いが、サイダアは何うした?

(妻) ほんとにまだ來ませんね。

ト、身體を後へ倒す樣にして、再び呼鈴を押さうとする時、宿の女中が來て、

(女中) お召しになりましたか。

(妻) サイダアを何卒!

(女中) お一つで御座いますか。

(妻) エヽ!

(紳士) オイ、子供がもう歸つて來やうぜ。

(妻) 子供にやア桃があるから、可いワ。アノ一本で可いんですから。

(女中) 畏まりました。

ト、行つてしまふ。紳士は笑びながら、

(紳士) ひどく節減主義になつたネ。

(妻) だつて貴君! 自家で取りや、十一錢なのが、此所ぢやア十五錢なんですもの。

(紳士) ひどく高いな。何うして知つてる?

(妻) 昨日お歸んなつた○○さんネ あの奧さんを送つてつて、いろんな事を聞いたんです。何しろ此所は馬鹿に高いんですとさ。だから私 すつかり考へちやつたの。

(紳士) どうせ一旦自家の閾をまたげば、七人の敵があるつて云ふ位だ。その位の事ア覺悟しなけりや不可!

(妻) そりやア私だつて覺悟していますけども、それならそれで、覺悟の仕榮がありや可いんですけども……

(紳士) 所は熱し、室は狭しか?

(妻) それに食べ物だつて、なるほどお肴は新しいか知れないけども、お料理がちつとも口に合やしませんよ。貴君だつて然うでせう。お中食のフライお殘

しになつたぢやありませんか。

(紳士) あれは全く驚いた。材料は良いだんが、油が惡いんだネ。あんな物取らなきやよかつた。

(妻) ですからお止しなさいつて云ふのに、貴君が二品ぢやア可笑いつて仰有るから……ほんとに勿體ない。

(紳士) でも子供達アよく食つたぜ。

(妻) 何しろ食べ盛りですのに、海水でよく運動が出來るから。

(紳士) その勢でムシヤ〳〵やられちやアたまらんなア。

(妻) だから親の心、子知らずだつて云ふんです。

(紳士) 然しその子に曳かされて、こんな苦勞をするのも親心か。

(妻) 考へると全く親馬鹿ですねエ。

ト、箸で頭を掻きはじめる。所へ女中はサイダアを持つて來る。

(紳士) オイ此方だ！

ト、紳士は引よせて直ぐ飲みはじめる。女中は序に持つて來た色書の板を出して、

(女中) 晩程のお肴は？……今日は牛肉の良いのが參りました。

(紳士) 牛肉は横濱からでも來るかネ。

ト、その板を取らうとするのを、妻は遮つて、

(妻) 待つて下さい！……何なら後から頼みますから。

ト、目配するので、

(紳士) さうか。ぢやアさう願はう。

ト返してしまふ。女中は怪訝な顏をして引退つてしまふ。

(妻) ですからさア、速く極めて頂戴よ！

(紳士) 私ア何方でも可いよ。

(妻) 何方でも可いなんて、貴君が極めて下さらなけりや困るぢやありませんか。

(紳士) 無論私ア退却論者だネ。實の所を云やア、初めから別に進んでやしなかつたんだ。それをお前が

切りに云ふから‥‥

(妻) いゝえ、さうぢやありませんよ。子供達があんまり云ひますから、一度は何所かへ連れてつて下ださつて云つたら、そんなら丁度好い、今年は特別賞與が出たから、ほんとに何所かへ連れてつてやらうッて、貴君が仰有つたんぢやありませんか。

(紳士) そりやア云つたさ。だが、云はせる樣にしたのは誰だイ?

(妻) そりやア私かも知れませんが、そのまた私を云はせる樣にしたなア誰でせう?

(紳士) それが子供達だつて云ふんだらう。その又子供達に云はせる樣にしたのは?

(妻) お友達がみんな出かけるからでせう。

(紳士) さう云ふお前だつてまさか下地の無い事もないぜ。毎年夏ア何所の奥さん方でも、避暑や轉地に入らつしやるのに、私なんぞは何所も知らないからお話が出ても合はせる事が出來なくつて、ほんとに肩身か狹いッて云つたらう?

(妻) そりやア云ひましたワ。何事も經驗ですから‥‥

(紳士) 全く經驗だ。で、何樣な經驗が出來た?

(妻) ほんとに良い經驗しましてよ。

(紳士) それぢやア毎年出かけるとするかネ?

(妻) その代りこれからは、貴君に子供達を願ふ事にして、私ア留守番してますワ。その方がどんなに氣樂だか知れない。さうして私ア連れてつていたゞく代りに、そのお金で帶でも買つていたゞきます。

(紳士) こりや驚いた。するとお前の經濟論は、つまり利己主義に過ぎないんだネ。

(妻) 利己だか何だか知りませんが、帶なら後へ殘るぢやありませんか。

(紳士) 海水浴だつて子供が丈夫になりやア、それ丈健康が殘ると云ふもんだ。

(妻) 何が健康が殘るもんですか。一人ア折角年頃になつてから、すつかり日にやけてしまふし、一人は汐を飲んだとか云つて、昨日からお下痢をしてるく

ですもの。

(紳士) それでも彼奴等は得意なんだから、此所に何日迄も居たいんだらう？

(妻) それが何うだか知れないんですよ。

(紳士) 歸つて來たら一つ聞いてやらう。その返答次第で、此方も方針を定めるさ。

ト、紳士は立ち上ると、衣桁にあつた手拭とタオルを取つて、

(紳士) どりや乃公は一ト風呂入つて來る。

(妻) オヽいやだ鹽湯なんぞベタ／＼して氣味の惡い。……あれ丈でも私ウンザリするワ。

ト、云ふのを背にうけて紳士は出て行く。その後で妻は、座敷の隅のカバンをあけて取り散らした物をかたづけにかゝる。所へ庭傳ひに、娘と息子と歸つて來る。

(娘) 阿母様！　只今！

(息子) アラ、阿父様？

ト、二人共海水帽を縁へ投げる様に置いて、ベタリと腰をかける。

(妻) オヤお歸り。お前達海水ぢやアないの？

(娘) だつて今日は海が汚いんですもの。芥だらけ！

(息子) それに僕ア腹が惡いから、今日は入りませんでした。

(妻) ぢやア今迄何所に居たのさ？

(娘) 濱で遊んでたんですけども……

(息子) つまらないから歸つて來ちやつたア。

(娘) それにねエ阿母さま！　大變な方に會つたのよ。

(妻) 誰さア？

(娘) そら△△さんのお孃さん！

(妻) あの成金のかエ？

(娘) 素敵な風俗をして……お女中だの婆やだの連れて……まるで帝劇の女優見たい……

(息子) ありや、やつぱり見せびらかしに來るんだネ。

(娘) ほんとにたまらないわねエ。

（妻）別莊でもあるのか知ら？

（娘）やつぱし此所の家へ來たのよ。だからそら、昨日から大騷ぎして、二階のお客を退いて貰つたりしてたんでせう‥‥

（妻）アヽそれでお隣室まで閉がつちまたんだネ、豪勢なもんだねえ。

ト、何か感じた樣に云つて、急に思ひ出し、

（妻）お前達桃食べない？

（娘）私澤山！

（息子）僕も止します。

と、二人とも氣が無ささうに、チヤブ臺の側へ來て座る。その二つの顏を見較べる樣にして、

（妻）ねエお前達！

（娘）
（息子）何イ？

（妻）もつと此所に居たい？

（娘）何故そんな事聞くの？

（妻）まだ飽きない？

（息子）何うしてゞせう？

（妻）ナニネ、此所も思つた程ぢやアないから、‥‥今も阿父樣とさう云つてたの、いつそ今日引あげやうかツて？

（娘）アラ歸へるの？

（妻）厭カイ？

（娘）厭でもないけども‥‥

（妻）お前は？

（息子）僕ア何方でも可いや。

（妻）そんなら又改めて、何所か他へ行く事にして、一とまづ此所は切りあげにしやうぢやないか。

（娘）そんならそれでもいゝけども‥‥

（息子）すると、何時歸へるんです。

（妻）おんなじ事なら今日の中に！

（娘）まア忙しいのねエ。

（妻）だつてお前達も三日居りやア、もう避暑の味も解つたらう。

（息子）何日まで居たつておんなじ事だなア。

（妻）ほんとに然うだよ。何所へ行つたつて自家より好い所は無いからねエ。

ト、云ふ所へ、紳士は風呂から上つて來る。

（紳士）やア、お前達も歸つてたのか。

と、云ふのを聞きちがへて、

（娘）エヽ、阿父さま。

（息子）僕達も歸りますよ。

（紳士）おやア歸る事に極まつたか。萬歳々々！

ト、タオルを衣桁にかけ、手拭丈持つて緣側へ來て、

（紳士）チヨツ、又そろ／＼西日だ。折角の風路に、日除が出されるんだからたまらん。

（妻）そんな事云つてるより、そろ／＼仕度に掛りませうよ。貴君早く番頭呼んで、この事を云つてやつてくださいな！

（紳士）よし！　誰か呼鈴を押せ！

（・・・・）ハイ！

ト、押しかける所へ、まだ呼びもせぬ番頭が出て來て、

（番頭）ヘイ・・・御退屈樣で御座います。

（紳士）オヽ！番頭君、丁度好い所だつた。

（番頭）左樣で御座いましたか。實はそのお願があつて參つたんで御座いますが・・・・

（紳士）お願ひ？　何だい？

（番頭）實はその、甚だ恐入りましたが、御座敷の所で御座いまして・・・何分昨日から急に大勢樣入らしつたもんで御座いますから、その・・・少しはお狹いかも知れませんが、風通しはごく宜しい所で、それへお移りを願い度いと存じまして・・・・

ト、云ひ憎さうに云つて頭を掻く。

（紳士）その事なら心配にや及ばん。實はね、もつと厄介になる心算だつたが、急に用事が出來たんで、一とまづ引揚げる事になつたから、急いで勘定をして貰ひ度いんだ。

（番頭）オヤ左樣で御座いましたか。

ト、番頭は呆れて皆の顔を見まはす。此方は照れ隱しに荷物なぞかたづけにかゝる。所へ女中急いでやつて來て、何やら番頭に囁くと、皆まで聞かず呑み込んで、

（番頭）いゝんだ〳〵、丁度此所はお立ちになるから‥‥

ト、小言で云つた心算のものが、生憎此方の耳に入つた。紳士夫妻は顏見あはせて目を張る。番頭はコソ〳〵と、

（番頭）それでは只今御書付を‥‥

ト、急いで行つてしまふ。

（紳士）オイ茶代は何うしやうな？

（妻）馬鹿々々しいから、遣らずにお置きなさい！

九州アルプスに馬を驅るの記

黑頭巾

其一

●青田、茫々として吾が北窓の前にひろがり、稻の梢、遠近、均しく戰ぎて、涼風、賑々として、日本海を吹き來る。

●田の畔に、柿の木、棕櫚などの出沒するを望む。是等の雜木を超えて、青嶂一帶、畫屏を作すものは、青海島なり。青海島は日本海にては屈指の大島なり。吾が卓前を距ること二里ばかりなるべし。彼の青嶂を過ぎて、彼方には、鵬雲遠く垂れ、天を蹴る群濤、韃靼に續くなるべし。

●今、吾輩、日本海上の深川村に歸臥し、老母の病を護つて、日々、青田の涼風に浴す。母、病、漸く蘇するに及び、夜々、始めて鳴蛙の村樂を聞く。

◉朝より鳴蟬あり。薫風に鳴蛙あり。二者ともに未だ天地を占領するに到らず。夜深くして、蛙聲ますく\繁し。蛙聲、沓燈に戲ぐ。更深く眠覺むるの時、人靜まり、星斗森然、蛙鳴、屋を撼かす。乾坤、但だ鳴蛙あるのみ。

◉吾輩、從來、未だ此の如く蛙鳴を味はず。蛙鳴の中、自ら節調あり、律呂あり、滿天の蛙聲、自ら滿堂の音樂を爲す。假に、其の樂譜を詳にするを得ずと雖、其の合奏の複雜にして、變化に富める、吾輩をして暫らく時を忘れて、自ら心耳を澄ましむるに足るもの無くんばあらず。

◉窓を開けば一螢流れ入る。忽然として九州を憶ふ。此の一螢、豈、九州より飛來せるに非ずや。九州アルプスの芳草、化して螢となり、吾が筆硯を照らすに非ずや。

其二

◉九州アルプスを憶へば、身世の變化、流れよりも速なるものあると憶ふ。吾輩、先に豐後に淹留せし時、六旬の間、再び九州アルプスを攀ぢ、九州アルプスの再游を去ること、今、僅に二旬に滿たず。山を憶へば、草色、尙ほ我魂を招く。

◉蘇東坡、百步洪の詩に、水流の迅駛を詠じて、有如兎走鷹隼落、駿馬下注千丈坡。斷絃離柱箭脫手、飛電過隙珠翻荷といへり。七箇の比喩を連用して、迅駛の感、人に迫る。然れども人世の變化、眞に、此よりも甚だし。

◉九州アルプスに行くの途、三あり。第一、大分より竹田を經過するもの。第二は大分より直行するもの。而して第三は肥後、阿蘇山方面よりするものとあり。吾輩は、第一線、竹田を經過するの途を取れり。明年、再游を期して、阿蘇線を執り、併せて阿蘇山の大噴火口を觀んと欲す。

◉竹田より九州アルプスに向ふの線、途に三宅山あり。吾が新らしき友人白鷗、竹田に在り。頃ろ、三宅山に游び、一束を寄せ來る。其の中にいふ、此の山、竹田に對する一面、松樹森々として翠、滴る。林を穿ちて登れば、山頂に近くして、紅巖溪あり。登路、羊腸として右に折れ、左に折る。迂回する每に、或は祖母山の翠色を望み、或は阿蘇山の噴烟を望む。遠景、走馬燈の如く、變化、窮らず。

◉竹田は、蓋し、千山の底に在り。咫尺の間、此の好

展望の一峰あるを想像せず。景行天皇、西征して熊襲を討ち玉ひし時、豐國に入りて、玖珠より都野を經、今の肥後往道、竹田の西三里の菅生を過ぎ、阿蘇山の南麓に向ひ、南郷に出で玉へり。而して三宅山は此の征途に當る。

◉白鷗は、紅巖谿に立ちて、九州アルプスの展望に耽りつゝ、想像を逞しくしたるらし。彼の書中、更にいふ、景行、西征の雄圖、偲ぶに餘あり、神武、東征の時、神都の附近、若し高山ありて、九州アルプスの高原を大觀するに足らしめば、皇祖は定めて豐後水道を取らずして、陸路、此の途を北上し玉ひしならん。

◉皇祖東征軍の北上說は、吾輩、必ずしも贊成せず。陸路は難し、海路の易きに若かず。然れども九州アルプスの高原の展望、爽快なるは、人をして雄心を發せしむるに足らずんばあらず。

◉三宅山の半面、湯の原に對するとき、山形、山色、一變し、奔つて九重山の裾野に連る。九重山は卽ち九州アルプスの第一峰なり。

◉三宅山より湯の原に下るに、山中に、一茶亭あり。白鷗は記していふ、此の茶亭、「草枕」の茶屋に酷似す。店頭の駄菓子を、山の風、木葉を含んで吹く。庭に雞あり、七面鳥もあり。但だ亭主、極めて漢文を好みて、且つ養蠶に熱中し、隨つて「草枕」の趣致を缺く。櫻下の傳說無く、おなみのロオマンスも聞くを得ず。

◉白鷗、「草枕」を思ひつゝ、山を下る。渾べて林木無く、此の半面の山、悉く青氈の嫩草、青、秋を浸たして、途、迷ふこと無し。牧牛、三々、五々、泉に沿ふで涼を取る。

◉彼、曰く、嘗てガルスワーシイの on the Alps を讀み、牧夫の生活の長閑なるに憧憬せし事あり。湯の原の光景、詩中の、描寫に違はず。若し羊群に換ゆるに牧牛を以てせば、斯身は則ちアルプスに在るなり。僕、中國に生れ、日本に、斯の好風景あるを想像したる事無かりし。

◉彼は語を續いでいふ、行く〳〵九重山は眼中に近し。駿馬の長鳴を聞く。ブリオンの嘶けるにやあらん。麓に接して密林あり、山鶯と子規と亂れ啼く。旅舍、溪泉に倚る。夜、螢火、群がつて樓に入る。竹田を發せし時、既に、今年の梅干を食ふ。湯の原に來れば、枝上、尙ほ青梅を著く、山中、曆日無しと。

◉彼は附記して曰く、三宅山の記事、計らず長きに過ぐ、匆々、擱筆すべしと。吾輩は寧ろ、三宅山記の價

くまで長からん事を希ふ。彼の三宅山記を讀めば、吾輩、未だ三宅山に登らずと雖、九州アルプスの舊游、髣髴として見るが如し。

●三宅山は九州アルプスの片影に過ぎず。然れども其の記事、尚ほ能く吾輩を醉はしむるに足る。九州アルプスの游、樂しかりし哉。一游、畫の如く、再游も亦た畫なり。

●九重山の草色、今、如何。青、青、まさに天を染めなす可し。吾輩、嘗て、其の凝靑中に游び、羽化登仙の想を爲す。豈、期せんや、二旬の後、母の病を護つて日本海岸に隱棲せんとは。今より遠からずして帝都に歸るの後、紅塵十丈の裡、九重山の草色を回想する時、感、果して奈何ならん。

●蘇東坡、赤壁の賦、千古の快游とす。然れども前後賦の間、感興、自ら多少あり、吾輩の九重山游は、再游、感興、更に新なり。明年、三游せば、詩思、更に濃やかなるものあらん。九重山游は、赤壁游に勝れり。

其三

●今日、午餐後、天陰り、殷々として遠雷を聞く。驟雨來る可くして來らず。蒸暑殊に甚だし。髭を剃り、筆硯を新にして、青田を望む。既にして、遠天、雲垂れ、青田漸く凉意を催うす。稻梢の戰ぐこと急なり。北海、何處乎、まさに、東坡の所謂天外黑風吹レ海立、浙東飛雨過江來の快觀あらん。

●忽ち霹靂一聲、遠林、或は落雷を疑ふ。吾輩も亦た黑雲翻墨未レ遮レ山、白雨跳珠亂レ入レ船の痛快事、目前に現出す可きを翹望す。

●晩春、四月廿三日、吾輩始めて別府に入り、月下に別府アルプスを望む。別府アルプスの權威は由布、鶴見の二山なり、由布山は豐後富士と稱す。海拔四千尺に滿たず。然れども海に迫つて突立するを以て、特に秀拔の感を與ふ。

●別府アルプスは概して明麗なり。雪景の時、アルプスの觀を爲すべきのみ。由布、鶴見ともに火山にして噴烟薄く、遠見して、烟を見ず。唯だ雲烟つねに頂を纏い、動もすれば噴烟の感を爲すのみ。

●今、九州の火山、大に烟を吐くもの稀なり、殆んど無し。假令、噴烟するものありとも、これを關東の淺間山の大噴烟に比すれば、烟と言ふ可きほどのもの無し。平野次郞の歌に『吾胸の燃ゆる思に比ぶれば、烟

は薄し、櫻島山」といへるもの、今、ひとり櫻島のみか非ず。阿蘇山の烟も漸く薄し。

●噴烟は、天下、淺間山に若くもの無し。黑烟、蒼蒼として、天に登るを見れば、大魔王の出現を豫想す。然れども櫻島の噴烟の美しかりしも絶好の對照となす可かりし。

●淺間山の噴烟は、原始的の氣分を以て、雄觀を爲す。櫻島のは、碧海に浮びて烟を吐くに、其の麗はしき事青疊の上に香爐を置くが如しと、西遊記の著者は言へり。

●別府アルプスには、淺間の雄偉無く、櫻島の妍麗無し。吾輩、計らず、豐後富士の美觀を見たり。此の如き光景、嘗て、日本アルプスに見ず。

●吾輩、柚軒、一也と大分に遊び俥を驅つて、黃昏に東より、由布山に向つて馳する時、夕陽恰も山の背後に落ち、大光芒、山頂より滿天に向つて四散すること軍艦旗を宇宙に擴げたらんが如し。夕陽は由布山に隱れて、釋迦像の後光の如くに、山後より光明を送りつゝあるなり。

●此の夕陽の大光芒は、由布山の西、海に、日の落つるに由つて、此の奇觀を現出す。由布山には、つねに此の光景あり。而して吾輩の、偶、見得たるものは、其の殊に鮮明なるものなりといふ。

其四

●雨聲、靑田に落つ。白雨、遂に來る。涼、肌に透る。自ら筆の奔るを覺ゆ。

●日本アルプスは高峯、一萬二千尺。其の八千尺以上のもの珍らしからず。信州に入つて、遠景を望むに、群峯、天を摩し、八千尺以上に非れば殆んど山らしからず。日本アルプスの雪景、尤も可。

●日本アルプスの壯觀、目に在り。吾輩、既に、別府アルプスを見、五月三日を以て、別府を發して、竹田に遊び、友人白茅を訪ふに、彼、忽ち九州アルプスを語る。速に、九重山に一游せん事を促がす。吾輩の意中、九州アルプスを重んぜず。輕々に聽き過ぐ。

●吾輩、豐國に來るの前、吾か竹庵、豐後の山水を語つて嘖々として、九重山を絶讃す。推稱して天下の名山と爲す。吾輩、未だ肯せず。

●吾輩、先年、表九州を南下して、薩摩に入り、琉球に航す。海門岳、印象して忘れず。未だ遑なく裏九州を見ずと雖、海門岳ほどの名山を豫想せざりし。

●大分より、輕鐵に搭して、竹中に下車し、馬車を驅つて竹田に向ふに、既に、竹田に近くして、忽ち、林邱の間に秀美なる一峯を發見す。祖母山なり。

●井田村に代議士森環あり。田舍路に目立つ家なり。此の家を右にして、左に、田畝、高く林邱を擘ちて拓け、自ら風趣を爲す。林邱の缺くる處に、祖母山の青翠、恰も闕を排して來る。山頂、蕎麥の實の如くに、秀で〻靑し。

●竹田に到るの間、是より時々、祖母山を見る。竹田の町には、或は林間に、或は峯巒々踰えて、此の山、つねに遠景を爲す。蓋し祖母山は九州アルプス山彙の尤も美しき山なり。

●吾輩、未だ九重山を見ずと雖、屢、祖母山を見るに及んで、心漸く動く。九州アルプスに一游するを期す。幸然、白茅、之泉、櫻草生、吾輩を慫慂して、始めて竹田に入るの翌々日、端午の日を以て、九重山に向ふ。

其五

●暮涼に、白雨、僅に來つて、忽ち風吹き散ず。凉意も亦た散ず。日落ちて、蛙鳴、閑にして譁ならず。天暴く、凉味、草間の泉水の如く、微風を送る。

●五月五日、吾輩、白茅と共に、竹田を出でし朝を思ふ。白茅、駿馬を好む。彼が九重山に行くの志は、春風に、馬を、山腹に躍らすに在り。彼は九重山の草色を說き、駿馬を說く。彼、足、未だ竹田を離れずして魂、早く、九州アルプスの馬背に馳す。

●吾輩、紙上に英雄を論ず。此身、未だ馬背に跨りし事無し。平生、聊か以て遺憾事とす。心、窃に、馬上「英姿颯爽來ニ酣戰ニ」の書趣を憧憬せずんばあらず。

●聞說、九重山の裾野に、大分縣種畜場あり。多く駿馬を有す。白茅、嘗て一游して、不幸にして、鞍上に馳騁するを得ず。場の第一、ブリオンといふ。此の駿馬を以て、吾輩を乘せて、九州アルプスを大觀せしめんと言ふ。吾輩、且つ喜び、且つ危ぶみ、鞍上の夢を趁ふて、竹田を出づ。

●吾輩、實に、白茅と莫逆の友たり。近年相見ざること久し。今、久濶にして、相逢ふて、共に、手を携へて、名山を擘ち、駿馬を春風に躍らさんとす。又た是、斯生、得易からざるの決心事たらずんばあらず。

●兩人、步して竹田の町を行く。途上、農夫の芋を擔ふて賣るに逢ふ。旅の上に、一條杖を載す。賒ふて之を得る。輕く此の條杖を揮り、飄々として行く。

其六

●吾輩、竹田に往くの前、別府に在り。流川の若松屋に淹留す。吾輩の寓處は、三層樓にして、扇の間といふ。扇山を望むに宜しきを以てなるべし。

●扇山といふは、鶴見山の山腹、西北の一峯をいふ。扇を開いて倒懸するが如し。而して靑一色、宛も顏料を塗るよりも濃く、其の下に、農商務省の種畜場あり。

●靑く、美しき扇山は、別府アルプスの一精采を爲す。此の山骨の組成及び色彩の上に、興味ある變化を與ふるものなり。少くとも別府の背景として、一の畫趣を添ゆるものなり。

●吾輩、足跡、殆んど海内に遍ねし。天下の名山を見ること少しとせず。扇山の草色も亦た稱すべし。扇の間より四夕、相看て、相得たるは、此の草色なりし。他日、九重山を經來るに及んで、則ち、若し九重山無かりせば、扇山の草色、頗る誇るに足る可かりしを思ふ。

●山陽は天下を周遊し、風景論を試みしこと少からず。妙義山及び耶馬溪を推稱するに於て力めたりといふ可し。然れども彼や、山水を説いて、樹色、草色に精ならず。樹色、草色に重を置きしを認むるを得ず。山陽の山水論の中、自ら樹色草色ありといふを得ず。

●山水論は、專ら山水の配合、及び山水の形式を説けるものなり。彼は九重山も扇山も見ざりし。或は九重山をば望みしなる可きも、審かに其の草色を見ざりし。

●吾輩の所見を以てすれば、高野山の樹色。九重山の草色、此の二者、海内に秀出す。日本の山水を説く者此の二者を、併せ觀ざる可らず。此の二者は、共の山形も、畫趣に富めり。殊に九重山、峯勢、豪宕、自ら九州第一峯の威儼を有す。

●九重山は九州アルプスの冠冕なり。此の山、此の草色に向つて、驂馬を驅る、此の樂、古詩人、未だ容易に夢想せざりし。

其七

●竹田は、譬へば螺螄の殼を横斷したる一面の如し。或は、胡桃の實の斷面にも譬ふべし。其の旋回する堅壁は、總べて溪山にして、山に沿ふて稻葉川、旋回して流る。溪山に倚つて、家あり、町あり。而して山、甚だ高からず。遠山、懸壁を踰えて、蒼翠を竹田に擲

ち來る。

●竹田人、自ら字して蓮根町といふ。其の蠑螺の一壁を出るに必らず洞道あり。洞道を郷語に、「ヌキ」といふ。町の中に幾多の「ヌキ」あり。町を出る必らず「ヌキ」あり。豊後の人、竹田を語れば、「ヌキ」を聯想す。

●吾輩、竹田の白茅書樓に寓し、日に鶯聲を友とす。庭上、柳陰より南望すれば、前峯の樹梢に山青を望む。山形甚だ奇なり。黒岳といふ。黒岳に續きて大仙山あり。此の二峯は、九重山の右肩なり。

●五月五日、男兒節、九州アルプスに駿馬を驅るの興味、頻りに吾心を煽る。久泉、櫻草生も來會し、馬車を僦ふて、會々橋を渡る。會々橋は稻葉川に架す。橋より上流を望めば、溪山、情趣を帶ぶ。

●吾が馬車、西南を指す。町を離れ、「ヌキ」を過ぎ、郊外に出づ。阪路、緩るやかに、軾、つねに上指す。蠑螺の殼を出で、僅に半里。風光、忽ち快濶、祖母山、其の全姿を現はし、傾山、これは近く、肩を聳めて奔るに似たり。此に來つて、前路の壯觀、頗る想像するに堪えたり。

●車中の人、交、祖母山を語る。祖母山は傳說の山なり。山腹、森林に富み、桐と松と多く、桐には稀世の巨材あり、ついじも多し。盆栽の松も、概ね此の山より出づ。

●植物帶の興味は、九重山よりも此の山に多しとすべし。高山植物の種類も亦た此の山を豊富なりとす。或は大蛇、棲老すと傳ふれども詳かならず。傾山は、山高、相似て少しく低し。山頂の傾きて、祖母山を避くるに似たり。傳說には、上古、此の山、まさに祖母山を凌がんとす。山神、怒つて其の肩を打つ。故に、此の山、萬古、傾きて稱ゆといふ。

●車窓に見る溪谷、行くに隨つて景情いよ〳〵饒し。小邱、細泉、層々、趣を爲す、看て飽かず。假令、九重山に到らずと雖、此の道、惡しからず。竹田を出で一里半にして、城原あり、二里餘にして湯原あり。三里餘にして、久住に到る。久住は九重山の裾野の町なり。

●城原には、道に傍ふて左に、八幡宮あり、豊後七八幡の一と稱す。祠殿、宏壯なり。右に一峯あり、景行西征の遺蹟と傳ふ。其の右に騎群山峙つ。峯上、孤松秀で、枝幹、一方に傾き、高く、軍旗を捧ぐるに似たり。鎭西八郎の古城址と稱す。

●三宅山は、舊藩の獵場たり。吾輩、藩主の獵圖とい

ふを、竹田の小學にて見たり。猶圖十數本、描寫精巧、まさに數年の工力を費せしなるべし。此の山、殖林、熊澤蕃山の設計に本づくと傳ふ、別に、文書の徴證す可きものあらず。（未完）

東商新會頭と新設拓殖局長官

鐵拳禪

一

政界とは直接何等關係なく、又關係なかるべき筈の東京商業會議所が政黨者流と歩調を共にし、對米問題に、電燈併合問題に、對支問題を提げて當局者に肉迫し、他面世論を喚起して大に運動する所ありたるは、大正二年の交なり。其の頃よりして東商の勢力漸く張り、實業家の鼻息も亦荒くなりて、動もすれば政界に容喙し、金權の辣手を以て政府者の背部をどやし、以て其の心膽を脅せり。殊に大正四年大隈内閣が在野の絶對多數黨たる政友會と衝突し、帝國議會を解散せんとするや、東商を中心とせる財界の勢力が働き來りて、朝野兩者の間に立ちて調停を試むるに至れり。其の運動素より効を奏せざりしと雖も、實業家が横合より出娑婆り來りて政界に容喙の端を啓けるの事實は、未來永刧抹殺すべからず。今後再び事ある場合、特に覿面に財界の利害に關係ある際には、東商の中心の勢力が活動し來りて、その形式の肉迫と、調停と、妥協との何れを取るにせよ、政界に容喙するや明かなり。東商の政界に容喙するの可否は暫く措き、斯かる傾向を呈せる以上は、會頭の人物も亦何程か政治を理解し、時勢の推移を知る所の進歩的頭腦と、事務的手腕以外に更に一種の手腕と、眼識とを有せる者ならざるべからず。昔氣質の素町人、乃至手固い一方の商法家と云ふが如き、算數の打算は明かにして而も取引上の信用を有するのみにては、未だ東商の會頭たるに適せず。苟も衆を率ゐ、若くは指導する以上、信用と德望の無かるべからざるは勿論なるも、手腕の之に伴ふものなくんば、單に一個德望の偶像として若くは信用の木偶坊として、狡猾なる傀儡師に操縦され、自主的活動を試みる能はざるなり。東商の常議員中、是等德望の偶像、信用の木偶坊無きに非ざるべしと雖も、信望と智腦と手腕とを併せ有する者は、甚だ稀なり。是に於てか、特別議員たる法博添田壽一を拉し來らんとせしも彼れが現に某新聞社長たり、縱令會頭となるも之を辭せずとするが故に

其處に政黨的感情の纏綿するものありて、主務省の認可を得難き事情（農相仲小路の峻拒）あり。其の間に東商の形勢一變して、添田推薦を裏切るものあり、寄々協議の結果再轉して藤山雷太を擔ぎ出す事となり、遂に之に決するに至れるなり。

藤山は多年常議員の席に列り、東商の爲に盡瘁せりと云へば、年の功だけにても、その盡瘁を認めざるを得ず。然らば如何の點に就て盡瘁せしやと反問さるれば、其の功勞の一々を叙説するに苦しむべけんも、彼れが兎も角も東商の動き手として、財界の一勢力として、活動し若くは盡瘁せるは爭ふべからず。元老澁澤榮一の隱居し、元勳中野武營の引退せる上は、會頭の椅子の當然自分の手に歸すべしとは、早く彼れの期待せし所なるべく、彼れの周圍者も亦固く信じて疑はざりしなり。然るに彼れの性格を好まず、彼れの辣手を厭ふの徒は、之を敬遠して會頭の椅子を與へざらんとせり。就中、男澁澤・小野等の元老元勳、及び其の周圍者は法博添田の推薦に努めたるの形跡あり。由來藤山は三井系の人物にして、故中上川の乾兒なり。而して其の妻の妹婿なり。往年か澁澤の經營せる王子製紙に入りて、男の女婿たる社長大川平三郎と衝突し、之を社長の椅子より去らしめたることあり。澁澤系の人々は、今日尚彼れに釋然たらざるものありて、彼れの勢力の增大せん事を好まざるに似たり。併し男澁澤一個としては、必ずしも彼れを排斥せず、却て彼れの才氣を利用せんとせり。夫の日糖事件の際、男は彼れを推薦して日糖に入らしめ、其の整理を托したる程なれば、表面財界元老の反感を買ふが如き事由の存在するものなしと雖も、男は彼れの才氣餘りありて德望足らざるを知るが故に、會頭たるの資格に就て疑を挾まざるを得ず。是れ彼れの才氣と辣腕を信じて推擧せしが如く、彼れの性格と信望に疑惧して、會頭の椅子を與ふるに躊躇せしに非ざるか。蓋し中野の藤山觀も略澁澤に一致し、藤山の他に學識手腕德望の優れたる人物を以てせんとせしに非ざるか。

從來東商の會頭たる、才氣あり、辣腕ある活動的人物よりも、寧ろ財界に勢力あり、信望ある調和的人物を必要とせり。何となれば、東商會頭は或意味に於ける財界の肝煎役にて、會社銀行の紛議内訌等の居中調停の任に當り、圓滿なる解決をなすの能力なかるべからざればなり。世の辣腕家と稱するもの、多くは破壞性を有す。妥協調停の結局よりも、革新の局面を展開す。藤山は妥協調停の適材に非ずして、革新の斷行家なり。之が經營乃至整理の蹟を見るに、悉く改革ならずんば斷行なり。姑息の膏藥療治に非ずして、外科醫の荒療治なり。消極的要領なくして積極的進取の氣分漲る。乃ち彼れが改革し、整理する所のものは、信望に非ずして、其の才氣と辣腕なり。年齡の差異、人物の大小に由ること勿論なりと雖も、藤山の性格は全然男澁澤、中野と別趣にして、彼等に見るが如き肝煎性を發見すること能はず。

二

人或は藤山を目して、東商の桂なりと云ふ。桂の字、往々誤植されて

柱となるも、彼れが會頭となれるが故に柱なりと謂ふに非ず。彼れが行動の、曾て元老元勳を暗に排斥しつゝも、巧に之を擒縱して内閣を組織せる公桂の遺口を忍ばしむるものあるを以てなり。彼れに公のニコポンと魔力あらば、尙一段の生彩を添ふべしと雖も、機略あるも局量に過ぎ才氣あるも包容豐かならざるの憾あり。財界の桂は、政界の公桂ほどに發達し、天下取の大芝居を打ち得るやは疑問なり。

男澁澤に對しては、中野は何となく素人臭き所あり。假に内閣大臣に見立つる時は、政黨出身の武富・箕浦の如き感あり。藤山に至りては、事務官出身の仲小路・若槻級の人物の如く思はる。口も八丁手も八丁なりと雖も、大臣の貫祿に乏しきが如く、財界の頭目たるべき威望の手腕に伴はざるものあり。將來男澁澤の財界に雄視せるが如くなる能はず、長く事務官級の會頭として、財界の一仕事師に終るや未だ知るべからず。

藤山の何程か中野に似たるは、彼れが年來政治に着眼せることなり。凡そ實業家は十呂盤の術を數ふるに是れ急にして、經世的見地に立てるもの殆んど無く、偶ま代議士となる者あるも、其の肩書を石碑に刻むの便宜より來れる者多し。此の間にありて、中野は嶄然として頭角を拔き石碑議員と全く其の選を異にし、營業稅問題其他財界の消長に關する諸問題の爲に奮鬪せり。其の辯舌を以てするも、優に論壇一方の將たるを得べかりしなり。藤山は未だ代議士たらざるも、年少にして政治に奔走し、郷里長崎縣の縣會議員となり、次で縣會議長に推され、鳥なき里の蝙蝠の如く翺翔せり。而して更に其の勢力を張らんが爲に新聞紙の發行を計畫し、初期衆議院議員の總選擧に當りて鹿を中原に爭はんと欲せしも、當時二十九歲の無資格者は、その地方的名聲を以てするも如何ともする能はざりき。剩へ彼れの養家たる伊吹氏は、彼れ政治運動及び新聞紙の計畫を喜ばず、家風に合はざるを理由として、此の野心兒を追放せり。この追放に由りて彼れは折角贏ち得たる地方的勢力と政治上の野心とを併せ擲たざるべからざるに至り、孤影悄然秋風に吹かれて再び都門に入り、三井家の執行たる中上川の幕下に投じたり。中上川は彼れの三田出身にして、才氣あり、手腕あるを鑑識し、直ちに登用して三井銀行抵當係長の要職を授けたり。是れ實に、彼れが財界の出立點にして、其の人物を知られたるの最初なり。中野が地方の一小吏より身を起して中央の官場に入り、馬鐵に成功して今日の聲望と資富を築けるとは其の行徑を異にするも、財界に轉じて驥足を伸ぶるを得たるは一なり。

其の富力を以てすれば、藤山は百萬圓と稱され、優に中野を凌駕せり。中野の大に儲くべき事業に關係し、大に儲くべき地位にありながら、大に儲ける事を敢てせざりしは、偶ま彼れの利を捨てゝ名を取れるを證するものならずんば非ず。然るに藤山の關係せる會社の到る所不結果を招けるに反し、彼れが富力の增大せるは、目的の爲に手段を擇ばずして驀進し、儲けんが爲に腐心焦慮せしの結果たるなり。見よ、彼れは芝浦製作所の所長となり、鋭意内部の整理と外部の擴張を圖り、特に電氣機械製作の如き積極的施設を設みたるも、周圍者の非難を受けて其の地位を去らざるべからざるに至れり。更に見よ、王子製紙に入りて浮澤派の勢

力と衝突せるが如き。明治三十六年三電合併に際し、彼れは街鐵専務として最初非合併説を高唱せるにも拘らず、株主總會の前日に至りて卒然變說せるが如き。同志と共に設立せる秦東同文局の不成績なるや、已れ一人責任の地を脫して恬然たるが如き。何れか失敗の歴史にあらざる。彼れは、團の非難を怖れずして積極的行動を執るの勇猛果斷ありと雖も抵敵の强き一面には非常の冷酷を敢し、不德を强行するも尙辭せざる底の慓悍あり。この慓悍性は、到る所に他の勢力と衝突し、而して多くの敵を作り、又多くの非難を崇れり。然れども、彼れは未だ曾て非難の爲に屈せず、一方に打たるれば、他方に頭を擡げたり。是れ親分中上川の庇護に依るべしと雖も、彼れが才略、縱橫にして、手腕敏辣の致す所ならずんば非ざるなり。

併し彼れは自已を知らざるほど、自己の手腕に心酔するもの非ず。彼れは自已の手腕を揮ひ過ぐるの結果、世人の信望漸く去らんとするを見て、自ら省みる所あり、慓悍の度に手心を加ふるに至れり。先づ日本火災に入りて何程か成績をあげ、以て在來の不評線を脫し、次で日糖の社長たるに及んで、亂脈なる社政を整理し、藤山の藤山たる手腕を事實の上に說明せり。その整理の際に用ゐたる辣腕、素より尋常のものに非ざりしも、世の非難を受けざりしは、尋常の手段を以てしては整理の目的を達する能はざるを知れるが故なり。蓋し革新整理、荒療治は、彼れが得意の壇場にして、他の何人の追隨をも許さざるなり。

業の人にして東商會頭となる、前二者の會頭たると其の遣口おのづから異ならざるを得ず。中野の時代にすら時局に容喙して金權の氣味を見せたり。近年漸く機鋒を藏め、虎質にして羊皮を蒙り、信望を得るに汲々たるも、野心火の如く烈々たるものあり。一たび地位を得るに於ては、性來の慓悍は再び彼れが脈管に甦り、東商の勢力を緊張せんが爲に如何の手段を講ずるや測るべからず。多少の閃光を發する彼れが經世的眼光と、何事をか成さざれば止まざる彼れが活動的手腕とは、單に居中調停の肝煎役を以て滿足する者にあらず。彼れが東商會頭としての疑問も玆にあるが如く、彼れが東商の面目を一新して案外成績をあげ得べしとなすも亦玆にあり。信望第一の東商會頭の椅子に、慓悍辣手の新人を迎へたるは、今回が始めてなればなり。

三

內閣九省の外に更に一省を増設すべしとは、今春總選擧前後よりの取沙汰なり。而して其の増設さるべき一省は、農商務省を兩分して農務省及び商工務省となすか、拓殖務省を復活するかの、二者孰れか一なりとの事なりしも、專ら後者を復活するの現代の要求に叶へりとなせり。拓殖務省は明治二十九年三月第二次伊藤內閣の時、臨役人物配置の關係上子爵高島鞆之助を祭り込むべく新設せるもの。所謂人の爲に官を設けたるなり。翌年九月第二次內閣の時、彼れの陸相專任たるに至りて、此の官を廢止せり。今日は當時と事情を異にし、我が新領土及び勢力範圍の增大せるを以て、別に拓殖務省を置くも可なるの形勢にあり。然るに此の

一省の増設が、何となく政友會に與ふる好餌の如く思惟され、黨人懷柔の爲に官を設くるが如き誤解を招けり。明治四十一年第二次桂內閣の時拓殖局は新設され、男後藤新平其の總裁となり、四十四年第二次西園寺內閣に及んで元田肇之に任ぜられたる關係上、後藤が拓殖務省の復活を主張すれば、其の大臣として指目に上り專る者は元田なり。是に於てか拓殖務省は政友會の爲に設けらるゝが如く思惟され、不都合少からざるを以て、其の規模の小なる拓殖局を増設する事となり、先年の總裁は親任官なりしが、今回の長官は勅任官とせり。即ち黨人の濫官を、官制上に於て豫防せるなり。而して其の官制は近く發布されんとし、其の人選の發表又近きにあり。

拓殖長官の何人なるや未だ明かならずと雖も、一時殆んど確定されたるが如く傳へられたるは、法學士秋山雅之介なり。彼れは統監府時代より勤續せる朝鮮總督府參事官にして、首相寺內及び翰長兒玉とは別種の深き關係あり。彼れを拔擢して拓殖局長官たらしめんとするは、年來の公的關係よりするも、自個の政策を實行する便宜よりするも當然なり。其の名聲甚だ顯はれずと雖も、官僚の型典的人物にして、而も事務的手腕あり。久しく朝鮮にありたるが故に、新領土の經營に關しても、相當の見識及び手腕を有すべしと見るべき理由あり。然れども、之を多年關東都督府民政長官たる白仁武に較する時は、其の人物、閱歷、手腕に於て、多少の遜色あるを免れず。男後藤或は斯の人を推薦して、其の手腕を揮はしめんとするに非ざるか。それかあらぬか、近時傳ふる所に據れば、秋山を以て民政長官となし、白仁を移して拓殖局長官たらしむるに決し、或時期まで法制局長官有松英義之を兼任すべしと。此の說にして眞ならんか、白仁の拓殖局長官たること疑なかるべく、吾人も亦彼れの登用を以て、適材を適所に配するものと謂はんとす。吾人豈好んで、彼れに世の所謂新聞辭令を交附する者ならんや。

白仁は文久三年筑後の柳川に生れ、當年五十五歲にして、藤山と同年なり。其の年齡を以てすれば新人と稱すべく餘りに薹が立ちたりと雖も六十七十歲の濟人物の尙勞力を支持する今日、彼等を目するに財界又は官界の新人を以てせざるべからず。實際彼等は今日以後が働き盛りにして、其の働き振の如何は、志す所の絕頂に達し得るや否やの運命を決す。新人白仁の如きも、單に其の地位を死守して、事務官級の人物に甘んずるに於ては、將來の發展は期すべからず。この點に於て多少の生彩ある多望の將來を有するが如く思はるゝは、彼れと競爭の地位に立つ所の秋山なり。秋山は彼と同年の赤門出身にして、偶ま明治二十三年の秀才輩出期に際會せり。一は英法科の中軸にして、一は政治科の中軸以下なり。官學の成績を以てすれば、白仁は秋山に優らずと雖も、官途に就くに及んで、其の才幹を認められ、白仁は儕輩を拔いて、夙に著名の人物となれり。然れども其の名の著はれたる割合には、其の躍進遲々たるものあり。科を異にすと雖も、同年出身の柴田家門は文相となり、子石井菊次郞は外相となり、而して科を同じうせる床次竹二郞は鐵道院總裁となれり。縱令彼れが親任官となりたりとするも、異常の躍進とは稱すべか

ず。況んや勅任の拓殖局長官たるに於てをや。秋山と雖も亦然り。

四

白仁の父は伯立花の家従にして、頑固一徹の律義者なり。彼れは此の家庭に人と為り、又幼時より伯立花の學友となり、共に柳川中學を卒へ上京して一高に入り、赤門を潜りて、型の如く卒業せり。彼れは床次と同じく苦學せし方にて、邊幅を修めず、蠻殼黨を以て鳴れること、又貧乏者の側に洩れず。既に蠻殼を以て知れるが故に、其の思想も從つて保守的色彩を帶び、堅實を以て處世の秘訣と心得るに至れり。されば彼れの生活は本實業にして、些の華やかなる所なく、一種の交際術を以て他を魅するが如きニコポン振は、到底彼れに望む能はず。其の妻を迎ふるや、先づ自然の經驗より學び來れる澤庵の済方を之に教授するが如き、極めて地味なる、堅實なる生活をなし、奢侈と浮誇とを厭ふこと蛇蝎も啻ならずと云ふの有様なり。曾て第一部長として北海道に赴任せる時の如き、管内を巡廻するに三等客車に投じ、羊羹色の古服を一着し、一人の屬官をも伴はざりしに見るも、其の良吏振を窺ふに足れり。斯の如く彼れは、個人としては質素節約にして親切なる好主人にして、公人としては清廉潔白にして嚴格なる良吏なり。牧民官としては産業の發達に期し得べけんも、地方開發の積極的施設を試みるが如き、多少の冒險を含む事業を起すは其の柄に非ず。彼れは頑固なるも、圭角の甚しからざる平凡人にして、何人とも衝突せず、何人にも親愛さると雖も、毅然として守る所は乃ち在り。若し彼れを好まざる人ありとせは、そは彼れの陰性にして、生彩煥發せざるの點なるべし。

斯の故に、彼れは内務の神社局長、文部の普通學務局長を以て、最も適任なりとせられたる事あり。彼れが文部より關東洲に轉ぜんとするに際し、彼れの學友にして彼れを引き止めたる者一二のみに非ざりしなり。然れども、彼れは拓殖事業に興味を有し、自ら信ずる所あるが故に、毅然起ちて民政長官となりて新領土に赴けり。彼れは夙に拓殖に關する研究を積み、北海道に於て之を實地に試み、又拓相高島の下に課長となりて大臣の仕事を行ひ、且北海道教科書を編纂して文相井上の稱讚を贏ち得たり。是れ後年普通學務局長たるの素地を作れるものなるも、彼れが拓殖に關して見識あり、根柢あるを知るべきなり。

白仁の始めて一般の視界に映ぜるは、此の學殖、閲歴にあらずして、實に栃木縣知事として谷中村事件を處置せるにあり。彼れは短刀を飲んで訪問せる田中正造に快く接見し、諄々として虎狼の如き田中を說き伏せ、以て危地を脱せしのみならず、相互に釋然として手を放てり。是れ彼れの至誠と膽力の賜にして、徒に策を弄する人々、若くは才氣を負ふ者の成し得る所に非ざるなり。而して谷中村事件大會を東京に開かんとするに際し、豫め警視廳より許可すべや否やを電問し來れるに對して、自由に放任するも可なりと答電せるが如き、其の態度の綽々たるものあり。彼れは必ずしも自由を尊ぶの人に非ずして、事に由りては官僚的壓迫、乃至干渉を加ふることあるも、夫の酷吏の如き無謀を敢てせさる

のみ。彼れの時に無能なるかに見えて、比較的好成績をあげ得る所以のもの、一に此の官僚的偏見の稀薄なるに由る。

之に反して有松は純官僚式人物にして、奇策縦横、才氣潑溂なり。譬ふれば鋭利なる匕首の如く、鞘を拂へば炎発たる凄味あり、引けば即ち血出でずして、肉先づ裂くる底の切れ味あり。法制局長官にして、首相寺内の懐刀となり、長官の身を以て首相の仕事をなすとさへ稱され、隱然現内閣に重きを成すは世人の知る所なり。獨逸協會學校の出身にして鼻柱强しと雖も、而も如才なく振舞ふの怜悧あり。拓相ならば差詰め内相後藤の兼任を希望する所なるべきも、長官なれば一時有松の兼任となり、其の配下の人選を了して、然る後專任者に引繼がんとするにや。但しは秋山を任ずれば白仁に不滿あり、白仁を任ずれば秋山に不平あり、其の均衡の得難き者ありて暫く有松の兼任する者なりと推せられざるに非ざるも、其の閲歴よりして白仁の拓長に進み、秋山の民長に据るの順序とせざるを得ず。其の赤門出身の同年如何は、問題となすに足らざるなり。動もすれば情弊を釀さんとする拓殖局には、敏腕の濁内派よりも、堅實なる手腕家を以てするを可とす。吾人の白仁を推す、必ずしも最高理想的の長官なりと云ふには非ざるなり。(大正六・七・二三)

浴衣姿の美人に對して

拜啓。時下益々御淸榮奉賀候。扨八月一日發行の「中央公論」に於て

「浴衣姿の美人に對して」

と云ふ題にて、知名の文士畫家數十氏の之に對する御感想を蒐錄致したき計畫に有之候へば、炎暑堪へ難きの候、寔に御迷惑の儀と恐縮千萬には存候へ共、廿二日中に相届き候樣御回答賜はり度伏して祈上候。其瀟洒なる、若くは華美なる、若くは淡泊したる大模樣の浴衣を透して窺はるゝ婦人の容姿美・肉體美は、獨り夏期にのみ其鑑賞を許されたる一つの特權とも存ぜられ候へば、平生藝術美の眼識高き貴下等の詩眼畫眼に映じたる御觀察によつて、普通一般人の美感を純淸にし、美眼を向上せしむるを得ば、獨り我等編輯者のみの幸福に止まらずと愚考仕り候につき、何卒枉げて御回答の程幾重にもお願仕り候。頓首

以下に掲ぐる數十名士の感想は右の如き問に對して賜はりたる回答なり。玆に謹んで寄稿家諸氏の御厚意を謝す（編者しるす）

○　坪内士行

拜復、昔より楚人冠氏以上に日本服を愛しをり候小生も、近頃の日本人が日本服を着こなす術の巧みならぬを嘆かはしく存候、浴衣姿などにては尙更らアートが大事に候、サラリと着なし、襟をしごいて、帶をキユツとしめる手際一つで姿の整ふ所に日本服の味も美も有之候、その意味で小生は藝者の浴衣姿を佛蘭西、伊太利の美人の夏姿よりも目出度きものと存候、色黃き日本の女には、肉體美は多く求めかね候へども、アートを凝らしたる髮の形、涼しき帶、輕やかな浴衣の裾を風に吹かせて、水色か、緋か、淡紅色か（改良スカートは眞平々々）蹴出しのハラ〳〵とちらめく姿は又なく嬉しきものに候、素人諸美人にアート研究を熱望致し候。

○　小川未明

浴衣姿の女を見るだけでも、東洋に生れたことを感

謝します。派手な快活げな縞柄は陰氣な、もしくは醜い女をも一様に美しく見せるものです。しかし、晝間は肉體上の缺點や、其の貧弱な顏付などが明かに分つて興を削ぎますけれど、夜の燈火に映し出された女は、すべて美しく思はれます。而して、こんなことすら限りなく生に執着を感じさせます。

○

鏑木清方

浴衣姿の女の髪は銀杏返し最もふさわしく丸髷これに次ぎ島田これに次ぐ、襦袢と足袋は用ゆべからず、年頃は二十より三十位まで盛りなるべし。場所は水に近き下町の黄昏がよし、かゝる際に行き逢はゞ常にはさのみ目を惹かぬ人も見違へる程美しく見ゆ、都の女の夏姿これに勝れるはあらじと思ふ。

○

高島米峰

美人といふも皮一枚、咄、這の一個の腐肉團。などと、悟つたやうなことを申しても、美人を見れば、矢張りその美しさに打たれ申候。而して、三枚襲でも、浴衣姿でも、美人に變りはなかるべきか。されど、小生は、冬の美人の重くるしきに比して、夏の美人の、如何にもさつぱりとせるを採るべく候。世人或は、夏の美人の、挑發的なるを云云するものあれども、そこが卽ち、美人をして、一層美しからしむる所以と、渇仰措く能はず候。敬白。

○

松崎天民

「浴衣姿の女は美しい」と云ふ。女自體が美しいのか、或は夏と云ふ特殊季節の背景や周圍が、浴衣姿の女を「美しく見せる」のか、審美上に、多少、論議すべき餘地がある。けれどもこゝには、「浴衣姿の美人」と云ふことを既定の事實にして、少々御たくをならべる。

「夏の生活」は、人間を自然に近寄らせ、原始的に還らせる。男の犢鼻褌一貫の裸體や、女の羅物や浴衣姿は、正に人間が技巧的の扮飾から、一歩を「自然」に叩頭した一事象である。羅物まとへる「夏の白日(まひる)の女」や、浴衣を着た「夏の夕暮の女」は、「生れたまゝの姿態」を、其の時代の風俗と習慣と道徳とが、許す限りの極度にまで、暴露したものである。そこに「夏の女」

の七分の容姿美と、三分の肉體美とが相交錯して、殊に異性たる男の感情を刺戟し煽動し挑發する。

けれども女自體は、決して美しいのではない。浴衣と云ふ一種の衣服の色彩や柄合と、それに配合された帶の模樣と色彩とが、女の肉體の輪廓を、深く強く掩ひ隱さぬ程度に、技巧的に調和された迄の美しさである。從つて細い白や茶の絣の浴衣を着る中國筋から九州路の女には、特殊の「浴衣美」と云ふものがない。同じ中形や絞りでも、經濟上の打算から、主として地味な黒つぽいものを用ゐる京阪の女にも、際立つた「浴衣美」が眺められぬ。夏の女の浴衣美は、中形や絞りの白ッぽい派手な物を好んで着る「東京の女」のみが、單りこれを領有して居る誇である。

然し浴衣姿の女が、その姿態の美を「强く發揮する」にも、亦た「美しく見える」にも、主として「時」と「背景」との關係があることを閑却してはならない。同じ浴衣姿の女でも、正午から午後四時頃までの日盛りには、たゞ半裸體的の肉體から、一種の感情を聯想させるのみで、そこには何等の「美」とすべき要素がない。けれども黄昏から初夜の頃まで、「夜」に見る浴衣の女は、白く浮いて瀟洒に、「夏の夜」を彩る精かとさへ疑はれる。但し其の「背景」が、茶の室の箪笥であつたり、お臺所であつたり、紛然雜然たる縁日などであつては、折角の「浴衣美」も、浮世繪から脱け出た樣なわけにはない。「浴衣姿の女の美」を、心ゆくまで鑑賞しやうとするには、家内にあつては蚊帳と葭戸が好く、屋外にあつては、公園の樹蔭、ほの暗い巷の辻など、すべて光線の强からぬ所が好い。電車中、劇場、カフエーなどは、浴衣姿の女の美を眺むべく、餘りに其周圍と背景が、騒然として明る過ぎる。

それにしても、「浴衣姿の美」を、異性に向つて誇らうとする女性達は、薄化粧と、浴衣の色合と模樣と、帶との調和を忘れてはならない。藍色がかつた浴衣に、小娘の紅い帶したる、或は眞白き浴衣に中年増の色黒き帶したる、極端と極端との色合の對照が、反つて涼しい美感を與へることを忘れてはならない。

要するに「浴衣姿の美人」は、「東京の夜に見る東京の女」に限られて居る。——女が美しいのではない。浴衣と、時と、背景とが、美しく見せるだけの美しさではあるけれど……。（八月十九日）

○　今泉雄作

男女の相、愛憎の念を放下し去て眞面目に逢ん。いかなるが眞面目。

美は徹底美
醜は徹底醜

○　永井荷風

浴衣美人と申せばずぐに國貞國芳などの錦繪思出申候。清長歌麿榮之などの錦繪にも浴衣姿はあれど時代チト隔りたる故にや此は唯繪として見るに過ぎず。芝居にては玄冶店のお富、女團七など目に浮び申候。總じて浴衣姿は下卑たる處に味あるなり、風致とは一致せまじ。大正今日の藝者浴衣に緋の腰卷する者あり、是非とも淺葱縮緬ならでは叶はず。縮緬浴衣と云ふものあまりよいものにはあらず。浴衣は年にかまはず思ひきつて荒い絞りがよし。帶は引掛け、下駄は是非とも後齒か日和にして貰ひたし、などと云出せば限りのない咄なるべし。

○　青柳有美

人は野蠻を愛する。物究まれば必ず其本に歸るのが法であるからだ。美人の浴衣姿はモデフアイせられたる野蠻姿である。人智の進歩した文明社會に適はしい野蠻姿だ。玆に容姿美もあれば、容姿美によつて引立てられる肉體美もある。夏期は一年中での野蠻時代だ。原始文明が熱國の産たるを思へば夏期に野蠻時代の來るのは當然である。美人の浴衣姿は、文明社會のオアシスたる野蠻時代の精華である。文明の砂漠を旅する野郎共が、美人の浴衣姿に憧憬するのになんの不審議があらうぞ？　總じて男は女の前に出づれば、何んとなく常に窮屈を覺え一種の壓迫觀念に驅らるゝものだが、浴衣姿の女の前に出た時ばかりは窮屈を覺えず壓迫せらるやうな氣のせぬものだ。打ち解け得らるゝやうな心情になる。蓋し、女の浴衣姿は野蠻姿のモ

デファイせられたもので、女の前では常に男女の別を守らねばならぬ文明社會の男も、女が野蠻姿で我が目前に在るを知れば、我れ自ら又男女の別を撤して、男女の別の無かつた野蠻時代の昔に歸つても敢て不可無しと想ふに至るからだらう。

○　若宮卯之助

浴衣姿の美人に對したときの感想は不立文字に候。

○　小杉天外

最もふさはしき婦人の衣服を縮緬の襲ね着と素肌に浴衣を着たるとの二となす。縮緬はしなやかなる擧止を技巧的に描くに於いて美しく、浴衣は包むにあまる豊き肉體の匂をほのめかすに於いて優る。我は愼みがちなる婦女の藍色濃き流行模樣の浴衣の端々より、浴後の柔な其の素肌を覗かせる小さき大膽さを面白しと思ふ。

○　上司小劍

浴衣姿の美人は歌磨あたりの繪の方がよろしく、無粹な小生は、まだ生きた美人の浴衣姿の、これはと思ふのを見たことがありません。これ以上、いくら考へても書くことが思ひ浮びません。あしからず。

○　齋藤與里

美しい女の浴衣姿は世界一結構なものです。然し只今の處では柄が下手で困ります。詰り圖案家が、柄の爲に柄を作ると云ふ風で、着た時の調和を考へない結果だと思ふ。殊に草花や何かを染め出した中形類は總體に駄目の樣です。線や點位を應用した簡單の物程は好い樣です。

○　岩野泡鳴

ふつくらした曲線美の趣きが衣一重につつまれて現はれるのは、無論、夏の浴衣姿に限ります。そしてこれは日本服の一つの特長です。

○　伊原靑々園

夏の宵。都の大通り。電燈のうつゝた柳並木の綠。そこを往き來ふ中形浴衣の女たち。私は何ともいへぬ美しさを感じます。長き旅から歸つて新橋へ着いた時などは特に此の印象が深いのです。東京くらゐ夏の夜

の美しい處を私は知りません。それを見捨てゝわざわざ地方へ避暑に出かける人達を不思議だと思ひます。

○　武林夢想庵

浴衣姿の美人に對して私は只性慾の衝動のみを感じます。同時にその浴衣の中に包まれた潑溂たる彼女の肉のオノヽキを想像します。又同時に其肉體を構成せる細胞の蠢動をも洞察します。最後に薄模様の浴衣に絡はられた白骨のみを觀得して頗る愉快を覺えます。

○　水野葉舟

浴衣の模様は日本の婦人を暗色の中から、花の咲いたやうに明るみに出す。そしてすぐ裸體に近い處まで、生々させて見せる。(但しこれは美しい人に限る、美人過電論を書くやうな人は問題外であります)

○　吉井勇

私は「浴衣姿の美人に對して」最多く女らしい人情味を發見します。私はこのしどけなく遣瀬ない姿を好むが故に、兎角夏の女には心を惹かれ勝になります。さうしてこんな歌をつくつたこともあります。

夏ゆきぬ目に悲しくも殘れるは
君がしめたる麻の葉の帶

○　溝口禎次郎

清く輕く夏の肉體美を包みたる水色模様のすゞしき美人裝は本邦ならでは到底見ることの出來ない特色の一つです。其毛髮美、肉色美、姿勢美の調節したる程度が自然に生んだ結果と思ひますが、しかも一千年餘を通じて模様界の權威を示す纐纈染のその涼味ある藍色の變化を一番よく浴衣の上に應用してゐるなどは尤も趣味ある事柄です。兎に角浴衣姿の瀟洒たる調和は眞夏の夕涼を占領する氣持のよき婦人美と思ひます。

○　若山牧水

浴衣はやはり夜のもの、ことに夏も末、天の河がくつきり見えて何だかうすら冷い風吹く宵など、やゝ更けそめた通りでひよつくりと出逢つた痩形の少し紺がゝつたのなど心に浮びます、井戸端にしやがんで朝顔を見てゐるうしろ姿のでぶ〳〵と張りつめた、而かも細帶のまゝのあたり、曲線美でも無からうとおもひ

す。

○　澤村胡夷

典型的制約を脱して、何處までも、自由な精神をもつてゐるところに、浴衣姿の特調がある。

感情の表出を圓滑ならしめて、表情の多致なる事を得る點と鋭どさを加ふる點とに於ても、亦特調がある。

更に色彩上の効果が之れに結合してゐる。爽快な白色。沈靜な、寒冷な、空想的な、紺味を帶びた色。

そしてまた、之れにもまして、浴衣姿を圍繞する空氣――形と色とを淨化して、法外な惡模樣をすら和らげさせ、感情化させる薄暮と夜色とが彼女に結びつく。……私は浴衣姿の婦人を眞夏の白晝に見出だすことを好まない。

○　巖谷小波

浴衣が一番女性美を發輝させるものと思ひます、但しこれには厚化粧は禁物！

○　沼波瓊音

あへて君子ぶるには候はねどこの頃のやうに一般の士女が賣色風のよそほひして男ほしげなるはあまりの事と存じ候。浴衣姿を云々するも、まづシンに品が出來てからのことゝ存候。

○　黒田鵬心

「浴衣姿の美人に對して」夏毎に思ふのは、日本の女の美が最も發揮されてゐるといふ事である。冬若しくは春や秋の紅紫とり〳〵なる姿も亦美しいには違ひないが、其れが多くの色彩を用ひ高價を費してゐる割合に、浴衣姿の美は、多くは、藍、紺、白等の簡單な色の取合せに過ぎずして、しかも比較的廉價で濟み却つて彼に優される價値がある。その理由にはいろ〳〵あらうが第一には肉體の美が浴衣を通して現はれる爲めである。第二には浴衣の色が單純な爲めである。蓋し婦人の肉體美が美の中で最も主なものゝ一つであり、單純といふ事が形式美の中で最も主なものゝ一つであるからである。

○　伊東深水

折角の御尋ねではありますが、それは其の時の氣分の關係で色々と異つて映じられますから是れとまとまつた感想も御座いません。

○ 梅原良三郎

最もSimpleなものは常に最も美しいものである如く最もSimpleな衣物である浴衣は日本の衣物の最も美しいものであります。私は昨日下町で、下婢らしい若き女の、靑き色の少しあせて、縮地の少し縮みて巾のつまりたるをかき合せて着て厚き肩の肉としりの丸るとのくつきりとあらはれたる背の眺めを賞觀しました。

○ 小山內薰

近頃はとんと浴衣姿の美人といふものを見ず候。この頃の女は猫も杓子も蚊帳のやうなるもの暑苦しげに羽織り歩きをり候。夕暮などにても浴衣一枚に夏帶といふやうなるが誠に少なく相成候。小生少年時代の記憶に依れば良家の少女が浴衣に素足、團扇片手にて山の手の奥より上野不忍あたりまで平氣で散歩に參り候ものに候。近頃とんとさやうの人を見ず候。

○ 正宗得三郎

裸體に近ずくに從て自然らしい感じを深くします。

○ 齋藤茂吉

「天(あめ)が下(した)ものさはにあれど女(をんな)ちふものぞ目につく虚假(こけ)も聖(ひじり)も」、これは先師の歌だ。夏の女のいゝのは官能的だからであつて、肉體を豫想せずには目の無いほとけのやうなものだ。それゆゑ路作の「眞美人」ではやはりもの足らぬ。肉體に目ざめてゐることが一つの大切な要約だと謂つても、夏の女はルーベンスのウエヌスのやうにあまりぶりぶりしてゐては少し若くるしい。そしてまなじりをだらりと下げさせる女よりも、目をみはらせるやうなのがよく、さういふ女を白日光下に見る方がよい。

○ 中澤弘光

夏の女に美人多し、二十五六のところ殊によし、藝者も貴婦人も脊高ければ粹なり、束髪よく丸髷よく島田銀杏返しすべてよし、近く見るより少し離れた方が

猶よし、溫泉場なれば隣室の後姿など大によし、午前より、午後の方が又よし。

○　鈴木三重吉

惜しいことには浴衣の柄や色合のいゝのを着た女が滅多にゐない。探さうにもないから致し方がないやうなものゝ、金の自由になる人は、私たちが一冊づゝの本の裝幀に凝るやうに、自分の着るものを創作させてはどうでせう。みんな、帶は帶、襟は襟、着物は着物で別々に買つて來て、比較的調和し得るものを纒めてゐるに過ぎない。すべてを一つの繪として創作させるといゝ。夏は、從來の浴衣の代りに、眞白い麻かリネンを着て、適當に單色の帶と、帶上げと、黑い髮とで色彩を取るといゝのにと思ふ。だれでも相談にお出でなら色の指圖をして上げる。

○　岡本一平

御たづねの「浴衣姿の美人に對し」候節は自然と冷しビールが飲み度く相成候他に、別に餘念も無御座候。敬具。

○　田村俊子

厚化粧した肥滿した女の浴衣姿ぐらゐ暑苦しいものはなく、色の白い、楚々とした女の浴衣姿ほど、又、涼しいものもありません。

○　長田秀雄

凡そ我國の婦人の身體の曲線の最も美しく露はれるのは晴れた夏の夕べの浴衣姿であると私は信じて疑ひません。白いやゝ肥えた美人が意氣な紺の浴衣で電氣や瓦斯の光の射映する處に立つてゐると、紺の色が柔らかな肉に喰入るやうな心も消ゆるばかりの感覺を起させます。冬になつて綿入れを着ると、日本の婦人の化粧は人形のやうに生氣がなくなつて硬く黑く見へますが、ほんのりと匂ふばかりの薄化粧がまだこの上なく浴衣姿にはうつるものです。柔らかでキラキラせずにしかも鮮やかな日本の婦人の浴衣姿は私は天下の絶品として感歎します。

○　德田秋聲

夏も呉服屋の陳列へ新柄の浴衣の出はじめる頃が一

番好きですが、しかし日本の特色は夏にあるのではないかと思はれるくらゐ都ての月を通して島國的特色が出て來るやうです。浴衣姿の美人などはそれの象徴だと思はれます。瀟洒な墨畫のやうな趣味で、日本の女を最も生々させるものです。色の黒い女の浴衣姿は未開的に見えますが、それでも夕化粧をして柄に合つた浴衣を着ると、媚めかしく艶に見えるものです。黒地に白く模様をぬいたものか何か鐵火なものが、この種の女には適するやうです。藍のものも移るやうです。浴衣には是非意氣な束髪か洗髪が必要です。堅苦しい丸髷は移りがわるいやうです。帶も餘りでこ／＼した重たいものは不可いやうです。浴衣の上へ夏のコオトなどを着たくらゐ野暮くさくて厭なものはないと思ひます。私は瀟洒で輕便な洋服仕立のものを着た可愛らしい女の姿も好きです。

○　笹川臨風

浴衣は銀座の田村屋、撫肩の細つそりした姿に、中形のいきなるは、春信の畫を現代化したる思ひあり、肉附豐かに、色白な、すらりとした女が、はでな浴衣姿は、歌麿の畫を生で見る心地す。髪は結立ての丸髷、手がらの鹿の子は絞りの大きなのがよし、但しは銀杏返し、庇髪のはらりと後れ毛の二筋三筋が涼風に弄ばるゝも惡くはなけれど、何だか暑くるしいやうなり。浴衣姿は夏の東京女の身上、山の手好みよりは下町風が似つかはし。

○　山村耕花

慾を云へば、眉を剃らして、鐵漿をつけて、勿論髮は丸髷か銀杏返し、而して地は白の先づ瀧縞だね、尤も背景もいります、赤煉瓦の裁判所裏や石炭臭い秋葉原驛でも困るから、時偶水上署の巡邏船位は通つても仕方がないとして、尠くとも濱町河岸か兩國橋位にして貰はねばならぬ、肉付は痩ても困るし、さればとて十八貫何百目あられてもお災難だ、然う云ふ前提であの粹な浴衣の胸をくつろげて風にゆるした雪の肌を御覧なさい、其處には大學の教室等に轉つてゐる所謂學者と云ふ下等な道徳や學問の喇叭手達の思ひも及ばぬ奧

いもの、即ち此世の中の凡てのものよりも超越した人間の智識や宗教道德等に少しも汚されない眞の藝術品としての最高の權威、自由、而して神的の輕易を味ふことが出來ます。

○　南　薫　造

拜復御申越しの儀誠に御同感、服裝の色彩に於て世界中恐らく最も陰氣なる日本の、初夏のネル、夏の白地の浴衣に移り候事は我々の眼を最も悦こばし申候。周圍の濃緑との美しき對照、人間らしき形の窺はるゝ事など。餘事に渡り候へ共彼の朝鮮の白衣の習慣（例へ其れが喪服より來りしとは曰へ）を無理にも破らんとする當局の仕打を遺憾に思ひ居り候、敬具。

○　奥　村　博　史

それが置かれた場所やその空氣や光りによつて色々になりますから、一がひに何ともお答へいたしかねが、概して申せば浴衣姿の美人は私の趣味から言へば大分遠いもので、餘り藝術的興奮を與へられた事はありません。右お答へまで

○　竹　久　夢　二

拜復夏はやはり關東平野の壯爽たる風をうけて立つ江戸の女を偲ばしめ候京の女は帶の線腰のあたりいかにもたよりなく、北山時雨をとのもにきゝつゝ利休の茶坐敷に坐りたるこそふさはしく存候憎らしい川風の裾を團扇でおさへて、すんなりと立つた東京の女――娘よりもこまたのしまつた年増がうれしく候東京が戀しく候

西京にて

追て、浴衣は三越製ではなくて有職風の古代模樣に限り候

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

代表的名作選集

◉何れも一粒選りの傑作。無比の廉價の無比美本

- 第一編 牛肉と馬鈴薯（廿一版）國木田獨歩
- 第二編 坊ちやん（三十版）夏目漱石
- 第三編 蒲團（廿二版）田山花袋
- 第四編 透谷選集（第十版）北村透谷
- 第五・第六編 春 全二冊（十五版）島崎藤村
- 第七編 わが袖の記 たけくらべ（十七版）高山樗牛 樋口一葉
- 第八編 爛れ（十二版）德田秋聲
- 第九編 平凡（十四版）二葉亭四迷
- 第十編 高野聖（十一版）泉鏡花
- 十一編 何處へ（第九版）正宗白鳥
- 十二編 今戸心中（第九版）廣津柳浪
- 十三編 耽溺（第七版）岩野泡鳴
- 十四編 明治詩歌選（十一版）詩壇六家
- 十五編 戀ざめ（第十版）小栗風葉
- 十六編 別れた妻（第八版）近松秋江
- 十七編 はつ姿（第七版）小杉天外
- 十八編 お艶殺し（第九版）谷崎潤一郎
- 十九編 俳諧師（第五版）高濱虚子
- 二十・廿一編 煤煙 全二冊（第六版）森田草平
- 廿二編 花枕（第六版）正岡子規
- 廿三編 その妹（第四版）武者小路實篤
- 廿四編 旅役者（第四版）長田幹彦
- 廿五編 物言はぬ顏（第二版）小川未明

▼羽二重表紙 ▼特製極美本 ■一冊参拾五錢 送料一冊六錢

◉無限の需要。總賣高既に三十萬部を超ゆ。

東京牛込矢來町中の丸 振替東京一七四二番 **新潮社** 電話番町八〇九番 電話番町八九九番

（小付二の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

大谷光瑞師序　廣瀨了乘著

日印會話捷徑

印度と我國との過去の文明の交渉を思ひ、又將來に於ける政治的並に經濟的關係を考ふる時は、印度語を習得するの必要は敢て多言を須ゐるの要なし。本書の著者は多年彼地にあつて佛典を研究するの傍、我國一般人士の爲めに此簡潔にして要を得たる印度語學習の好指針を與へたり。苟も印度に志あるの士、速かに一本を購うて其雄志の實行を急げ！

定價金五拾錢　郵税四錢

東京神田（振替東京二七〇）東京堂發賣

新發見液

一滴一日　一日五厘

禁煙パイプ

東京醫藥學會發見創製

禁煙專用

●警視廳認可　體內のニコチン中毒を消し根本より煙草きらいとなす、其上味も香も煙草に勝り一度吸引すれば手ばなせず、禁煙斷行には最も妙●決して從來のハッカパイプや又彼の一時的翫弄物の類に非ず●一回注入一日有効、其費用僅に五厘●醫師藥劑師、實驗者証明●毒になる煙草に高い金を費すよりは衞生經濟共一擧兩得の此禁煙パイプ風味液に限るで茲に世の一般喫煙家諸君に謹すゝむ

發見液一壜ポケット入	十六錢
パイプ水牛製	十四錢
同　特製	十七錢
同　象牙製	十九錢
サック	十三錢
送料　內地八錢　台灣樺太二十錢　海外三十錢	
代金引替　內地二十二錢　海外三十五錢	

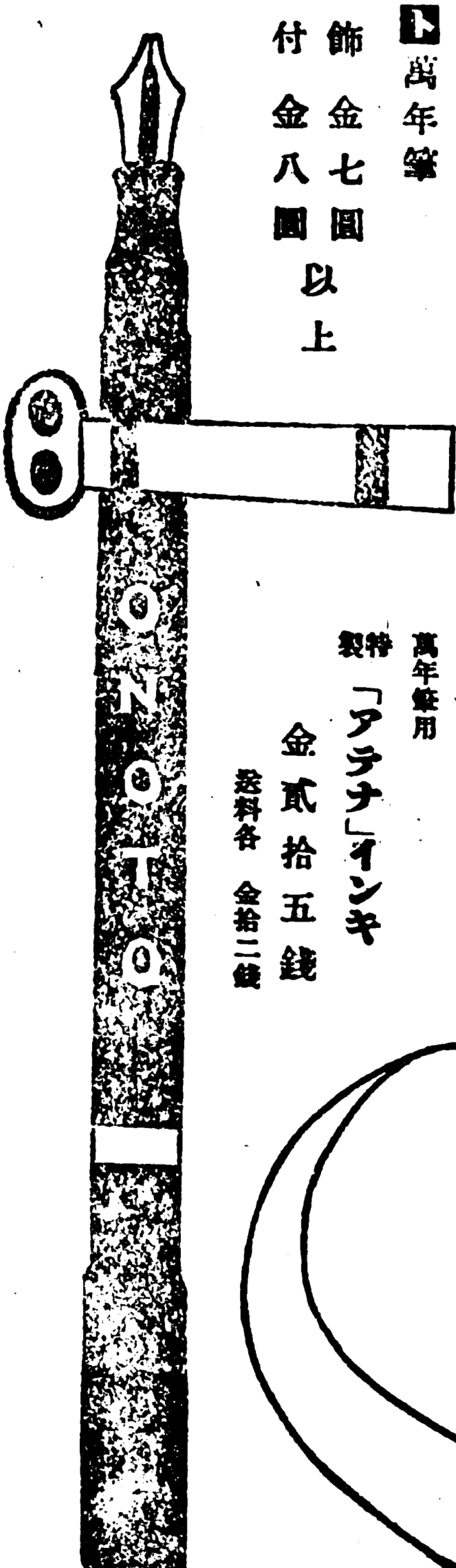
東京神田猿樂町三ノ四幸勝坂
振替東京參壹貳七番
一貫社

（中付二の二）

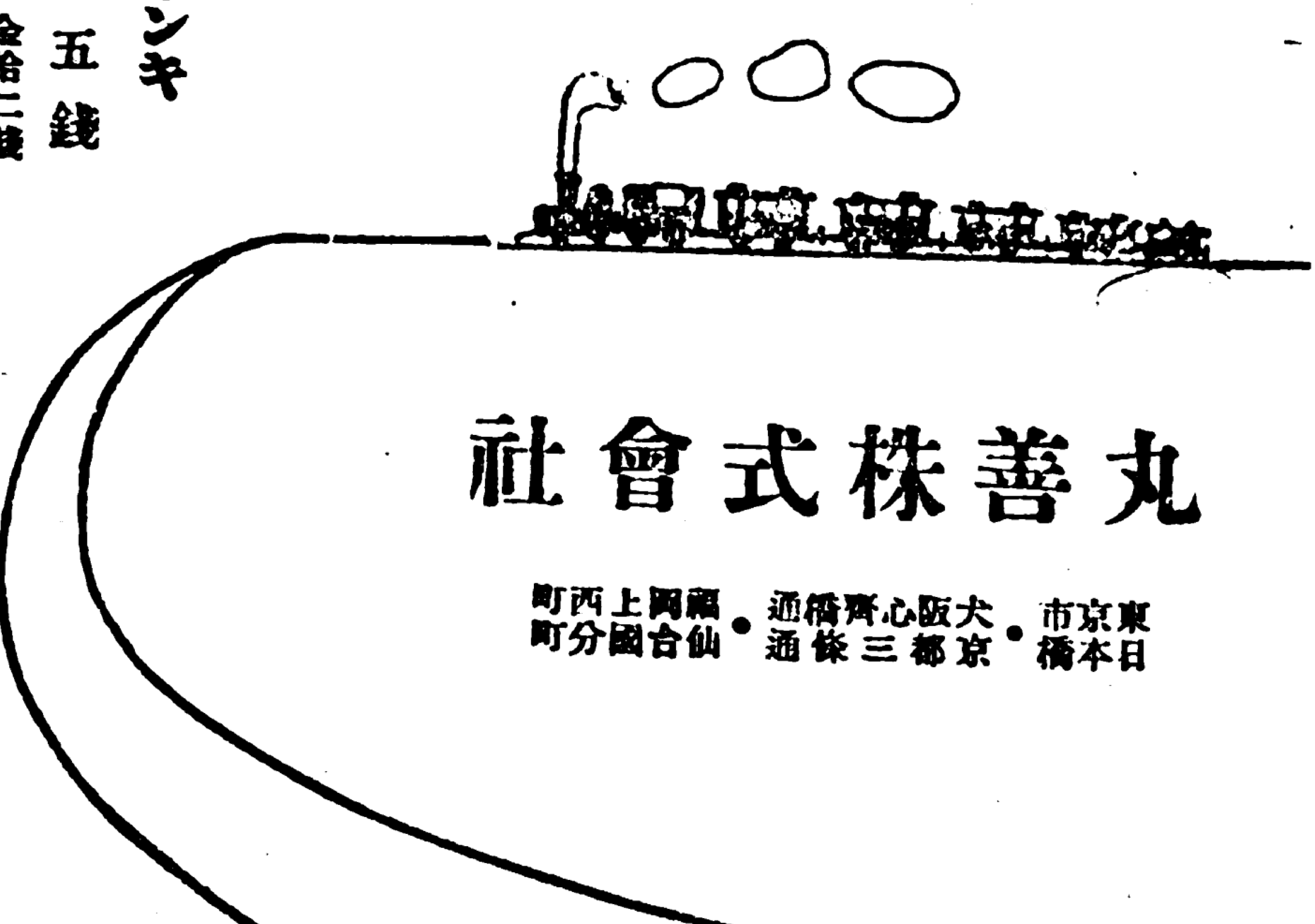
旅行家とオノト

旅行するとオノトの優秀が益々解ります。オノトほど多量のインキを貯溜出來るものは外に有りません。オノトほどインキの流出が適度で且インキ止めが完全なものは外にありません。就中ペン先の硬度が大字細字楷行草を自由自在に書く事が出來るほど適度なるはオノト獨特で、オノトの携帶は通信をするにつけ旅の日記を書くにつけ　樂しい旅行を愈々益々愉快にします。

オノト萬年筆
無飾　金七圓
飾付　金八圓
以上



萬年筆用
特製「アテナ」インキ
金貳拾五錢
送料各　金拾二錢



丸善株式會社

東京市日本橋・大阪心齋橋通・京都三條通・福岡上西町・仙台國分町

（中付二の三）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京帝國大學文科大學講師 紀平正美先生新著

最新刊

改訂 人格の力

四六判最上製美本全壹册三百卅頁

正價金壹圓 郵税八錢

本書は今より十一年前に一度江湖に愛讀を得たものであるが其後久しく絶版せられてゐた。然るに昨年末に其姉妹篇たる「自我論」を出版したるに就て再び讀者からの要求が出たので同書の出版者からして再び世に出ることになつたのであるから其の儘での再勸は到底許すことが出來ない、それで全部書き改めて自分の責任を新たにしたのである。もと四拾錢の定價のものが壹圓になつた内容にそれだけの差があるか否かは讀者の判定に待つべきであるが自分からは時代の推移と諦められん事を願ふのである。（著者識）

(中付二の四)

早稻田大學教授内ヶ崎作三郎跋＝一條忠衛先生新著

((好評激甚))

男女道德論

日本及日本人評＝和漢先哲の倫理學中に男女に關する道德に就て論述せるの少なき否な寧ろ絶無といふの過言ならざるは蓋し種々の事情に因りしならんも其之れ無きは我國今日の社會に觀て實に大なる缺點なりと謂はざるべからず、是れ吾人の平素密に遺憾とせし所なりしが今や我國現代の新生活を立脚地として新道德上より男女問題を論究したる本書の如きを得たるは誠に時代の要求に應じたるものと謂ふべし。内容は男女道德の倫理的地位●男女自覺●男女同權●男女兩本位●戀愛●結婚●離婚●獨身等の十一章に亙りて男女問題に關係ある事柄は論究し盡せり。近來自由戀愛を曲解し男女道德を蹂躪して淫逸放縱の生活を好む青年男女の續出しつゝある際本書の世に出でしを悦ぶ。良書なり。

大正男女問題を解決する一大光明現る＝四六判上製五百餘頁 金壹圓卅五錢 郵税八錢

東京神田區表神保町七番地 ◁大同館發行▷ 振替貯金口座東京八七七貳番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

評論

内外時論

議會の現狀を悲しむ

法學博士　古川　學人

凡そ物には進化がある。獨り怪む、我帝國議會は開設以來三十年に垂んとして、寧ろ殆んど退化の實を示して居る事を。見よ、議會の中に何處に國政を議すると云ふ眞摯があるか。放縱亂離の弊風は殊に衆議院に於て甚だしい。從つて世人も亦議會を重んじない。人侮つて自ら重んぜざるか、自ら侮つて人の嗤笑を招くか。何れにしても國家の爲めに予輩は之を憂ふべき事とする。

衆議院侮蔑の最も著るしき例は、岡田文相の前科者應援事件にあらはれて居る。岡田文相が果して法律上前科者と稱すべきものを應援したか否か、又應援したとしても、如何なる意味、如何なる方法で應援したかは玆に問ふ所ではない。又前科者を應援するといふ事夫自身が文部大臣の行爲として適當なりや否やについても予輩には別箇の意見がある。前科者なりとて永遠に社會より之を葬り去るべしとするは予輩の與せざる所。其人にして已に改悛の狀明かに、以て優に社會に紹介するに足るの人格を恢復したりとせば、之れを推擧するに何の妨げが無い。問題は其人次第である。唯苟くも文教を司るの任にあるものが前科者を推擧するといふ以上は、其人の現狀について社會に之を明白に證明するの責任を有する。其人の品格に關する明白なる自信なくして、唯漫然政府黨なるが故に推擧すると

いふならば、それは決して適當の行爲ではない。文相は此點について果して自信ある證明を爲し得たであつたらう乎。反對黨が文相を責めんとするならば、此點を窮追すべきである。唯漫然前科者を應援したのが惡いといふのでは、恐らく敵の急所に當らなかつたらう。然し此等の點は今予輩の玆に逃べんとする要點ではない。此問題に關して予輩の玆に說かんとする點は、此問題を以て憲政會が文相に肉迫するや、彼は白々しくも毫頭其覺えなしと白を切り、更に貴族院に於て同樣の質問に逢ふや、彼は事實を承認して陳謝之れ努めた事である。一國の文相に斯の如き陋劣なる非紳士的態度を見るは、予輩の非常に遺憾とする所であるけれども、他の一面に於て此現象は衆議院の著るしく侮蔑されて居るといふ事實を語るものとして、我國憲政の爲めに長大息を禁じ得ない。侮蔑した文相の態度が惡いとか、衆議院其物に侮蔑さるゝ丈けの理由があるとかいふやうな事も今は問題ではない。唯各方面に亙るいろ〳〵の理由が相寄り相待つて、衆議院に於ては白を黑といひくろめ、有る者を無いといひ做しても差支がないと云ふ風潮を馴致した事に、我々は大いに反省せねばならぬと思ふ。

一體に政府當局者も議院もお互に尊敬を以て國事を議するといふ眞摯が無い。故に議院の質問も極めて些末の揚足を取り、當局者も亦分り切つた事に白を切つて突き放す。殆んど辯明にも何にもなつてゐない。外國などでは議會の質問といふものは、本當の意味に於て國政の討論である。問ふ者も答ふる者も皆問題の實質に觸れて居る。此質問によつて初めて問題の眞相が世間に明かになる。之れに比すると我國の議會に於ける質問の如きは驚くべき程幼稚な、そして粗慢なものであつて、我々は多年政治の研究者として議會の質問應答に精密なる注意を拂つて居るが、未だ殆んど一度も之れによつて有力なる研究の材料を得た事が無い。第一に質問するものも啻に問題の要點の明かならざるのみならず、國家の利害休戚・國民の安寧幸福といふやうな根本問題に關する實質的政治に亙つて居るやう

な大質問といふやうなものが無い。來るもの來るもの皆愚にもつかぬ駄問である。之れ豈に國會議員の無經綸・無政策を證明するものではなからうか。第二に偶々質問が極めて重大な國家問題に觸るゝ事あつても、質問者に之れを重大事項として取扱ふ丈けの見識がない。從つて事實上重大な問題でも、一度彼等の論議に上ると極めて輕い不眞面目な問題になつて了ふ。今度の議會に於ける不信任案も此一種であつたが、後藤內相彈劾案の如きは、最も其著るしき例である。後藤內相の所謂秘密出版なるものは、男爵自身が何と辯明しても、又政府與黨が如何に男の擁護に力めても、我々公平なる第三者から見れば甚だ面白からぬ事件であつて、政敵を斃さんと熱するの極遂に反對黨よりして一個の賣國的行爲なりと罵らるゝに値するものであつて假令在野當時とは云へ、苟くも大臣の禮遇を忝うする男の行爲としては、實に淺間しき限りと云はなければならぬ。故に之を以て內相を糺彈するといふ事、事は極めて重大であるけれども、併し憲政會が此問題をあゝいふ形で、あゝいふ方法で取扱ふのでは、我輩と雖も此彈劾案に反對したくなる。之れ皆彼等に問題の輕重大小を分つて、之れを相當に取扱ふの道を解せざる爲めである。第三に我等の遺憾に堪へない事は、國政を議する士として議員の餘りに無識なることである。眞摯を缺くの結果重大問題の取扱を誤つた彼等は、又無識なる結果同じ樣な誤を重ねて居る。例へば臨時外交調査會の設置の如き、之を公平なる第三者の批判に聽けば、明白に帝國憲法の精神に違反するものにして、學者の間にも殆んど定論がある。かう云ふ重大な問題で政治を監督せずして何で監督するの道があるか。彼等は此問題を以て政府に肉迫しないではなかつた。けれども其論點は甚だ薄弱にして、政府並びに與黨の怪しげな辯明に對して、殆んど二の矢が繼げなかつたではないか。其他對敵通商禁止を法律によらず勅令を以て規定せるが如きも、事柄自身は夫れ程大問題ではないとしても、之れ一面に於て政府が不當に議會の權限を侵すの例を開くものであつて、憲政運用の上には極めて重

大視すべき出來事である。之れについても貴族院に於てアッサリ質問があつたに止まり、未だ此問題が値打する丈けの重き取扱を受けて論議されてゐない。之れ皆恐らく議員の無識の致す所であらう。

斯くの如くにして我國の議會に於ける質問應答は、殆んど形式一片の空世辭になつて居る。之れに加ふるに議員皆自ら侮り政府當局も亦之れを尊敬せざるが故に、遂に世人をして議會は果して國政を議するの府たるに足るだらうか否かといふ疑を起さしむる。否、世上には已に此醜態に憤慨して議會の無用を叫び、甚だしきは其存在を呪ふものすらある。然し予輩の見る所に據れば、議會をして斯くの如き狀態に立ち至らしめたものは、議員其物の不謹愼が又重大なる原因たるを失はないけれども、國民並に國民中の先覺者にも責任がないでもない。殊に先輩の政治家が議院政治創設の當初より、此制に同情なく厭や／＼ながら議院政治は布いたが、出來る丈け議院の發達を阻礙しようといふ方針を取つた結果として、自然國民の有力なる階級間に議會侮蔑の念を起さしめた。殊に先輩の政治家が此風潮を教育界に瀰蔓せしめた事は、最も許すべからざる罪惡であつた。教育と政治との分立を企てた事はよいが、更に一歩を進めて今日の教育家は上下通じて、殆んど憲政に對して何等の理解と興味とを持たざるのみならず、寧ろ多くは憲法政治に對して反感を持つように仕向けられて居る。之れが自然と國民全般に影響を及ぼすから、國民自らが此點について眞面目なる理解を缺くのも怪むに足りない。故に我國の先覺者殊に教育に從事する人々をして、眞に憲政の何たるかを理解せしめ、教養ある人物を選擧すべき事等を徹底的に教へ込むのが今日の急務である。斯くして更に國民をして十分代議士の行爲を監督せしむる爲めに選擧權の擴張も必要だ。選擧權の擴張を伴はずしては他の方面の改善も十分に効を奏するものではない。此等の點は尚細目に渉つて精密に研究を要する點であるけれども、要するに予輩は議會の現狀に滿足せざるの餘り、其缺點の一端を明かにして、一つには議員其人の反省

を求め、一つには社會識者の此點に關する根本的考察を促したいと思ふ。

注目すべき獨逸の政變

去年の秋頃から獨逸國民の間に密かに講和を希望するの風あつた事は掩ふことは出來ない。只從來永く戰勝の餘威に醉ふて居つたのと、前途に多大の希望を揭げて居る政府の宣言とに惑はされて、之が具體的の運動として表にあらはれなかつたまでゝある。然るに此彌縫的安定は今年春の露西亞革命の影響として俄かに大動搖を感ずることになつた。

露西亞革命の影響は恐らく獨逸よりも墺太利に於て著るしかつたらうと思はるゝが、それ等の細目の點は今日尚よく分らない。獨逸は流石に墺太利に比して動搖を感ずること遲かつたのであるけれども、遂に四月末から五月にかけては段々其影響が事實の上に著しくなり、具體的の運動となつて表面にあらはるゝやうになつた。而して此種の運動の特に政府に向つて要求するところの點は二つある。一つは制度の自由的改革である。一つは戰爭の目的の宣言である。

制度の自由的改革殊に責任內閣制の設定、獨逸帝國議會並にプロシア國議會の選擧法の改正の事については、予輩已に本誌（本年五月號）に於て之を說いたから、再び之を贅しない。戰爭目的の宣告の要求に至つては、之れ實に露西亞の勞働者兵士委員會の主張と相待つて大いに講和的風潮を進めんとする同國自由派の叫びである。蓋し戰爭の目的を宣言せよといふ意味は、政府は果して領土擴張、賠償の要求の如き利己的目的の爲めに戰爭を繼續するものなりや否やを問はんとするのである。更に一歩を進めて突詰めるならば、露西亞側の主張の如く非併合、無賠償の主義に贊成するの意なきやを問はんとするものである。若し此主義に贊成であるとすれば、最早や戰爭を繼續するの口實がない。今や非併合、無賠償といふ言葉は露西亞革命黨の提唱によつて世界各國の流行語となつて居る。各國の

平和論者は、此流行語に好個の口實を見出して頻りに政府に迫つて、此表面上至公至平なる主義に基き速かに戰爭の終止を計らん事を求めて止まぬ。而して獨逸に於て又此種の議論あるは、之れ取りも直さず同國平和論者の昨今漸く頭を擡げ初めた事を語るものである。

併しながら、當初政府は容易に此等の要求には應じなかつた。尤も四月中制度の改革については、一應の口約をなしたといふ報道はあつた。若し其口約が實行せらるれば、如何なる變動を見るかについて予輩は先に之を說いたのである。(前揭論文)けれども戰爭目的の宣言に關する要求については、帝國宰相は言を左右に托して之を拒んで居つたが、最近に至り彼は明白に非併合、無賠償の主義に反對する旨を宣言したと傳へられて居る。且又制度改革の口約についても、政府が容易に之を實行すべき色を見せなかつたので、民間には不平の聲高く、議會に於ても段々政府反對黨が增加する傾向を示して居つた。之は四月より五六月にかけての形勢である。

斯くても尙政府は議會に於ける各種の黨派の上に大體過半數の投票を置くことを得て居つたのであるが、最近に至り此形勢は段々に變つて來た。其一つの原因は自然と盛んになる民主的傾向が益々露西亞方面から刺戟さるゝことにもあらうけれども、もつと近い直接の原因は豫ねて獨逸の唯一の望の綱であつた潜航艇戰が思ひの外大なる効果を擧げず、從つて之によつて英國を屈し得べしとせる希望も水泡に歸せんとし、其外露西亞を誘ふて單獨講和を計らんとせる計畫も非常な苦心慘憺を盡したに拘らず、遂に全く失敗に歸して講和の念茲に全く絕え、剩へ露西亞は最近攻擊に出でゝ着々成功を收めて居る。そこで現政府に滿足せざるの考が、特に一層盛になつたものと見える。蓋し國民の多數は今や切に和を欲する。けれども政府の態度從來の如くにしては到底其見込が立たない。對手國も亦現在のやうな專制的政府では講和の相談にも應じまい。そこで自ら政府を國民的勢力の代表者を以て作るとい

ふ思想の起るのが當然である。斯ういふやうな點から、更に制度改革論と戰爭目的宣言論とを旗印として政府の從來の態度に反對する勢力は益々尨大した。此種の勢力の中堅は云ふまでもなく社會黨と進歩國民黨とであつた。然るに昨今新聞の報道せるところによれば、國民自由黨並びに中央黨までが之に加擔したといふ事である。果して然らば、此等の反政府同盟は二百二三十名の多きに上り、優に議會の大勢を作る事が出來る。斯くては玆に何等か重大問題が起れば、政府は卽ち議會の反撃に會つて失脚せざるを得ない。帝國宰相の最近の辭職は、斯くの如き理由によつて導かれたと思ふ。

今度の政變の導火線となつたものは、七月初旬中央黨の一名士イルッベルガーの政府攻擊演說に初まる。彼は政府が議會の政黨を基礎とせざるべからざるを說き、且つ帝國議會並びにプロシア國會の選擧法改正の必要を說いたが、從來政府を支持して居つた中央黨の大部分は彼の說に贊成を表したので、玆に初めて中央黨の態度一變により、政黨關係の均衡が破れ、政界に一大變動あるべきを豫示して大いに當局者を狼狽せしめたのである。之れより議會の多數は政府に反對して各黨派の領袖を網羅する聯立內閣說を唱ふる者が盛んになつた。

單に之れ丈けならばまだよい。なぜならば、獨逸の帝國宰相は議會に對して責任を有せず、議會の向背如何に係らず其職に止り得るといふ事は、從來の慣例の示すところであるからである。けれども若し玆に現に議會に重大問題が提起され、此問題の否決が內閣の死命に關するやうな重大事である場合には、之に對して與ふる議會の拒否は決して宰相の地位を安全ならしむるものではない。時なる哉、今度の議會には戰費十億馬克を要求するの案が提出されて居る。從來議會の各政黨は如何に政府に反感を持つても、國家の重大なる問題については恨を呑んで贊成するの例であつたが、今度はいよ〳〵決心した政府が先づ以て戰爭の目的乃至講和條件を示し、且つ選擧法改正の方針を明白に示

さゝる中は、本案に協賛を與へないと頑張つたらしい。政府が之に對する宣明を拒むに及んで、議會は卽ち無期休會の決議をして政府を脅かした。之れ七月十六日我國諸新聞にあらはれた電報が、獨逸帝國議會政府に對してストライキを行つたと傳へられた所以であらう。之が卽ち宰相ベートマン・ホルウエックをして其職を退かしめた所以であらう。且つ又帝國宰相は官制上プロシアの内閣總理大臣の兼任せるところなるが故に、宰相の辭任は又プロシア内閣の瓦解を意味する。從つて、プロシア各大臣の辭職の報も傳つた。要するに、之れ又何等か重大の結果を齎すべき、獨逸に於ては稀に見る一大政變たるを失はない。

只其後に來るべき變動が如何なる方向を取るべきやは、今日未だ明かでない。七月十四日旅行中の皇帝が急に伯林に歸り、ヒンデンベルグ、ルーデンドルフ兩將軍を招ぎ、之に皇太子を加へて重要軍事會議を開いたといふ報道は何を意味するや。十六日の電報が擧さの食料品管理局長プロシア委員ミハエリス博士を擧げて宰相の後任たらしめたといふ事は、果して何を意味するや。新聞の報道は之を以て民權派の勝利なりと言ひ、又は專制派の勝利なりと言ふ。紛々として未だ一定の論を見ない。之を要するに、帝國議會の多數は今日一方には平和論を唱へ、他の一方には政治の監督權を國民の手に收めんとして居る。他方皇帝の周圍には之に反して戰爭を繼續し、政治の實權も從來通り少數貴族の手に壟斷せんとする勢がある。此兩勢力の爭が如何樣に決するやが問題であり、而して昨今の大勢は到底民權派をして其志をなさしめねば收まりがつくまいと思ふ。若しミハエリス博士の帝國宰相就任が假りに一部の新聞の傳ふるが如く、主戰論者の勝利を意味するとするも、大勢に逆行して永く其地位を繼くべからざるは、恰かも張勳復辟の比であらう。尙後報を待つて次號に之が評論を試みよう。

八月一日　發行

婦人公論

定價　二十三錢　郵税二錢

◆◆ 新時代の代表的婦人雜誌の八月號の壯觀を見よ ◆◆

身の上相談に行く女（松崎天民）

親兄弟にも明されぬ胸の秘密を懷いて新聞社の相談部を頼つて行く哀れな女のさまぐ\な憐れな物語

▼お嬢どん\教育を排す……湯原新女子高師校長

▼婦人の參政權問題……石川半山

●數字上から觀た婦人職業問題……わらび生

▼婦人の自由解放と個人的修養……平塚明子

▼「女大學」を脱せよ……本間久雄

石鹼の話（近藤教授）

石鹼の使用法及び石鹼の良否を見分ける法等

七女學校長の觀たる今の若い女の長所短所

本誌の最も誇りとする

好評の三大長編小説

■秘めたる戀……德田秋聲

■蹂躪られて……正宗白鳥

■春宵記……小山内薫

中央公論社

新聞は如何にして作らるゝか（小野瀬毎夕主筆）

▼愚かな女の手紙……神近市子

▼眼を涼しくする法……前田醫博士

●時事書報●　口繪現代女風俗　●挿畫數葉

▼最近流行絞り染の話……植村まさ子

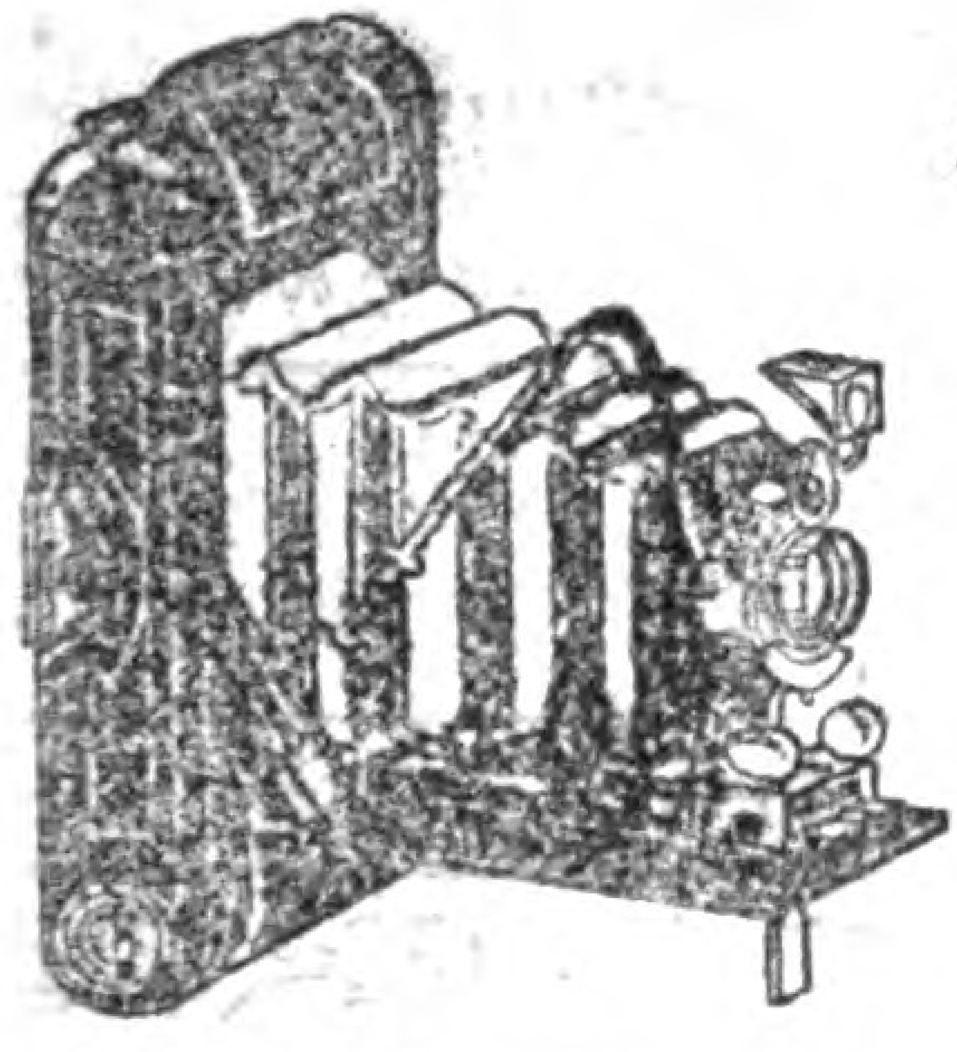
▼涼しいお料理五つ六つ……秋穗校長

三十四人の奥さま方の我家の納涼法

この著さに思ひ〳\の納涼法は一讀涼しくもあり一は好個の修養談にして二は才筆流麗の美文塲

避暑旅行の友は寫眞器に限る

▼寫眞機は旅行の友、家庭の重寶
▼想ひ出の種として、寫眞が第一
▼誰にも出來、安くて危險無し
▼覺へておけばあとで役に立つ



(目錄無代進呈)

小西本店

東京本町

出張所　大阪長堀橋筋一丁目

◉御寫しの種板は御送附次第迅速仕上げ仕候

高須梅溪氏新著

増原咲次郎氏裝幀

光る源氏の一生

四六判形和裝
定價六十五錢
送料金六錢

内容略目

□靈と肉との闘爭……(光源氏)
□第一の戀より第二の戀へ……(内侍)
□妖靈に咀はれし女……(夕顔)
□矛盾した愛の犧牲……(浮船君)
□煩悶のどん底……(藤の君)

梅溪氏が常に文壇に於て、特異の卓越せる地位を獨占し、其の著作が常に新人の共鳴と渇仰とを得る所以は、氏が新唯美主義に立脚して近代思想の先驅者たる特質を有するによる。「平家の人々」を出してより以來五年間の努力によりて本書成る。苦心の餘に生れし一大散文詩にして又深酷なる人生批評也、日本第一流の風流男光源氏と其の周圍の美しき女性の印象は、此に無比の濃艶清麗なる筆を以て描かれたるものなり。發行日ならずして好評三版成る。

東京淺草柳橋　**岡村書店**　振替一九〇六五番

(中付三の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

冨山房出版圖書百九十種臨時大特賣

特價目録 申込次第進呈

急告!! 警告!!!

此百九拾種は現在品に限り破天荒の特價を提供するものにして、部數極めて僅少なり。而も現品品切となれば一切増刷せず、且つ期間極めて短かし。此機を逸せず即刻御申込あれ。

東京 神田 **冨山房** 振替五〇一 電本四一三〇・一〇三六

（中付三の三）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

◆◆綠蔭繙くべし◆行旅携ふべし◆◆

早稻田文學

八月號

■花嫁（小說）中村星湖

■鐘（戲曲）額田六福

■廣重と北齋と——（二個の日本自然觀）
齋藤與里、野口米次郎
森口多里、古川修
結城素明、松本亦太郎

淸新 事の記につ満 八月號

■現詩壇の神秘主義と現實主義と……萩原朔太郎

■未來派の發足……加藤朝鳥

■演劇の社會的要素……島村民藏

■櫻川町で……島崎藤村

■岩野泡鳴氏に與ふ……廣津和郎

■微笑についての反省……三富朽葉

■作者の感想……アルツイバアセフ

最近思潮

本誌の特色にして且つ興味ある歐米及び我國の社會、文藝思潮の紹介と批評十數項。いづれも興味ある讀物を網羅す。

詩歌

▼嵐の空　島木赤彥

▼勞働と生　福田正夫

▼隣の奥さん　齋藤未學

■良寬遺跡めぐり（紀行）相馬御風

■文壇無駄話（隨筆）近松秋江

——時評——

■新技巧派とは？　中村星湖

■活動寫眞と教化問題　本間久雄

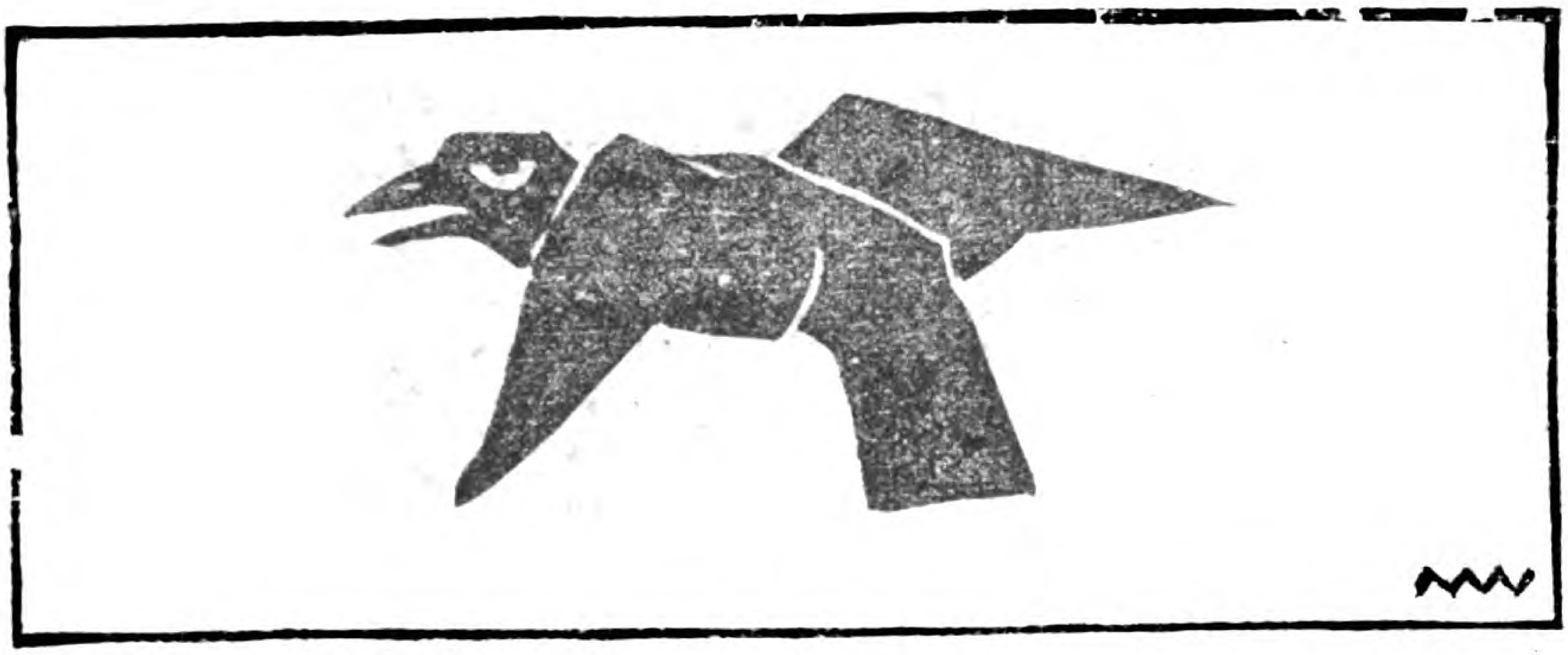
■教育界の反民本的傾向　原田實

八月號　定價二十八錢　郵稅一錢五厘

東京神田表神保町　振替東京二七〇番

東京堂

（中付三の四）



罪惡に戰きて

小川未明

一

狹苦しい處から、生ひ出たひよろ高い木は、其れでも他の廣々とした圃や、野原に立つてゐる木のやうに若葉を萠して、而して、他の木が等しく、今や青葉となつた如く、この木立の葉も黑ずんで繁つて來た。可なり葉が繁ると、醜い細い瘦せた、人間でいふなら、絕えず病つてゐる者のやうに見えたこの木も相應に賑かになつて、見られるのであつた。木は壞れかゝつた灰色の長らく手入をしない竹垣と、錆たトタン葺の長屋との間に狹つた僅かばかりの空地に根を下してゐる。だから建物の蔭になつてゐて、枝から下の幹の方は一年中たつたつて、日の光りを浴びることがなかつた。

やつと、此處まで伸びて、憧がれてゐた太陽を見ることが出來たと喜ぶやうに、木の頂きだけが屋根から二尺ばかり拔き上つてゐた。而して、自由に大空を驅け廻る風に吹かれてさも心地よげに笑つてゐた。

六月の天候は照つたり、曇つたりした。毎年この季節にはかういふ天候であると知つてゐるから仕方がないと思ふもの丶、たしかにこの時分は空が惡疾に罹つて氣持が定らないとしか思はれない。正吉は、硝子窓の處に立つた。而して、見るともなしにこの長屋を見た。まだ其處には三軒ばかり並んでゐる中古の家が一軒も借手が附かずに、昨日の如く空家になつてゐた。彼は其を見ると、何といふことなしに失望するのであつた。どんな人間が其處に越して來るだらうといふことが、一つの小さな樂しみであるのが、なか〳〵其の希望が滿されないやうに思はれた。恐らく、永久に借手はないであらう。家主があきらめて、其等の陰氣な建物を取拂つて、新たに其處へ住み心地のよさ丶うな家を建築するのでなければ、誰も金を出して、こんな荒れた氣味の惡い家を借る者は恐らくないであらうと考へることもあつた。彼が此家に越して來てから、ずつとあの長屋は空いてゐるのだから、其れ以前どれ程前から、人があの長屋に住んでゐないのか知れない。

彼はもういつ見ても相變らずの眺めである、其の長屋にも、木立にも見飽きたといふ風に窓際から離れて、傍の椅子に腰をかけて仕事場の裡を見廻しながら煙草を喫した。普通の住家に少し手を入れて活版の工場に直したので重量のある、堅苦しさうな、黒い汚れた機械と、周圍の壁や、弱っけない構造とがすべて不調和に見えるのは當然であるとしても、僅かに顏の醜い女中と、男の職工一人だけしか使つてゐない哀れな有樣は、工場といふ程のことも出來なかつた。もつとも彼が仕事を手傳つてゐる上に、尙ほ男の職工一人だけでは手が足らないことが多かつたので、せめてもう一人位女工でも雇はうかと叔父は言つてゐる。しかし、今のところでは利益もさう上らなかつた。

職工の藤田は、既にやつて來て默つて彼方で下を向いて仕事に取りかゝつてゐる。活字の塵が立てかけてある傍で叔父は帳簿を繰つて、やはり默り込んでゐる。正吉の喫ふ煙草の煙は彼の鼻先で散つて、一時は其等の光景を掠めて見せなくするのであつた。

『正吉、もつと活字を買はんければならんな。せめて小さな雜誌位は刷れる位にしなけれや、今、田舍の方は景氣がいゝさうだから、其内にちよつと歸つて來やうと思ふが』と叔父は言つて、帳簿をインキ壺や、硯箱や、手紙や、下摺などが載つてゐて雜然としてゐる、其上に置いて、其處から歩き出すと、彼は窓際に行つて立つた。

正吉は其れに對して、深く彼の意見を言ふことが出來なかつたので、たゞこの活版所を出來るものなら叔父の意見通り擴張した方がいゝと答へたまでゝあつた。而して、むしろ、硝子窓に其の半生の苦勞を刻んだ顏を淡く映して、外を茫然として眺めてゐる、不幸な叔父を見て憐れむ心が生じた。

叔父は早く、從順で忠實であつた妻に別れてから獨身で通して來た。彼は幾何月日が經つても、死んだ妻のことを思ふと悲しみが心を暗くした。彼はよく其の妻を叱つたものだ。けれど、其は決して惡い考へからでなかつた。生れつき彼は非常に怒りぽかつた。而して、直に人々を信じ、最後に彼等からは欺かれた。この善良な正直な性質を妻は飲込んでゐて、何を言はれても、叱られても其に對して怨まなかつた。妻だけが、よく彼の心の裡を諒解してゐた。この忠實な友に別れて、彼は二たび妻を取らうとは思はなかつた。

空想家である叔父は、これまでいろ／＼なことに手を出した。菓子製造、製粉業、書籍販賣　薪炭

業、何一つ成功したものはなかつた。而して財產も屋敷も山林も無くてしまつた。正吉は尖つた、年を取つてから次第に淋しくなつた叔父の顏を見て、しみ〴〵と人間の力では何うすることも出來ない、ある殘忍な力があるのを呪ひ而して泣きたくなつた。

日がうすい雲を破つて、黑ずんだ忩先の葉の上を照した。かうした明るい光りに觸れると、やがて熱い赤く爛れた夏がこの先に迫つてゐるのを感じさせた。しかし、また忽ちに日が見えなくなつて、空が曇ると四邊には重苦しい陰欝な氣が漂つて、蒸しつぽい風に葉が眞黑にざわめき始める。

「い、いつになつたら、つ、つゆが…上りますんでせう」と、手頭を汚した、脊の低い職工服を着た藤田が此方を向いて聞いた。

「まだ、まだ」と言つて、此時、叔父は氣付いたやうに、忩際から身を返して、足早に彼方へ行つた。

二

藤田は默つて仕事をしてゐた。小さな臆病氣に見える眼は物を見る時に光りを帶びるやうであつた。短かい堅さうな髭が大分口のまわりに延びてゐたけれど、元來不精者の彼は剃らなかつた。ちやうど足の踏む處もなく茂つた雜草の藪のやうに、彼の顏は一層くしや〳〵として見えた。二三年前の冬三四ヶ月の間、彼はある法律學校の科外講義を聽いたといふことを話のついでに得意となつて語つた。けれど、其時聞いた講義などはてんで分らないことが多く、其時は頭に入つたことでも今は大抵忘れてしまつてゐる。しかし、これからの勞働者は政治に關し、法律に關し、また經濟學に關した幾分の智識を持たなければ、彼等の生活や、地位を永久に高めることが出來ないばかりでなく、雇主や、資本家等に馬鹿

にされるといふことを語ることがある。これだけを聞いた時には、いかにも考へのある職工のやうに思はれるけれど、彼自身は何の學問に對しても纏つた智識も有たなければ、また其等に對する意見といふものを持たなかつた。

　而して彼は常に埃とインキと手垢で汚れて革のやうに底光りのした黒い洋服の隱の中に新聞紙を入れてゐる。其の新聞は其の日のもあれば、時には四五日前のものや、若くは半月ばかり前の古新聞紙であることもあつた。仕事の間や、休息時間に、彼は其の新聞紙を取り出すと、丁寧に其れを開いて、活字がぎつしりと身動きの出來ないやうに、整然として詰つた面に小さな眼を晒らしながら、皆なの視線が其方に集るのを待つて、口をもぐ〱さして言つた。

　いつものことであると知りながら、彼がどんな事件を語るのかと彼の樣子は人々の心にある期待を抱かせた。

『カ、カナダに、大金礦が發見さ、されたと書いてあります。米國の富は、英國の富よりは、偉大で、であるかも知れません』と言つて、彼は獨り興がつて、さも嬉しさうに笑つた。其のことが彼にとつて、どんな關係があるか、また此處に働いてゐる何人にとつて何の影響があるか、そんなことはどうでもいゝやうに、たゞ彼はさも嬉しさうに、其の記事の載つてゐる新聞紙を覗いて眼を細くして笑つてゐる。彼が笑ふ時に柄杙のやうな出齒が唇の外に露はれるのであつた。

『君もこんな處にゐずに、外國へ行つて金を儲けて來たら』と正吉は言つた。彼はかう口で言ひながら、自からもまだ知らぬ廣い豐かな世界を眼に描いたのであつた。

「はあ、私も、語學を勉強しやして、い、行きたいと思つてゐます」と藤田はまた丁寧に其の新聞を疊んで、洋服の隱しに收めた。彼はなんでもこの世界に起つた珍らしい出來事の載つてゐる新聞紙は皆なからして大切にして、其れを持て歸つて保存して置いた。そんな古新聞が何になるものか、また其等の記事を讀んで憶えてゐることが少なくも彼の生活にとつて何に役立つかといふことは誰にも分らなかつた。恐らく、彼自身にも分らないことであらう。

彼は新聞を隱しに入れて來ない時は、リーダーの第一を入れて來た。而して、赤い表紙の付いてゐる小さな辭書をもう一つの隱しに入れて來た。正吉は、いつも彼が同じ頁を見てゐるのを不思議に思つた。彼がこの一冊のリーダーを一年かゝつたつて、讀み終ることが困難だと思つたからだ。

この活版所がいつまでつゞくだらう? この後叔父の生活は何うなり行くだらう。叔父が金を溜めて生涯樂な生活を送る人とは何うしても考へられない如く、またこの工場に雇はれてゐる藤田のすることを見て、この人生が眞實に苦しいものであるといふことが少なくも彼にはまだ分らないやうな氣がして、彼の樂天家であるのが愚かしく見えることもあれば、また羨まれることもあつた。正吉は過去に於て作家にならうと思つた。ある時は辯護士にならうと思つた。また新聞記者を志願したこともあつた。早くから何をするにしても、生活といふものが、思ふやうにならぬものだといふ苦しみを知つてゐる。而して、人間が何一つするにしても容易な努力では出來ないことを知つてゐる。彼には、この容易でない努力が仕遂げられさうでないやうな氣がする。常に氣が滅入つてゐる。常に絶望してゐる。けれど、彼は現在に滿足することが出來ない。叔父のすることも眞に同感することが出來なければ、また職工の藤田

が毎日かうして安價な心持で生活してゐることにも、全く低能的な滑稽味のある男といふより他に興味を持たなかつた。

彼は皿一つ滿足に洗ふことの出來ない醜い下女を叱つた。彼はたゞこれだけの仕事に對してすら義務と責任とを果すことの出來ない人間を憎んだ。

「魚を食つた後でないか。よく洗はんで、こんな臭ひのする茶碗で飯が食へるか！馬鹿ッ」と正吉は下女のおひさを怒鳴つた。

「そ、さう怒んなさるもんでありません。親方が新聞に女工の募集を出して行きなされ、ま、ました」と藤田はにた〳〵と笑つて、箸で茶碗を鳴らした。

「僕は、自分のするだけの責任を果さん奴は嫌ひなのだ」と正吉は言つた。

おひさは膨れ面をして、横眼で正吉を睨んで、臺所の方へ隱れた。

「彼奴は直に膨れ面をしやがる。而して、河豚のやうな眼付をして人を睨みやがる」と正吉は洩らした。

彼は、彼女が人を見る時に眼の中の瞳が片端の方に寄つて、コひんがになるのを何となく氣に喰はなかつた。

「ち、ちつと位茶碗が臭くても、別嬪がしたのなら、そ、さう怒りなさらんでせう」と藤田は小さな眼を光らして、狡さうに正吉の顔を見ながら、ヒヽヽと言つて笑つた。

正吉はこの卑劣者の頭を擲り付けてやりたかつた。しかし、つい考へると馬鹿らしくなつて、彼の笑に引摺り込まれて、自分も共に聲を立てゝ笑つた。

三

太陽は白々しく空に輝いて、草木の葉は眠りから醒めたばかりなのに、この強烈な光りを直に浴びてしよげ返つたやうである。ぐんなりとして葉を垂れて、このてら〳〵とした眩しい銀の光りを吸うて、吸ひ盡されぬやうに葉の面に照り返してゐた。しかし、少しでも風か出て來るとさわやかな青い空に響き返へるやうな音を立て葉は今を盛りの夏を讃美するのであつた。

正吉は、この日は刷り上つた名刺や、廣告札や、まだ受取らなかつた印刷賃や、新しい注文を受ける其等の用事のために早くから家を出て、其れ〳〵用事を濟して、正午少し前に歸つて來た。藤田は機械を廻轉さして、彼方向きになつて立つて働いてゐる。正吉は此方の窓の處で着物を被かへてから腰をかけて、煙草を吸つてゐた。歩いて來たので、體中が何となく爽快であつた。而して、外を見てゐると其の光りの世界の裡に魂が溶け込んで行くやうに覺えて眠くなつた。

彼は昵と木の葉の上に日の光りが染んでゐるのを見てゐると、子供の時分の記憶があり〳〵と其の葉の上に蘇生つて來る。葉の色も、日の光りも、皆な少年時代を呼び起すのである。自分が祖母に手を引かれて歩いた白い路の姿や、淋しい、しかし懷かしい村や、南瓜の花の咲いた圃や、赤い實の生つた棗莢の木が周圍に繁つた空濠や、今ではどんな人が其の中に住んでゐるか知らない城下の士族屋敷であつて、而して自分が其家で十三四の頃まで育てられた我が家の姿などを思ひ出した。

彼がかうして昵と窓から外を見てゐると、蜻蛉が飛んで來て、垣根の竹の尖に止つたのである。其の薄い透き徹つた羽根に眼を注ぐと、其れにも遠い、樂しみの多かつた、美しい夢と霧に包まれてゐる過

去が浮んで來る。彼はしばらく茫然として、空想の後を慕つてゐた。

叔父が故郷に歸つてから、既に三日になる。今頃叔父はあの山と、あの林と、廣い野との見える村に住んでゐる親戚や、知己や、まだ其處に殘つて働いてゐる友達などを訪ねて、何事か圖つてゐると思つた。彼は其儘、眼を閉ぢて自由に眠ることが出來るものなら、いつそいつまでも眠りたかつた。而して、もうこの上何も思ひたくなかつた。

おひさの汗染みた着物の臭ひは、動くたびに四邊の空氣に散つた。蠅は勝手許に渦卷いてゐた。肥つた彼女の顏はいつも氣拔のしたやうにぼんやりとして、ちゞれ髮の薄い額際には小さな汗の粒が宿つてゐた。正吉はこの女の顏を見、この女の造つた食事をしなければならぬかと思ふと、其れだけでもこの現在が過去に比して不快な、興味のないやうに思はれる。而して、生といふものは現在ばかりにあるものだと知ると、生といふものは苦しみと、醜くさの外に畢竟ないものゝやうに思はれたこともあつた。而して、こんな女がどんな感情を持ち、神經を持つかといふことが疑はれた。やはり彼女の持つ戀は美しいと言へるだらうか？而して、彼女が戀人を見る時、戀人に物を言ふ時、また接吻する時などを思ふと、其れが殆んど彼には想像がつかない程不思議なものであつた。

『人間の生活は分らないものだ。此家に集つてゐる者は皆いつか別れて行くものだ。現在に於てすら彼等はどんなことを思ひ、どんなことをしてゐるかすら分らないのだ。また自分といふものが、どうなつて行くものだか分らないのだ』と正吉は、思つた。

彼は顏を見たゞけで、永久に敵となつて行く人間のあることを知つた。自分がこの醜いおひさのする

ことを何んでも不快に思ふやうに、彼女もまた俺を嫌ふであらうと思つた。而して彼女が此家に奉公してゐる間、何かにつけて俺から叱られたり、罵られたりしたことを終生忘れないであらう。而して、其のたびに俺を心の底で惡く思ふだらう。しかし其れは何うすることも出來ないことだ。默つて晩飯を食べると、匆々に彼はまた窓の處へやつて來て腰をかけて煙草を吸つてゐた。

　四十格好の男につれられて、若い女が門口を入つて來るのを見た。正吉は直に新聞の廣告を見てやつて來た女工の志願者にちがひなからうと思つた。其れは彼の思つた通りであつた。四十格好の黑つぽい單衣を着て、人相のよくない男は女を置いて、よろしく賴むと言ひ殘して先に歸つてしまつた。正吉はおとなしい樣子付をしたまだ十六七になつたばかりの女と相對して語つた。女はちよつと見たところで、まだ女工になるのは始めてゞあるらしかつた。而して、社會に出てこれまで苦しい働きをしたことがないらしかつた。どんな生活をしてゐたのか見當が付かなかつた。何を言つても羞かしさうにして、下を向いて僅かにしか答へなかつた。彼は色の白いやさしい柔かさうな頸筋を見てゐるうちに、たゞ何となく女といふものは愛らしいものであるといふやうな考へが起つた。其れでも女は正吉の問ひに對しては何でも答へた。其によると、女の家はもとはそんなに貧しくはなかつたのださうだ。たとへ貧乏をしても尙ほ娘を奉公に出したくないと祖母は言つてゐた。しかしさうも遂に出來なくなつて、いよ〳〵出て來るやうになつた。祖母は娘が風儀が惡くなるといつて心配したさうだ。しかしこれからの娘はそんなことを言つてゐられないと叔父が言つて遂に今日、叔父が此處へつれて來たのであると女は語つた。

　正吉はかうして俯向いて語る女のひつちりとして薄い着物の下に膨れ上つた腕や、ぱつちりとした黑

い大きな眼や、赤い唇などに見惚れてゐた。けれど、心の中で叔父といふ、男をちよつと見たゞけであるが、人相がよくなかつたので何となく好かなつた。而して、こんな男が女の親戚であるといふことを心私かに喜ばなかつた。彼は叔父は何をしてゐるかと聞かうとしたが、氣にとがめて聞かなかつた。何の必要があつて俺はそんなことまで聞くのか？と良心が囁いたからである。たゞ給金を得るために此處に通つて來る女工に過ぎないのでないか。此方からは彼女の勞働に對して規定の給金を拂ふだけである。而して俺と彼女との關係も單にこれだけに過ぎないではないかと思つた。

　女工のおはなは其の明る日から毎日通つて來た。而して、日暮方家に歸つて行つた。女が一人加はつたといふことは、そんなにこの小人數な淋しい工場の空氣を華かにはしなかつた。藤田はやはり默つて仕事をしてゐた。彼は新しく來た女に對して、さまで注意もしなかつた。而して相變らず隱しの中に新聞紙を入れて持て來ることもあれば、またリーダーを持て來ることもあつたけれど、彼自身の氣持の具合で、其れを取出して見ないこともあつた。獨り正吉だけは、彼女が來るやうになつてから、この單調な一日がさう全く樂しみがないとは思はれなくなつた。

『妾は家にゐても別に用事のない體なんですから、此家へ來て泊つてゐてもいゝのです』と、おはなは長い睫を瞬いて、正吉を見上げながら言つた。

　正吉は彼女に對して、此處へ來て泊つてゐてくれることは出來ないかと問ふたので、彼女がさう答へたのである。しかし。意外にも造作なく彼女が其れが出來るといふと、彼はまた暫らく考へなければならなかつた。

『或は此處へ來て泊つてゐてもらふやうになるかも知れませんが、もう暫らく』と彼は自分の言ひ出したことを打消した。女は彼方に行つて仕事に取りかゝつた。彼女の胸にかけた白い前垂はまだ新しかつた。而して、其れを見るのが何となく氣持よかつた。正吉は感情と意志が戰ふのを覺えた。而して、自分の言つたことを考へながら、茫然として彼女の働く姿を見守つてゐた。

『お、おはなさんは肥つてゐますねと、、、』と藤田君が厭らしい眼付をして、突然こんなことを口に出して笑ひながら正吉を見上げた。其れが何となく正吉の胸の裡を見透して言つたやうに思はれたので、彼の顏は熱つたが、素知らぬ風で、何となく狡さうに見える藤田を見返して、

『あの娘は、おとなしいよく働く子だね』と彼は言つた。

『ど、どうして先生、あれは始めてゝはありませんぜ。なか／＼す、擦てゐますぜ』と藤田は蔑むやうな眼付をして答へた。

『そんなことはないだらう』と、正吉は言つて取り合はなかつた。彼は焦立しさうに煙草を喫して窓の方を眺めた。

四

何處を見ても暗綠が深く重たらしく立罩てゐた。其等は地から吸ひ上げた生氣に滿ちてゐるといふよりは互ひの厚ぼつたい葉と葉の觸れ合ふために蒸れ返つてゐた。而して、人間までか其等の草木が吐く蒸し返る香氣にいつしか醉ふて四肢が痺れて奧底の知れない眠の谷に引き込れて行くのであつた。こんなやうな眠い眠い日が幾日もつゞいた。

工場から皆なが家に歸つた後で、正吉は閉の處で何を考へるともなく茫然と腰をかけて、やがてどんよりと暮れて行く空を見上げてゐた。

此頃になつて、下女のおひさがよく夜になつてから用事があるといつて出かけることを思ひ出した。而して、いつも歸りは彼が眠てしまつた後であることを考へた。この時、勝手許で、ひそ〱と何か二人で話をしてゐる聲が聞えた。もはや、電氣の來てゐる時分で、燈火を點ける頃であつたけれど、彼は物憂く此の室の隅に蹲んで鼠のやうに、また全く默つて死人のやうに寂然とした空氣の底に滅入り込んでゐたので、彼女は正吉が其處に居らないものと思つてゐるか、若くは何か仕事にでも夢中になつてゐるとでも思つてゐるらしく、兎に角、幾分か安心してゐるやうに、話の方に身を入れて、男と何か囁いてゐたのである。正吉は眤と二つの瞳をうす闇の裡に光らして、一點を凝視しながら、耳を欹て彼等の話聲に神經を集めてゐた。ちやうど、何か思ひがけない好い獲物を見付けた時の野獸の如く、今にも其の方に躍りかゝつて行かうとする心をば押へてゐる樣子に見えた。しかし、其の話の調子だけは聞えたけれど、其の意味は分らなかつた。なんでも獨りおひさが熱して、頻りに小止みなく懸樋の水の滾るやうにしやべりつゞけてゐる。其の合間に、たゞ僅かばかりの男の太い小さな聲がするばかりであつた。正吉はこの話の樣子によつて、女が嫉妬心からか、もしくは疑惑からか何等か男に對して怨みがましいことを言つてゐるのだと察した。同時に、さう思ふと彼の頭の中を激しい憤りの情が過ぎつた。共れは彼がこの醜い女に對してすら、尙ほ少しでも思ひを寄せたことがあるからでない。寧ろ醜い彼女までが情欲の前には盲目となつて、大膽な行爲を敢てするかと考へると、すべての人間といふもの

が卑しく、淺間しく見える、其の瞬間の反感と怒りに過ぎなかつた。彼の眼は怪しげに燃えた。口を歪めて、而して滿身の注意を兩脚に籠めて拔足をしながら、勝手許に近づいて彼等の樣子を探らうとした。

うす暗い灰色の光線がよどんでゐる裡に二人の黒い影が浮き出しゐる。男の影は女のよりは細く小さかつた。而して、二人とも顏がよく分らないまでに四邊はもう暗かつた。女は彼方を向いて立つてゐた。男は戸口の處に立つて暗い家の裡に向つて、女の胸のあたりを見てゐるらしい。たゞ僅かに女の横顏に鈍い光線がかすれてゐるのが白く見えたばかりであつた。正吉は障子の隙間から息を凝して彼等の樣子を見守つてゐた。其のうちに女の大きな重みのある體が動いた。而して板の間に軋む音を立てた。二人の話聲は暫時杜絶えたのである。すると、また女が二言三言話をする聲がしたかと思ふと、男が歸つて行く氣はひがした。正吉は此時、逃げるやうにして、障子の際から離れて、既に全く暗くなつてゐた仕事場の方へと身を隱したのである。

夜の九時頃であつた。おひさは正吉に向つて買物があるから、出してくれいと言つた。

「どんな用事があるんだか知らないが、明日の晝間にしたら何うだ。この頃毎晩のやうに遲く歸つて來るぢやないか。今夜は行つてはならん」と正吉は言つた。おひさは腫れ面をして、燈火のついた明るい室から立つて、蚊の澤山ゐる濕氣ばんだ暗い臺所へ行つて、其處に呪として坐つた。而して、彼方向になつてしく／＼と泣いてゐたやうだ。

正吉はかう言つたものゝ心の中では、彼女の自由に委して置かうと思つた。而して、彼は早くから床

の中に入つて臥てしまつた。いくら眠つても、まだ眠り足らないやうな氣がして、全身に物憂ひ疲勞が行きわたつてゐるやうに感じた。ふと夜中に彼は眼を醒した。時計の針は十一時を指してゐた。おひさの室を覗くと、空になつてゐて彼女の姿は其處に見えなかつた。

二三日天氣のつゞいた後である。正吉は外から歸ると、机の抽斗を開けて見た。昨日の晝間其の中に入れて置いた一枚の紙幣が見當らなかつた。たしかに彼は其の抽斗の中に入れたことを記憶してゐる。而して、彼は四つに折られた其の紙幣の手摺れた色合から、皺の寄つた具合までを尙ほ彷彿として眼に描くことが出來る。其れはたしかにこの抽斗の中になければならぬ筈であつた。其れが紛失すると、昨日の午後から、今日のもう少し前までの間の、ある時刻に誰人かの手によつて盜まれたのでなければならなかつた。

正吉は默つて、暗い氣持を抱いて工場の中に入つて來た。而して、氣付かぬやうに彼等の仕事をしてゐるのを眺めた。藤田は機械の傍に立つて手を動かしてゐた。おはなはおつとりとした顏付をして下を向きながら刷り上つたものから正しく揃えてゐた。而して、此方である疑ひの眼をもつて自分の顏を見てゐる男があるといふことなどについては、全く知らぬ樣子であつた。其れが却つて彼女に對して傷ましい氣がして、一層彼女が正吉には懷しく見えた。

「なんで、このおとなしい女が金などを盜むものか？」と彼は頭を振つた。而してもう一度藤田の顏付を見ると、人の好さうな夢想家はそんな罪惡を犯しさうに思はれなかつた。彼は勝手許から出て來たおひさの顏を銳く睨んだ。彼女は直に膨れ面をして、彼に對して心の反抗を其の色に見せたのである。而

して、眼を外して行き過ぎてしまつた。
「彼奴にちがひない」と彼は思つた。彼奴でなくて誰が盗むものか？この犯罪は夜間に行はれたにちがひない。人の此處にゐる晝間、誰がそんなことをなし得やう。昨夜も彼女は遲く歸つて來た。あの男に盗ましたか、それとも彼女か自から盗んだにちがひない。かう思ふと彼はもはや用捨して置くことが出來なかつた。其日の午後の休息時間に、彼は皆なの前で金の紛失したことを告げた。其時、皆なの眼は彼の顔の上に注がれた。
「外から入つて來た泥棒でないとすると、誰かこの中で盗んだ者があるにちがひない。其れが多勢といふならば仕方がないが、三人や四人の中で、そんな惡いことをする者が混つてゐると思ふと何んだか怖しいやうな氣がする」と正吉が言つた。
「へ、へえ、そ、そんなことがありましたんですか？其れは、ひ、晝間ぢやない、夜でせう」と藤田は小さな圓い眼を打ち引込めながら言つた。
「僕も、さう思ふのだ。大抵見當が付いてゐるよ」と言つて、彼は、前に立つてゐる下女のおひさと、女工のおはなの顔を見較べた。おつとりとして夢見てゐるやうな美しい顔付をしたおはなの様子には何の疑りがなかつた。而して彼女は、何か自分等の身の上には全く關係しない、おとぎばなしでも聞いてゐるといふやうな風に見られた。次に彼はおひさの顔を見た時に、忽ち顔の色が曇つた。而して、ある不安な影が瞳の中を過ぎるのを見た。彼女はまだ何とも言はない先から、例の腫れ面をして正吉の顔色を横眼で睨むと俯向いてしまつた。正吉は彼女の様子を見て、金を盗んだのはまさしく彼女であると思

はずにはゐられなかつた。而して、彼女を頭の頂きから、足の先きまで睨んだのである。

　其日、彼はおひさに向つて此家を出て行くやうに命じた。其時、おひさは何も言はなかつた。たゞ白い眼を剝いて、眤と正吉の顏を見たが、直に其の眼を外すと彼女は起つて自分の居間へ行つて荷物を纏めにかゝつた。而して、三十分と經たぬうちに、彼女は大きな風呂敷包を小脇に抱へて暇乞をして、此處から出て行つたのである。

　正吉は西の空にうすれ行く、入日の跡を眺めながら、彼女が睨んだ白い眼の印象を思ひ起して、拭ふことの出來ない不快を覺えたのであつた。――而して、最後に彼女に對して、宣言した刹那、金を盜んだ眞の犯人は彼女ではないのでないかといふ疑ひが起つたが――また其の疑ひが彼の心の底に頭を擡げて來た。そんなら、其の眞の犯人は誰だ？　この時、彼の眼の前に美しいおはなの顏が浮ぶのであつた。

『あのおとなしい、美しい、俺の好きな女に限つてそんなことがあらうか？　やはり金を盜んだのはおひさだ。夜遲く男と密會をして歸つてから、俺が眠入つてゐるのを見込んで金を盜んだのだ』と彼は言つた。彼は、あの醜い女をどんな苛い目に遇はしてやつても構はぬと思つた。自分が彼等の面前で彼女に罵辱を與へて、出て行けと言つたのは正當なことであるばかりでなく、痛快なことであつたと思つた。

　おひさがいよ／＼此家にゐなくなつてから、正吉はおはなに來てもらふことを考へた。其には充分に理由があることだ。而して、叔父に對しても少しもやましいところがないと考へた。

五

　明る日、正吉はおはなが工場に出て來るのを待つてゐた。而して、彼女が來ると直に彼の傍に呼ん

で、顏をしげ〳〵と見詰ながら、この工場に來て、暫らくの間泊つてゐてくれるやうにと賴んだ。「先日はあゝ言ひましたけれど、家で何と言ひますか歸つてから聞いて見ます」とおはなは答へた。次の日、彼女が來た時に、正吉は返事を聞くことを待てゐた。しかし、彼女から言ひ出すまでは默つてゐやうと思つた。彼女は頭痛がするからと言つて、正午過ぎから仕事を休んで歸つてしまつた。

其れぎり何うしたことか、彼女は工場に姿を見せなかつた。正吉は彼女の來るのを待つてゐたけれど、いつしか彼女は何等かの事情のために此家へは來なくなつたのだと考へるに至つた。

ある日、正吉は心の寂寥を慰めるために程隔つた處の河に行つて釣をしてゐた。河の兩岸には鬱陶しいまでに草が伸びて、頭の上には茂つた枝が垂れ下つてゐた。雲を破る太陽の光りは隙間から洩れて、靑々とした水の面に不思議な影を落してゐる。彼方の往來の端が木々の間から、僅かに白く覗かれて、其處には小さな黑い人影が現はれたり、消えたりしてゐた。而して、此方には堰があつて、其處からは絕えず溢れた水が單調な音樂を空氣の裡に奏でながら、下の靑々とした深味へ流れ落ちてゐる。且つ、岸から岸に渡された細い灰色の橫木が危く水の上に懸つてゐるが、木はちやうど水に接吻しやうとして出來るだけ下を向いて其の面を見詰てゐる如く見えた。

正吉はこの靜かな處に來て空想に耽つてゐた。工場で藤田が相變らず働いてゐることを思つた。また町のいろ〳〵な工場では皆なが孜々として汗を流して働いてゐることを思つた。然るに彼れ獨りはたとへ短かい間とはいへ、其等の生活からの逃避者の如く、何を考へ、何を思つてゐるかを考へた。彼は水の面に映つた女工のおはなのあどけない顏に心を吸ひ取られたやうに茫然として、彼女の來なくなつた

のに落膽し、其の姿に憧がれてゐるのに氣付いた時に、恥かしく感じたのであつた。

曾て、この一日を樂しいものと思つたことは永久に消えてしまつた。而して、たゞ熱苦しい日光が露骨に晒らした現實の境には塵埃と、汗と、苦痛とがあるばかりのやうに考へられた。彼は生活を知らず、女を知らなかつた子供の時分の生活を純潔に思つた。而して最も限りない眞の幸福といふものが、たゞ獨り其の時分にあつたやうに思つた。

折から林の中を分けて此方に歩いて來る子供の聲が聞えたので、其の方を振向いた。二人とも十一か二の少年であつた。學校からの歸り途らしい。一人はやゝ背が高かつた。しかし其の高い方の子供は何處かおんぼりとしてゐた。他の少年は其れから見ると痩せてゐた。しかし何處となしに敏捷さうに見えた。二人は何か大きな聲で言ひながら、正吉が蹲踞つてゐる崖の上を通つて、堰の方へ歩いて行つた。四邊には小鳥の聲と水の音とがするばかりであつて、彼等の話聲がこの寂然とした空氣の中でよく聞えて來るのであつた。

「君、水の中へ入らうよ」と痩せた方のが言つた。

「だつて、僕はよく泳げないんだもの」と背の高いおんぼりした方が答へた。

「何、この河の水はそんなに深くないぜ。僕のこゝん處までしかないぜ。二人して入らうよ」と痩せたのが言つた。

「家へ歸ると叱られるから厭だ。僕は入るのは厭だ」

「僕は叔母さんに默つてゐるよ。ねえ千ちやん入らうよ」と痩せたのが言つた。

「お母さんが言つたぜ。時ちやんといつしよに河へ行つてはいけないつて」と背の高い方が言つた。
「おや、叔母さんは僕といつしよに遊んではいけないつて言つたのだね。其れはほんたうかい？」
「うゝん、遊んでいけないと言ひやしない。河へ行つてはいけないと言つたのだよ」
「何と言つたつて分つてゐらあい。君のとこの叔母さんはそんなことを言つたのかい。言つたつていゝや、今度は俺は勉強して千ちやんを追越してしまふからいゝやい」と痩せたのが怒つた。
「僕だつて勉強すれば負はしないやい。僕の家のお母さんも、お父さんもお前の方が時ちやんよりは出來るのだと言つたからいゝやい」と背の高いのが、負けぬ氣になつて言つた。
「僕のとこのお母さんも、お父さんも、ほんたうはお前の方が千公よりは出來るのだけれど勉強せんから今度の試驗には負けたのだ。勉強すればきつと追越すことが出來ると言つたよ。何、君なんかに負けるものか」と痩せた方が言ひ張つてゐた。

彼等は互ひに爭ひながら林を分けて彼方に行つてしまつた。

やがて正吉は釣竿の糸を卷いて歸る仕度にかゝつた。崖を上つて、靜かに水が落ちてゐる堰の方に歩いて來ると、先刻の二人の少年が其の堰の處で何かして遊んでゐる。彼はふと漸く近づいた時に林の中に立止つて、彼等の遊んでゐる有樣を見守つた。あまりに二人の遊び方には意味があるらしかつたからだ。彼は姿を隱して、二人の樣子を凝視してゐた。

「こんな處を渡られんなつて、弱蟲だあい」と痩せたのが言つて、彼は直に下駄を脫いで素跣になつて、水の面に渡された細い横木の上に乘つた。而して、始めのうちは兩手で體の中心を取つて、眼を一處に

落しながら、さも怖ろしさうに緩く渡り始めたが、終には元氣よく一走りに其の木の上を渡り離して彼方の岸に着いた。

「千公の弱蟲は渡れないやい」と彼は叫んで、其時まで、彼方の岸に立つて友達の渡るのを見てゐた背の高いのに言つた。

背の高いのは、かう言はれても、たゞ頭を傾げて水の面と、細い一本の横木とを見較べてゐるばかりで何とも言はなかつたが、決然として、手に持つてゐた學校の荷物を足許の地面に置くと、急に素跣になつて、

「何、僕だつて渡れんことはないやい」と言つて、兩手で其の横木に摑まりながら、自分の體を其の上に乘せて、やつと手を左右に擴げて起ち上ると、前に友達がしたと同じやうな樣子付して、美事に其の木の上を渡つたのであつた。

「おや、今度いつしよに渡らう」と背の低いのが言つた。

「君が先きかい、僕が先きかい?」と背の高いのが問ふた。

「さうだね」と背の低いのは考へてゐたが、

「君が先きだ。僕は後からだ」と言つて、友達を促した。背の高いのは、また危なげな樣子付をして横木の上に乘ると、靜かに前の方へと進んで行つた。背の低いのも同じやうな樣子付をして横木の上に乘るとつゞいて其の上を渡り出した。やがて二人は青々とした水の眞中に來ると、背の低い少年は不意に急ぎ足になつて兩手で強く、前に乘つて歩いてゐる少年の脊中を押して水の深味へ突き落しさうな樣子を

したが、其の刹那に至つて思ひ返した如く、上に伸した手を下に落した。其のうちに前の少年は無事に木の上を渡り盡して、一足先に彼方の岸に着いて、此方を見て笑つてゐた。其の晴やかな明るい顔には、今、もう少しのことで、河の中へ突き落されやうとしたのを全く知らないらしかつた。空の色は美しく澄んでゐた。而して、林の中では蟬が鳴いてゐた。この一日がこの少年の記憶にいつまでも殘つて、樂しい日となつて傳へられるであらうと思ふと、而して、永久にもう一人の少年の怖しかつた心の裡を知らずに、いつまでもこの時の友達を懷しく思ふであらうと思ふと、正吉は戰慄せずにはゐられなかつた。

彼は林の中から出て、二人の少年の前に立つた。而して、二人が彼の顔を同時に見上げたのを見返しながら、彼は、ずつと背の低い少年の顔を見詰む。其の少年は氣まり惡さうにして伏眼になつて顔を反(そむ)けると、

「千ちやん、もう歸らうや」と言ひながら先になつて、堰の邊(ほとり)を離れて、先刻來た道を引返して、二人はやがて林の中に入つて行つた。正吉には、いつまでも其の背の低い少年の瘦せた顔付と、瞼しさうな眼の色とを忘れることが出來なかつた。而して、彼は二人の間に何等の間違がなければいゝがと思つた。

六

玄關に來て案内を賴んだものがあつた。其れを聞き付けた正吉は早速其處に出て見ると、見慣れない男が羽織を被て、白いパナマの帽子を被つて立つてゐる。其男は正吉の顔をしげ〳〵と見てゐた。

「どなたですか」と正吉は其の男を見ながら言つた。
「あなたはこの工場のご主人ですか」と其男は問ふた。
「持主は今故郷（くに）へ歸つてゐます。留守を私がしてゐるのですが、どんなご用ですか？」と正吉は言つた。
「ちよつとおたづねしたいことがあつて上りましたのですが、此處にはなといふ女工が來てゐましたか？」と其男は言つて、彼は懐（ふところ）を探つて一枚の細長い名刺を出して正吉に渡した。正吉は其れを受取つて見ると刑事であつた。彼はぎよつとした。而して彼の心は覺えず戰いたのである。
「はい、來てゐたことがあります」
「今も來てゐますか？」
「いゝえ、もう十日ばかり前から來ません。あの女がどうかしたのですか？」
「何か此處に來てゐる間に、間違つたことはありませんでしたか」と刑事は問ふた。正吉には、直に金の紛失したことが思ひ出されて、其れは下女のおひさでなく、全くあの女の所業（しわざ）であつたかと思つた。が、彼は其のことを口に出さなかつた。彼の心の何處かには尚ほ彼女を護（かば）ふ情があつたものと見えて、
「別に變つたこともなかつたやうですが、何かあの女がしたのですか？」と正吉は、驚いたやうな顏付をして刑事にたづねた。
「他で惡いことをして、拘引（あげ）られたのですが、そんなら別にあの女について變つたことがありませんでしたな」と刑事は、さも有りふれた、何でもない事實を語つてゐるやうに飽迄冷靜であつた。
「別に變つたことがありません」と正吉は、きつぱり言つた。

「いや、お邪魔をいたしました」と言つて刑事は歸つて行つた。戸口を彼が出ると、烈しい日の光りが白いパナマ帽子に赫と照り付けた。而して、彼の穿いてゐる幅廣の下駄が忽ち乾いた路の上から見えなくなつた。

「どんな惡いことをしたのだらう」と正吉は女工の身の上について考へた。彼女のあどけない、眼のぱつちりとした一見罪のなささうな顏が彼の眼に浮んで來る。どうして、あんなやさしい女がそんな怖しい罪惡を犯したらうと思つた。次に彼の頭の中に浮んだ考へは人間といふものは、全く顏付では、其者の心までは分らないといふことであつた。其の次に彼の頭に浮んだ考へは、自分には尙ほ人間といふものを見るだけの經驗と觀察が足りなかつたといふことだ。而して、彼は尙ほこんな罪を彼女が犯しても、幾分なりと彼女を心の中で愛することが出來るかといふ問題が頭の中に浮んだのであつた。理性は彼女を斥けた。しかし感情は尙ほ彼女を抱からうとした。正吉は全くこの矛盾した氣持を經驗して、眞實の自己は何方に味方するものであらうかと思つた。

彼の眼の前には、あの醜い腫れ面のおひさの顏が浮んだのである。彼はこの女に對していかなる怨みがあつたか？　またこの女は彼に對していかなる怨まれるやうな行爲をしたか？然るに彼はこの女を憎んだ。罵つた。其ればかりでない。この女に對して拭ふべからざる程の汚辱を加へたではなかつたか？彼は殆んど彼女に向つて、お前が金を盜んだのだらうと明言しないばかりに言つたではないか？而して、彼女を其日の間に暇をやつたでないか？　其時、彼女はどんな眼付をして彼を睨んだらう。其れは、恐らく正吉が終生忘れることが出來ない程の印象を彼の頭に刻んだ程怨の深いものであつたと思ふ。其

ればかりでなく、彼はおひさが此家から出て行くと、其の代りに女工のおはなを家に入れて、彼女に食事から萬端の世話をしてもらはふと思つたでないか？　あの場合、おはなが眞に惡いことをしたのでなければ、此家に來なければならぬ筈であつた。しかるに其の場合になつてから彼女は來なかつたでないか。其れはたしかに彼女が身に暗いところがあるので、氣が引けたに相違ないからである。而して、彼はこの事件のあつた刹那、彼の心にこの犯罪者はおひさでない、却つておはなのしたことでないか？といふ一種の直感が心を襲つたにかゝはらず、彼は其れを打消して、この所業は全く醜いおひさにちがひないと心にきめてしまつた。其時いかなる確證が彼にあつたらう。かう考へると彼は自からの行爲に對して恥なければならなかつた。すべてはたゞおはなが美しくあつて、おひさよりは自分の氣に入つてゐたといふだけの理由に過ぎなかつた。單にこれだけの好き、嫌ひが原因で、そんな怖しい犯罪までを醜いおひさは負はなければならぬのか？と正吉は自身に問ふて見た。彼は良心の呵責の鞭に堪へなかつた。何といつて、おひさに詫びたらいゝだらうと思つた。彼女の許しを受けるまでは、彼の生活は永久に暗い影を宿して、樂しい時、喜ぶ時、幸福を感ずる時に、何處からともなく冷かな手が差し出されて、其等を掴み、而して笑ひも、喜びも消してしまふであらう。其れは、おひさが永久に彼を何處かで呪つてゐるからである。彼女はあの時のことを思ひ出すたびに、睨とあの白味の多い眼を凝して、瞳を片隅の方に寄せて、いつまでも物の一處を見詰て、彼から受けた無實の罪に對して心からの悔と、怒りと、怨みとに燃えて、彼の姿を眼に描いて呪ふであらう。——彼は其れを否定することが出來ない。

おひさが、今何處にどうしてゐるか其れは正吉には知ることが出來なかつた。彼は今後彼女と相見る

機會がないかも知れない。偶然道で遇つても物を言ふ機會がないかも知れない。恐らく物を言ふ機會はないだらう。而して、二人は永遠に敵視しなければならない。この世界に於て、眞にたとへ一人でも思つてゐてくれるものがあるとしたら、それはどんなに氣強いことであらうか。また眞にたとへ一人でも咒ひ、憎んでゐるものがあるとしたら、それはどんなに怖しいことであらうか。人間は時に全く其の一人の愛によつて救はれることがある。時に其の一人の憎みによつて滅されることがある。彼女には、正吉を滅すだけの力はないであらう。けれど彼女の憎みと怨みは、永久に彼の幸福を奪ひ、憂鬱と暗愁とを彼に感ぜしめ、終生彼を寂寥の人とすることが出來る。

正吉は、おひさが自分を呪つてゐる眼を見ることが出來た。彼は最後に彼女が睨んだ、あの氣味の惡い眼付を忘れない限り、彼女が何處にゐてもあの時のことを思ひ出した刹那、あの眼付をして彼の幻影を睨み呪つてゐることを知つた。彼は其のことを考へると戰慄せずにはゐられなかつた。

「そんな惡いことをする女でないとばかり思つたがな」と正吉がいふと、シャツ一枚になつて上衣を脫いで働いてゐた藤田は額際に汗を染ませながら、ヒヽヽと笑つて、

「ね、ねこ被つてゐたんです。あ、あんた惚れてゐたんぢや、あ、ありませんかヒヽヽ」と言つた。

「馬鹿ッ」と正吉は言つて、彼もまた苦笑せざるを得なかつた。

此時、藤田のところへ宿から子供が辨當をとゞけに來た。子供はずん／＼此方に上つて來た。正吉は彼等の傍に近づいて來た子供を見ると、先日、釣に行つた時に、堰の邊で見た二人の少年の中の痩せた方の子供であつた。彼はこの子供の顏をよく覺えてゐた。子供もまた意外な人を見たといはぬばかりに

驚いた顏付をしてゐた。藤田は其れを受取ると、やがて子供は歸つて行つた。
「あれは何處の子供だい」と正吉は藤田に問ふた。
「あ、あれですか。宿の子供です。い、いふことを聞きませんぜ」と彼は答へた。
正吉は、偶然にもあの痩せた少年が、藤田の下宿してゐる家の子供であることを始めて知つた。

七

日暮方になると藤田は工場から歸つた。正吉は彼の後姿を見送つた。家を出て半丁と行かぬ處は崖になつてゐた。崖の上には靑々として葉の密茂した雜木が立つてゐた。其等の葉の間から、彼方を望むと新開地の光景が手に取るやうに見られる。藤田の歸つて行く處は其の方であつた。隙間のないやうに押し合ひ重なり合つて家根が黑くなつて見える。而して、他に廣い手の付けられてない土地がまだ澤山あるのに、もう其の外には空地がないといふやうに、彼等の建物は一寸の土地を爭つてゐる如く見えた。其處には小さな工場や製造場と共に貧民の長屋が混つてゐた。而して、工場には貧民の子供等が働いてゐた。折からの夕暮の空は美しく、林の方へと流れてゐた赤い雲が、下の煙突から出てゐる黑い煙を見落してゐた。正吉はしばらく其處に佇んで、藤田の宿は、あの町の建物の中の一つであるが、何の邊になつてゐるだらうと見てゐたのである。
故郷へ歸つた叔父は、容易に出て來なかつた。最近に來た手紙によると、東京で活版所を擴張するのでは、誰も金の出し手がない。やはり故郷で何か始めるのでなければ、資金を安心して借せる者がない。いはゞ借して置いて彼等は其の事業の進行を眺めることを、ちやうど樂しもうとするのである。而

して、もつと貸しただけの金には利子を付けて取るのであるが、其れでも眼に見ることの出來ない、遠くで事業をするのでは安心して貸せる者がない。其れに、ちやうど故郷の方も景氣が惡い方でないから、何か事業を企てるにはいゝ時期である。事によつたら、東京の活版所を一先づ解散するやうにも考へてゐると叔父の手紙には言つてあつた。

正吉は、早晩、理由はいづれとしてもかうした運命にこの工場の陷入ることは考へてゐたのであつた。其後來た叔父からの手紙によつて、彼はいよ〳〵この工場を解散することにした。叔父は後始末についての一切を正吉に頼んで來たのである。

『あ、あんたは、どうなさいますか』と藤田は正吉に聞いた。

『僕は君のやうに、さうした勞働者にはなれないよ。體が第一に強くないからね。其のうち何か職業を見付けるよ。其れまで何處かに間借りでもしなけれやならない』と正吉は言つた。藤田は、小さな落込んだ眼を向けて、鼻の頭に汗を染ませながら、正吉の顏色を探つてゐたが、

『あ、あんたが毎晩、英語を敎へて、く、下されば、私の宿に來ませんか。一間三疊が明いて、ゐ、ゐますが』と藤田は言ひ出したが、どういふものが、彼はかう言つた後で直に自分の言つたことを後悔してゐるやうな樣子にも見えた。

『何處でもいゝよ。そんなら、君のゐる素人下宿へでも行かうか』と正吉は考へもせずにきめてしまつた。

叔父の經營した活版工場は前後僅かに四ヶ月に滿ずして解散してしまつた。而して、陰鬱な梅雨が漸

く上ると、ちやうど同時に正吉はすべての後始末を付けて、曾て彼がよく崖の上に佇んで見下したことのある、新開地に建てられた長屋の一軒であつて、藤田が長らく下宿してゐる家へ越して來た。

長屋は建てられてから、まだ四五年とは經たないのに、もう柱は歪んで、壁の隅々は隙間を生じてゐた。正吉は二階の三疊にゐて、其の隣の四疊半には藤田がゐたが、其處には下の家族の道具などが隅の方に積み重ねられてあつたので、何となく汚穢しい上に、臭氣が室の裡に漂つてゐた。而して三疊も、四疊半もたゞ片側から射す光線だけしか入らなかつたので、其の軒下に洗濯物を吊された時は、室の裡はうす暗くなつて穴の中にでも竦んでゐるやうであつた。殊に雨の降る日には四邊はじめじめとして、洗濯物から滴る雫が、風の吹くたびに障子の面を濕らした。汚れたぶくぶくした、たるんだ皮を張つたやうな茶色の疊からはむせ返るやうな臭氣を放ち、隅々の濕けたうす暗い處や、押入の中からは、垢の付いた着物などの放つ黴臭い氣が、其の中に坐てゐるだけでも病氣になりさうであつた。下の四疊半の一間には家内三人が臥たり起たりして、其處には、主人の仕事道具が置いてあつて、また仕事着などが壁にかゝつてゐた。

此家の主人は大工職であつて、幸太郎といつた。彼はあまり人がいゝので誰からも馬鹿にされてゐた。獨り仲間からばかりでなく、彼の女房からも馬鹿にされてゐた。他の者等はいゝ割前をもらつて歸つても、彼ばかりはいつも彼等の思召だけしかもらはなかつた。だからもうこの職についてから幾年になるが、まだ獨立して金の儲かりさうな仕事といふものは、何一つ彼の手で請負つたことがない。世間が彼を虐待したといふよりは、寧ろ彼に其れだけの膽力もなければ、力もなかつたといふのが適して

ゐる。彼はいつも仲間の下働きをして、彼等がくれるだけの賃金に對して不平を言ふことが出來なかつた。

正吉は此家に來て、主人の幸太郎を見た時に顏付が全く伜の時一に生寫であるので、あまり其の似てゐるのに驚いた程である。獨り顏付ばかりでなく、其の痩形の處までが似てゐる。眼は臆病氣に戰いてゐる。彼は低能的な藤田までを怖れてゐる風に見えた。幸太郎は朝早く起きて、獨りで飯を食べて仕事に出て行つた。其れから大分經つた時分に女房のおまきは床から離れて、顏を洗ふのであつた。おまきは脊は低かつたが肥つてゐた。而して、癇癪持の女であつた。其の代り亭主の幸太郎が他の顏を見るのも怖れ、また誰に對しても碌々物も言へないのに比して、おまきは思つてゐることは何んでもはき〳〵と言ふ性質であつた。

おまきは、起きると梯子段をみし〳〵と音をさして、それでも成丈け足音を立てぬやうにして、藤田の居間へ入つて來た。ある時は、正吉が隣の間で耳を澄してゐても互ひに物も言はずに暫らく何の氣はいもせずにゐることがあつた。するかと思ふと、突然おまきの笑ふ聲がすることもあつた。つゞいて藤田が低い聲で叱りながら、彼女に囁くのが聞えた。

正吉は、殆んど幾日かの間死んだもの〻やうになつて、其の陰濕な三疊の間に机の前に昵として坐つてゐた。彼は人間の生活といふものに、何處かに美しい、清らかな世界といふものが別にあるかも知れないけれど、兎に角、自分の周圍に於て見る生活は汚たない、醜いものであると考へた。而して、人間にはこれ以上の生活を營む能力が缺けてゐるやうに思つたこともあつた。もしすべての人間といふこと

が出來なければ、彼等には其の能力が缺けてゐるやうに思つた。彼は居心地のいゝ家に住み、清潔な食器で食事をし、清らかな垢の付かない着物を被るといふことも畢竟、この社會の生活にあつては理想に過ぎないと感じた。もしこの社會といふことが出來なければ、自分等の生活では理想に過ぎないと感じた。而して、自分等の世界で、清らかとか、美とか、理想とか、清潔とか、いふやうなことは一種の贅澤な考へに過ぎないと感じた。醜惡であり、不潔であることが普通であるやうに思はれたのであつた。だから、彼は何を見ても驚かなかつた。何を聞いても不思議とは思はなかつた。或時は、全く當然だと思つたのである。或時は、この絶望に近い心持も絶望とは思はなくなつて、却つて、眞實の人間生活といふものは、こんなものであると思つたのである。

正吉が此家に同居するやうになつてから、藤田の態度は變つて行つた。もはや、藤田は金錢上の利益關係について、正吉とは何の交渉もなかつた。物質生活に於て交渉のないといふことが彼を冷淡にさした。彼はたゞ何といふことなしに正吉と疎隔しやうとつとめた。而して、成べく顔を合はさないやうにした。其れは、やがて正吉がたび／＼彼の室に出入することを好まないからであつた。正吉は此家に來ると彼と女房のおまきとの間柄を疑つた。しかし、これは全く彼の邪推であるかも知れないと思つて、彼自からの直感を打消した。しかし日を經るにつれてさう信じなければならなかつた。藤田が疎くする理由も分つた。曾て、藤田が自分の宿に來ないかと言つて、直に其の言葉を後悔したやうに顔色を變へたのも、單純な不安からではなしに、全く意味があつたのだと分つた。

藤田は其れでも時々、新聞を持て正吉の室にやつて來た。而して、露西亞は飢饉であるとか、ポーラ

ンドでは革命が起りさうだとか、シャックルトンが南極探檢の計畫をしたとかいふ事件をさも切實に彼自身の生活に關係のある如く一種の感興をもつて語つた。而して、其等の現象は、自然がこの人生の永遠の問題に對して解決を急ぎつゝあるのだといはぬばかりに語つた。彼は新聞の記事に對しては今迄の如く感激し、時々正吉の室に來て語つたけれど、英語のことについては、正吉が此家に來て以來全く口に出さなかつた。正吉も、自分から彼に教へるなどゝは言はなかつた。藤田は仕事から歸ると、毎夜默つて室の裡で何かしてゐるらしかつた。女房のおまきは、夜更けてからも彼の默つて何かしてゐる室に入つて來ることがあつた。其のたびに正吉は、早く職を見付けて、彼自身が安全な生活の路に就かなければならぬと思つた。其時は、この汚れた家を見捨る時だと心の中で言ひながら、尚ほ彼は其後幾日も此家にゐたのであつた。

「ほんたうに何から何まで、みんな藤田さんのお世話になつてゐるのでご座いますよ。主人はあのとほりの頼みにならない意氣地なしですからね」とおまきはある時は外聞もなく大きな聲で、正吉に對つて言つた。正吉は此家に來てから、あまり家内の誰とも親密にならなかつた。幸太郎は彼を見る時もおどくした眼付をしてゐた。而して、成たけ顏を合せるのを避けやうとしてゐた。彼の眼付はちやうど土鼠が日光を見るのを怖れて、竦んで戰いてゐるやうに黑い瞳は臆病氣に光つてゐた。おまきは正吉を殆んど他人扱ひにしてゐた。而して此人とは現在に於ても深い關係がないやうに、未來に於ても一向自分等の生活の圈内に入つて來るやうな人間ではないとみくびつたやうに、彼の前で大膽に藤田と惚氣ることもあつた。

『この人は、こんな顏をしてゐて、なか〳〵油斷がならないんですよ』と、藤田の肩を叩いておまきは言つた。藤田はヒヽヽと笑つた。

『早くいゝ女房さんをお持なさいよ、妾が世話して上げますわ』と、おまきはまた藤田の腕のあたりを抓つた。

『ヒヽヽ、さ、妻君なんか、も持ますもんか』と藤田は、流石に正吉の前氣まり惡げに顏を赤めながら言つた。

よく藤田は仕事を休んだ。而して、下の室でおまきと菓子を買つて來て食たり茶を飮んだりして一日何か話して、笑つたり、時々罵り合つたりして日を暮した。幸太郎は、その間仕事に行つて、いつも留守であつた。彼等二人が、かうして話をしてゐる時分に、小學校から時一が歸つて來た。父親に顏付のよく似た時一は神經質さうな眼付をして二人の樣子を見守つて、學校の荷物も下に置かずに立つてゐた。

『さあ、お菓子を上るから、外に遊びにお行きよ』とおまきは言つた。

『だつてお母、もう試驗が始まるもの、算術を勉强しないといけないもの』と、時一は母親の顏を不審さうに見てゐる。

『いつも遊ぶ癖に、なんだね今日に限つて。試驗が終ると暑中休みだ。また毎日世話が燒けて、ほんたうにいやになつちまふ』とおまきは言葉を投げるやうに言つた。

『千ちやんに負ければ、また叱るだらう』と時一は怨めしさうに母親の顏を見た。

『あたりまいぢやないか。この前の試驗にもお前は負たらう。お前の父さんも、外へ出れや叔父さんにいぢめられてゐるのだよ。妾は悔しくてならない。この頃は妹までが妾の上に立たうなんかとして馬鹿にしやがる。お前までが學校で千公に負けちや、なんて家は意氣地なしばかりの集りぢやないか。獨り妾だけ、やきもきするばかりなんだもの』と、おまきはさも悔しさうに涙ぐんだ。

『ねえ、お、女房さん、そ、そんなことを言つたつて仕方がないぢやないか』と藤田はさも當惑したやうな顔付をした。時一は、神經質の眼を輝かして、彼方の隅に置いてある机の前に行つて肩から荷物を下した。

　夜であつた。晝間から、やきもきしてゐるおまきは、甚く時一を叱つた。子供を擲る音がすると、子供の泣き叫ぶ聲が梯子段の下で聞えた。

『まだ、暗くなつたばかりぢやないか。性根のない餓鬼つてや仕方がない。居眠りなんかしてゐて何が分るもんか。ねえ。よくお聞きよ。お前が今度千公に負けたら、もうお前は家には置かないのだよ。何處へでも奉公に出してしまふのだよ』と言つて、おまきはまた子供を擲つた。小さな肉體が叩かれるたびに音がすると思ふと、時一の泣聲が募つた。

『やい、ほんたうだ。今度千公に負けて見れ。勘辨出來ねえぞ』と、お人好の幸太郎までが女房の後につといて、時一を叱つてゐた。而して、だん／＼其の叱りは強くなつた。元來この男の癖で、強い者や、友達などに對しては大きな聲を出して物も言へないのに、小供なぞ叱る時だけは、そんなに大したことでも何んでもないのに、いつまでもしつこく繰り返し、繰り返し同じことを言つて、しまひには眞實

に彼自身までが本氣に怒つてしまつて手荒なことをするのであつた。しかしこんなことは稀であつたが、今、彼は時一に對してだん〳〵其の怒りが募つたのであつた。何といふ淺間しい家庭だと正吉は思つた。しばらく下の樣子を覗つてゐると、藤田が仲裁に入るために、梯子段を降りて行く足音が聞えた。其れでも尙ほ彼等の互ひに口々で罵り合ふ聲がしてゐたが、いつしか騷ぎは靜つて、藤田の叱りながら話す聲に混つて、おまきの笑ひ聲が聞えて來た。

八

夜中に時一は、不意に床の上に躍り上つた。彼は學校の敎室で算術の試驗をしてゐる夢を見た。四問題の中で、分つたのがたつた一つしかなかつた。いくら考へても他の三問題は分らなかつた。だん〳〵時間は經つて行つた。他の生徒等はさつさと答案を敎師の机の上に差出して、敎室の外へ出て行つてしまつた。もう間もなく鐘が鳴るだらうと思ふと、時一は胸がわく〳〵として、手足が戰いて、頭が痛んで來た。千藏に今度の試驗も負けるかと思ふと、母親や、父親が、いつもの如く口やかましく言つて、彼を苛める光景が浮んだ。彼はこの不自然な競爭を思ふたびに、いつそ敵手としてゐる千藏が死んでくれゝばいゝと思つた。そんなことを考へてゐるうちにも時間はだん〳〵と經つて行つた。彼は覺えず聲を上げて、心の苦しさのために叫んだ。

『頭が痛い。頭が痛い』と、時一は夢から醒めると床の上に座つて言つた。うす暗くなつた五燭の電燈は、この少年の惱みに輝いてゐる瞳を照してゐた。おまきも、幸太郎も其れがために眼を醒したが、默つて半分ばかり眼を開いたまゝ、我が子の樣子を見守つてゐた。多分夢を見たのだ位にしか思つてゐな

かつた。其のうちに時一は獨りで彼の寢床の中に入つて眠つてしまつた。彼が眠りに就く前に、既におまきも幸太郎も眠りに陷ちてゐたのである。

暑中に入つてからも、陰晴定まらぬやうな日がつゞいた。幸太郎は仕事に出なかつた。おまさの癇高な聲が梯子段の下でした。時一が叱られて泣く聲がした。藤田は仕事を休んで、下に行つて朝から、夜まで何事か話してゐる。一家の樣子は何となく落付かなかつた。正吉には仔細あることだと思はれたが、別に藤田と顏を合はして語り合ふ機會もなく過ぎた。

ある日突然藤田が正吉の室へ入つて來た。いつになく彼の顏は興奮し切つてゐた。

「やあ、こゝの主人にも、こ、困ります。ち、ちつとも考へないんですから」と、彼は獨り彼のみに分るやうなことを言つて、額際から流れる汗を汚れた白地の袖で拭つてゐた。

「何か、揉てゐる話でもありさうな樣子だが、どんなことがあるのだね」と、正吉は口を開いて、藤田の返答を待つた。

「な、何、やはり生活問題で、です。今、滿洲に行くと、お金の取れるところがあるといひます。主人が行くといつて見たり、またやめると、い、言つたりして、一向分らないのです」と藤田は答へた。

此時、下でおまきが大きな聲を出して、藤田を呼んだ。彼は慌てて室から出て梯子段を降りて行つた。正吉は藤田が、主人のことを言ふ時には、きつと代名詞に英語を用ふることなどを思ひ出して、微笑みながら其の風通しの惡い三疊の間に仰向になつた臥てゐると、下でおまきの聲と、幸太郎のいつになく激した聲とが聞えたのであつた。正吉は人の好い幸太郎を憫れまずにはゐられなかつたけれど、や

はり彼がこんな目に遇ふのは自身にも幾分の責任があると思つた。たゞ人が好いといふ理由だけでは正吉は彼に同情が出來なかつた。

しかし彼はこの弱者に對して同情が出來なかつた以上に、この意氣地ない男を虐める周圍の者を憎んだ。幸太郎が彼の腕で妻子を養つて行くことが出來ないにしたところが、彼の意志でもないものを無理に彼等が滿洲へやらうとする權利が何處にあるか。彼は彼等の不純な精神を思ふと一層彼等を憎まずにはゐられなかつた。其れよりも一層人間の生活を闇の底に、彼等を救ふことの出來ない泥濘の裡に沒し去る怖しい本能の力を憎まずにはゐられなかつた。誰でも過去にこの後悔を持つてゐる。或者は現在に持つであらう。而して、ある者は未來に持つであらうと思ふと、彼は彼の至る處にこんな罪惡が行はれつゝあるのを知つた。彼はしばらく壁の方に向いて兩方の眼を閉ぢたのであつた。

この後二日ばかり經つと、幸太郎がいよ／＼滿洲に出稼に行くことにきまつた。其の出發の前日には下の間で、藤田も仕事を休んで、彼等は酒を飲んで朝から、笑聲が聞えた。いつになく幸太郎も晴々しい顏付をして、時々唄などを歌つてゐた。而して、日暮方前に彼は時一をつれて、これがしばらくの別れだといふので、町へ出て行つた。一時間ばかりして二人が歸つて來た時には、時一は父親に手を引かれながら、片手にはおもちやの鐵砲を持てゐた。時一は、家に歸ると、さも嬉しさうに、

「お父ちやんに、鐵砲を買つてもらつた」と言つて、頻りにはしやぎ廻つてゐた。

漸く夏の特色が見えて、鮮かに西の空を燒いて沈んだ夕日の名殘りは空に殘つてゐる雲に燃え移つてゐた。遠くの森の方では頻りに蜩が鳴いてゐた。

日が暮れると、紫紺色の冴えた夜の空は眠と下界に、其の魅力のある眼を見張つて望んだ。この世界では曾て見ることの出來ない奇異な星の光りが、この夜の大きなゆるやかな體を、ちやうど珠數をかけたやうに、若くはさまざまな石で鏤めたやうに飾つた。而して、かゝる永久に其の神秘を包んだ夜の景色は、一人の不幸な男が其の住みなれた家から立つと、否とにかゝはらず、すべての人間の喜びも、悲しみも押し包んで默々としてゐるのであつた。

正吉は、ちやうど全く風が落ちて、蒸し暑くて室の中に眠としてゐるのに居堪らないで、窓際の處に出て、夜の空を仰いで、叔父のことなどを思つてゐた。彼方の家の物乾場には、洗濯物が高い竿にかゝつたまゝ其儘にされてゐる。其れが、夜の空にくつきり黑く姿だけを見せてゐる他には、彼方の地平線を染めた賑かな街の脚光が、空をほのぼのと染めてゐるのが見られたばかりであつた。

其時、みしりみしりと梯子段を上つて來る足音がした。やがて藤田のゐる室に其の足音は入つて來た。其時、藤田は默つて室の中で何かしてゐるらしかつた。すると聲が洩れて來た。其れは幸太郎であつた。彼の聲は眞面目であつたにかゝはらず、何處か其の調子に醉つてゐるらしいところがあつた。

『藤田さん、いらいあなたにお世話になつてすみません。私が行きましたら、後には女子供ばかりですから、何分にもこの先きよろしくお願い申します。やあ、ほんたうに藤田さんにはすみません。何といつてお禮を申し上げていゝか分りません。私も、あちらに行きやしたら、今度ばかりは一つやつてみます。やあ、ほんたうに……………』と幸太郎は、藤田の前に膝をついて、言つてゐるのが手に取るやうに分つた。

これを聞いた正吉は、彼を憫み、且つ苦笑したのであつた。幸太郎は、正吉の室には來ずに其の儘、下へ降りて行つた。正吉は、生なか彼等の生活に關係しないやうに支配された自然に對して感謝した。もし、幸太郎が假りに正吉に向つて、後の事を依賴したとしたら彼は其時、何う返答するであらうと考へた。他人の生活は趣くがまゝに委すより仕方がない。其のことは善でもなければ、また惡でもない。たゞ自然であると感じた。

自己に力のない時に、自然はたゞ自然として眺めるべきである。其に對して善とか、惡とかいひ得るなら、彼等の生活に對する責任をも擔ふだけの强者であると自己を信じなければならない。正吉は、さう信ずるには金もなければ、また腕力もなかつた。彼はたゞ心の自由が許す限りに於て、ある者を憎み、ある者を憫んだ。

九

もう一日も此家にゐることは出來ない。もしゐたなら、藤田を擲り倒してやるだらうと正吉は心を激して思つた。彼は常にこの人生を醜いと思つた。人間の生活といふものは、見るが如き淺間しいのが眞實の姿であると思つた。而して、個々の生活はすべて苦痛であると思つた。もしこれを厭ふならば、彼は生活に對して絕望しなければならぬと思つた。しかし、彼はもはや其を默つて見てゐることが出來なかつた。

幸太郎がゐなくなつてから、藤田とおまきとは誰れ憚るところもなく醜い關係をつゞけてゐたが　其れを彼は見て憤つたのでない。どうせ彼等は動物の如く生きて、動物の如く死んで行く人間であると思

つてゐた。たゞ時一を可哀さうに思つたのであつた、少年の眼には、いかに彼等のなすことが映るであらうか？　時一は、正吉が此家に來てから、はや幾十日にもなるけれど彼に親しまなかつた。時一は他の少年のやうに容易に誰とでも親しむ子供でなかつた。たゞ眤と人の顏を見て、神經質な眼を光らしてゐるばかりであつた。而して、其の人がどんなことを胸の裡で思つてゐるだらうかと思つてゐるやうに見えた。母親は、この子供がどんな性質であるかも知らずにがみ〱と言つて、學校では妹の子供と不自然な試驗の點數を爭つたりさした。正吉は、この子供を決して可愛氣のある子供とは思はなかつた。けれど、全く孤獨な子供であると知ると憐れまずにはゐられなかつた。物欲と色欲との以外に何等の理想も持たない此家の生活にあつて、たゞ獨りこの子供だけが眞に人間らしい惱みと苦しみとを小さな頭の中に感じながら、而して、外界と戰ひながら、其日を送つてゐるのだと思つた。けれどこれまで我を忘れる程に其に對して憤慨もしなければ、感激もしなかつた。

肥つたおますは、朝のうちから彼女の脂切つた肌を出して小さな安つぽい鏡臺に向ひながら、澤山な黑い臭氣の漂ふ髮を解いて、念を入れて結び直してゐたが、正午頃から、藤田と連立つて、淺草公園のあたりへ活動を見に出かけたのである。

時一は、學校から歸つて來たけれど、母親がゐないので、獨り淋しさうに戶口の處で遊んでゐた。夏の日はやがて暮れかゝつた。けれど彼等はまだ歸つて來なかつた。時一は父親がゐなくなつてから、父親を懷かしむ情に堪へなかつた。彼は父親がまだ目的地に着かずに、汽車に乘り、汽船に乘つてゐる時分から、父親はいつ歸つて來るだらうと憧がれてゐたのであつた。而して、其の日の暮方から、彼は每

晚門口に立つて、暮れて行く西の方の空を眺めた。いろ〱に雲の形が崩れたり、結ばつたりした。少年の憂愁は遠く見ない異郷に達した。其處には懷かしい彼の父親が空の下に立つて、やはり遠く此方を仰いでゐる姿が浮んだ。彼は聲を上げて泣きたいやうに思つた。而して、母親が藤田と次第に親しくなつて行くのを見て、たゞ何となく遠くにゐる父親か可哀さうな氣がしてならなかつた。彼はある時は母親と藤田とが話をしてゐる場處へ躍り込んで行つて、思ふ存分に暴れ廻つてやりたいと思つた。

時一は、獨り茫然として、この日も戶口に立つて赤く崩れて行く雲の影を眺めてゐた。はてしない大空に、鬼事をして遊んでゐるやうに雲は思ひ、思ひに光りつゝ入日を受けながら左右に散つてゐた。杉の木の頂きが、神々しく、淸らかな空に伸びて、其の木の尖には、人間が眞心を籠めて願へば、どんなことでも聞きとゞけて下さる神樣が止つてゐなさるやうな氣持が、時一にはしたのであつた。而して彼はこの廣やかな、不思議な空の景色と、木の影とを二つの瞳の中に映してゐた。彼の眼は不安げであつた。いかなる人間でも最も惱みを感ずる不安な經驗の影がこの哀れな少年の眼の裡には、早くも暗い影となつて漂つてゐた。

彼の傍に拔足をして近寄つて來た正吉はこの少年の淋しさうな樣子を視つて、直にもひしと力强く抱きしめてやりたいやうな氣がした。而して、この少年と共にこの人間の生活に伴ふ醜惡を呪はふとした。しかし何處か誰に對しても警戒してゐるやうな、孤獨な少年の樣子は其の時に際して正吉の心を冷さずには置かなかつた。正吉は、彼にちかづくと、たゞ彼の顏を見てにつこりと笑つた。少年もまた、いつになく柔順な無邪氣な眼付をして正吉を見上げて、彼の心の中を悟つたやうに、につこりと笑つて

答へた。而して、二人は遂に一語も混へずに離れてしまつた。正吉は、彼の室に歸ると、机の前に眤と坐つたまゝいつまでも默然として、暗涙に咽んでゐた。

夜が明けると、正吉はこの胸苦しい、穢(けが)れた家から永久に脱出すべく、早速下宿を探して其處に移つた。

其れから、彼はすべてのことを忘れて職業を求めることに奔走したのであつた。

十

烈々として燃える太陽の光りと熱は威嚇して下界の建物の上や、路の上や、蠢めく生物の上に迫つた。草木は成熟するだけ生長して、各の其等の天職を急ぎ、實るものは實り、花の咲くものは咲いて、やがて凋落する秋の來るのを知るやうに、一日、一日を日の張つた中に波打ち、戰ぎ、而して、自由に思ふ存分に何ものにも拘束されずに樂しみつゝある如くに見られた。

獨り、人間はいかなる目的を果すために終りのない苦しみの底に喘ぎつゝあるのであらうか。この煮え返るやうな暑い日中にも、乾いて龜烈を生じた路の上を車を引いて行く者があつた。また汗に塗(まみ)れて勞働をしてゐる者があつた。彼等は常に々々不平を言つてゐる。其の不平は曾て天が彼等に與へた幸福を充分に味ふことが出來ないための不平ではなかつた。彼等の不平は常に人間が、人間に自由を與へず、罵辱し、迫害し、冷酷である不平に過ぎなかつた。斯くして、この下界には、他の生物界に見られるやうな自然的な現象と逆倒して、人間界には常に不自然的な爭闘にこの一日が過されつゝあるのを知つた。

正吉は役所につとめて、僅かに生活を繋ぐだけのことが出來た。而して、彼は自分の下宿に歸るといつもの如く靜かに机に向つて空想に耽つた。この頃、彼の忘れやうとして忘れることが出來ないのは、時一の姿である。彼の憐れな少年の姿である。この頃、彼は何うして日を暮すであらうと思ふと、毎日晩方になると戸口に立つて、西の空を見やつて父を思つてゐる彼の姿が浮んだ。藤田や、おまきは、やはりあのやうな關係をつゞけてゐるであらう。彼等のことを考へるのは、自分の頭の中を汚すやうに一種不快な感じがしたので、なるたけ其のことは考へずに、彼はたゞ時一の痩せた形と、神經質の眼と、短かく刈つた頭髪とを思ひ出すのであつた。

ある日の午後、正吉は役所が休みの日に、わざ／＼彼の新開地へ訪ねて行つて、時一を見て來やうと思つた。ついでに彼等がどんな風に暮してゐるだらうか見て來やうと思つた。彼は灰色の町の間や、狹い路次などを歩いて、やがて其の新開地の光景を眼前に見ることが出來た。

銀線の降り注ぐやうな日光は、屋根や、まだ新しい建物の白い板や、路の土の上や、草の葉などの上に反射してゐた。而して、空は眩しく霞立つてゐた。見覺えのある彼方の森は、笑つてゐるやうに白い齒を露はして風に戰いでゐた。而して、其處には相變らず狹い地面を爭つて、押し合ひ、重なり合つて、建物が隙間のないやうに地の上を塞いでゐた。まだ他には手が入らない廣々とした土地があるのを知らぬやうに……。小さな工場や、製造所の内部が、心の眼に映る如く、其日暮しの女房や、貧民の娘等が、この暑さに肌襦袢一枚になつて、孜々として働いてゐる光景が想像された。黑い煙突からは、煙が旗のやうになびいてゐた。空の色は、雲一つなく底光りを放つてゐた。彼は、雨の降る時には、さ

ながら田の如く泥濘となつて下駄の齒が埋まつて歩けない場處を思ひ出した。けれどこの連日の照り輝きで全く其處の地面も白く乾き切つてゐた。あまり外が熱いので、何處の家も寂然としてゐて、往來に出てゐる人影が稀であつた。彼は長屋の路次を通つて、以前下宿してゐた家の前に來ると、既に其家に住んでゐる人が變つてゐるのを見た。しばらく彼が此家に來なかつた、其間におまき一家の者等は何處かへ越して行つたものと思はれた。正吉はもしこの近くなら、立寄つて見る考へで、隣家で彼等が越して行つた先をたづねたけれど、何とも言つて行かなかつたといふので、遂に彼等の行衞は分らなかつた。

其の次の日曜日に正吉は×町を歩いてゐた。ちやうど凉氣が街頭に立ち初める午後五時頃で、點燈時に少し間があつた。叔父が故郷で、製糸場を計畫したといふ知らせに接して、正吉はそんなことなどについて考へながら、下を向いて、路幅の廣い、賑かな往來から、横に入つて狹い通りで、小綺麗な食物屋などが並んでゐる路次に差しかかつた。

ふと、彼は眼を上げると片側に一軒の西洋料理屋があつて、表の硝子戸が半分閉つてゐる。其には赤い字で「西洋料理」と書いてある。而して半分戸が開いて、其處から顔に眞白に白粉を塗つた女が姿を現はして外を眺めてゐた。正吉は何の氣なしに其の女を見た。女も眼を正吉に向けて眤と見たが、につこりと微笑したのであつた。彼は刹那、誰かと思つて凝視すると、其れは、おはなであつた。彼はあまり意外なのにびつくりした。而して、あの時よりは一層彼女が美しくなつたのに氣付いた。其の眼はたしかに多くの男の魂ひを魅する力があると思つた。其にしても、いつか刑事が彼女のことについてた

づねて來たが、あのことはどうなつただらうかと思つた。

「この頃は、こゝにゐるのかね」と正吉は其の言葉が咽喉に塞へるやうに言つた。

彼女はたゞこれに何とも答へずに、顔をほつと紅くして、眼に媚を含んで俯向いて笑つたばかりであつた。此時、正吉は彼女が何とか言つて、彼を惹き入れやうとしたなら、何の考へもなく彼は其の中に入つたであらうと思つた。しかるに女がたゞ笑つたゞけでは、正吉は入るのに何となく氣まりが惡かつた。自然は、また偶然に彼を其處から引離してしまつた。彼は其のまゝ後も振向かずに其の路次を行き過ぎてしまつた。

彼は其の路次を通り拔けて、もはや女が彼を見て居らぬ場處に來ると、急に歩みを遲くして、何んとなく名殘惜しいやうな、快樂を取り逃したやうな寂寞を心に感じた。そして今では、もうあの店に行くことが出來ないやうに思つた。明日は知らぬ顔をして、あの店に入つて見やうかと思つた。其にしても、其の明日までが非常に待遠しいやうな、漠然とした焦立しさに彼の胸は掻き捲りたい程であつた。しかし彼は下宿に歸つて机に向ふと、あの儘別れて來たことが、美しかつたやうに思つた。彼の良心は其れを喜ぶやうに思はれた。しかし盲目的に體中を驅け廻る血は、何となしに熱つてもう一度、彼女の顔を自分に近く引き附けなければ承知が出來ぬといふやうであつた。

彼女が偶然、硝子戸を開けて外を見てゐたのは、自然が自分に幸福を與へたのである。今、自分は彼女を得やうと思へば、其れが出來るやうに思はれる。彼は、あてなき空想に其の日の夜を送つた。同時に、彼の眼には、いつか見たことのある、何となく人の惡さうな顔に痘痕のある彼女の叔父の姿が浮ん

だ。また、おはなが旣に處女でない、幾人の男によつて汚されて來たやうな何處となしに墮落してゐる姿が浮んだ。しかし、其の苦しみや、惱みは、彼が曾て孤獨と失意と、無慰と、寂寥の裡に抱いたものとは全く比較のならぬ程に、尙ほ甘い、樂しいものに相違なかつた。

十一

彼は明る日の夕暮方、役所の歸りにわざ〳〵路を迂回して其の路次を曲つた。其時、彼の胸はわく〳〵と戰いてゐた、心の何處かにはまた今日も彼女が店頭の硝子戸を開けて外を覗いてゐてくれゝばいゝと思つた。また一つの心はどうか彼女が覗いてゐてくれなければいゝといふ矛盾した怖しさがあつた。もし彼女が覗いてゐなければ、彼は其の儘過ぎてしまふであらうと思はれたからだ。これは良心がかうした感情の惑溺の間にありながら、尙ほ眼覺めてゐることを證據立てたに他ならなかつた。而して、彼女が二たび其處から覗いてゐるやうなことがあつたら、もうおしまひであると思つた。彼は必ず顏を見て笑ふにちがひない、而して今度は昨日とちがつて物を言ふにちがひない。而して、きつと彼は其の中に入るにちがひない。中に入つてから何を彼女に向つて話すか。而して、何うなり行くか其等は大概彼の頭に想像がついたのであつた。しかし彼の欲情は彼女が覗いてゐることを希望した。彼はこの二つの異つた心の間にあつて、この二つの意志と感情との戰ひを痛切に覺えながら、考へに沈みながら其方に一足、一足、步いて行つた。

「西洋料理」とこの酷暑の中に、書いてある赤い文字は一層熱さを增すやうであつた。而して、やはり昨日の如く店頭の硝子戸は閉つてゐた。しかも全部閉つてゐた。さながら、この赤い文字と、どんよりと

うす濁つて曇つた摺硝子の面に反射する光線の色とは、この店の內部に蟠る秘密を直覺的に思はせた。こゝに來かゝる時に、良心が彼に密かに囁いたやうに、彼女が覗いてゐなかつたので、遂に彼は自から進んで其の店の中に入る勇氣がなくて其の前を眺めたまゝ通り過ぎてしまつた。

彼は昨日にもまして後悔した。而して、彼の勇氣のないのを自から罵つた。血管は張りつめた。憤りと、ある悔いと惜しさとが彼の頭髮を掻き挘しつた。全身は痒みを帶びて路上に突立つたまゝ身の置き處のないやうに彼は本能の暴動に悶えた。けれど、彼は幾分か痲痺せざる良心のために、物憂く押默つて下宿に歸つた。

其後、彼は幾たびか其の料理店の前を、日暮方に通つたのである。けれど、ついに彼女と顏を合はすことがなかつた。正吉は、この偶然が與ふる幸福を二たび待つに堪へられなかつた。而して自から進んで其れを求むべきであると思つた。かうして、今日まで敢て其れが出來ずに空しく日を過ぎたのは全く彼自身に勇氣がないからだと思つた。かれは胸の中に眼覺る臆病と、良心とを憎んだ。良心とは何だ？其れは行爲に對する一種の解釋に過ぎないではないか？ 習慣が命ずる常に消極的な解釋に過ぎないではないか？ いかなる場合にでも、其の人間が責任を負うて、苦痛を廻避しない覺悟がある限りは、其の者のなす行爲は絕對に惡いといふことが出來ない。たとへ善と見做すことが出來なくとも、少なくとも惡いといふことは出來ない。人間が、すべてこの生といふものを幸福に送るといふことが眞實であるとすれば、其れは極めて主觀的な事實である。人類全體の行爲を律する良心といふものは、いつたいどんなものであらうかと彼は疑つた。

彼はこの短かい自己の生に於て、出來るだけ經驗し、快樂を味ひ、幸福でありたいと願つた。彼は、今度ばかりは、あの料理屋に大膽に入つて行つて、おはなに顏を合さうと思つた。而して、彼はロマンチックな光景を眼に描いて、懷裡に金の入る日を待つてゐた。

常の如く四つ街道の電車の交叉點は混雜してゐた。殊に日暮間近になると急に四方から電車に乘つたり、また乘り換へたりする人々が其處に黑くうよ〳〵と集つて、何となく都會生活の慌しさを感じさせた。夕刊賣の鈴の音と叫び聲とが、この一日の中にこの巷に起つた幾多の血腥さ事件を報導してゐる。わざ〳〵一枚の新聞を買つて開いて見るまでもなく、彼等の前に垂れ下つた大きな見出しによつて、其の大抵の慘たらしい事件は男女間の嫉妬に原因してゐるのを知ることが出來る。

正吉は、首垂れながら線路を横切つて此方に來ると、ふと思ひがけなく藤田に出遇つた。二人は顏を見合つて、しばらく言葉も出なかつた。

『やあ、其後しばらくだ。此頃はどうしてゐるかね』と、正吉が言ひながら、雜沓の人々を避けて少し路の片隅の方に寄ると、藤田もにこ〳〵して彼の後について來た。

『やあ、怪、ほんたうにしばらくでした』と言つて笑つた。彼は垢染みた、うす黑くなつた單衣に、茶色になつた麥藁帽子を被つてゐる。

『主人から、其後たよりがあるかね』と正吉は不幸な男の身の上を思ひ出して、藤田にたづねた。

藤田は、背後から走つて來た自轉車の方に氣を取られてゐたが、車が過ぎると、

『あ、ありません、ちつとも、あ、ありません。ど、どうしたんですか心配してゐます。ご、ご承知の

通り、わ、私が皆なを世話してやらなければなりませんので、や、やりきれませんと、、、」と彼は笑つた。

「さうかね、いま何處にゐるね」と正吉はたづねた。

「ふ、深川に越して行きました。そ、其に妻君が病氣で弱つてゐます」と彼の顔は何となく悄れて見えた。

此時、正吉は彼の顔の額際といはず、頰の邊一面に肉を掻き捲つたやうな生傷があつて、赤黒く血が染んでゐるのを見た。而して、其の血はある時間が經つたので固つて乾てゐたが、まだ新しいものであることが分つた。正吉はこの傷は何うしたのだとは、流石に氣の毒な氣がして彼には聞き得なかつたので、默つて其れを凝視してゐた。すると、藤田は其と悟つたものか、幾分か顔色を赤くして、右手で彼自身の顔を撫で廻しながら、

「どうも、と、時一には困つてしまひます。こ、この頃は、まるで氣狂のやうに氣が荒くなつて誰れにでも飛付いて來ます。こ、このとほり私の顔に傷を付けて、て、手が附けられません。末には、ど、どんな怖しい人間になるか知れません」と、藤田は顔色を變へて、さも當惑したやうに語つた。

正吉には、神經質が募つて、とう〳〵こんなことをするやうになつたかと時一の姿が想像せられたのであつた。彼はむしろ、この孤獨な、反抗的な少年の心持に同情する心が生じた。彼はもつと甚くこの男の顔を掻き捲つてやればいゝと思ひながら、默つて、二たび藤田の顔を凝視すると、彼もまた日頃精神に何等かの苦痛を感じてゐると見えて、何處かに悄然とした哀れな樣子附が見えた。すると、彼もま

た憐むべき人間の一人のやうに思はれて、正吉は悲しかつた。二人は、また永久に別れなければならなかつた。

正吉は電車に乘らず、獨り坂を上つて來た。坂の上にはまた賑かな街があつて、其處には何の苦勞もなさゝうな多くの人々がぞろ／＼と步いてゐた。彼は其等の人々を押し分けるやうにして步いて來た。活動寫眞舘では客を呼ぶために、もう樂隊はやかましいまでに樂器を鳴らしてゐた。救世軍は太鼓を叩いて、散步の人達を其のまわりに集めて、說敎を始めやうとしてゐた。而して、其等の雜多の生活が揚げるいろ／＼の音色が空に立ち上る。この都會の建物を見下す大空には、やがて逝く夏の美しい雲がたなびいてゐた。其等の雲は、華かな入日に彩られてゐたにかゝはらず、何處かに、既に冷かなさびしい秋の氣が潛んでゐるやうであつた。

正吉は、もう決して彼の料理屋の前を通るまいと決心した。彼はこの夕暮の空に、哀れな反抗的な、神經質な少年の姿を描いて、いつまでも彼の味方であり、而して、いつしよにせめてもこの不條理な人間生活に反抗しやうと思つた。

彼は、大膽に大跨に街の中を步いた。

――一九一七、六作――

總てを失ふ話

(Ein Märchen)

小山内　薫

西村太郎といふ新派の役者がありました。

西村は芝居は下手でしたが、女を取り扱ふ事と花札を弄ぶ事が、大の上手でした。

芝居は下手でしたが、女を取り扱ふ事と花札を弄ぶ事が上手なので、仲間内から大層尊敬されてゐました。

西村が一寸でも舞臺へ顔を出すと、見物はきつと「色男」とか「女殺し」とか言つて騷ぎます。それ程、西村は新聞の艶種を豊富にしてゐる男でした。

樂屋にゐる時は、いつも西村の部屋で賭場が開かれました。舞臺の上では西村のずつと上に立つ役者でも、この部屋では西村の男衆か何かのやうに、へいへいしてゐました。

西村は自分の藝の下手な事などは、まるで知りませんでした。舞臺へ出れば見物が騒ぎます。樂屋へ歸れば仲間がちやほやします。西村はそれが嬉しくて堪りませんでした。

「役者といふ者は好いものだなあ。」

西村の人生觀は、唯これだけでした。

西村が愛されてゐる客の一人に、麻布の方の或金持の奥さんがありました。この奥さんの御亭主は貿易が商賣で、一年の内、日本にゐる時は、ほんの一ヶ月か二ヶ月でした。奥さんは年中好い着物を着て、好い食べ物を食べて、好きなところを遊んで歩いてゐました。

奥さんはよく西村の出てゐる芝居へ見物に來ました。大抵、一興行に十遍ぐらゐは來ました。西村もよく「今夜は麻布の奥さんのところへ行くのだ。」と言つて、芝居から自動車で出て行きました。麻布へ行くと、西村は大抵泊まつて來るやうでした。

奥さんは西村のどこが氣に入つてゐるのでせう。西村の色の白いところが氣に入つてゐるのでせうか。西村の目のぱつちりとしたところが氣に入つてゐるのでせうか。西村の口元の可愛いところが氣に入つてゐるのでせうか。勿論、さういふ點も氣に入つてゐるには違ひないのですが、そんな事よりもつともつと氣に入つてゐるのは、西村の花が上手な事でした。

敎育のない奥さんは、花の勝負の外に道樂といふものを知りませんでした。奥さんが西村の出てゐる芝居へ來てゐない時は、きつと何處かで花合戰をしてゐる時でした。西村が麻布へ來ると、奥さんはい

つも夜明かしで花を引くのです。勿論、奥さんは西村の敵ではありませんでした。西村は一晩麻布へ行くと、いつも纏まつた金を持つて歸つて來ました。それでも、奥さんには西村が一番氣に入つた相手でした。

或晩、西村が麻布を訪ねますと、奥さんがいつもになく青い顔をして、ふさいでゐました。

「奥さん。どうしたのです。」

と、西村が訊きますと、

「すつかり負けつちまつたの。」

と、奥さんが答へました。

「負けたつて好いぢやありませんか。」

と、西村が申しますと、

「それが唯の負け方ぢやないのだよ。」

と、奥さんが言ふのです。

「一體、どこでそんな負け方をしたのです。」

「濱町の春日でさ。」

「へえ。春日で。餘程大きいのでしたか。」

「何しろ來る人が、株成金だの大所の旦那だのばかりなんだらう。十圓花のぴんと來るやうなのさ」

「好い氣持でせうなあ。あつしも一生の内に一度はそんなのを遣つて見たいな。」
「勝てば好い氣持だらうが、負けちやああんまり好い氣持はしないね。」
「負けた負けたつて、一體どの位負けたんです。」
「五つばかりさ。」
「五つと言ふと、大きい五つですか。」
「五百圓さ。」
「え。五百圓。そいつあ大變だ。」
流石の西村も、これには驚きました。
「一體、どの位の間に、そんなに負けたんです。」
「三日三晩、夜通しでやつたのさ。お結びを食べながら。——一文なしになつて、外へ出ると、人の顏がみんな黄いろく見えたよ」
「へえ。それは近頃での大合戰でしたね。で、初めつからずうッと惡かつたのですか。」
「初めから惡けりやあ、何ぼあたしだつて、そこまで深みへ這入りやあしないよ。一時は二百圓から好かつたのだからね。それが、二日目の晩からがた〳〵と惡くなつたのさ。」
「なんしろ、それは大變でしたな。」
西村はかう言ひながら、急に失望したやうな顏をしました——いつも麻布へ來れば、相當な金が握つて歸れるのに、奧さんがそんなに負けてゐるんでは、今夜はとても駄目だと思つたのです。

「ところで、西村さん、お前さんに相談があるんだがねえ。」

奥さんは、西村がそんな事を考へてゐるとは知らずに、何か賴みでもあるやうな顏をしました。

「何です。あつしの身に叶ふ事なら、御相談に預からうぢやありませんか。」

西村は少しの責任をも感ぜずに、唯いつもの口癖でかう言ひました。

奥さんは暫く言ひにくさうに、もぢ〳〵してゐましたが、やがて思ひ切つたといふ風に、膝を進めました。

「この頃は内の方も景氣が惡いやうだし、そこへ持つて來て、あたしがこんな大穴を明けて了つたのだらう。一寸支那へも言つて遣りにくいのさ。」

「大きに。」

「そこで、お前さんに相談があるんだが、お前さん、あの赤坂のお常さんを知つてるだらう。」

「お常さん。」

「ほら、もと常吉と言つた春本の藝者さ。こなひだ、連中で芝居へ來てゐたらう。」

「ああ、あの今お妾になつてるとかいふ。知つてます。知つてます。ちよいと小意氣な人でせう。」

「さうさ。あの人がこの頃ちよく〳〵内へ札を合せに來るんだがね。何でも、大附好い旦那をつかまへてゐるらしいんだよ。」

「さうでせう。こなひだ、ちよいとお茶屋で見ただけですが、持物なんざあ大したものでした。」

「あの人が一度お前さんと手合せがしたいと言つてるんだよ。」

「へえ。そいつあ有難いな。」

「相談といふのはそこだがね。近い内に、芝浦かどつかへあの人を呼ぶから、お前さんそこへ來て、一つあたしの味方をして、根こそぎ取らして呉れないか。」

西村は少し考へました。別段それを惡い事だと思つたのではありません。唯、そんな事をして、自分にどれだけの利分があるのだらうと思つたのです。

「それはわけのない話ですが、少し罪なやうな氣がしますね。」

「なあに、向うはどうせ唯絞り取る金ぢやあないか。」

「さう言へばさうですが、現在あなただつて、有り餘る御身分でゐながら、こんな目に會やあ、やつぱり困るんですからね。」

奥さんもこれには一言もありませんでした。併し、奥さんは西村の腹をよく見拔いてゐました――西村がこんな事を言ふのは、何も奥さんに反對しようとしてゐるのではないのです。そんな事をするなら、そんな事をするだけの事がなければならないと思つてゐるのです。西村は報酬を求めてゐるのです。返禮が欲しいのです――奥さんはそれをよく知つてゐました。

「その代り、お前さんがそれだけの事をして呉れれば、あたしもきつとそれだけの事はして上げる積りだよ。」

奥さんがかう言ひますと、西村は直ぐ膝を乘り出して來ました。

「さうですか。」

『さうともさ。誰が可愛いお前さんに唯働かせるものかね。』
『ぢやあ、どうして呉れるんです。』
『あのお常さんを取り持つて上げようぢやないか。』
『ほんとですか。』
『ほんとともさ。』
『何だか、あぶなつかしい話ですね。』
『大丈夫だよ。お常さんはお前さんに氣があるんだから。』
『へえ。さうですか。』
西村は急に希望を持ち始めました。
『どうだい。やつてお呉れかい。』
『やりませう。なあに、あんなものは一振りでさあ。』
『では、もう樂までも二日しきやないから、樂の明くる日あたりに、竹芝かどつかへ呼ぶからね。お前さん、きつと來てお呉れよ。』
『ええ。きつと參ります。』
こんな事で、相談は直ぐ纏まつて了ひました。
世間から見れば、隨分恐ろしい相談なのですが、心の荒んだ二人には、それがまるで遊びに行く相談か何かのやうでした。

西村の出てゐる芝居が樂になりますと、直ぐその明くる日、奥さんは赤坂のお常さんを、芝浦の竹芝館へ呼びました。

かねて話もしてあつた事ですから、お常さんは直ぐとやつて來ました。

『まあ。お常さん。よく來て下すつてねえ。』

奥さんは、お常さんの顏を見ますと、直ぐから云ふお愛想を言ひました。

『もつと早く上がるんでしたが、生憎、來る日でもないのに遣つて來たもんですから。』

『まあ。旦那が入らしてたの。それはお氣の毒だつたわねえ。』

奥さんはかう言つて、氣の毒さうな顏をしましたが、おなかの中ではしめたと思ひました。旦那が來たのなら、きつと纒まつた小遣をねだつて來たに違ひないと思つたからです。

『あの、奥さん。西村さんはまだ見えませんの。』

お常さんは直ぐとかう訊きました。

『もう直き來るでせうよ。何だか一軒寄り道をして來るとか言つてましたつけ。』

奥さんは意味ありげにニヤリと笑ひながら、かう答へました。

『やつと、思ひが叶ひましたわねえ。どうか、今夜はみつしり敎へて頂かなくちやあ。』

『でも、お常さんは中々うまいから、西村の方がお弟子入りをする事になるかも分かりやしなくつてよ。』

「あんな御冗談ばつかり。西村さんに敵ふ者は東京に一人だとか二人だとか言ふぢやありませんか。それに、失禮ですけど中々色師なんですつてね。」

「失禮な事はないわ。あたしもそれは承知の上よ。そこが又あの人の面白いところですわ。一苦勞して見ちやどう。」

「でも、奥さんのやうな方がおありなのに。」

「あたしのやうなのは幾人ゐるか知れやしないわ。そんな事を氣にするお前さんでもないでせう。」

「あら。奥さん。隨分ですわ。」

こんな話をしてゐるところへ、西村が汗を拭き拭きやつて來ました。

「おや。大層お話が持ててゐますね。」

西村は顔に似合はない太い聲でかう言つて、いつもの癖の引き笑ひをしました。

「あら、お前さん、遲いぢやないの。さつきから、お常さんがお待ち兼ねぢやないか。」

「どうも濟みません。ちと野暮用でね。京橋の伯母さんのところへ寄つて來たものですから。」

「どこの伯母さんだか分かつたもんぢやありやしないよ。」

かういふのが、いつもこの人達の挨拶なのです。さて、かういつた挨拶が濟みますと、奥さんは改めてお常さんを西村に引き合せました。

「始終奥さんからお噂は承つてをります。また毎度御見物を有難う存じます。」

西村はかう言ひながら、お常さんの前に兩手を突いて、丁寧にお辭儀をしました。

「およしよ。柄にもない。」

奥さんはいきなりかう言ふかと思ふと、疊の上に置いてゐる西村の手を、ポンと上の方へはね上げました。そんな事をされても、西村は怒つた顔一つせずに、

「でも、これが地なんですもの。」

と言つて、平氣で笑つてゐました。

お常さんは、さつきからの二人の樣子を見て、この分ぢやあこの先きどんなに當てられるか分からないと思ひました。それと同時に、こんな樣子を見せつけられて、ぼんやり默つて見てゐるのは、女の恥だとも思ひました。お常さんは奥さんに對して、少し敵對の心を持ち始めました。

「兎に角、もう時分時だから、御飯をたべてから始める事にしようぢやないか。」

やがて、奥さんがかう言ひますと、西村は直ぐ贊成しました。

「さうですとも。兵糧を詰め込んでからでなくちやあ戰は出來ませんや。實は、小生けさから一食もしないんで。」

「それが、丁寧に兩手を突いてお辭義をした人の言ふ臺詞かい。」

「ほい。書拔が違つたか。」

西村は自分の扇子で自分の頭を、ポンと一つぶちました。

誂へた料理の來る間に、西村は手水へ立ちました。すると、直ぐあとから奥さんが又二階を降りて來

ました。
「お前さん、暢氣(のんき)な事ばかり言つてゐて、あの一件は大丈夫なのかい。あたしや眞剣なんだよ。」
奥さんはかう言つて、今までとは丸で違つて恐(こは)い顔をしました。
「御心配にやあ及びませんよ。」
西村はだらけた聲でかう答へながら、やつぱり平氣な顔をして、笑つてゐるのです。
「なんだか頼(たよ)りないねえ。」
「大丈夫ですつたら。安心して入らつしやいよ。」
「あぶないねえ。お前さんお常さんに惚れてるんだらう。氣が變ると承知しないよ。」
「御褒美が欲しいから、大丈夫ですよ。」
「ほんとに勝たして呉れるんだらうねえ。」
「ほんとに取り持つて下さるんでせうねえ。」
こんな話をしてゐる内に、西村は急に眞面目になつて來ました。さうして、自分がかうしたらかう、自分があゝしたらあゝと、すつかり敵を欺(だま)す手順を奥さんに敎へました。もう軍略はちやんと西村の胸中にあつたのです。それを聞くと、奥さんはやつと安心して、また二階へ上がつて行きました。
「若いぢやありませんか。少しくつろいだらどう。そんなにお行儀をしてゐちや堪らないわ。」
奥さんは西村との立ち話が少し長過ぎたので、照れ隠しにこんな事を言ひました。
「まあ。御飯を頂いてから。」

お常さんはかう言つて、やつぱりきちんと坐つた儘、小さな銀の扇で、乳の下を扇いでゐました。
やがて、お膳が來ました。
お膳の上には、茄子の鴫焼だの、氷を入れた玉子豆腐だの、黒鯛の鹽焼だのが、段々に運ばれました。
お酒はお常さんも西村もいけませんでした。いける口は奥さん一人でしたが、奥さんもその晩は餘り盃を重ねませんでした。
お常さんは、お膳の上の物にも餘り箸をつけませんでしたが、胡瓜のかくやで御飯を一ぜん食べると急にお腹が痛くなつて來ました。
お常さんは箸をお膳の上に置いて、暫く我慢をしてゐましたが、段々痛みが烈しくなるので、思はず「あッ」と聲を立てながら、兩手で下つ腹を押さへました。
「あら。どうして。」
奥さんが心配して、かう訊きますと、お常さんは無理に笑ひ顔をしました。
「いゝえ。少しお腹が痛いんです。」
「あら。それはいけないわねえ。何に當つたんでせう。」
奥さんがかう言ひますと、それを否定するやうに、西村が首を振りました。
「でも、あつし達も同じものを頂いてるんですからねえ。」
西村はさう言ふかと思ふと、直ぐ座蒲團を立ちました。

『兎に角、何か藥を貰つて來ませう。』

『いいえ。それには及びませんですよ。』

お常さんが遠慮して、かう言ひました。併し、西村はそれには答へずに、どん〳〵下へ降りて行きました。

やがて、西村は自分で粉藥と白湯を盆の上にのせて來ました。さうして、それをお常さんに飲ませました。

『どうも濟みません。』

お常さんはさう言ひながら、西村の手につかまつて、西村の持つてゐる湯呑から白湯を飲みました。併し、それでもお常さんのお腹は直りませんでした。益々痛みが強くなつて來るばかりです。お常さんは兩手で帶の下を押しながら、思はずそこへ突つ伏して了ひました。

『少し横になつたらどう。』

奥さんがかう言ひますと、西村は廣い所へ手早く座蒲團を二つ繋げて、そこへお常さんを抱へるやうにして連れて來ました。そして、戸棚の中から括り枕を一つ探し出して來ると、それをお常さんの頭の下へ入れました。

お醫者を呼ばうとしましたが、お常さんはそれを斷りました。お常さんはお醫者に體を觸られるが大嫌ひだと言ふのです。西村は奥さんと代り合つて、お常さんのお腹を摩つてやりました。

段々夜が更けて來ましたが、お常さんのお腹は中々直りません。お常さんに聞くと、別に吐氣を伴

のでもなければ、下痢を催すのでもないのです。唯、しく〳〵と針を刺されるやうに右の下つ腹が痛むのだと言ふのです。

『どうせ、今夜は夜明かしの覺悟だつたんだから、一つゆつくり寐て見たらどう。合戰はあしたの事にして。』

奥さんがかう言ひますと、お常さんは嬉しさうに笑ひました。

『さうさせて頂きませう。少し寐れば直ると思ひますから。』

『ぢやあ、西村を看護婦につけときますからね。氣を落ちつけて、ゆつくりお休みなさい。』

奥さんは西村の顏を見ながらかう言ひました。西村を附けとくのは少し危險だとは思つたのですが、この際自分があんまり親切に看護するといふ事は、何となく氣が咎めました。それに、どうせ一度は取り持つ仲なのだからとも思つたのでした。

奥さんの命令で、夜具が二組と蚊帳が二張り運ばれました。

お常さんの體(からだ)が夜具の上に運ばれて、その上に白い蚊帳が釣られました。西村はその蚊帳の中へ這入つて、お常さんの帶を解いてやつたり、足袋を脫がせてやつたりしました。

『西村さん。お前さんは起きてゐなけりやいけないよ。起きてゐてお常さんの面倒を見て上げなきやいけないよ。』

奥さんはお常さんの這入つてゐる蚊帳の外から、かう聲をかけると、自分は隣り坐敷に釣られたもう

一つの蚊帳の中へどん／＼這入つて行つて了ひました。

「ぢやあ、お常さん。御免なさいよ。」

奥さんは自分の蚊帳の中でかう言ふかと思ふと、直ぐ横になつて了ひました。

奥さんが輕い鼾を立てる時分になると、お常さんのお腹の痛みが急に留まつて了ひました。

「有難う。西村さん。お蔭様でもうすつかりよくなりました。」

お常さんは心から感謝するやうに、西村の顔を見上げながら、かう言ひました。

「さうですか。それは好い塩梅でした。では、ゆつくりお休みなさいまし。」

西村はかうは言ひましたが、今更お常さんの手前、奥さんの蚊帳の中へ這入つて行くわけにも參りませんでした。

お常さんも、「では、あちらへ入らしてお休み下さいまし。」と言ふのも可笑しいし、さうかと言つて、「では、こゝで休んで入らつしやいまし。」と言ふわけにも行かず、暫く困つて默つてゐました。

併し、西村はいつまでもお常さんを困らせては置きませんでした。自分も決していつまでも困つてゐるやうな事はしませんでした。

花の方が後になつて、女の方が先きになつて了つたのです。

お常さんの病氣が直つたので、その明くる日は朝から三人で合戦を始めました。

併し、西村は人情にほだされて、もうお常さんを欺す事が出來なくなりました。それでは奥さんに濟まない濟まないと思ひながらも、西村はお常さんが勝つやうに勝つやうにとしました。

奥さんは一生懸命に、きのふ西村が敎へたキッカケの來るのを待つてゐましたが、いつまで立つても、中々それが遣つて來ません。それでも、初めの三四度は、ダマを出すのだと思つて、我慢をしてゐましたが、六番になつても七番になつても、お常さんが勝つばかりです。

奥さんは自分のを出す上に、西村の元手まで出すのですから堪りません。忽ちの内に、百圓ばかり負けて了ひました。

『御覧なさい。お常さん。だから、あたしの言はない事ぢやないでせう。ゆうべのお腹が當つたんですよ。』

奥さんは、强ひて笑ひながら、こんな冗談を言ひましたが、もうお腹ん中は煮えくり返るやうでした。奥さんは一勝負濟むたんびに、恐ろしい目をして西村を睨みつけました。

お常さんはなんにも知らずに、自分の運が好いのだとばかり思つてゐました。そして、男は奥さんの知らない内に自分のものになるし、花にはどん〳〵勝つし、やつとこれできのふ散々見せつけられた腹愈せが出來たと思ふのでした。

西村の腕は冴え過ぎる程冴えてゐました。奥さんがどんな好い手を出しても、西村は巧みにそれを切り破つて行きました。そして、いつも終はお常さんに勝を持つて行かせました。

日が暮れると、奧さんが言ひました。

『けふは餘つ程どうかしてるんだよ。第一、西村さんのだらしなさつたらありやしないぢやないか。』

『全くさうですね。』

西村は平氣な顏をして、こんな事を言ひました。

『あんまりお常さんが憎らしいから、けふは御飯を食べたら、直ぐ寐て、あした又新規蒔き直しにやらうぢやないか。』

奧さんはこんな事を言つて、夜食の膳が來ると、ひとりでお酒をがぶ〳〵呑みました。そして、散々西村に當り散らして、どん〳〵ひとりで先きへ寐て了ひました。

西村はとう〳〵その晚、お常さんに總ての事を打ち明けて了ひました。奧さんの近頃濱町でひどく惡かつた事。それから西村を語らつてお常さんを裸にしようと企んだ事。その禮にお常さんを西村に取り持たうとした事。何から何まで、すつかりしやべつて了ひました。

お常さんは話を聞いてゐる内に、寒氣がする程、この人と附き合つてゐるのが恐くなりました。

夜が明けると、お常さんは、けさ早く旦那の來る筈になつてゐたのをすつかり忘れてゐたと言つて、奧さんのまだ寐てゐる内に、急いで赤坂へ歸つて行つて了ひました。

奥さんが起きると、そこには西村が一人で卷煙草を吸つてゐました。

「お常さんは。」

奥さんがかう訊きますと、西村は平氣な顔をして答へました。

「もう歸りました。」

「卑怯ぢやないか。どうして。」

「旦那がけさ早く來る筈になつてゐたのを、すつかり忘れてゐたんですつて。」

「嘘おつきよ。お前さんが歸したんだらう。」

奥さんは口を極めて西村を罵りましたが、西村は何を言はれても一向平氣な顔をしてゐました。

「あんな素張らしいのが俺のものになつたんだ。奥さんに毒づかれる位なんでもねえや。」

西村は腹の中でかう思つてゐたのです。

奥さんはぷり／＼しながら、厭だと言ふ西村を、無理に麻布へ連れて歸りました。奥さんは、もう一いぢめ西村をいぢめて遣らなければならないと思つたのです。

「只今、赤坂のお常さんのところからお使でございました。」

家へ這入ると、直ぐ女中がかう申しました。そして、封の手紙を奥さんに渡しました。

手紙はお常さんから奥さんに宛てた絶交狀でした。手紙の中にはお常さんが西村から聞いた奥さんの惡企みが細々と認めてありました。

奥さんはそれを讀むと、眞つ青になりました。そして、直ぐ西村に出て行けと言ひました。

『もう一切あたしの家へは出入をさせないから。あたしももう一切お前さんには會はないから。どうか、さう思つてゐてお呉れよ。』

西村は奥さんのかう言ふのを後にしながら、平氣な顔をして、麻布の家の門を出ました。

そして、その足で直ぐ赤坂のお常さんを訪ねました——きつと歡待して呉れるだらうと思ひまして。

ところが、お常さんの樣子はもうすつかり變つてゐました。

『あたしのとこは麻布さんなどと違つて、いつ何時旦那が見えるか知れないんですから、どうか家へ來るのはよして下さいよ。もうこれから先きお附き合ひも出來るかどうだか分かりませんから。どうか惡しからず思つて下さいよ。』

お常さんは氷のやうな冷やかな調子で、かう言ひました。

『でも、それぢやあ、姐さん。あつしがあんまり可哀さうぢやありませんか。』

西村は泣き出しさうな聲を出して、嘆願するやうにかう言ひました。

併し、もうお常さんは裁判官のやうに冷靜でした。

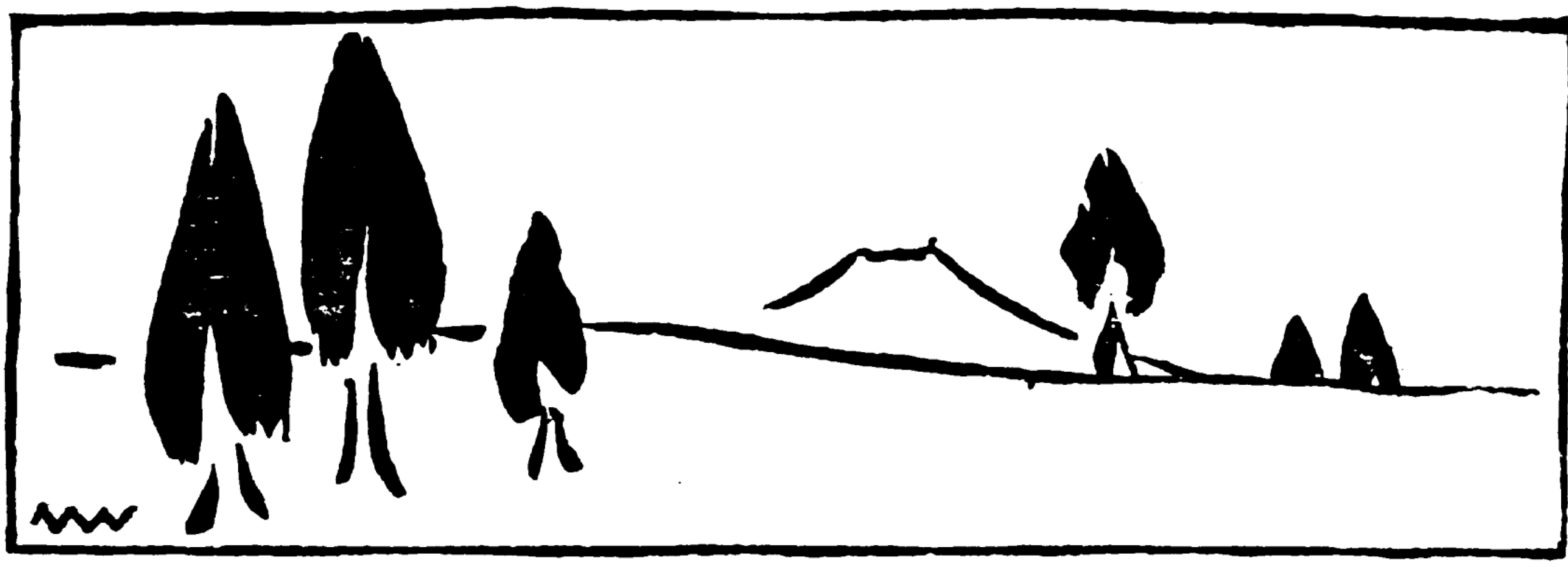
『あたしは商賣こそして來ましたが、あなた方のやうな人と附き合つたのは今度が始めてです。あたしは世の中が恐ろしくなりました。奥さんも恐い方です。あなたも恐ろしいんです。』

お常さんはかう言ふかと思ふと、ついと立つて、二階へ上がつて了ひました。

流石の西村も、これには手のつけやうがありませんでした。

西村はすご〱とお常さんの家を出ました・・・・

（大正六年七月作）



山上にて

徳田秋聲

その日は八十二三度の暑さであつた。私は毛織物の手頃な袋と外套とを車夫に持せて、ステーションへ入つて行くと、時々帝劇の廊下などで出逢ふ△△新聞のO氏の脊の高い姿がふと目に入つた。

「どちらへ。」O氏は先刻から話をしてゐた白い詰衿の洋服を着た人から離れて、待合室で私と相近くと涼しげに刈込んだ髭をひねりながら言つた。

「伊香保へでも行かうかと思つて……貴方は。」

「輕井澤へ十日ばかり遊びに行きます。あすこにE博士の別莊がありますので。」

そんな話を口切りに、二人はしばらく避暑地の品評や旅行談に暑を移してゐた。私はT氏やN氏など〻一晩どまりで何處か涼しいところへ遊びに行く約束があつたが、急に片着けなければならぬ仕事が湧いて來たので、その約束は斷つて、一週間ほどの豫定で、伊香保行を思立つたのであつた。そしてまだ一度も行

つて見たことのない山上の溫泉場に一種の興味を想像しながら、暫くでも埃ぶかい厭な都會を離れ得ることの幸福を感じながら、發車の時間の來るのを待つてゐた。

私は豫めO氏と同じ赤帽に荷物を托してあつたので、輕井澤の行旅客のために特に取つてあつた一室を、O氏と二人限で占領することが出來た。勿論盆前のことで、避暑の旅客はまだそんなに多くはなかつた。二時頃の日光に照らされる綠色のクシヤンには白い埃が目に立つて、屋根も可也焦けてゐたが、でも汽車が何處を見ても綠の濃い平野へ出て行くと、野原くさい風がそよ〳〵と窓から流れ込んで、いくらか凌ぎよかつた。O氏は自分の大きな鞄にE博士の宅かららしい大きな萌黄の風呂敷包みが二つもあつて、涼しい高原地に於ける博士の夏籠りのいかに快適なものであるかを私に想像せしめた。O氏は窮屈な袴や羽織を取ると、旅行なれた人らしく、意氣な模様の縮の浴衣に着替へて、扇子を使ひながらクションに寛いだ。

「E博士とは御懇意ですか。」私が訊ねると、

「え、子供の時分からですよ。」

「博士は幾歳くらゐの人です。」

「六十くらゐです。」

「なか〳〵際といところまで突込んで時事論をする人ですか、さう云ふ特權をもつてゐる人でせうか。」

「ゑ……どんな内閣でも、博士には一目おいてゐますから」とO氏は博士の勢力や政治上の地位について二三の話をしてから、博士が讀書家で、各種の新刊書に目を通してゐることなどを語つた。

「朝もなか〱早起です。子供がないから、取るだけ使ふと云つた風で、生活可も成贅澤です。」

私は昔しの希臘か羅馬わたりの故老のやうに、始終高等政治批評家の地位にあつて、自由な論評を試みつゝある博士の高風を想見しながら、O氏の話に耳を傾けてゐるうち、汽車はいつか大宮へ來てしまつた。すると其處でおりて、ブリッヂを渡つて行く、若い藝者の姿などが目についたところから緒を見つけたO氏の花柳界の話が、また私の汽車の無聊を慰めてくれた。大宮と云ふ土地についての話や、秩父の方に料理屋をしてゐる女優の噂や、新橋や赤阪の或特異な女についての話なども、私に汽車旅行の興味を添へた。

單調な平野の果に、藍色がつた山の姿が少しづゝ見えはじめて來た。倭林や桑畑や、海底の藻を見るやうな黑い杉木立の翠嵐などが、汽車の次第に山へ差かゝりつゝあるのを想はせた。そして久くぶりで懐かしい山氣に接するとは、私に取つては大いなる歡喜であつた。私は窓から顔を出して、少しづゝ目の前に近いて來る山の翠黛を眺めた。

すると今迄碧みわたつてゐた空に、處々今刷いた墨色のやうな雲煙が何處からともなく漂ひ出て、高原地から吹降して來るやうな冷い氣流が、車窓を襲つて來たかと思ふと、右手の空にあつたつて、七彩の虹が二條大きな弧を描きつゝ現はれた。私たちが窓から首を出してそれを眺めてゐるうちに、風は益々加はつて、畑の作物や、樹木の枝葉の劇しく靡き搖ぐのが目についた。と、白く乾いた沼道の砂に、水銀のやうな白い大粉の雨が落して來て、次第に添はつて來る風威と共に、それが看々可恐しい驟雨となつて、横なぐりに降そゝいで來た。

「可恐しい暴風雨ですね。」私はこの天候の劇變に驚きの目を瞠てつゝ、寒い車窓に首を悚めた。

「空ッ風と嬶天下は上州の名物だといひますから。」O氏も心地よげに外を眺めながら言つた。

高崎でO氏に別れて、汽車を降りた時には、風はもう凪ぎて了つて、暑い日が雲の割目から赫と差してゐた。私はぼつ〳〵顔にかゝる雨のなかを、窮窟な電車に乘移つた。そして年中その空ッ風に痛めつけられてゐるやうな粗雑でせゝつこましい町と人とを眺めながら、感じのわるい平野を橫截つて、赤城や子持山を左に眺めつゝ、次第に山上に運ばれつゝある自分を見出した。

溫泉宿へ着いた時分は、もう夜であつた。私は高崎から乘つて、澁川泊りで草津へ行くはづのを、到頭人々に勸められて、その夜は伊香保で泊ることになつた一人の英國人と、車窓から見える山々の名や、哩數や、名所や古跡などを話して聞かしたり、何事にもよく口を出して、終ひには伊香保までその西洋人を惹着けてしまつた二人づれの婦人の一人のおせつかい振とに、單線のレールを走る窮窟な電車の徒然を紛らされつゝ、暗い山道の木立の梢から見える遠山の頂きを見下すやうな高い位地にある坂路を登る頃には、三時間の沈默と空腹とで可也頭腦がぼんやりしてゐた。其女は、土地で一番高い場所を占めてゐる一つの湯宿のお上であつた。

何處をどう行つたか思出せないやうな廊下や細かい段梯子を登つて、薄暗い電燈の下に落着いた私は、咽喉がへばりつくやうな渴きを覺えた。そして一風呂浴びると間もなく、直に女中の運んで來た夕飯の箸を取つた。高い三階のはづれにある部屋の中から、淡い濛靄に包まれたやうな子持山やその山の

姿が眺められた。直ぐ目の下から山裾へかけての高原には、灯影がちら〳〵してゐた。私は給仕をしてゐる女中と、二言三言話を交へると、もう談話の緒も盡きて、何のために來たかと思ふやうな、始めて着いた宿屋の寂しさを、今更のやうに身にしみて感じながら、ふらりと外へ出て見た。

外はどこも薄暗くて、閑寂じてゐた、私は石段や坂の多い町を、そつち此方歩いて見た。寂しい貧寒なホテルの前で、洋服の若い番頭と、何か話してゐる先刻の西洋人の姿が見られた。

宿へ還ると、隣の部屋で、女たちがわい〳〵騷いでゐるのに氣がついた。先刻風呂からあがる時、連の女の部屋の入口に跪坐んでゐた、目のぱつちりした、脊のすらりと高い、絞りの浴衣の細腰に伊達卷をしめた、丸髷姿の婦人の顏などが、廊下から見えた。亭主らしい脊のづんぐりした男が、酒を飮んでゐた。

「さあ、旦那やりませうよ。」連の女が、自墮落なやうな蓮葉な調子で、三味線の絲をぺつん〳〵言はせると、東北訛の口の重いやうな共男が、それに應答へをしてゐた、するうちに三味線が引搔きまはされるやうな騷々しさで、陽氣に彈れはじめた。ヴヰオリンがそれに合され、尺八が吹かれた。

「宵の口だけだから可いわよ。」三味線の彈手らしい女の浮づつた聲が聞えた。

「お隣の方我慢して頂戴よ、お名殘ですから……。」同じ聲がさう言つて、また何やら謳はじめた。

私はやつと安靜を見出さうとした頭腦を引搔まはれるやうな共等の騷音に脅かされつゝ、いくらかいら〳〵した氣分で、床の前に横はつてゐた。次ぎの部屋の手欄の上から見える、一段高い位地にある隣の溫泉宿の薄暗い二階や三階の人の動きが、影畫のやうに見透された。三人ばかり寄つて、棋をうつて

ゐる部屋があつた。丸髷姿の女と差向ひで話をしてゐる男が見えた。

「これぢや遣切れない。僕は少し勉強しなければならないのだから。」私は炭や何かを運んで來た赭ら顔の女中にこぼした。

女中はにやりと笑つた。

「藝者かい。」

「いゝえ。」

「どこの人だい。」

「足利の肥料問屋の方ださうですけれど、もう直きお立ちになるでせう。」

さう言つて女中が出て行つてから、暫らくすると、先刻宿帳をつけに來た若い番頭が、のそりと入つて來た。そして火鉢の側へ素朴な顔を寄せて來て、お世辭氣のない調子で、

「お喧しいやうでしたら、下の別莊の方へでも……たゞ少し不便でせうと思ひますが、御勉強中はどこでも他の部屋へお出になつて……。」

「さうね」と、私は然し餘り人氣のない離屋などの、餘り靜かすぎる空氣に浸つてゐる時の、神經の疲れや頭腦の空虚になり易いこととを怕れて、躊躇した。

「いつでも何うぞ……。」番頭はこれまでに此處へ來た作家や、まだ全く都會化してゐないこの溫泉場の習慣や客の待遇法などについて、しばらく話をしてから、さう言つて出て行つた。

私が寢床につく時分には、隣の騷ぎはもう靜つてゐた。私は春以來勞作をつゞけて來た手足を蒲團の

うへに伸して、山上の健やかな空氣にすやされつゝ、直に深い眠に陥ちた。

仕事が一段落を告げた時分に、隣室の親子三人の客の連であつた二人の女も歸つてしまつてゐた。若いその女たちの、謳つたり彈いたりして騒ぐ晩が二晩か三晩つゞいた。或晩などは彼等はしんみりした、緊張した氣分で、勸進帳を謳つたりした。

「どうせ氣保養に來たんだもの、可いぢやないの。」勝氣らしい目つきをした細君の、さう言ふ聲が私の耳へも入つた。

連が歸つてからの隣室は、可也靜かであつた。その細君は、下の病氣で、駿河臺の婦人科の病院で、下腹部の手術を受けた病後の體を、月の初めから此處で靜養してゐるのであつた。そしてをり〳〵の話の端々から想像すると、彼女の周圍には、姑や小姑や、氣を兼ねなければならないやうな人たちが多かつた。

「こんな時に思ふさま樂をしなければ……。」彼女はそんなやうな氣分で、親子水入らずの二週間かそこいらの日を、山上の温泉場で出來るだけ有効に享樂しようとしてゐた。そして二室しかない、風通しのいゝ此の三階の一角の一室へ、私のやうな階級の人間が、獨法師で入つて來たことは、意地惡な邪魔ものが闖入したやうなものであつた。

ある日の晝頃、私はつい近くにある醫師の藥局で、藥のできるあいだ、其邊を散歩に出かけた。私はこゝへ來た晩から、つい氣づかずにゐた胃腸の甚だしく害はれてゐるのを知つた。そして持つて行つた

藥の外に、消化劑を買はしたり、按摩を取つて、堅く硬張り脹れた腹部を揉ませたりしたが、效驗がなかつた。胃壁が益々突張るばかりであつた。

「ひどい胃ですね。」按摩は鯱子張つたやうな腹部に觸ると、驚きの聲を立てた。私は夏の初頃から、さうした硬張を胃壁に感じてゐた。鳩尾や脇腹に薄氣味の惡い鈍痛をさへ覺えた。そんな徵候は、三四年前の痔の手術の當時にさい溯ぼることができるのであつた。そしてK博士などの診察を受けて、時々服藥した。その時はそれでいくらか快くなつても、そんな狀態はやつぱり續いた。胃の內部が、年と共に硬張り乾いて行くやうに思へた。そして其が繰返される間に來るであらう可恐しい結果が想像されるやうであつた。

「一時的のカタルでせう」溫泉場の醫師は、初診のとき然う言つて、いつも飲むやうな藥を調合してくれた。

私は町はづれの靜な森のなかへ入つて行つたが、少しばかり坂を上ると、直に劇しい疲勞が感ぜられた。にがく〳〵した痛みをさへ腸に感じた。山道を兩側から深く蔽ふた木立のなかには、蟬が鳴いてゐた。日光が幽かに梢を洩れて、陰濕な風が鼻孔に迫つた。曲りくねつた夏山の坂路を、えつちらおつちら上つて行く婦人たちの浴衣姿などが、青葉の蔭に見透されたりした。十町ばかり上ると榛名富士や子持山の晴れた容が、目の前に見えた。澁川や高崎あたりの町も、廣々した山裾の平野に眺められた。私は鮮清な山の荒い空氣に、健やかな疲れを感じつゝ、やがて町へ還つて來た。そして藥瓶をもつて、親しみのできた三階の部屋へ入つた行つた。私はその時、傘を一本持つて、裏から下へおりて行く、隣室の男

の姿に、入口で出逢つた。

二時頃の懈い時間を、細君が子供と一緒に部屋で寢そべつてゐるのが、ぼんやり机の前に坐つてゐる私の耳に感ぜられた。子供が時々、目をさましかけるほか、何の音もしなかつた。隣の宿屋の二階からは、石の音がばち／＼と、絶えず聞えてゐた。朝の九時頃になると、細君か土地の師匠かの三味線で、空洞な單調な聲で、長いあひだ長唄の温習に坐る男の姿も見えなかつた。

山から流れて來る冷い風が、時々颯と私の部屋へ濺つて來た。そして其を氣づく頃には、後の山や空には一面に雲煙が擴がりかけてゐた。その水氣が今まで青々と晴れわたつてゐた目の前の山や原野をまで掠めて、倏忽の間に濃い霧の海となつてしまつた。電が雲の襞から閃めき雷が劇しい音で轉がりはじめた。ぽつ／＼乾いた屋根の上に音を立てゝ降濺つてゐた雨が、思出したやうに可恐しい勢ひで降出して來た。海の底の藻草のやうな杉木立や雜木が、ゆら／＼と霧のながに搖れてゐるのが、目についた。

「旦那はまだ起らないんですか。」隣の部屋で、ふと毎時往來をしてゐる二階へ夫婦づれで來てゐる男の聲がした。

「え、まだですよ。」寢ぼけたやうな懈い細君の鼻聲が聞えた。そして話の樣子では、彼はこゝから二十町許ある水澤の觀音へ行つたらしかつた。

「然うですか。私はまた疾に歸つて、寢んでゐるんだとばかり思つてゐまして。」

細君はまだ目がさめないらしく、何の返辭もしなかつたが、急に氣を持つたやうな聲で、「多分お酒でも飲んでゐるんでせう。良人は梯子ですから、歸るまで安心が出來ませんよ。」

「まさか間違ひもないでせうけれど……」と、その男は話相手のないのが寂しさうに、「どうも私も忘屈で……この分ぢや迚も二週間の辛抱は出來ませんよ。度々湯に入れば體が慵いし、晝間眠れば夜寢れなくて爲方がないと云つた鹽梅で。」

その男はそんな話をして降りて行つたが、夜になつてからもう一度訪ねて來たときにも、隣の男は歸つて來なかつた。そして迎ひを出さうか出すまいかと、暫く評議をしてゐた。

その晩私は九時頃に床についたが、雨や流の音が耳に立つてうと〱とするかと思ふと目をさまされた。隣はいつも森としてゐた。をり〱子供のぐづる鼻聲が聞えるきりであつた。するうち私は何時か不安な眠に陷ちてゐた。

夜なかに、どさ〱と云ふ音がして、隣の男が歸つて來たとき、私は今一度可恐しい豪雨の音に脅かされて、目を開いてゐた。私は始終默つて考込んでゐるやうな男が、家庭の事情から夫婦でこゝへ廻避して幾日をか過した果に自分の死場所をでも見つけに行つたのではないかと想像してゐた。そして其の愚かな想像が今にも事實となつて現はれるのが待たれるやうな氣がしてゐた。男は醉つてゐるらしかつた。そしてふゝ云ふ鼻息や、荒い跫音を立てゝ、下の風呂場へおりて行つたかと思ふと、直に上つて來て、その間にごそゝゝ寢床をでも替へたらしい細君と、口も利かずに床についた。そしてしばらくどたばた體を動しながら、マッチを摺つて、莨をふかしながら、荒い息を吹いてゐた。私はまた眠つてしまつた。

翌朝目がさめた時には、廊下に日がさしてゐた。遠い山の姿が、薄い紫色にかすんで、原野は一面に

燃えたつやうに夏の日に輝いてゐた。隣の三階からは、無間な長唄の聲が聞えて、溫泉場の朝の空氣は、夢のやうに靜かであつた。

間一日置くと、隣の男はまたどこかへ遊びに出かけていつた。溫順な動物のやうに、部屋にゐれば、彼は訥々とした辯で性急な調子の細君や、二階の夫婦づれの男と、話をしながら、時を過してゐたが、氣がつまつて來ると、吹かずにはゐられない尺八を取出して、むくれたやうな其の厚い愛嬌のある脣にあてゝ、歌口をしめした。遠慮がちな彼は、しかし高い音では吹くことを憚つた。彼等が私のことを立つか、部屋を替へるかするのを待つてゐると同じに、私は盆には多分歸るであらう彼等の立つのを、心待ちに待つてゐた。彼等は時とすると、部屋を見に、多勢で新建の方へ行つた。しかし何處も彼等のためには安全な隱れ場所ではなかつた。部屋はどれも此も約束濟になつてゐた。

「來年は早く來ますよ。込まないうちに。」細君が勘定書でも取つたらしい時に、祝儀のお禮を言つてゐる女中に話しかけてゐる聲が、ふと私の耳へ入つた。

私は彼等も然うであつたと同じに、彼等のために力めて靜謐を保たなければならないやうな事が多かつた。

男が留守のあひだ、細君はよく子供と一緒に寢そべつてゐた。「あゝ」といふ細い溜息が時々聞えたり、節々が慵くてたまらないやうな、生欠が奥齒で嚙殺されたりした。

「濟みませんか、按摩さんを呼んで下さいな。」

次の室へ來て火を直してゐる年増の女中に、病人のやうな聲で、さう言つてゐるのが聞えたりした。

この人たちや、連の身のうへを能く知つてゐるらしい按摩が直にやつて來て、うと〳〵してゐる細君を喚起しながら、療治に取かゝつた。按摩と彼女との世間話が、それから夫へと續いた。するうち彼女の懈い聲がいつか絶え〴〵になつて、甘い眠に沈んでしまふと、按摩は傍に木細工の玩具を弄つてゐる子供をかまひはじめた。

日暮になると、男は外から歸つて來てビールを飮みはじめた。ビールに飽足りなくなると、日本酒を命じた。そして酒に醉ひつぶれると、直に臥床に就いた。同じやうな日が幾日か續いた。

「あの、兄いさんにお頼みして、もう二三日居ろつて……。」

自分の妹から來た手紙をひろげながら、そんな事を言つてゐてから、一日たつと、彼女は長いあひだかゝつて支度をして、ステーションへ迎へに行つた。そして其日から、若い學生風の女が、時々部屋を賑はしに來た。

健康がやゝ恢復したところで、私が或日榛名山へ登つて見たのは、それから一兩日たつてからであつた。私は疲れたときの用意のために、傭ふことにした駕籠が來ると、輕い扮裝で宿を出た。そして駕籠を從へつゝ、石高な道を宿の裏から湯元道の方へ、てく〳〵歩いた。その日は、雲がいくらか懸つてゐたが、朝の間の湯元道は、谷間を流れる水の音と青葉を渡る涼風とで、頭腦がせい〳〵するやうであつた。

榛名の登山口へ岐れる橋の袂まで來ると、そこに馬に乘つた二人の男と、乘つて來た駕籠を出て、位

置を工夫してゐる若い二人の女と四十四五の下町風の女との、宿の浴衣姿が目に入つた。寫眞機がそこに据ゑられてあつた。

「旦那の宿にゐる役者です。」

橋を渡つて、山道へ差かゝつてから、駕籠屋の後棒が私に言つた。

「あれは何處の役者だか知りませんが、△△へ來てゐる何奴とか云ふ役者は、餘程の年ですね。」昔しの雲助を聯想させるやうな、年取つた方の前棒が、話しだした。

「誰と來てゐるんだ。」

「旦那と二人でね。私は昨日一日その役者の案内をして、山登りをしましたがね、茅や何かの脊たけもあらうと云ふなかを、洋服姿で歩くんでさ。何でも毎日六里づゝ歩くから、明朝も朝早く來てくれろと云ふ話だつたから、今朝早く行つてみると、昨日一日で潰れてしまつたと云ふんで、寢てゐましたよ。」

「旦那は行かないのか。」

「え、一人きりで……。」

第一の茶屋で、麥湯を飲みながら休んでゐると、やがて山の細道を、先刻の馬がのそり〳〵やつて來た。そして其人たちが、茶屋へついた時分に、女達の駕籠が、坂の下から見えだして來た。

「やつぱり蚊燻しをしてやるのかい。」役者でない方の、痩せた男が馬夫に話しかけた。二十五六と見える役者の方は、ぶよ〳〵に肥つてゐた。私は見馴れない其役者が、誰であるかを想像しながら、また空駕籠を從へて、日和下駄の足を素捷く運んで行つた。

碧い靜かな湖が木の間に見えるまでに、私は二タ丁場ばかり駕籠を假りたが、やつぱり歩く方が自由であつた。

湖上の休茶屋へ着いた頃には、私は可也疲れてゐた。そして襦袢一枚になつて、冷たい風に當つてゐた。そこへ女優たちが、又やつて來た。いつか涼しげな女唐服に着替へた姿で、駕籠から轉げ出る樣子

が、不思議に私の目をひいた。

　骨瘦峠や座頭轉しの嶮岨をも、私は襦袢一枚で往復とも歩いた。そして湖畔のレストウランへ入つて涼みながら飲食をしてゐると、間もなく二頭の馬と三挺の駕籠と、徒歩の若衆との姿が、また山から降りて來た。

「あれは活動の役者らしうございます。」湖畔に寫眞機をすえながら、客を待つてゐる伊香保からの出張寫眞師が、私に話した。

「寫眞はいらないが、種板が入用だと云ふところを見ると、素人ぢやありません。」若い寫眞師は附加へた。

「旦那、少し空模様が怪しくなつてまゐりましたから、早く歸るとしませうか。」年取つた方の私の駕籠屋は、酒で眞赤に筋張つた長い顔を、緣側へ突出して、お辭儀をした。私は勘定をすまして、着物を着ると、今度は駕籠で、湖水のほとりを急がせた。木立がざわめいて、寒い風が吹いて來た。暗い影が、つい目の先きに見える山の麓の或部分を蔽ふて、雨がばら／＼と落ちて來た。と、それも一時で、少し行くとまた日が照りかゞやいて來た。

「好い鹽梅だ、涼しくなつて。」駕籠屋はさう言つて、赭黑い手で息杖を調子よく使ひながら、だら／＼した坂路を急いだ。

「一杯やると、體が不思議にしやつきりするんでございます。今日はお陰で早仕舞ですから、是から歸つて、またゆつくり飲むのが樂しみです。」

　そんな話をしてゐるうちに、いつか榛名富士も後になつてしまつた。駕籠にゆられてゐる私の目が、時々すれ／＼になる道傍の夏草の上に働いた。いつか私の本能が、その草のなかゝら何物かを見つけやうと骨を折つてゐた。

「鐵草と云ふ草が、偶然とするとこの邊にないだらうか。」私はいつか人から聞いたことのある藥餌を思

出してゐた。鐘草を食はすと、老衰した兎がぴん／＼して來る、私はさう言つて聞かされた。
「さあ、そいつは多分若菜のことでせう。鐘の形をした白いやうな花が、一杯咲きますから。」
若い方の駕籠夫は、さう言つて急に道傍の草に注意しはじめた。旋て車輪なりに、對生葉のしやごしやごした草がちぎられた。
「この草なら、春出たてにおしたしにして食べますんです。」
最後の茶屋へついたとき、私はその一株をぬかせて、紙に裹んで駕籠の上に挿ませた。
駕籠が宿の上口に舁込まれたのは、午後の三時頃であつた。
「駕籠で行つたんぢや、やつぱり面白くないわね。」
部屋へ歸つて、着物を着かへてゐる私の耳に、そんな聲が、隣室から聞えた。

その晩家から電話がかゝつて來た。
「子供の一周忌ですからね…。」さう云ふ妻の聲が、忘れてゐた家の空氣を急に私に想起させた。出來ることなら觸れずに濟ましたかつた私の悲しみに、私はまた出逢はなければならなかつた。
この翌日遠慮がちな、尺八の音が久しぶりで、隣室から洩れて來た。壓え／＼して來た音樂の慾望が、抑えきれなくなつたもの、やうであつた。私はこの音を聞棄に、二三日氣になつてゐた髯を剃りに、外へ出た。そして歸つて來ると、その日に期待しなかつた、電報爲替の封書が、思ひがけなく私の机のうへに置かれてあるのに氣がついた。そして其午後、私は到頭二三日先きにそこを立つた。
電車が山路を大分降りた時分に、私は苦心して色々の人に確めた、例の草を置忘れて來たことを想出した。草は根を包まれたまゝ、私がよく顔を洗つたり體を拭いたりした、噴井の流れに浸されてあつた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮内立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

册數＼國別	內國	外國
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附[illegible]時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ[illegible]十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾[illegible]は金六圓八拾錢の割となる

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一屋社
金蘭社、万年社、電通社、信賴社

送金注意

一 誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一 郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本郷區西片町十番地 中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盗取さるる虞なし

一 振替貯金　口座は東京三十四番なり

一 郵券代用　必ず一割増の事

一 集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

　一金一圓迄　金六錢（集金委託料）
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）

一 受領證請求　は必ず返信料を要す

大正六年七月廿九日印刷納本
大正六年八月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木[illegible]三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話(小石川)[illegible]
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す